魔法少女リリカルなのはＡｓ～人々を守りし仮面伝説

Ｒ２

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＡｓ～人々を守りし仮面伝説

【Ｎコード】
Ｎ９９９４Ｕ

【作者名】
Ｒ２

【あらすじ】
ジュエルシード事件から半年後

未だに出現するＤから海鳴市の人々を守り戦い続ける新田飛鳥…
…又の名を　―仮面ライダーＤ―

クリスマス間近の冬、　なのはが謎の敵に襲撃を受け駆け付け

た飛鳥が見たものは新たな敵、闇の書の守護騎士―ヴォルケンリッター―

そして新たな黄色い瞳のDの名を持つ弓戦士

今互いの守りたいモノの為に傷ついた心を仮面に隠し、二人の仮面ライダーがぶっかりあう

魔法少女リリカルなのは～人々を守りし仮面伝説の続編です

現在もう一人の主人公、新田蓮を中心に話が展開してます　8／1、新田蓮編終了

現在はオリジナル編を開始しています

12／2よりSPIRITS版、仮面ライダースーパー1が参戦

1／7、ライダー設定を一部変更しました

感想と指摘、ご意見をお待ちしています。

第一話　「蓮ちゃんと子だぬきの約束」（前書き）

今回は蓮視点です

第一話　「蓮ちゃんと子だぬきの約束」

季節は5月中旬を過ぎ後少しで6月になろうとする中、
僕はいつも通り兄さん達と別れ、大学病院に向かう

今日は、はや姉と待ち合わせをしているんだ
病院についた僕は後ろから声をかけられた

「あら、蓮ちゃん今日は早いのね」

「石田先生、こんにちは。あのはや姉はまだ……」

「蓮ちゃん、来てくれたんか！」

その声に振り向くと凄いスピードで向かってくるはや姉だった

……このスピードなら世界が狙えるかもしれないと思ったのは僕だけかな？

「フフフ、はやてちゃんと蓮ちゃんは相変わらず仲がいいのね」

「うん、仲はいいよ（姉弟的な意味で）」

「うちも蓮ちゃんは大好きや」

それを聞いた石田先生は凄くいい笑顔になった、何でだろ？

「ほな、うちらは帰ります。石田先生また今度」

「はい、それと今日もごちそうさまね。蓮ちゃん」

はや姉の車椅子を押す僕に石田先生はそう言うと診療に向かった
…何がごちそうさま何だろ差し入れしたかな？

病院からでた僕とはや姉は海鳴市最大のスーパーマーケットに向かった、

今日はお肉の特売日、狩人達がその時を待っている

「いよいよや、蓮ちゃん今日も勝ちに行こか」

「何時でもいいよ、はや姉」

お互いにうなずきその時を待つ

そしてアナウンスが鳴り響き戦闘が開始された

「今日は大勝利や、蓮ちゃんおらんかったらひとつも取れんかったわ」

「そうだね、けどはや姉があの時怪我をしなくてよかったよ」

あのお肉争奪戦の最中黒い服のおばちゃん達が三人一列に並んで「ジ○ットス○リームア○ック」と叫びながらはや姉にぶっかりそうになったときはヒヤヒヤしたんだけど

それをはや姉は車椅子ごとジャンプしてかわしたのをみて間違いなく世界レベルで通用できると思ったよ

「…蓮ちゃんは心配性やなあ、以前もらった本にかかれたのが役に立つ日来るとは思わんかった」

はや姉その本ってまさか…多分違うよね

そうしてる内にはや姉の家についた僕は冷蔵庫の中に戦利品のお肉を入れていると

「蓮ちゃん、汗かいたやろお風呂入っていかん？」

確かに汗をかいているしお言葉に甘えるかな

「じゃあ、お風呂使わせて貰うね。はや姉」

その時僕は気付くべきだった　はや姉のスイッチが入っていたのを

八神家バスルーム

「ああ、気持ちいいなあ…お風呂って最高だよ」

「そうやろ、そうやろ」

「……何ではや姉がここにいるの？」

油が切れたロボットのようにギギギと後ろを振り向くと凄くいい笑顔のはや姉がいました

「いやな、手伝ってもろたから背中でも流そかと」

「いいよ、僕一人で洗えるから！それにはや姉足が悪し服が濡れちゃうでしょ！」

「そんなもん気合いでカバーや」

「出来ないから！」

……結局はや姉の押しに負けた僕は隅々までキレイに洗われました…

八神家リビング

「蓮ちゃん、ほんまにごめんな、だから機嫌治してな」

「……はや姉」

「うん……」

僕は静かに口を開いた

「はや姉、もう二度とこんなことしないって約束したら許してあげる」

「ええのか！」

さっきまで暗い顔だったはや姉の顔が笑顔に変わるのをみて僕は小指を出した

「はや姉、指切りしようか」

「うん！指切りしよか」

はや姉も小指を出し絡めたのを確認し

「「指切りげんまん嘘ついたら針千本の～ます、ゆ～びきった！！」」

指切りを終えしばらくして僕は帰る準備をしているとはや姉が寂しそうな顔をしていた

「…もう帰るんか、蓮ちゃん」

「うん、そろそろ帰らないと兄さんやおじいちゃんが心配しちゃうか…」

「蓮ちゃん、約束覚えとるか」

はや姉があの時の約束、誕生日を一緒に祝う約束を思い出しながら僕はひとついい案を思い付いた

「じゃあ、誕生日の前の日にはや姉の家に泊まりに来ようか」

「蓮ちゃんが家に泊まりに来てくれるんか！！」

「うん、だからそれまでの楽しみに待っててよ、はや姉」

喜ぶはや姉を見ながらこの笑顔だけは守っていきたいなと思いながらしばらくしてはや姉に見送られ屋敷に戻った

誕生日まで後一週間

第一話　「蓮ちゃんと子だぬきの約束」（後書き）

おまけ

「え～皆さん今日から新しい先生が赴任しましたので紹介します」

「新田五月だ、専門は化学だ、尚、私の事は姉と呼びように」

「ねえ、飛鳥君の知り合いなのかな？」

「いや、あんな人シラナイゼ（な、何で姉さんがここにいるんだ！）」

俺の平穏な学校生活が音をたて崩れていくのを感じた

第二話　「新田飛鳥と翠屋の洋菓子」（前書き）

第一話と時間軸は同じです

第二話　「新田飛鳥と翠屋の洋菓子」

「……何でこんなにいるんだ」

＞さあ、俺にもわからねぇなたがやることはひとつだ＜

ため息をつき拳を構えた先にいたのは

今朝たおした筈の烏野郎×２だった

……こいつらは俺の美味しいお菓子を食べる至福の時間を奪いたいのか……

海鳴市　ＡＭ０５：５５

「Ｄ！そろそろ決めるぞ！！」

＞何時でもいいぜ飛鳥！＜

俺は今日も奴等Ｄとの戦いをしていた、

あれ以来出現率が減少したんだが俺の都合なんかお構いなしに現れる

で今回の相手は烏野郎だ

「カアアアアアア！」

「グウゥ！（体がちぎれそうだぜ）」

鳥野郎が叫ぶ度に俺の装甲にヒビが入り血がにじみ出てるのを耐えながら接近し胴体にパンチを連打し体勢を崩す

「チェーンバインド！」

鳥野郎をチェーンバインドで締め上げ、空へ飛び上がる！

それは螺旋、あらゆる防御を削り抜く一撃。

その名は―

「ラアァァイィダアァァーキイィックウゥ！！」

「カアアアアアア！？」

叫び声をあげながら鳥野郎はライダーキックを受けDは消滅しもとになった生き物が残った

「……やっぱりカラスだったか」

カラスは暫くすると目を覚まし飛び去っていく

それを見ながらアクビをする俺にDが喋ってきた

＞飛鳥、近くになのは嬢ちゃんがいるぜ。挨拶していくか＜

携帯（変身解除して服を着た）で時間を見る

「そうだな、少し挨拶して来るか」

ジェイダーに乗りオートモードでなのはのところへと向かった

「今日の採点は？」

＞７５点です、マスター＜

いつも通り、魔法の練習（ディバインシューターを缶に当て地面に落とさず当て続ける）を終え帰ろうとしていると

「すごいコントロールだったぜ。なのは」

「飛鳥君、いつからここに？」

＞十分前から見ていたぜ、なあレイジングハート＜

＞はい、マスターは一度集中すると回りが見えなくなりがちですからね＜

デバイスに指摘を受け慌てるなのはは俺に

「あ、飛鳥君こそ、必殺技考えている時なんか回りが見えてないよ」

「なっ！？」

＞ハハハ、こりゃなのは嬢ちゃんに一本取られたな、飛鳥＜

なのはの意外な反撃に何も言えず黙り込むがあることに気付いた

「なあ、時間大丈夫か？」

「ふぇ？時間……あああああ！！」

…そう現在時刻０７時１５分やばすぎる！

「なのは！お前ん家まで送るから早く乗れ！！」

「ふぇ？」

なのはの手を掴みジェイダーに乗せるとアクセル全開で高町家へと向かった……

学校？もちろん間に合ったぜ。

そして何時も通り（新しい先生が赴任してきたのを除く）ようやく放課後を迎え蓮となのは達と帰る途中

「兄さん、僕用事があるからこ……」

「…八神の所に行くなら別に構わないぞ」

「に、兄さん？！」

「ほら早く行って来い、蓮」

「う、うん。なのは姉達また明日ね」

俺に促された蓮が八神がいる大学病院に向かうの見送りながらフェイトの事を思い出していた

（フェイト、プレシアさんとアルフと仲良くしているかな、いやリニスさんも一緒だから毎日が楽しくてたまらないはずだよな）

「…く…飛鳥君！話聞いてるの？」

「あ、悪い。考えて事してた」

「飛鳥が考えて事なんて明日は雨が降るかしら」

「ア、アリサちゃん言い過ぎだよ」

最近アリサがよく突っ掛かる、雨が降るってもうじき梅雨だから関係なくないか？

「飛鳥君、今日翠屋に来ない？前に約束してたよね」

「けど蓮も一緒に連れてくるって約そ…」

「大丈夫だよ飛鳥君、蓮君から［僕なら平気だから楽しんできてね］って言われてるから」

「そうか…（蓮ありがとうな）」

「そうと決まれば早くいくわよ飛鳥！」

「行こうよ飛鳥君」

両腕をアリサとすずかに掴まれた俺はそのまま喫茶翠屋に連行された

後ろから奴等以上の殺気を感じながら……

喫茶翠屋

「あら、なのはにアリサちゃんにすずかちゃん。それと飛鳥君、喫茶翠屋にようこそ」

「「「「こんにちは桃子さん」」」」

挨拶を済ませ席に座る俺は初めて食べる翠屋のお菓子を今か今かと待ちわびていた

「飛鳥ってお菓子好きなの？」

「おう、手作り和菓子しか食べたことないから洋菓子を食べるのはスゴく楽しみなんだ」

「そう言えば飛鳥君の食べてる和菓子ってお手伝いさんが作ってるんだよね」

話が弾みながら早く来ないかと楽しみにしていたときだった

＞飛鳥、奴等だ！しかも二体もいやがる＜

[場所は近いのかD？]

＞ああ、不味い人が近くにいる！＜

それを聞き席を立ち上がると店の外に走り出す

「飛鳥、何処にいくのよ！」

「悪い、少し用事を思い出したすぐ戻るから待っててくれ！」

怒るアリサにそう言い残すと人気のない路地裏にはいる

D-メットを被り右手を顔の前に構え左手を腰におき叫ぶ

「変身！」

特殊ナノマシンDが活性化し服が弾け、体が大人になりその回りをDASが展開装着されそこにいたのは

龍の角に赤い瞳、体を黒と白の装甲を纏った戦士

一人の白い少女から名を授かった戦士その名は

「仮面ライダーD！」

変身を終え待機させていたジェイダーに乗り現場へと向かう俺たちの前に奴等二体が人を襲おうとしている

「う、うわあああ！だ、誰か助けて！」

「カアアアアア！」

もうダメだと思ったその時甲高いエンジン音と鈍い音が響き自身に攻撃が来ないのを不振に思い目を開けるとそこにいたのは

赤い瞳の異形が自身の体を楯にして彼を守っていた

「は、早く逃げろ」

「ヒ、バ、バケモノ」

逃げていく人を見ながら思う、「バケモノ」この言葉いつ聞いても慣れないな。

＞感傷に浸ってる暇はないぞ飛鳥＜

振り向くと今朝倒した筈の鳥野郎が二体もいる、どうやら三位一体での存在みたいだ

「二体も相手にするとなると厄介だぜ」

「「カアアアアアア！」」

奴等が叫ぶと一斉に羽を飛ばしてきた、数が多すぎて捌ききれず身体に刺さっていく

「く、痛えんだよ！　何処に行きやがったんだ鳥野郎！」

羽手裏剣をかわした先に鳥野郎がいない、いつ間にか前後挟まれた俺に向け超音波を叩き込まれた

「「カアアアアア！！」」

体の装甲がひび割れ血が吹き出し更に沸騰し始めた

「ぐあああああああ！」

＞ヤバい奴等共振波でお前を殺す気だ！＜

しかし今の俺には聞く余裕もなくただ叫ぶだけだった

「ぐあああああああ！」

その時だった

「飛鳥から離れろ！ランブルデトネィター！！」

「カアア？」

鳥野郎の一人にナイフが無数に突き刺さり爆発すると俺は共振波から解放され膝をつく

「飛鳥、大丈夫か？」

「助かったぜ　姉さん」

仮面シスター五号に体を支えられ立ち上がろうとする俺達に奴等が再び仕掛けようとする

「甘いな、ライドインパルス！！」

高速で動くなにかに鳥野郎達が殴られ吹き飛ぶとその何かが姿をみせた

「全く無茶をしすぎだ飛鳥」

「ごめん、姉さん」

仮面シスター三号に叱られながら俺は立ち上がると鳥野郎を見ると姉さん達の攻撃で弱っている

「姉さん、D！今から新必殺技を使うぜ！」

＞おい、まさかあれ使う気じゃないよな＜

あれとはライダーワイルドブレイカーの一人で出来る奴の事だ、

毎度ながらぶっつけ本番で行かせてもらうぜ！

「「ま、待て飛鳥！」」

姉さん達の制止を振りきり空へと飛ぶとかかと落としの構えをとる、そしてＤＡＳのスラスターを全開にする

上から下へゆっくり回転していき徐々に速さを増していきソーサー状の魔力を帯びた塊になりそして凄まじい回転スピードに達したそれは回転鋸［ノコギリ］あらゆる防御を切り削る魔力刃を持つ回転鋸［ノコギリ］、

今こそ放つ俺の新たな必殺技その名は！

「ライダアアアアー・ワアァァイルウゥドオ・スウラアァッシィィャアァァー！！」

魔力刃の回転鋸が鳥野郎二体をその予測不能な動きで翻弄しながら切り刻みそして二体並んだところを横一閃で切り裂く！！

「「カアアアアアア！？」」

切り裂かれると同時に奴等と取り込まれた生物が分離され消滅しそこにいたのはやはり

「「カラス？」」

気絶したカラス二匹だった

「ところで三号飛鳥は何処だ」

その時空から何かが落ちた、其の何かを仮面シスターズは見てしまった

犬神家みたいな状態で地面に突き刺さった飛鳥を

「「あ、飛鳥あああああ！！」」

「う～ん、まだくらくらするぜ」

＞このバカ飛鳥、何て技使うんだ、＜

姉さん達に助けて貰いあの状態から脱出した俺は　あの技［ライダーワイルドスラッシャー］を使って1つ分かったことがあった

それはかなり目を回すって事だ

「全く、あんな無茶するとは姉は思っても無かったぞ飛鳥」

「飛鳥、もうあんな無茶絶対するなよ」

「ごめん、姉さん達」

姉さん二人に謝ってる時　携帯が鳴り出した

「誰からだ、アリサから……あああああ！姉さん俺戻らないと今度お菓子をご馳走するから、じゃあまたね！」

そう言い残しジェイダーで喫茶翠屋に着いたのはいい、
待っていたのはアリサの怒った顔と

「ごめんなさい、飛鳥くん実は洋菓子売り切れちゃったの」

俺の人生初の洋菓子を食べる機会が次回来店に持ち越しになってしまった瞬間だった

第二話　「新田飛鳥と翠屋の洋菓子」（後書き）

感想、ご意見お待ちしています

第三話　「蓮、はや姉の家にお泊まりと新たな家族」（前書き）

守護騎士達登場！

第三話　「蓮、はや姉の家にお泊まりと新たな家族」

６月３日　ＰＭ０６：３０

八神家自宅前

「予定より早く着いちゃった、はや姉驚くかな」

僕はお泊まりセットを降ろしインターホンを押す

［はい、どなたでしょうか］

「はや姉、僕だよ」

言い切る前にドアがすごい勢いで開かれ引きずり込まれた先にいたのは

「蓮ちゃん、うちに早く逢いたくて来てくれたんか！」

僕を抱き枕状態にして頬擦りするはや姉は、とても車椅子で出来る動きじゃないと思った

「はや姉、く、苦しい」

「あ、ごめん苦しゅうしてごめんな」

名残惜しそうに離れたはや姉だったけど何時も以上の笑顔が見れてなんかいい気分になった

「さあ、蓮ちゃん早うあがってや、今日はご馳走や」

鼻唄混じりで車椅子でリビングに向かうはや姉を僕も追う

八神家リビング

「す、すごい、全部はや姉が作ったの？」

「そうや、すごいやろ」

テーブルの上には吸い物、筑前煮やちらし寿司更には刺身等が並べられていた

「「いただきます」」

まずは筑前煮を食べる、うん美味しい、リンクスさんに負けないぐらいだ。

「蓮ちゃん、これも食べてみてや。はい！」

はや姉が唐揚げを箸に摘まんで持ってくる

「あむ、モグモグ……」

「れ、蓮ちゃん味は……」

おそるおそる聞いてきたはや姉に答えた

「うん、すごく美味しいよ。はや姉いいお嫁さんになれるね」

「な、何いっとるんや。これはあくまで予行……」

顔を赤くするはや姉の言葉の最後が小さくて聞こえなかったけどはや姉の旦那さんになる人は幸せだな

「ご馳走様でした。はや姉のご飯美味しかったよ」
「蓮ちゃんにそう言われると嬉しいわ」

そうして片付けを手伝いながら石田先生が話してくれたはや姉のことを思い出していた

［はやてちゃん、蓮君と出会ってからは治療やリハビリに真剣に取り組むようになったわ。これからもはやてちゃんの事をよろしくね］

「…ちゃ…蓮ちゃん、どこか気分悪いんか？」

「違うよ、少し考え事してたんだ」

はや姉心配しすぎだよ。
そんなこんなで楽しい時間は過ぎ眠る時間になったんだけど……

「蓮ちゃん、今日一緒に寝てくれへんか」

「……はや姉、絶対に変なことしないって約束したらいいよ」

やっぱり甘いのかな、前にあんな事されたのに（Ａｓ編第一話参照）　けどいいかな

６月３日　ｐｍ１１時５５分

はやての部屋

寝づらい、まずはそう思った何故なら

「一度でいいから蓮ちゃんを抱き枕にしながら寝てみたかったんや」

抱き枕じゃないんだけどな、抱き締められるたびにいいにおいがするしなかなかに眠れない

「ねえ、はや姉あの本光ってないかな？」

「あれ本当や」

いきなり部屋全体が揺れ鎖に縛られた本がいっそう輝きをまし鎖が弾け

［封印を解除します］

「う～ん」

「はや姉！しっかりして」

崩れるように気を失うはや姉を抱き抱える

［起動］

機械的な音声が聞こえ振り向いた場所には

「闇の書の起動を確認しました」

「我等、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

「夜天の主の元に集いし雲」

「ヴォルケンリッター何なりと命令を」

二人の女の人と子供と背が大きい男の人がその場に膝まづいていたが、いまはそれどころじゃない！

「貴方たちは誰なんですか！」

「誰だてめえ！」

「お前は何者だ、もしや主に危害を加え…」

「僕の話を聞いてよ！！」

あまりの大声に驚く四人大きな声を出すの初めてかも知れない

「今はそんなことよりもはや姉を病院に、早く病院につれていかなきや駄目だよ！！」

僕の言葉にうなずき病院に向かおうとする四人にあることに気づき呼び止めた

「なんだよ、男女」

疑り深い目をするなこの子、と今は其より

「みんな、ちゃんとした服来てからいこうよ」

だってあまりにも目立つその格好でいったら怪しまれると言うと疑り深い目で見ながらも納得したみたいだ

「じゃあ準備はいいね？いくよみんな！」

はや姉を優しそうなお姉さんに預けると一路病院へと向かった

この日、はや姉と僕は守護騎士、ヴォルケンリッターと出会った

僕が人間から黄色い瞳の異形になる日までの物語が今始まる……

第三話　「蓮、はや姉の家にお泊まりと新たな家族」（後書き）

おまけ

「この街に蓮がいるんっすね」

「うん、間違いないよウェ……」

「待って！姉さん達みたいに仮面シスターを名乗るっす！」

「…僕は蓮に前あった時に名乗ったよ」

「本当ッスか?!」

第四話　「はや姉と守護騎士、黄色い瞳の覚醒（目覚め）」（前書き）

蓮君が遂に覚醒しました

第四話　「はや姉と守護騎士、黄色い瞳の覚醒（目覚め）」

6月4日　海鳴大学病院内
同病室

「本当、はや姉に何もなくて良かったよ」

「蓮ちゃん、心配しすぎや、うちはもう元気やで」

「あの、はやてちゃん、蓮君あの人たちは？」

石田先生の向いた先には守護騎士、ヴォルケンリッターが立っていた（一応服は蓮が渡したのを着ました）

「あ、あの人たちは…」

「石田先生、あの人たちは　はや姉の親戚なんだ、誕生日をわざわざ仮装迄してきてくれたんだよね」

「そ、そう親戚なんや、わざわざ遠い祖国からきてくれたんですよ、びっくりしすぎてもうてそれで…」

「そうなんですよ」

「その通りです」

はや姉の即席ストーリーが効を奏し石田先生に信じて貰えた。

だけどはや姉の家に帰ってからずっと…

「「「「……」」」」

視線を感じる原因は守護騎士さん達だった

特にあの女の子の視線はなんと言うかきついなあ

「そうか～この子が闇の書ってもんなんやね」

闇の書を見ながら守護騎士さん達の説明を聞きながら机に向かうはや姉はあるものを取り出した

「分かったことがひとつある、闇の書の主として守護騎士皆の衣食住きっちり面倒みなあかんと言うことや」

「はや姉、じゃあ僕も協力するよ、まずは皆の服を買いにいかないとね」

「ありがとな蓮ちゃん、早速買いにいこか」

服を買いに来たまではよかったんだけどある問題が起こった

「は、はや姉僕外で待ってるから！」

「え～蓮ちゃんも一緒にいかなあわからんよ（笑）」

そう、下着売り場だった、結局はや姉は一人で買いに行き待つこと数十分

「ふう～蓮ちゃん待っとったか？」

「はや姉、皆待っているみたいだし帰ろうか」

こうして守護騎士さん達全員の服を買って戻ったんだけど現在

「……」

「（し、喋りずらい）」

廊下で三人が着替え終るまで待ってると大型犬になったあの人が喋りかけてきた

「…蓮と言ったな、主とはどんな関係なのだ？」

「……はや姉は僕の大事な友達だよ」

「……そうか」

短い会話だったけど悪い人？じゃなさそうだね。大型犬にもなれるしすごい

「……狼だ、蓮」

何でわかったんだろ、心を読むのが得意なのかな

「お待たせや、蓮ちゃん。さっそくお披露目も兼ねた自己紹介い

こか」

部屋にはいると着替えを終えた守護騎士さん達がこちらを見ている、　自己紹介するかな

「はじめまして、新田蓮って言います。趣味はぬいぐるみ作りと弓道です、これからよろしくお願いします」

自己紹介を終える、もしかしてわかりづらかったかな?

「…烈火の将シグナムだ、弓を使うのか、蓮…」

「私は湖の騎士、シャマルです。蓮君よろしくね」

「楯の守護獣ザフィーラだ、蓮」

ここまではうまくいったんだけどあの子の番になったときだった

「……」

「ほらヴィータちゃん自己紹介しなきゃ」

「……鉄槌の騎士、ヴィータだ、男女」

シャマルさんに促され自己紹介するヴィータに苦笑しながら思った、男女って言うから嫌われているのかな僕は?

守護騎士達と会ってから三週間が過ぎたある日

シグ姉達の騎士甲冑のイメージをはや姉と僕は考えていた

「シグナムはこんな感じでええな、シャマルは参謀的な感じや」
「ザフィ兄は動きやすさを重視して、ヴィー姉のは…」

僕が考えた案を　はや姉に告げるとＯＫが貰えた
ヴィー姉喜んでくれるといいな

そしてリビングにて騎士甲冑の御披露目が行われた

「主はやて、素晴らしい騎士甲冑ありがとうございます」
「ありがとうございますはやてちゃん」

「主、ありがとう」

そしてヴィー姉の騎士甲冑が姿を現す

「…はやてありがとう」

「フフフ、ヴィータとザフィーラの甲冑は蓮ちゃんが考えてくれたんや、お礼なら蓮ちゃんに言うんや」
「…蓮、いい甲冑だ」

「男おん…蓮ありがとう」

「気に入って貰えただけで十分だよ、ザフィ兄、ヴィー姉」

この日を境に皆との距離がなくなり、はや姉とシグ姉達と楽しくも穏やかな日々が続いた

8月6日、夕方

「今日も大漁や、やっぱり家族が多いと助かるわ」
「そうだね、はや姉。シグ姉やっぱり僕も荷物持つから渡して」
隣を歩くシグ姉の荷物を受け取ろうとする
「蓮、今主の車椅子を押しているだろう、どうやって持つ気だ?」
「お前以外と抜けてるんだな」
今はや姉の車椅子を押していたんだった。
それをシグ姉とヴィー姉に言われへこんだ、抜けているのかな僕はもうすぐはや姉の家に到着する時それは起こった
「!なんだあれは」
目の前に居たのはウサギと人を足したようなナニかがこちらをうかがっているのが見える
「蓮!主を早く安全な場所に連れて…」
騎士甲冑を展開し構えるシグ姉にウサギが襲いかかってきた

「く、ヴィータ！結界を張ってくれ」

「わかった！」

ウサギの攻撃をレヴァンテンで防ぎながらヴィー姉に指示を出し、結界が展開された

「シグナム！今あたしも行くアイゼン！！」

ヴィー姉も騎士甲冑を展開しウサギにアイゼンを降り下ろす！

「ぶっとべえぇ！」

「＃＄％＆ａｍｐ；＊＊＊！」

ウサギは頭にアイゼンの重い一撃を受け言葉にならない声あげながら壁にぶっかる

けど気づくべきだった、後一体ウサギが居ることに

「＊＆ａｍｐ；＄＊＄＄＊＆ａｍｐ；＊＆ａｍｐ；！」

「はや姉あぶない！」

「え？」

はや姉を守るような立ちはだかる、しかし其を気にせずウサギは僕を殴り飛ばした

「うわあああ？！」

「れ、蓮ちゃん！！」

目の前に火花がまいからだが自分のじゃない感覚が襲う

（…ぼくどうなったのはや姉、何で泣いてるの？）

「蓮ちゃん、しっかりしてや蓮ちゃん！！」

「蓮？くっ！そこをどけえぇぇ！！」

「しっこいんだよ！ウサギもどき！！」

シグ姉とヴィー姉がウサギの片割れと相手をして身動きが取れない

「&

固い壁に背中を打ち付けられ意識が飛びかける

「れ、蓮ちゃん！っ！こ、来ないで！」

はや姉の方をみるとウサギがはや姉に近付いてくる、立ち上がろうにも体がしびれて動けない……

（だけど、もう一度でいいから立たなきゃ…はや姉を守らなきゃ）

再び立ち上がろうとするも膝に力が入らない

（僕はもう駄目なのかな……）

「助けて、蓮ちゃん！！」

意識が墜ちようとしたときだった

はや姉の声が聞こえる、

助けを求める声が

僕に助けを求めるはや姉の叫びが！

僕に再び立ち上がる力を与える

「う、うく、ううあああ！」

「れ、蓮！」

「蓮、おまえ…」

立ち上がった僕にウサギが攻撃を仕掛けようとしたときだった

＞ようやく目覚めたようね蓮＜

「え、だ、誰？」

＞蓮ここよ＜

声は首に掛かってるペンダントから聞こえていた

「き、君は誰なの」

＞それよりも前をしっかりみて蓮！＜

前を見るとウサギが拳を振り上げ殴ろうとするのをなんとかかわす

＞蓮、今から私の言う通りにしてまず私を首からはずしてＤ－メット起動って言って＜

「で、Ｄ－メットき、起動？！」

僕はペンダントを外して起動と呟く

ペンダントが分解されメット？に構成され僕の手に現れた

＞其を被っ……＜

「蓮ちゃん！」

振り向くとはや姉が心配した顔で見ている。

「大丈夫だよ、はや姉。僕を信じて」

そう言いD-メットをかぶった僕に彼女?が言葉をかける

＞被ったらこう言って変身って＜

僕は知らないうちに右手を顔の前に左腕を腰に構え叫んだ

「へ、変身!?」

僕の体にナニかがざわめき服が弾け飛ぶ、そして体が大人に変わり　体の回りに鎧みたいなものが浮かび装着されそこに居たのは…

…

鬼の角に黄色い瞳が目立つ仮面、その体を蒼と黒の装甲を身に纏いし異形がそこにいた

「蓮、おまえその姿は?」

「……なんなんだよおまえは!」

ウサギと戦いながら其を見たシグナムとヴィータは驚きを隠せなかった

蓮が自分達の主、八神はやての想い人が異形に姿を変えたことに

今ここに黄色い瞳の戦士が誕生した瞬間だった

「……蓮ちゃん」

第四話　「はや姉と守護騎士、黄色い瞳の覚醒（目覚め）」（後書き）

おまけ

同日同時刻

「く、こいつら数が多すぎる」

＞飛鳥悪い報せだ、別な場所にも現れた…あれ？＜

「どうしたD？」

＞奴等の反応が突然消えやがった＜

「どういう…こいつら！」

飛鳥の目の前では蜘蛛？が糸を吐き子供を絡めとろうとする

「危ない！」

糸を体に受け絡めとられ身動きが取れない

「早く逃げるんだ」

「う、うん！」

子供が逃げていくのを確認して糸を引きちぎり飛鳥は戦う。

飛鳥は知らない蓮が自分と同じ異形になったことにまだ知らなかった

第五話　「黄色い瞳の戦士その名は……」（前書き）

蓮君初戦闘終了～と新キャラ

第五話　「黄色い瞳の戦士その名は……」

「……蓮ちゃん？」

はや姉が僕を見ているけど今はウサギをどうにかしないとはや姉が危ない

＞蓮！来るわよ＜

「う、うわあ？」

ウサギのパンチが襲いかかるが、其をかわしパンチを叩き込む…

…あれ？

「＃＊＄＆ａｍｐ；＊！！」

全然効いてない！しかも余計怒らせたみたいだ

＞蓮！ツインソードを使いなさい！＜

「え、ツ、ツインソード！」

叫ぶと同時に両手に短めの片刃剣が握られる

「え、えい！」

「＊＆ａｍｐ；＄＆ａｍｐ；＊＄？」

双剣をウサギに降り下ろすけどまだ威力が足りない

＞蓮！双剣の利点は手数の多さ、素早く斬撃を叩き込みなさい。私もサポートするわ＜

彼女？にそう言われ剣を構えた

ウサギがその脚力で蓮を翻弄しながら蹴りと拳を繰り出すが

＞蓮、右斜め下！次は左へ回って切り下げて！＜

「うん、え、えい…やあ！！」

拳や蹴りを双剣で防ぎ右斜め上へ逆袈裟で切り上げ左へ回転しながら剣で切り下げる様はまさに剣舞だった

「すげえ、シグナムもあの動き出来るか、シグナム？」

「…っ！ああ多分私に出来ると思うな…」

ウサギと戦いながら初めて戦う蓮の動きに感動を覚えるシグナム

「えい！やあ！！」

＞少しずつ動きを覚えてきたわね、蓮！そろそろ決めなさい＜

乱舞が効を奏しウサギが弱ってきたのを見た彼女？の言葉に頷くと足元に青白い魔方陣が展開される

＞蓮！私に合わせて言って！＜

「う、うん、わかった」

「＞アブソリュート・スラッシュ！！＜」

ウサギに一気に詰めより通り抜け様に青白い斬撃の嵐を打ち込む

「＄＊＄＄＃＆ａｍｐ；！？」

ウサギは無数の斬撃後一瞬氷に包まれ砕けるその場所にはもとに戻ったウサギが残った

「……後は、一匹だけだね」

僕はシグ姉達の方を向く

「はあああ！紫電一閃！」

「ラケーテンハンマー！！」

……余りの攻撃の嵐にふらっくウサギ

シグ姉達怖すぎるよ

しかしウサギが意外な行動を起こした

「待て、逃がすか！」

逃げ出したウサギをシグ姉達は追うけど距離が離されていく

＞蓮。貴方弓を使ったことある？＜

「え、弓だったら僕得意だよ。なんで？」

＞蓮！細かい話はあと、ツインソードを合体させなさい＜

言われた通り柄を繋げるとその部分にパーツが追加され弓になる

「弓に変わった？」

迷わず弓をウサギに向け構える

＞蓮、自分の力を、遠くまで撃ち抜く矢をイメージして＜

足元に青白い魔方陣が広がり弓に矢を繼がえる

（力を矢に集める、もっと集めて遠くに射つ！！）

先端にも魔方陣が展開され青白い魔力が矢に集まる

それは一本の矢、しかし凄まじい魔力を秘めた青白い絶対零度の力

それが今放たれる！

「＞フリージング・エクスキューション！！＜」

青白い絶対零度の矢は凄まじい速度でウサギを撃ち抜くと同時に凍りつき砕ける

「…やっぱりウサギなんだね」

氷が砕けた場所にいたのはやはりウサギだった

「あ、あれ？」

体かふらっき地面につく寸前誰かに抱き止められた

「蓮、大丈夫か？」

「シグ姉、ありがとう」

「気にするな、今はそれより……」

「蓮ちゃん！」

凄い速さで車椅子を操るはや姉が抱きついた

「なんであんな無茶したんや、あんな怪我までして…」

「はや姉、ごめんあんな無茶もうしないから、」

＞……そんなことより早くこの場から離れた方がいいんじゃない＜

彼女？に促されはや姉とシグ姉達は買い物袋を持ち家へと向かった

けど家についた時問題が起こった

＞蓮。貴方今服持ってるかしら＜

「え、なんでなの？」

＞貴方このまま変身を解くと全裸になるわよ＜

「……それ本当なの？」

そう今服を持ってない、どうしょうか悩んでいると肩に手を置かれる…振り向くとソコには凄くいい笑顔をしたはや姉が手にあれを持っていた

「…蓮ちゃん、久しぶりにこれ着よか」

「…待って、はや姉。それって処分したはずだよね?!」

その手にあったものそれは黒いゴスロリ服だった

「服ないんなら、これ着とこか」

にじり寄るはや姉から逃げ出そうとしたときそれは起こる

＞蓮、ごめんなさいもう変身維持できないわ＜

「え、ちょっとま……」

装甲が色褪せ消滅しメットを被ったまま裸ではや姉達の前にいた

「あらあら」

「……」

「あ、あ、あ!?」

「相変わらず立派やな～」

「……」

シャマル姉、シグ姉、ヴィー姉、はや姉、ザフィ兄の順番で全てを見られました

八神家リビング

「……いい加減機嫌なおしてや…蓮ちゃん」

「……」

そこには黒いゴスロリ服を着た蓮ちゃん（笑）がいた

「蓮って怒るとあんなに怖いんだな」

「そ、そうみたいね」

「……そのようだな」

「……蓮」

＞怖いのね～けどその顔も良いわねぐ

八神家とメット？はドアの後ろから覗き見しながら事の成り行きを見守ってる

「……はや姉、今回だけだよ」

「え、許してくれるんか」

「うん、何も考えずあの姿になった僕も悪かったしだから良いよ」

ドアの後ろから覗き見していた八神家とメット？は胸を撫で下ろすと同時に有ること誓った

（（（（（蓮を絶対怒らせないようにしょう））））

八神家リビング

「僕のあの姿怖くなかった？」

「怖くないと言うたら嘘になる……けど守ってくれたやないか、だからうちは蓮ちゃんを怖がらんで」

「蓮、どんな姿になろうとも私はお前を拒絶しない。」

「蓮は、はやてを守ってくれた。だからあたしも怖がらない」

「私も蓮君を怖がらないわ」

「……我もだ、蓮」

その言葉を聞いた僕は泣いていた、はや姉達に拒絶されるのが怖かったんだ。

「あ、ありがとう、はや姉、シグ姉、シャマル姉、ヴィー姉、ザフィ兄」

「そや、蓮ちゃんの名前考えんとな」

「何の名前？」

「あの姿には名前がないと不便やろ、うちがかっこいい名前考えておくわ」

…確かに名前がないと不便だ、はや姉を見ると真剣に名前を考えているようだ

（うちを守ってくれた時の蓮ちゃんは王子様に見えた、だから一番似合う名前考えてあげるんや）

そういう想いがあったのは当の本人（蓮）は気づいてないようだ

黄色い瞳の戦士は夜天の主と騎士達に仲間いや家族として認められ、新しき名を授かる時は近い

夜天の主と騎士を巡り
飛鳥と戦う運命が始まった事に蓮は気付いてない

ある管理外世界の違法研究施設の一室、
モニターに蓮と飛鳥の変身後の姿が写し出され其を見つめる男、
ドクターLは狂気の笑みを浮かべ二人を見つめていた

「まさかもう一人のDが目覚めるとは…これでアレの完成が近づきます」

目を向けた先には生体ポッドがありその中にいたのは…

紫の髪が目立ち飛鳥達より幼い少女が培養液に浮かび、その下のプレートに開発コードが刻まれていた

[DeUS]

第五話　「黄色い瞳の戦士その名は……」（後書き）

おまけ

「D、これで決めるぜ」

＞おう！＜

蜘蛛？に向け必殺の一撃が今放たれる！

「ライダーキック！」

「&ａｍｐ；＃＄＊％＊@！？」

赤い螺旋が蜘蛛を撃ち抜き分離された奴等は消滅その場には蜘蛛が残った

「D、さつきの反応はどうなったんだ？」

＞今は奴等の反応すらないぜ、こんなのは初めてだ＜

俺たちが戻ろうとしたときだった

「あ、あの待ってください」

振り向くと助けた子供の母親が俺を呼び止めた

「ユウヤを助けてくれてありがとう。えと」

「…仮面ライダー」

「え？」

「俺の名は仮面ライダーDだ」

「仮面ライダー！僕を助けてくれてありがとう！！」
その言葉を聞き終えると背を向けジェイダーでその場を去った

（ありがとうか、あいつら以外から初めて言われたかもな）
そう思いながらジェイダーを屋敷に向け走らせた

幕間　「その名は［J］」（前書き）

今回はどシリアスな話かも

幕間　「その名は［J］」

とある管理外世界の地下数百メートル地下大空洞に偽装された施設

その施設の一室では多数の立体デスプレイが浮かぶなか、高速タイプをする一人の人物がいた

「……ふう、これでジェイダーのＡＩを移せば完成だな。」

「J、コーヒーをどうぞ」

「ありがとう、ウーノ」

一人の女性、ウーノが渡したコーヒーを飲みこれからの事を考える。

（奴がいたと思われる施設に足を運んだがデータは全て破壊済み、まさかあの計画を復活させる気だったのか、あの時データは全て消したはずそれをどうやって）

私の名はＪ、奴等の計画を止めるため娘達と複数の有志と共に日夜戦いを行う者、　そしてあの子たちを守る者だ

新暦５０年

ある組織に作られた私達兄妹は人の命を塵芥のように思うような最低な人間（妹を除く）だった

そんなある日だった新田先生と新田シンヤに会ったのは

「……君！君は命をないがしろにしすぎる！！命は限りがあるからこそ輝くんじゃ！！」

「…、僕は信じているよ、君が僕を信じなくてもね」

今までこんなこと言われたことがなかった

少しずつだが私は彼らの言葉にそして科学者の信念に傾倒していった

「兄さん、お弁当忘れて……こ、この人はだ、誰でしゅか？！」

「彼は「初めて会うね、Ｊからいつも話を聴かされてるよ、マリアちゃん」

…おいシンヤ！なに言っているんだ！」

マリアはシンヤと目をあわせた瞬間顔が赤くなるのを見た

「……じ、じゃあ、私はここで！」

「あっちゃ～嫌われちゃったかな、マリアちゃんに」

「……シンヤ気付いていないのか？！」

妹が恋しさらには結婚するなんて、この時私は夢にも思わなかった

新暦５４年

式場

「シンヤアァァ！妹を頼んだぞおぉぉ（泣）」

すっかりアルコールが回り泣き上戸になった私を先生は面白いものを見た顔をしている

「J、飲み過ぎだよ（汗）」

「に、兄さん（汗）」

私は次の日にプレシア女史から昨日の事をききかなり後悔し二度と酒を飲まないと誓った

同年

私は新田先生、シンヤ、マリア、プレシア女史と共にある計画を考えた、

［R計画］それが大きな十字架をあの子たちに背負わせてしまうとは思わなかった

新暦５９年

「ほ～ら飛鳥、蓮。ここまでおいで」

「「じぇー」」

「随分とJ君になついておるの」

先生とシンヤ、マリアは笑顔でよちよち歩きの飛鳥と蓮を見ている

子供の成長は早いなと私は想う

「本当ね～やっぱり名付け親だからかしらね」

「マリア、僕が考えた名前は？」

「貴方が考えた名前は二朗や三郎ばかりだったわよね、今時はないわよそんな名前つけるのは」

マリア、あんまり言い過ぎると…時すでに遅かった、シンヤが部屋の隅で拗ねてるよ

「「じぇ～」」

「よく来たね、偉いよ飛鳥、蓮。ほら高いた～か～い～」

私は親友そして家族が出来たことに感謝した、この時間がずっと続けばいいと

新暦６０年、新田研究所

「我々にどうしても協力出来ないと?ドクターN」

「当たり前じゃ、儂らのR計画があんな奴等のため使われるのはまっぴらごめんじゃ!!」

「私も先生と同じ考えだ帰ってくれませんか」

「……分かりました。ですが1つだけ言わせていただきましょう……我々を舐めるな爺、それに無限の欲望」

彼が去り、暫くしてからだった　シンヤたちが事故にあったと連絡が来たのは
病院に駆けつけ見たものは今にも命が尽きかける
シンヤとマリアだった、私達に気づきこちらに目を向けた二人の手を握った

「ハハ・ハ、参ったね。せ、折角の家族…旅行が、こ、こんな」

「シンヤもういい、喋るんじゃない」

「に、兄さん、……あ、飛鳥と…蓮…は大丈…夫なの?」

飛鳥と蓮が生死の狭間をさまよっている事を今の二人に私達は言えなかった

「シンヤ、マリアあの子たちは無事じゃだから生きてくれ！」

「……父さ…ん、ジェイル。飛鳥…と蓮…事を」

「私…も、お…願…い、義父さん、ジェ…イル…兄さん…。」

ピー！

冷たい電子音が響くと同時だった、力なくそういい残しシンヤとマリアは息を引き取ったのは

「…シンヤ、マリア、目を開けてくれ、頼む…」

「ジ、ジェイル君。シンヤとマリアは…」

「頼むから、目を…目をあけてくれえええええ！！」

二人の亡骸の前で泣き叫び私は床に崩れ落ちた

なぜだ、何故二人を喪わなければならない、

昨日まで元気に話していたのに何故だ！

しかしある知らせが悲しみにうちひしがれる先生と私に飛び込んできた

飛鳥と蓮がＩＣＵから姿を消したと言う事実を

新暦６１年　某違法研究所

「ここに飛鳥達はいるんですね」

「そうじゃ、間違いなくここにおる」

病院に偽装された違法研究所入り口付近に私達はいる
この一年半私と先生は姿を消した飛鳥と蓮を探し様々な世界の違法研究所等を叩き潰していた

諦めの言葉が浮かびかけた時、飛鳥達の所在情報が入ったのだ

「行きましょう、先生……Ｒ起動！！」

私が叫ぶと右手のグローブが光り、アーマーが展開され装着されていく。

そこにいたのは

試作型ＤＡＳ［Ｒ］をまとった私だった

本来はレスキュー用に作った試作品だがパワーはある

「うおおお！」

重く厚い扉をなぐり壊し施設の中にいるはずの飛鳥を先生と共に警備員や違法魔導師を気絶させながら探して行く

「ジェイル君、飛鳥達の所在がわかった！この奥じゃ」

そして飛鳥達のいる研究棟に着くと扉のロックを解除し中に入った私たちが見たものは

「「……」」

Dメットを被った飛鳥達が私達を見ていた

「飛鳥、蓮！！無事だったか…！」

「「……」」

何も反応を見せずただ意思の無い瞳を向ける飛鳥達に呆然とした

「ま、まさか、奴等なんて事を！」

そう、飛鳥と蓮二人の心がすでに壊れてしまっていたのだ

もう少し早く見つけていればこんな事には…

その時だった桁ましい警報と施設の崩落が始まったのは

恐らく誰かが証拠隠滅のため自爆装置を押したのだろう

「先生、今はこの子達を連れて逃げましょう」

崩れ落ちる壁から飛鳥達をかばいながら転送ポートに向かう

飛鳥達を抱くと私達は転送ポートへと向かう

「先生！座標設定を終わりました、早くポートに」
「ジェイル君、君も早くくるんだ」
ポートに入った飛鳥と蓮を抱き抱えた先生は叫ぶが　私にはまだやる事がある
「先生、私は残ります、彼等…いえ最高評議会の計画を五年、いや十年遅らせてみせます、私のことはいいですから…」
「…っ！この子たちにとって君は家族なんじゃ！早く来るんじゃ！」
「新田先生、私はシンヤと飛鳥と蓮に出会えてなかったら　私は命の素晴らしさ人を信じる心を理解することは無かった。　ですから…」
私は先生の両手に眠っている飛鳥と蓮に優しく微笑みを浮かべ語りかけた。
「…飛鳥、蓮、多分と会うのはこれが最後かもしれない。例えこの先何があろうとも強く生きてくれ。」
そういい終え転送開始キーを押し光と共に消えていく先生と飛鳥達を見送る
「ジェイル君！！」
先生て飛鳥達は光に包まれ光が収まったときそこには私だけが残

った

新暦６２年

あれから半年が経ち、私は今［R計画］のデータ破壊の為にここ
違法研究所に潜入していた

監視カメラにダミーを流しながら奥へデータルームへと向かった
私は途中あるもの見てしまった

四肢を機械に変えられた少女

光の羽を躯に付けられた少女

そして巨大な大砲を持たされ苦しむ少女

もう私は見ていられなかった

「今度はうまくいったな」
「ああ、だが余りにも泣き叫ぶから麻酔の量を増やしたが大丈夫か」

「構わねえさ、代わりはまだまだあるんだからよ」

その言葉を聞いた私は吐き気を覚えた

こんなやつらに飛鳥達、シンヤとマリアは！！

「さあ次いこうか」

「今度は何だ?」

「砲撃タイプを再改造するんだとさ、クライアント…」

その言葉をきき終わる前に彼らに手刀を当て気絶させ少女達を見る

「……またじっけんするの?」

「……違うよ、君達を助けに来たんだ」

あの時の飛鳥達と同じ目で見る少女達を連れ出した私はデータルームへと到着した

「……まさかこんな事の為だけにこの子達を!」

戦闘機人計画、機械と人体の融合をした生体兵器を生み出す計画

私も先生に出会ってなければしていたかもしれない。

データを探す私に一人の少女が話しかけてくる

「……あの、私も手伝います」

素早いタイピングで目的のファイルが開かれるのに驚く

「君は一体…」

「…私は情報統制処理に特化した…戦闘機人です」

無表情だが悲しみが混じる言葉、この子はどれだけの苦しみと悲しみを味わったのだろう

「其処までだよ、ジェイル・スカリエッティ」

データ全削除に後数分と言う時だった

奴が、ドクターLが私の前に姿を表したのは

「まさか私のセキュリティを掻い潜りデータ破壊をしにくるとはね、無限の欲望」

「その名前は捨てた！私の名はJだ！！」

飛鳥達を助けたあの日に私は過去を捨てその時からJを名乗った

「あの子達の運命を歪めたお前達を私は許しはしない」

一瞬奴は呆けた顔をし、直ぐに狂喜に満ちた顔を浮かべた

「アハハハ。過去を捨てた？何を言ってる？それで精算したつもりか無限の欲望！」

「黙れ！お前達の計画を潰したら　私はその報いを受ける。それまで戦うのを私は止めない！！」

「出来るものならやってみるといいさ、でもこの状況をどうする気だい」

どうやら私たちは囲まれているらしい、何かに掴まれる感触を覚え振り向くと銀髪に眼帯を着けた少女が袖を握りしめ震えている

「大丈夫だよ、私が君達を守るから…R起動!!」

＞ラーサー＜

体が紫光に包まれ白と紫の装甲、バイザーが目立つ戦士が現れたのに驚くドクターL

「な、何ですかその姿はまさか貴方もDe…」

「違う!私の親友(とも)が作り上げ理不尽な行いから人々を守りし戦士、[R]だ!」

そう言い放つと同時に私は取り囲む連中を次々と気絶させてドクターLに迫っていく

「くっ!このままでは不利みたいですね。せめてデータだけでも…」

奴がデータを吸い出そうとコンソールに向かった時

[デリート完了]

機械音声が響き渡り、絶望に顔を歪め床に崩れ落ちるドクターLはしばらくして笑い始めた。

「ハハハハハハハハ!やってくれたな!無限の欲望!」

その顔は絶望から狂気に変わり、その矛先を私からあの少女へと向かう

「失敗作！今すぐバラバラに壊してやる！」

片手にデバイスを構え少女へと無数の魔力弾を放つ　それをかわせず目を瞑る少女の前に紫光を纏ったなにかが楯になる

「…大丈夫かい？」

「…あ、ああ！？……血、……血が！」

当たる直前に少女の楯になったが、装甲の薄い部分が傷付き其処から血が流れ、華奢な手で塞ごうとするが隙間から流れ落ちる

「そんな失敗作を庇うとはな、貴方も一緒に死になさい！」

再び無数の魔力弾を放つも私の展開した障壁に阻まれた事に、驚いている彼に私は静かに呟く

「…今なんと言った？」

「はぁ？失敗作だと言ったんです」

狂気が入り交じった顔で答える彼に怒りを覚えた

「この子達は失敗作なんかじゃない！…人間だ！！」

「何が、何があああ人間だあああ！死ねえジェイル・スカリエッティ！！」

再び無数の魔力弾を彼は放つ、私だけなら避けられるだがこの子

達が危うくなる、私は温存していた切り札を使う

少女達に障壁を張り終えると、魔力弾が当たるのを気に止めず、彼に拳を向け構えると同時に紫色の魔法陣が輝く

「なんのつもりか知りませんがこれでおしまいです！」

彼が無数の魔力弾を一つに集めこちらに向け撃とうと構えると同時に私は切り札を解放した

「はあああああ！」

背中にある魔力スラスターが展開され構えた拳に紫光が集まる

それは鉄拳と言う名の切り札

紫光を拳に宿し人々に仇なす理不尽な暴力を打ち砕く切り札

その切り札の名は―

「ウオオオ！ライダーパンチ！！」

同時に彼の集束された魔力弾が放たれ拳と押し合う形になる

「アハハハ、そんな拳が私の魔法に効くと思っているのですか？」

徐々に押されはじめ装甲に亀裂が生じ血が滲み出してくるのを構わず力を込める

（まだだ！まだ倒れるわけにいかない、私の後ろにはあの子達がいる！）

だがそんな思いも空しく押され始めていく、その時だった

「「……で」」

（声？）

激しい魔力のぶつかり合う音に紛れ聴こえてくる。しかも一人だけではない
声は数を増やしながら彼の耳に入ってくる

「「「「ま　……な…　」」」」

さらにはっきりと聴こえてくる声に耳を傾けた時だった。

「「「「「「……負けないで！……ライダー！！」」」」」」

その言葉はまるで彼に、Ｊに更なる力をつきかけていた魔力を甦らせた！！

「ウオオオ！！」

「な？何だと、私の魔力が押されていく？！」

Ｊは魔力弾を押し返していき遂に

「これで最後だ！ライダーパンチ！！」

「ば、馬鹿な！うあああああああ？！」

魔力弾を打ち砕くと同時にドクターLは凄まじい勢いで壁を撃ち抜きながら吹き飛ばされ姿が見えなくなった

「や、やったのか？ウゥ？！」

痛みを忘れて戦っていたJは甦った痛みで地面に倒れかかった時誰かに支えられた。

「だ、大丈夫？ら、ライダー？」

「君達の声が聞こえなかったら駄目だった。ありがとう」

支えられながらJは礼を言い少女達と共にこの場所から転送して去っていった

これが私とこの子達との出会いだった

そして時は現在に戻る

「あれから一年半か…」

「そうですね、J」

彼女、ウーノはJに出会えたことに感謝していた、自分達を危険を省みず助けだし「娘」として育ててくれたことに

「もし、私達が貴方に会わなければ［今］はありませんでした」

「そんな事はない。私もウーノや娘達の声が聞こえなければ助ける事は出来なかったよ」

お互いそう言いながらウーノは弟達、飛鳥と蓮の事を考える

（飛鳥さん、蓮さん　例え過去がどうであろうと貴方達は私達の大事な弟よ）

今は会うことが出来ない弟達の事を想うウーノそこに…

「姉さん、パパりん私に何か用っすか？」

「パパりんは、やめてくれないかな、ウェンディ」

Jは苦笑しながら娘、ウェンディに頼み事をした

「私も飛鳥達の所に行ってきて良いんっすか！」

「ああ、それとオットーと一緒に蓮の護衛を頼みたいんだいいかな？」

それを聞いたウェンディは笑顔になりながらも尋ねてきた

「レンレンの護衛と言うとまさか目覚め…」

「其はないんだ、ただ奴等もだが…蓮の通う学校の肉食獣（上級生）から守ってほしいんだ」

「レンレンは凄く可愛いからね、その上級生達からオットーと一緒に守るっす」

「じゃあ蓮の事を頼んだよ」

「了～解、じゃあ行ってきますッス」

笑顔で私達から離れ転送ポートへ向かうウェンディを見送りながら想うことがあった

（先生とシンヤ、私とマリア、プレシア女史が目指していたもの、人工四肢および臓器の拒絶反応を無くす特殊ナノマシンＤの開発、そしてありとあらゆる災害を想定した特殊レスキュー装備内臓型デバイス（デバイスアーマーシステム）、ＤＡＳの開発、それが本来のＲ計画だった）

新田源三、新田夫婦、Ｊ、プレシアの五人が人々を守り命を救う為に考えた夢の計画

しかし特殊ナノマシンＤとＤＡＳはある組織の醜い野望に歪められ生まれたのがＤｅＡＭＯＮだった

その生体兵器［ＤｅＡＭＯＮ］へと改造された飛鳥達は、心が壊される寸前でＪと祖父に助けられるも記憶を喪った

（私達がＲ計画をかんがえなければシンヤ、マリアは死なず、飛鳥と蓮は普通に暮らせたはずだ）

だが、飛鳥は一年前、いるはずのない劣化版Ｄ［デビル］に遭遇

しＤｅＡＭＯＮに覚醒し倒してしまった

これは私達の罪なのだろうか、飛鳥と通信を繋ぎ経緯（生体兵器であることを除く）を話した。

罵られ、軽蔑されてもいい私は飛鳥からの言葉を待った

［Ｊさん、俺は信じるぜ］

意外だった恨み言を言われるものだと思った私に飛鳥は続ける

［この力がなければ人を守ることが出来なかった。要は何の為に力を使うかだろＪさん？］

飛鳥は、そういい終えるとある言葉を、私を変えた言葉を呟いた

「こんな化け物みたいな俺を他人が信じなくても、俺はそいつを信じるぜ」

その言葉はかつてシンヤが私に言った物と少し違うが意味は同じだった

シンヤの信念は飛鳥達に受け継がれている　そう想うと嬉しかった

「だからこれからもよろしく頼むぜ、Ｊさん、Ｄ」

其からは知っての通りだ
ジュエルシードとプレシア女史を洗脳した黒幕ドクターLとの望まぬ再会、
飛鳥はボロボロになりながらも多くの人達と共にプレシア女史を洗脳とDの呪縛から解き放ち
その娘フェイトの心を救った

しかし未だに出現するDから人々を守るため飛鳥は傷つき血を流しながら戦い続ける

私に出来ることは飛鳥の戦いのサポートマシンと娘達を数人送る事しか出来ない事を歯がゆく想う

あの子達、娘達の苦しみを少しでも多く私は背負いたい

「……J」

「ウーノ、今出来ることをしよう。それがあの子達いやこの次元世界の未来へと繋がるのなら信じて進もう」

「はい、J」

再びメンテナンスに戻ったJの瞳には新たな決意に満ちているのを見たウーノも決意を新たにし持ち場へと戻っていった

私の名はＪ、数多の過ちと罪を背負い娘達と有志と共に奴等、ドクターＬの野望と戦う者

そして、己の罪と向き合う一人の戦士だ

幕間　「その名は［J］」（後書き）

おまけ

J
「ジェイダーの定期検査結果は…不味いな」

ウーノ
「どうしました、J」

J
「いやね、ジェイダーの金属疲労が激しくてね」

ウーノ
「新しく作り直せないんですか？」

J
「それは考えてはあるんだだけどね……デバイスになってしまうんだ」

顔を向けた先にあったのは飛鳥と同じくらいのポットがある

ウーノ
「まさか融合……ですか？」

J
「このボディにＡＩを移すだけで完成する、どうしたウーノ？」

ウーノ
「一応きますがジェイダーはまさか女の子ですか？」

J
「ああ、最近になって女の子だと分かったんだ、それがなにか？」

ウーノ
「J、飛鳥さんこの事を知っているんですか」

J
「知らないけど何か問題でもあるかね」

ウーノ
「……（飛鳥さん、将来貴方苦労するわね）」

第六話　「守護騎士と若き仮面の騎士、守りたい人の為に剣を取る」（前書き）

今回で蓮視点は終わりです

第六話　「守護騎士と若き仮面の騎士、守りたい人の為に剣を取る」

あの日以来、はや姉とシグ姉達の家族になった僕、新田蓮はみんなと楽しい日々を過ごしていた

八神家、リビング

「蓮ちゃん、明日はどうするんや？」

「学校が終わってからはや姉の家に来る予定だけど」

帰る準備をする僕に聞いてくるはや姉は少し寂しそうだと思った

「今週の土日にまた泊まりに来るから楽しみにしてよ、はや姉」

「ほんまか！でも蓮ちゃんの家族心配せえへん？」

蓮の家族の事を心配するはや姉だったがそれは杞憂だった

「大丈夫、お爺ちゃんと兄さんが土日に泊まっていいっていってたから」

＊回想＊

朝、新田家食卓

「あ、あのおじいちゃん、今週の土……」

「蓮、泊まりにいっても構わんよ、八神はやて君にこれからもよろしくと言ってたと伝えといてくれ」

「俺も別に構わないぜ、蓮」

笑顔で許しがもらえ蓮は喜んだ、それを見た飛鳥がすごくいい顔している

「蓮は将来は八神のお婿さんにでもなったらどうだ?」

「に、兄さん?!」

あわてふためく蓮にさらに続ける

「いっそのこと、新田蓮から八神蓮になるのもいいかもな…ズドって!おい!弓を射つな、話せばわかる!」

どこからか弓を持ち出した蓮は飛鳥に向けながら

「……兄さん、余り言うと僕怒るからね、そういう兄さんだってテスタロッサさんって子からのビデオメールが来ているの知ってるんだよ」

「な、なじぇしょれををを?」

蓮からの爆弾投下に驚き舌が回らずしゃべる飛鳥

「もしかして兄さんテスタロッサさんって子と付き合って…」

「な、なにバカいってるんだ蓮、フェイトは俺の大事な友達だ。付き合ってる訳ナイジェリアアア！」

もう言葉がうまく出ず混乱する飛鳥は頭から湯気がで始める

「ソ、ソレに俺は化け……」

「あ～～～二人とも時間は大丈夫かの」

飛鳥の言葉を遮るように源三に言われた二人は時間を見ると

現在０７時４０分、バスが来るまで時間がない事に気付き慌てる飛鳥と蓮はご飯を掻き込みバス亭へと向かった

＊回想終了＊

「…てな事があったんだ、だから…ってはや姉どうしたの？」

蓮が説明を終えはや姉を見ると

「蓮ちゃんのお祖父様がよろしくって、お婿さんで新田蓮から八神蓮になる……」

すごく嬉しそうな顔だか何か怪しさを感じ怯える蓮

「……大変だな、蓮？」

シグ姉は主を見て若干引きつつ蓮に声をかける

「う、うんじゃあまた明日ね。はや姉、シグ姉」

「…ハッ！うんまた明日な蓮ちゃん」

ようやく現実に帰ってきたはや姉とシグ姉に見送られ蓮は新田屋敷へと帰路についた

１０月２７日
海鳴大学病院、診察室

「はや姉達どこにいるかな？」

何時も通り病院に来た蓮ははや姉を探しに診察室の前を通ったときだった

「命の危険？！」

「はやてちゃんが？」

「ええ…」

シグ姉とシャマル姉の驚く声が聞こえてきた

会話を盗み聞き終えた蓮はフラフラとしながら病院の中庭に来ていた

「……何で、はや姉が死ななきゃいけないの…」

蓮はベンチに座り込んで泣いていた

そして先程の会話を思い出した

「はやてちゃんの足は原因不明の神経性麻痺だとお伝えしましたが、この半年で麻痺が少しずつ上に進んでいるんです」

石田先生は少し間を置き再び続ける

「この二ヶ月は特に顕著でこのままでは内蔵機能の麻痺に発展する危険性があるのです」

この事実に蓮はどうすればいいかわからず只時間だけが過ぎていった

「…どうしたの…蓮」

声が聞こえた方を振り向くと

「あ、貴女は…仮面シスターさん?」

「蓮…よければ僕に話して…」

蓮の話を聞いた仮面シスターは少し考え答えた

「蓮、もしかしたらシグナムさん達なら何か方法を知っているかも…」

「！　ありがとう仮面シスターさん僕シグ姉達に聞いてくる！！」

蓮は仮面シスターに礼を言うとその場から去っていった、
仮面シスターは中庭にある茂みに目を向ける

「…君達が何者かは知らないけど…もし蓮や八神家に少しでも危害を加えたら…」

言葉を区切り殺気を溢れさせる

「…僕は全力で君たちを潰す…」

そう言うと仮面シスターはその場から去っていった

深夜

海鳴市街地、某ビル屋上
そこに４つの人影?その正体は八神家の面々だった
その表情は固い決意に満ちていた

「我等の、不義理をお…」

その時屋上の扉が勢いよく開かれ目を向けた先には…

「はぁっ…はぁっ、やっと見つけたよ…シグ姉」

「れ、蓮。何故ここに」

扉を開け放った先にいたのは肩を上下させる蓮だった

「はぁっ、…ディーヴァが教えてくれたんだ、はぁ…此所にいるって」

＞全く、貴女たちの魔力を辿るのに苦労したわよ＜

「シグ姉達は、はや姉の病気の原因知ってるんだよね」

「「「「!!」」」」

その言葉に驚くが一人シグナムはあの時診察室の外に誰かいる事に気づいていた

「まさか、聞いていたのか蓮」

「何で…」

「？」

「何で僕だけ除け者にするのシグ姉、シャマル姉、ヴィー姉、ザフィ兄！」

「それは違うのよ、蓮君」

「お前には、はやての傍にいて貰いてぇんだ」

「我も同じ意見だ、蓮」

そうシグナム守護騎士達はこれから行う事に　主であるはやてと蓮を巻き込みたくなかった

だが―

「僕たちは家族じゃないの！シグ姉、シャマル姉、ヴィー姉、ザフィ兄！」

家族、シグナム達はその言葉の前になにも言えなかった

「僕は、はや姉に死んでほしくないし、シグ姉達が傷付くのはもっと嫌なんだ、だから僕にも協力させてよ！」

シグナム達は蓮の決意に満ちた瞳を見て本気である事を悟った

「…わかった蓮」

「いいのかよ、シグナム！」

「ヴィータ、蓮の目を見ろ覚悟を決めた目だ」

ヴィータは納得がいかないみたいだったがシグナムに言われ渋々従った

「シグ姉、シャマル姉、ヴィー姉、ザフィ兄。今から僕の名は蓮じゃない」

「蓮じゃないとはどういう事だよ？」

「ヴィー姉、僕の名は……」

（蓮ちゃん、あの姿の名前決まったんよ、［コルト］って名前や）

（コルト？）

（意味は、幼い馬なんやけど別な捉え方ももあるんや）

僕の目を見ながらはや姉は口を開いた

（才能に溢れた幼き馬とも言うんや、蓮ちゃんはまだまだ成長するからぴったりやと思うたんよ）

（はや姉、ありがとう。この名前一生大事にするよ）

（けど約束してな蓮ちゃんの力は大事な人達を守る為に使うって）

はや姉は小指を出し僕の指を絡める

（（指切りげんまん嘘ついたら針千本飲～ま～す。ゆ～びきった））

あの時の約束を思い出しながら蓮はもうひとつの姿へと変わる

「…（今がその時だよね）、　ディーヴァいくよ。Ｄ－メット起動」

＞いくわよ蓮＜

メットを被り右手を顔の前に左腕を腰にあて叫ぶ

「変身！」

服が弾け、同時にリンカーコアが再構築し　体が大人に変わり、
ＤＡＳが展開と同時に装着されそこに現れたのは
鬼の角と黄色い瞳が目立つ仮面に青と黒の装甲をまとった戦士
夜天の主から名を授かった弓と双剣を使いし若き仮面の騎士

「僕の名はコルト、騎士コルトだ！」

「蓮君、本当にいいの？」
「蓮…辛い道を行くことになるそれ…」

「ザフィ兄、シャマル姉、それがどんなに辛くてもはや姉を助ける為だったら其れを貫き通すよ、だからいいんだ」

守護騎士と若き仮面の騎士コルトはお互いに頷くと、夜天の主を救うべく　ビルの屋上から五条の光と共に飛び立つ

（はや姉、　シグ姉達と僕が絶対に助けるから、だから待ってて）

それから季節は冬に入り二人のＤが激突する時は近い…

飛鳥と蓮、お互いの守りたいものの為に…

第六話　「守護騎士と若き仮面の騎士、守りたい人の為に剣を取る」（後書き）

おまけ

仮面シスターが去った後繁みから二匹の猫が出てきた

「なんなのアイツは」

「お父様に連絡して判断を伺うしかないわね」

二匹の猫は先程の殺気を当てた仮面シスターの事をお父様と呼ばれる人物に連絡するべくその場から離れた

その頃海鳴市街

「レンレンはどこにいるっすかね」

新たな仮面シスターが蓮を探していた

第七話　「仮面ライダーD、敗れる！」（前書き）

飛鳥の体に異変が？

第七話　「仮面ライダーD、敗れる！」

12／2、学校屋上、

「飛鳥ってば聞いてるの？」

「あ、ああ聞いてるぜアリサでなんだっけ？」

「あんたねぇ…、フェイトの事よ！」

箸を止めアリサの話を聞くと、どうやらフェイトの事のようだ

「私、フェイトちゃんと会えるのすごく楽しみ」

賑やかな会話が続くだがなのはが飛鳥の様子がおかしいのに気づいた

「……飛鳥君、どこか具合が悪いの」

「ああ、大丈夫だぜ！ほら」

少しの間をあけた後、わざとらしく元気に振る舞い弁当を食べる飛鳥に念話で話しかける

［…本当に大丈夫？］

［…最近奴等が明け方によく出るから寝不足なだけだ］

［私も手伝お……］

［……その気持ちだけ貰っとくぜ］

［で、でも］

［…なのは、そろそろ昼休み終わりだぜ］

時間だと言う理由で念話を切り弁当を片付ける飛鳥を納得がいかないという表情でなのはは見ていた

「蓮、お前も早く食べろよそろそろ授業が始まるぜ？」

「ま、待ってよ、に、兄さん…ムグゥゥ」

「あ、悪い、ほら飲み物だ慌てず飲めよ」

喉を詰まらせた蓮を心配する飛鳥を見たアリサは

「飛鳥と蓮って、本当仲がいいわね」

「ああ、兄弟だからな、アリサ達も早くしないと間に合わなくなるぜ」

飛鳥の言葉に促され蓮となのは達は屋上から教室にもどるが途中飛鳥はトイレ行くといい別れた

「…オエェェェ…ははは、不味いなこれ…」

吐いたものをみてつぶやく、大量の血が浮いていたからだ

＞飛鳥！お前何時からこんな状態に？！＜

「…先月末からだD、それに変身が永続きしない感じがする…」

先月末から体におこった異常は徐々にそして確実に飛鳥を蝕んでいた、

「D、Jさんに連絡取れないのか？」

＞…無理だ、そうだ！仮面シスター達なら連絡が…＜

「…姉さん達に聞いたらわからないって、向こうから連絡が来るの待つしかない…」

＞それまでに飛鳥に何かあったら俺は！…＜

心配するDに飛鳥は落ち着きながら話しかけた

「大丈夫だD、俺にはDとジェイダーと姉さん達がいる無茶はしないよ」

明るくいう飛鳥に呆れつつDはなんとか連絡方法がないかと探す、これ以上無茶をさせない為に

そして学校も終わり何時ものように、なのは達と帰る途中、蓮は

用事があるていい別れ飛鳥は一人屋敷に帰った

ＰＭ０７：４５　新田屋敷　飛鳥の部屋

「最近蓮の奴、八神ん家によく行ってるなぁ…マジで八神蓮になるかも…」

＞飛鳥！大変だ結界が張られている、しかもなのは嬢ちゃんが襲われている！＜

それを聞いた飛鳥は飛び起きＤを起動させ屋敷を飛び出す

＞飛鳥！無茶だけはしないでくれ頼む！＜

走りながらメットを被る飛鳥にＤは叫びに近い言葉を掛ける

「Ｄ、わかった…けど俺は大事な友達を助けなきゃいけないんだ！」

（俺（化け物）を人間だと言い名前をくれたあいつを助けないで何が男だ）

結界の前に立ち止まると右手を腰に置き左手を顔の前に構え、力を込め叫ぶ！

「変身！！」

特殊ナノマシンＤが活性化しリンカーコアが再構築される、体が大人になると同時に服が弾けＤＡＳが展開装着されそこにいたのは

龍の角に赤い瞳が目立つ仮面に黒と白の装甲を纏いし異形

白い少女から新たな名を貰った戦士
―その名は―
「仮面ライダーD！」

叫ぶと同時に現れるがしかし

「くっ！」

＞飛鳥！＜

ふらつき地面に膝をつく飛鳥を心配し声をあげるDだったが飛鳥は立ち上がる

「D、大丈夫だぜ…ジェイダー！」

甲高いエンジン音が響かせながら赤いボディが目立つバイク［ジェイダー］が目の前に止まりそれにまたがる飛鳥

「結界に突入する！ジェイダートルネード！！」

＞ラーサー＜

魔力の奔流がジェイダーを包み込むと同時に飛鳥はジェイダーと共に結界内に突入し見たものは

「ぶっとべぇぇ！！」

「きゃあああ?!」

赤いゴスロリ服にハンマー?を持った少女がなのはに攻撃をしビルに吹き飛ばした瞬間だった

「な、なのは?!……て、手前ええぇぇぇ!」

叫び声に振り向いた赤い少女は飛鳥を見て驚きを隠せない顔をした

「お前コルト?…いや違えなだって彼奴は今…」

「何ごちゃごちゃと抜かしてやがる!ハンマーどチビ!!」

ぶちっ!

この言葉が不味かった、わなわなと体を震わせ怒りに満ちた顔を飛鳥に向けた

「誰がハンマーどチビでちんちくりんだ!!あたしだって好きでこんな体じゃないんだあああ」

「おお!何度でも言ってやらあハンマーど・チ・ビ!!」

ジェイダーから降りお互いに構える、先に動いたのはハンマーどチビだった

「てゃあああ!ぶっとべぇぇ!」

当たると痛そうなハンマーが頭めがけて降り下ろすが

「甘えぇぇぇ、くらいやがれぇぇ！」

ガキイィィ！！

降り下ろされたハンマーと打ち合う形になり互いに競り合う

［飛鳥！］

久しぶりに聞く師匠の声が飛鳥に聞こえてきた

［！その声は師匠か、頼みがあるんだなのはを…］

［大丈夫だよ、今なのはの治療をしている、フェイト達も来ている］

［師匠にフェイトとおば、アルフも一緒か！ならば百人力だぜ！］

拳に力を込めハンマーを押し返しハンマーどチビを吹き飛ばしと同時にフェイト達が来た

「飛鳥、久しぶりだね…」

「…あんた、またおばさん言おうとしただろ」

「おう、フェイトにおば…アルフも元気だったか？ってんなこと

より…あと二人いたみたいだな…」

飛鳥が目を向けた先にいたのは女剣士と格闘家みたいなのがこちらをうかがっていた

「コルト？なぜ此処に」

「シグナム、彼奴はコルトじゃねえ、それにあたしをハンマーどチビでちんちくりんだの一生背が伸びないだの……」

「……確かにコルトはそんなことは言わないな」

どうやら飛鳥をコルトと呼ぶ人物と勘違いしているようだ　一人は確実に腹を立て飛鳥が言ってない事を二人に話していたが

「ヴィータ、忘れ物だ破損は直しておいたぞ」

「…はっ、ありがとう」

ようやく戻ってきたヴィータはシグナムから帽子を受け取り飛鳥達を睨む

「あたしはコルトの偽物を叩く、ザフィーラとシグナムは他の二人を相手してくれ」

「お、おい、ヴィータ？」

「…ナニカイッタカ？シグナム？」

「わ、わかった！」

「……承知」

今まで見たことがないヴィータを見た二人はうなずくしかなかった

「フェイト、アルフ、ハンマーどチビの仲間が動き出したぞ」

「飛鳥、ハンマーどチビってあの子だよね」

「ああ、彼奴の相手は俺がする［師匠聞こえるか？］」

襲いかかってきたハンマーどチビと戦いながら、ユーノ師匠に念話を飛ばしなのはの容態を聞いてみた

［なのはの方は応急処置が終わったよ、でも結界を破壊しないと転移が出来ないんだ］

「ちょこまか動くな！コルトの偽物！！」

ヴィータの降り下ろされるハンマーを拳で打ち返しながら結界を破壊する方法を思い付いた

［…師匠、この結界をぶち壊せばいいんだな］

［！まさか飛鳥ライダーワイルドブレイカーを使う気かい！］

「いい加減当たりやがれ！アイゼン！カートリッジロード！」

ヴィータがアイゼンから薬莢を飛ばすと同時に魔力が膨れ上がるのを感じ飛鳥が身構えた時だった

ドクン！

「う！ガハアアアア！！」

飛鳥は口から大量の血を吐き出し徐々に力が抜け落ちるのをヴィータは見逃さず攻撃した

「ラケーテンハンマー！」

（くそ、力が入らねぇ！）

徐々に迫るラケーテンハンマーの直撃を受ける瞬間赤い何かが楯になった

金属が砕け潰れる音が響くなか飛鳥が見たもの、

それは　破壊されながらも飛鳥を守るジェイダーだった

「…ア…ス…カ…ニニ…ニゲ……テテ……」

「ジェ、ジェイダー！！」

初めて言葉を話すと同時にジェイダーは激しい爆音と共に爆霰し残骸が落ち砕けていくのを飛鳥は見てしまった、

「く、次こそは」

ゾクッ

ヴィータは怯んだ今にも力尽きそうな飛鳥に恐ろしいものを見た

「ウ、ウ、ウオオオオオ！！」

雄叫びをあげる飛鳥の声は遠くで戦うフェイト達にも聞こえた

「っ！ライダー、何が起こったの」

「な、なんだこの魔力は？」

「……ライダーの魔力が膨れ上がってるよフェイト！」

「……何者なんだ」

そして結界を分析しているユーノと少し離れた場所にいるなのはにも雄叫びは聞こえていた

「飛鳥、一体どうしたんだ」

今までの飛鳥と違うことに違和感を覚えるユーノ

「たすけなきゃ、私が…皆を…助けなきゃ」

なのはは結界を破壊するために防御結界からでる、しかしこの後起こることに気づいてなかった

「D！ランページフォームだ！！」

＞まて！飛鳥お前何をする気だ＜

普段と違う飛鳥にDに対し飛鳥の意外な答えが帰ってきた

「ランページライダーキックで結界を破壊する！！」

＞やめろ飛鳥、今のお前がランページフォームになってみろ、どうなるかわからないやめるんだ！、＜

「黙れ！いいからやれ！！」

余りの飛鳥の怒声にDは従うしかなかった。

「ウオオオオオオオ！！」

全身の装甲が鋭角化し更にスラスターが強化され、龍の角が増え赤い瞳が緑の瞳に代わりランページフォームの進化を終える

［師匠！今からランページライダーキックで結界を破壊する！］

［わかった！結界の薄い場所は君の真上だ！遠慮なくやっちゃっていいよ］

「あ、アイツ姿が変わりやがった、けどそんなの関係ねぇ！」

飛鳥にアイゼンを構え再び攻撃を仕掛けるヴィータ

「ぶっとべえぇぇ！」

しかしその場にいたはずの飛鳥は消え、アイゼンが大きく空回りする

「アイツ何処に！？」

「遅いぜ、ハンマーどチビ！」

ヴィータの背後を取り攻撃を仕掛けようとしたときだった

「……アブソリュート・スラッシュ！」

「な！グアアアア！！」

背後から現れた青白い何かに斬撃を受け吹き飛ばされビルに貼り付けられる飛鳥

「大丈夫？ヴィー姉」

「こんなやつあたし一人で十分、と言いたいけどありがとうなコルト」

「く！体が凍りついたみたいに動かねえ、お前何も…」

飛鳥が見たのは、鬼の角に黄色い瞳が目立つ仮面、青と黒の装甲を纏った自分と同じ存在だった

「……ヴィー姉！結界が破られた！」

コルトと呼ばれた人物が空を見上げると桃色の閃光が結界を砕いたのを見た

「あの馬鹿…、無茶しやがって…俺も人の事言えないか…ゴハア！」

［ちっ、仕方ねえいつもの場所でまた集合だ！いくぞコルト］

この場から去るヴィータに続いてコルトも行こうとした

「……まて！お前は一体何者だ？！」

「……仮面騎士コルト…」

飛鳥の問いに振り返らず答えると光となってその場からいなくなり飛鳥だけがその場に残された

［飛鳥、今何処にいるの］

［結界を破壊し損ねた、済まねえ。師匠、なのは、…フェ…イト…アル…フ］

「飛鳥！しっかりして飛鳥あ！！」

徐々に意識が遠くなりながら泣きそうなフェイトの顔を見たのを最後に飛鳥は意識を失った

第七話　「仮面ライダーD、敗れる！」（後書き）

おまけ

D
＞ようやっと繋がった！おいJ聞こえてるか＜

J
「どうしたんだD（どうやってここのアドレスを？）」

D
＞どうしたじゃないんだ、飛鳥が、飛鳥が死にそうなんだ！＜

J
「どういう事だ！飛鳥が死ぬって？」

D
＞今から飛鳥のバイタルデータを送るから早く見てくれ＜

J
「こ、これは！？」

果たして飛鳥の体に何が起こったのか

第八話「新たなる力、甦れ仮面ライダーD！」（前編）（前書き）

飛鳥、進化の時！

第八話「新たなる力、甦れ仮面ライダーD！」（前編）

時空管理局内、医療施設
あの戦闘の後、高町なのはと新田飛鳥は別室にて検査入院をしている

「…ここに飛鳥はいるのね」

一人の看護婦が飛鳥の病室に入り素早く扉を閉め飛鳥に駆け寄ると優しく髪を撫でる

「…写真とやっぱり違うわね、こんなに傷だらけになって…でも会いたかったわ飛鳥」

まるで姉みたいに優しく微笑む彼女は顔に手をかけると本当の素顔をさらした
彼女の正体は仮面シスター二号、ドゥーエ

現在管理局内に潜む最高評議会及びドクターLの所在を探っている潜入のエキスパートである

尚かなりのブラコンぎみであるが

「…ピアッシングネイルで刺すわよ作者」
ひいい！ごめんなさい！！

＞相変わらず過激だなドゥーエ＜

「あらD起きて大丈夫なの？」

＞ああ、それより送ったデータなんだが飛鳥の体の事何かわかったか？＜

ドゥーエは谷間から小型端末を取り出しDに繋げた

＞おい子供の前だぞ、そんなところから出すなよ＜

「他の男ならともかく飛鳥にだったら喜んで見せるわ」

色々問題ありな会話をしながらも準備を終えると立体スクリーンにJが写し出された

［D、杉崎君に感謝しなければならないな、肉体的ダメージが完治している］

今現在の飛鳥の容態を知り安心する二人？

［…しかし闇の書いや夜天の書の守護騎士と蓮が共に行動をしてるとは…］

＞待て！仮面騎士コルトの正体は蓮だって言うのか！＜

「そんな、じゃあ飛鳥は蓮と兄弟同士で戦ってたの…こんなの悲しすぎるわよ！」

Jの語る衝撃の真実に驚きを隠せない二人に更に話を続ける

［全ては十年前の事件、第一級捜索指定ロストロギア［闇の書］輸送時の事件に端を発していると私は考えているその裏には奴等がいると。ドゥーエ、今の任務を中断し無限書庫に潜入、闇の書又は夜天の書の調査、後……も頼む、クアットロも向かわせる］

「わかったわJ、これ以上飛鳥と蓮を戦わせない為にすぐに調査開始するわ！」

ドゥーエはライアーズマスクを付け変装すると眠っている飛鳥の頭を優しく撫でる

「飛鳥、待っててね。もうこれ以上貴方に苦しい想いをさせないから」

＞ドゥーエ、頼んだぜ＜

Dの言葉に頷くとドゥーエは病室から出ていく

［D、君には先生に連絡してくれ、進化の時が来たと伝えればわかる］

＞わかったぜ！じいさん聞こえるか？進化の時が来た！［なんじゃと！今どこに飛鳥はいる、D！！］がなるなじいさん！管理局の医療施設だ［今からいく！待っとれ飛鳥！］て、場所解るのかよ？＜

その直後病室に光が溢れ現れたのは新田兄弟の祖父新田源三だった

「瞬間転移装置はまだ改良が必要じゃな…其よりもJ君、遂にこ

の時が来てしまったか…」

［はい、出来ればこの時が来ない事を願ってました……ですが飛鳥は戦う事を止めない、止めるわけがありません！他人の痛みがわかりすぎて、優しすぎるんです飛鳥は…」

Ｊの悲痛な嘆きが病室に響き源三は何も言えなかった、その時だった

「…Ｊさん、」

声がした方に振り向くと体をベッドから起こしＪの顔を見た飛鳥

「…Ｊさんの顔を初めて見たぜ…蓮に似てるんだ、驚いたよ…叔父さん」

慌てて顔を隠すＪだったがもう遅かった

［…何時から私が叔父ってわかったんだ飛鳥」

「…声だよ、俺や蓮を呼ぶ声は昔から変わってなかった、其よりも進化ってなんの事だ？」

飛鳥は一年前からＪを声だけで叔父だと気付いていた、血の繋がった肉親だと言うことに、

だが今は進化について説明を始めるＪの言葉を聞き飛鳥は少しの間を空け決断した

「Ｊさん、進化をさせてくれ、今の俺ではあいつらを守りきれない」

［飛鳥、本当にいいんだね、今なら…］

「…それに俺じゃなきゃ蓮を止める事ができない！あいつは俺以上に心が傷付いてるだから進化をさせてくれ！」

飛鳥の叫びにも似た願いにＪも覚悟を決め源三の答えを待つ

「飛鳥お前の思いは良くわかった。Ｊ君！今から飛鳥の進化を行う、サポートを頼む」

［解りました、飛鳥変身してくれ］

「いくぜＤ！変身！！」

変身を終えた飛鳥は源三が用意した半透明の十字型のポッドに入ると閉まると同時に高濃度の魔力に満たされる

「此れから、２４時間特殊ナノマシンＤへの高濃度魔力を注入し進化を行う…Ｊ君、儂と飛鳥は転移装置で屋敷へ戻る、通信は繋げたままで頼む」

［わかりました、私の方で闇の書又は夜天の書の調査を…］

「頼んだぞ、Ｊ君。」

光と共に源三と飛鳥が転移し消えた病室に回診に来た医師とフェイトとなのはが来たときにはもぬけの殻だった

それが原因で本局内で大騒ぎになったのは言うまでもない

果たして飛鳥の進化は成功するのか？

第八話「新たなる力、甦れ仮面ライダーD！」（前編）（後書き）

おまけ

フェイト
「……」

なのは
「フェイトちゃん、飛鳥君の事考えてるの？」

フェイト
「うん、飛鳥は何時もボロボロになりながら誰かの為に戦ってるよね、何でなのかな？」

ジュースの缶を見つめながらなのはに尋ねるフェイトに

なのは
「…多分なんだけど、優しいからかな、普段はあんな感じだけど他人が傷付くのを見ていられないんじゃないかと思う」

フェイト
「……優しいか。そうだねなのは。そろそろ飛鳥の病室だね」

なのは
「フェイトちゃん、飛鳥君に会えるの楽しみにしていたよね、」

フェイト
「…うん」

病室に向かったなのは達だったが飛鳥がいないのに驚き大騒ぎになったのだった

第八話　「新たなる力、甦れ仮面ライダーD！」（後編）改（前書き）

飛鳥、復活！

第八話　「新たなる力、甦れ仮面ライダーD！」（後編）改

新田飛鳥が本局医療施設から姿を消して１２時間経過したが一向に見つからなかった

捜索を一時中断したリンディ艦長、クロノ執務官以下アースラクルー一同はロストロギア闇の書の捜索をするために地球の海鳴市に捜索本部を置く事になった

同時刻八神家　シグナム＆ａｍｐ；シャマル寝室

「ねえ、シグ姉、僕のリンカーコアを蒐集してくれないかな」

蓮からの突然の申し出に驚くシグナム達

「駄目だ、蓮に何かあったらはやてが悲しむじゃねえか！」

ヴィータが声を張り上げるも蓮は微動だにせず真っ直ぐな瞳でシグナム達を見た

「…シャマル姉、リンカーコア蒐集は一人一回だけだったよね、それ以外、例えば生命エネルギーとかも可能かな？」

「…リンカーコアは一人一回だけだけど、生命エネルギーは何回でもできると思うわ…まさか蓮君！？」

シャマルは蓮の考えに気づいた。

蓮は自身のリンカーコア、更には生命エネルギーをも蒐集させようとしていたのだ

「駄目よ、蓮君そんなことをしたら貴方が…」

「この方法（力兄から聞いた）なら他人や魔法生物を傷付けずに済むんだ、だからお願いシャマル姉！」

蓮の真っ直ぐで決意に満ちた目で見られ四人は何も言えなかった

「…確かにその方法なら出来るかも知れないが…本当にいいのか蓮」

シグナムは変身（この状態でしかリンカーコアが現れないため）を終えた蓮に再び聞くが首を縦に降る

「うん、シグ姉限界ギリギリ迄蒐集して」

「…行くわよ蓮君、闇の書蒐集開始」

「うっ！」

シャマルは意を決し蓮から蒐集を始める

「凄い？ページがどんどん埋まっていくわ！」

そして蒐集を終えると同時に蓮は気を失い変身が強制解除され倒れそうになるところをシグナムが抱き抱えた

「蓮、お前なんて無茶をするんだ。…シャマル、ページはどれぐらい埋まった」

「驚かないで聞いてね、今の蒐集で５９８ページ迄埋まったわ」

「なんだと！蓮は大丈夫なのか！？」

顔色の悪い蓮を気遣いながらシャマルに聞く

「大丈夫よ、けど蓮君またこの方法を使うわね」

「ああ、だが今は蓮に感謝しないといけないな」

「そうね、シグナム」

蓮（シグナムが服を着せた）を抱き抱えリビングのソファーに寝かせ掛け布団をかけるとシグナム達は自分達の部屋へと戻っていった

海鳴市　某高級マンションロストロギア［闇の書］捜索本部

「…フェイト、飛鳥さんの事が心配ですか？」

「…うん」

「大丈夫よ、飛鳥君は必ず戻ってくるわ、フェイト」

現在リニスとプレシアは民間協力者としてフェイトと共に捜索本部の一室に居を構えていた

「フェイトちゃん！」

「あなたがフェイトね？」

「フェイトちゃん、こんにちは」

心配してるフェイトの所になのは達が遊びに来たようだ、
プレシアはなのは達の所に挨拶に向かう

「初めまして、私はプレシア・テスタロッサ、フェイトと仲良くしあげてね」
「「「こんにちは！プレシアさん」」」

元気に挨拶するなのは達に笑顔で迎えるプレシアは思った

（今の私があるのは先生と飛鳥君、アースラの皆のお陰よ本当にありがとう）

フェイトと再び親子として過ごせる日々をおくれる事にプレシアは感謝していた

それから数時間後、

新田屋敷地下秘密研究施設

「…後３０分、Ｊ君異常はないか？」

［はい、ですが最後まで気は抜けません…あと少しだ飛鳥」

今現在飛鳥の特殊ナノマシンＤの進化作業は源三とＪ（リアルタイム通信）に見守られ、順調に進み完了まで３０分を切ったときだった

突如警報が鳴り響き飛鳥のバイタルが乱れ始めた

「な、何が起こった！」

［いけない！高濃度魔力に特殊ナノマシンＤが拒否反応を！！］

飛鳥の特殊ナノマシンＤが急に拒否反応を起こしたのだ

［早く制御しないと、飛鳥が、飛鳥が死んでしまう！］

「飛鳥！待っとれ今制御…」

『…特殊ナノマシンＤ移植者の心肺停止を確認。繰り返す心肺停止…』

機械音声が無情にも特殊ナノマシンＤの制御作業を続ける源三とＪに飛鳥の死を告げた。

「う、嘘じゃ…飛鳥、目を、目を覚ましてくれ飛鳥！！」

［…そんな？シュミレートでは成功確率９９％だったのに、なぜだ！！」

二人の悲しみに満ちた声が室内に響き渡った

同時刻、

八神家リビング

先ほど自身のリンカーコアと生命エネルギーをシグ姉達に蒐集し倒れてしまった蓮だったがいきなり飛び起きた

「に、兄さんの身に何か！…って……はや姉?!」

身体が動かないのに気付き見るとはや姉が蓮を抱き枕にしてしっかりしがみついていた

「シグ姉達は何処に?…仕方ない」

その手を離そうとしたその時はや姉の目から涙が零れ寝言が聞こえた

「…もう一人はいやや…」

「……大丈夫だよ、僕は、はや姉を絶対一人にはさせない、約束するよ」

そう言い頭を撫でると安心した寝顔になったはや姉を見ながら兄飛鳥の身を案じる蓮

しかしはや姉の手に携帯（録音機能起動中）が握られていたのに蓮は気付いていなかった

（…すべて計画通りや！）

…はやて、恐ろしい子！

海鳴市　　ｐｍ１７時４５分

喫茶翠屋

「なのは、フェイト。また明日ね」

「なのはちゃん、フェイトちゃん。またね」

アリサとすずかと別れたなのはとフェイトは翠屋から出て高町家に向かっていた

「フェイトちゃん、私の家に来るの初めてだね」

「うん、そうだね……飛鳥まだ見つからないのかな」

未だに飛鳥が見つからない事にフェイトは気持ちばかりが焦っていた

「フェイトちゃん、もしかして飛鳥君の事す…」

その時だった、一陣の風が通りすぎなのは達のすぐ横の壁が綺麗に切り落とされそこにいたのは、

蟷螂と人が融合した異形が現れ、なのは達に向かって鎌を振り上げ攻撃を仕掛けてきた！

それを辛うじてかわした二人だがデバイスがない状態ではどうしょうもならなかった

「バルディッシュはまだ修理が終わってない、どうする？」

「フェイトちゃん！避けて」

その場から逃げようとして躓き転んだのを見逃さず蟷螂？がその鋭利な鎌を降り下ろされる瞬間、思わず目を瞑るフェイトはある言葉が浮かんだ

（フェイト、困ったことがあったら俺やなのはに助けを呼びな、どんな遠くでも駆けつけるからな）

「……助けて！飛鳥！！」

「フェイトちゃん！」

飛鳥に助けを求める叫びとなのはの叫びと同時に鋭い鎌が降り下ろれたその時

「うおりゃあああ！ぶっとびやがれえええええ！！」

「＆ａｍｐ；＄％＃＊％＄＆ａｍｐ；％？！」

鈍い衝撃音と雄叫びと同時に吹き飛ばされた蟷螂？フェイトは目をゆっくりあけ見たものは

大型化し数が増えた龍の角に赤い瞳、更に鋭く頑丈さを増した黒と白の装甲、その表面には金のラインが走り背中には二対の翼が輝く戦士が其処にいた

「……怪我はないか、フェイト」

「あ、飛鳥だよね？」

飛鳥？はフェイトの方を向くとうなずき再び蟷螂？に視線を向けた

「おい蟷螂野郎……俺の大切な人に手を出すんじゃ無え！！」

飛鳥の啖呵が響くと同時に空気が震えアスファルトにヒビが入り其処にユーノ師匠が現れる

「飛鳥！」

「師匠！いいところに来てくれたぜ、結界の展開を頼むぜ、それと半年ぶりにアレをやろうぜ！」

「アレだね！わかったよ飛鳥、アイギス！」

＞はい、マイスターユーノ＜

アレと言っただけですべてを理解したユーノは結界展開と同時にアイギスを起動し変身する

「行くぜ！チェーンバインド！！」

「％％＃％$@＼＆ａｍｐ；％$＃％？？」

強化されたチェーンバインドに身体を巻き付けられもがくがその鎌では切れないほど強かった

「うおりゃあああ！」

金の翼を広げ空中へと高く蟷螂野郎と共に飛翔する

「魔力スラスターゼ・ん・かい！うおりゃあああ！！」

飛翔をしながら砲丸投げ見たいに振り回し更に回転をます

「今だ！師匠！」

「ＯＫだ！ギガラウンドシールド！」

空中に巨大ギガラウンドシールドが展開され其処にめがけて蟷螂

野郎をぶつける！

「ライダーワイルドブレイカー！！」

「%#$&＼&＄#$#！！」

ギガラウンドシールドに打ち付けられシールドが砕けると蟷螂野郎は地上に落ちる

それを見逃さず俺は新たな切り札を使う

それは凄まじき焔（ほのお）を纏いし螺旋

進化を終え生まれ変わった戦士の新たな技

その焔は命を奪う技にあらず必生の一撃

その名は

「ブレイズ・ライダーキック！！！」

落下速度とその身に纏いし焔の螺旋に撃ち抜かれると劣化版Dとそれに取り込まれた人と蟷螂が切り離され消滅したのを確認しその人達？を伴い師匠と地上に降りた

「「飛鳥（君）！」」

なのは達が飛鳥とユーノに駆け寄り怪我がないか、今までどこにいたかと聞いてくる

「そういっぺんに聞くなよ、お前達も知ってるだろ、傷の治りは早いって」

「じゃあ今までどこにいたの飛鳥君？」

仕方なく何処にいたかを話すことにした

回想

新田屋敷地下秘密研究施設

「J君、儂等は無力じゃ孫の命すら救えないのだから…」

［先生…私もです。あのとき引き留めておけばこんなことには…］

その時劣化版Dの融合体出現の報が入った直後だった

（…ドクン！…）

［！待ってください先生、飛鳥の特殊ナノマシンDが再起動しましたそれに脳波と脈も正常に、すごい早さで進化を！あり得ない！！］

Jの声に画面に示されたデータを見た源三はあり得ないスピードで進化を終える特殊ナノマシンDに驚く

それと同時に半透明のポッドが破壊され赤い閃光が隔壁を撃ち抜

きながら、外に出るのを見送るしかなかった

「は！俺は一体、それにこの姿進化に成功したのか？」

新田屋敷の上空で体の変化に驚く飛鳥の耳に声が聞こえた

「…助けて！飛鳥！！」

強化された目で声が聞こえた方を見るとフェイトが蟷螂野郎？に攻撃を受けそうになっていたのを見た瞬間考えるより速く体が動いた

「待ってろ！フェイト！！」

翼を広げた瞬間その場から姿が消えた

回想終了

「とまあこんな感じだな」

＞こんな感じじゃ無いだろ、少しの間死んでいたんだぞ飛鳥！！＜

「え、飛鳥君死んでたの？！」

Dの衝撃の言葉に驚きつつなのはは大々理解したみたいだがフェイトの様子がおかしい

（俺の大切な人、飛鳥の大切なひとってもしかして…わたしの事なの！？）

「フェイト、やっぱりあの時どこか怪我でもしたのか？」

心配になってフェイトと目を合わせた瞬間　飛鳥のナノマシンが体の奥で熱くなった（理由は無印編最終話参照）

（フェイトのナノマシンから感情が流れてくる？）

顔を真っ赤にしていきなり倒れる寸前でフェイトを抱き抱え慌てまくる飛鳥

「どうしたんだフェイト！しっかりしろ！！師匠、治癒魔法を！？」

師匠であるユーノに助けを求めるがあきれ顔で飛鳥を見ていた

「飛鳥、流石にそれは治せないよ」

＞そうだなユーノ、アレを治すには魔法じゃ無理だ＜

「そうだね、ユーノ君、Dさん」

三人？に言われても何故倒れたのかを考える飛鳥、そしてある事を思い出した

『俺の大切な人に手を出すんじゃ無え！！』

（し、しまった、つい熱くなりすぎて言っちまった！こんな化け物にあんなこと言われて気絶しちまったんだ、どうしょう……）

フェイトが起きたら必ず謝ろうと思う飛鳥だった

遥か遠くのビルから二つの影が飛鳥を見ていた

「やっぱりアイツも蓮って子同様に危険だわ、アリア」

「そうねロッテ、このままじゃお父様の計画を邪魔される可能性が高いわ」

「じゃあ、今のうちにあの二人を排除…」

「私達の弟に手を出すとはいい度胸だな、猫共！」

二人に向けクナイが投げつけられ爆発するが障壁で塞がれた

「何者だ！」

「「私達は仮面シスターズ、あの子達の姉だ！」」

そう名乗りお互いに一対一の戦いを繰り広げる

「これは姉の怒りだ！ランブルデトネイター乱れ撃ち！！」

「くっ！障壁が間に合わないコイツら強い！」

ランブルデトネイター乱れ撃ちの爆風で徐々にダメージを受けアリアは追い込まれる

「私の弟達に手を出す身のほど知らずが！ライドインパルス！！」

声を出す暇もなくひたすら防御に徹するロッテはその強さに恐怖を覚えた

数分もたたないうちにボロボロになるアリアとロッテ

「さて、猫共。お父様とは誰の事か聞かせてもらおうか」

「これでもくらいなさい！」

「この姉に通用するか！」

アリアの放った魔力弾を五号がクナイで撃ち抜いた瞬間激しい光に包まれ二人は一瞬視力を失うしばらくして目を開けた二人は猫共はいないことに気づいた

「逃がしたか、どうする三号？」

「屋敷に戻り新田先生に指示を仰ごう、五月」

「…今は、五号だ。」

二人は新田先生と今後の対策を検討するために新田屋敷へと向かった

第八話　「新たなる力、甦れ仮面ライダーD！」（後編）改（後書き）

おまけ

J

［先生、何故飛鳥は蘇生できたのでしょうか］

源三

「昔、シンヤとマリアから聞いたことがある…」

今は亡き息子夫婦の言葉を思い出す源三

回想

『父さん、特殊ナノマシンDは人の感情に反応するんだ』

『人の感情に反応するじゃと？』

マリア

『…後、適合した人間同士との無意識下の感覚共有も理論上可能なのよお義父さん』

回想終了

源三

「…あくまで推測なんじゃが、フェイト君の身になにか起こったのを飛鳥のナノマシンが感じて蘇生ができたのかもしれん」

壊れた機材を片付けながら語る源三にＪは頷くしかなかった

源三
「…さて、飛鳥が戻ってきたら検査などしないとな」

幕間　「テスタロッサ家にお泊まりと飛鳥の苦悩」（前書き）

飛鳥の受難と苦悩

幕間　「テスタロッサ家にお泊まりと飛鳥の苦悩」

某高級マンション

「闇の書」捜索本部

「…僕たちが探してる間君は自分の家に居たと言うわけだな？」

「まあ、そう言うことになるかな」

あれから（なのはとフェイトを助けた後）倒れたフェイトを抱えアースラメンバーが駐屯しているマンションに来た飛鳥を待っていたのはリンディさんとクロノの質問と言う名の説明会だった

「…全く心配して本局中探したのが無駄になってしまったじゃないか」

「……クロノ、リンディさん心配をかけてごめん」

「とにかく飛鳥さんが無事に戻って来て良かったわ」

そうリンディさんは締めくくり説明会を終え、飛鳥は帰ろうとするとプレシアが呼び止めた

「飛鳥君、今日はもう遅いから家に泊まっていきなさい」

「…それはありがたいけどプレシアさん迷惑じゃないか？」

「いいのよ、それにリニスも貴方に逢いたがってるし夕食も食べていきなさい」

飛鳥はプレシアの厚意に甘え、テスタロッサ家に泊まることになった

同マンション

プレシア・テスタロッサ宅

「ただいま、リニス」

「…お邪魔します」

「お帰りなさいプレシア。飛鳥さんお久し振りですね、今日はフェイトを助けてくれてありがとうございます」

プレシアと飛鳥が玄関に入るとリニスが笑顔で出迎えてくれた

「元気だったリニスさん、蓮も一緒に来れたら良かったんだけど…」

「……飛鳥さん、少し背が伸びましたか？」

リニスは飛鳥の頭に手を置き以前の背の高さを思い出していた

「そうかな、まあ半年も経てば背ぐらい伸びてるよリニスさん」

「フフ、そうですね」

会話をしながらリビングまで来た飛鳥は子犬モードのアルフをいじりながらしばらくゆっくりしていた

「そうだ、飛鳥君お風呂に入ってきたら？まだ入ってないでしょ」

「それじゃあ、お言葉に甘えて…」

しかし飛鳥は気付いてなかったプレシアの顔がすごくいい笑顔だったのを

「♪～♪♪♪～♪ここだな♪」

鼻唄を歌いながらバスルームの入り口を開けた飛鳥の前に先客がいた

「え？」

「…あ、飛鳥？……」

そこには風呂から上がり服に着替えようとしているバスタオルをまいたフェイトがいた

「～～～～～～！！」

恥ずかしさのあまり手当たり次第飛鳥に物を投げ始めた

「お、おいシャンプー投げるな　待て待てフェイト！洗面台だけは止せえぇぇ！！　あべし！！！」

「は？！飛鳥しっかりして！」

頭に洗面台を投げつけられ気絶してしまった飛鳥を見て慌てて手当てをし始めるフェイトだった

テスタロッサ家　リビング

「あら、フェイトが入ってるのすっかり忘れてたわ～」

「……プレシア、あなたわざと教えませんでしたね」

「飛鳥、あんたも大変だね」

悪魔の尻尾がみえ隠れするプレシアを見てリニスとアルフはため息をついたのだった

テスタロッサ家　食卓

「飛鳥さん、ご飯どうでしたか」

「こんなに美味しいの久しぶりに食べたよリニスさん」

「フフ、作ったかいがありました、飛鳥さん卵焼き大好きですしね」

頭に包帯を巻いた飛鳥は久し振りに食べるリニスの手料理に舌鼓を打ちつつフェイトを見る

「……！」

飛鳥と目があった瞬間顔真っ赤にし視線を反らされた

（あっちゃ～まださっきのこと怒ってるな、今日はあんな事言っちまったし…）　回想

『蟷螂野郎！俺の大切な人に手ぇ出すんじゃ無ぇ！！』

回想終わり

（やっぱこんな『化け物』にあんな事言われちゃフェイト怒るよな…よし謝ろう！）

「あ、あのよ、フェイトあの時言った事なんだが、ご…」

ガタン

席をたったフェイトは一瞬飛鳥を見た後逃げるように部屋に戻るのを見たプレシアとリニスはと言うと…

「フェイトも年頃なのね～」

「…プレシア、あまりフェイトをからかわないでください」

とプレシアに呆れるリニスだった

深夜、

テスタロッサ家　テラス

（……眠れない…）

なかなか寝つく事ができず外の空気を吸いにテラスに出た飛鳥はしばらくして背後に気配を感じ振り向いた

「…飛鳥さん、寝付けないんですか？」

「……うん」

互いに会話もなく只時間が過ぎていく、

「…飛鳥さん、フェイトと何かありましたか」

「…リニスさん、実は…」

今日あったことをリニスに話すと少し呆れながらも次第に笑顔になっていく

「…飛鳥さん、フェイトの事好きですか？」

（……！）

「な、何言ってんだ?リニスさん!それにこんな『化け物』に好きって言われたら迷わ…」

「…飛鳥さん、私は以前（無印編第六話後編参照）言いましたよね、何故自分の事をそう言うんですか」

少し怒りながらリニスは飛鳥の目を見ながら聞いてきた

「…だって、普通の人だったら治らない傷や、首を折られても直ぐに治る人間なんていないよ…」

その辛そうな顔を見たリニスは　自分の居なかった半年間で再びこの状態に陥った飛鳥をみて悟った

（…この半年の間に助けた人達にまた言われたんですね…）

（…飛鳥……）

この半年間で飛鳥の心が傷ついていた事に

そしてそれを盗み聞きしている人物にも痛いほどに伝わったのだった

「…飛鳥さん、もう一度だけ言わせてください　貴方は人間です。誰が何を言おうと私は飛鳥さんを人間だと信じてます」

その言葉を聞き飛鳥の中で何かが堰を切ったように溢れだした

「…リニズざぁあん…」

泣き始める飛鳥を優しく抱きしめリニスは頭を撫で慰めるのだった

（私も飛鳥の為に何かできることないかな）

それを見ていた人物も飛鳥の為に何かできる事はないかと考えるのだった

翌朝、ａｍ０６時００分

目を覚ました飛鳥は顔を洗いテスタロッサ家のリビングに向かっていると

「…あ、飛鳥！」

呼び止められ振り向くと部屋から出たフェイトがいた

「お、おはようフェイト？なんか用か？（どうやら機嫌を直してくれたみたいだな）」

飛鳥はフェイトとリビングに向かうがお互い一言も話さない

「…なあ、フェイト昨日の事なんだけど、あんな事言っちまってごめ…」

改めて謝ろうとする飛鳥の言葉は別な言葉に遮られた

「…私も、私も飛鳥が人間だって信じてるから、何度でも貴方が人間だって言うから…自分の事をあんな風に言わないで」

「…ありがとうフェイト（リニスさんとの会話聞いていたのフェイトだったのか）…」

＞…二人だけの甘い時間を邪魔して悪いが、飛鳥奴等の反応だ！＜

劣化版Ｄの出現を聞き現場に向かうべく走り出す飛鳥の背中に声が届いた

「あ、飛鳥！い、行ってらっしゃい！」

「ああ、行ってくるぜフェイト！」

その言葉を背に受け元気よく応えマンションから飛び降りながら変身を終えた飛鳥は現場へと走り出した

（飛鳥、私は貴方の全部を信じる、だから無事に帰ってきてね）

そう心に想いながら飛鳥の姿を見送るフェイトだった

幕間　「テスタロッサ家にお泊まりと飛鳥の苦悩」（後書き）

おまけ

フェイト
「あ、あのリニス」

リニス
「はい、どうしました　フェイト？」

フェイト
「わ、私にリニスの卵焼きの作り方を教えて！」

意外な申し出に驚くリニスだったがフェイトを見て微笑んだ

リニス
「はい、では飛鳥さんが喜ぶ味付けも一緒に教えてあげますね」

フェイト
「…よ、よろしくお願いします」

果たして飛鳥の口に合う美味い卵焼きは出来るのだろうか？

第九話「復活の超マシン！激突、飛鳥と蓮！！」（前編）（前書き）

今回は多分二つに分けるかも

第九話「復活の超マシン！激突、飛鳥と蓮！！」（前編）

管理局本局内無限書庫内

「……まさか、闇の書いや夜天の書の……に彼奴等が関与していたのね」

Ｊからの指示を受け仮面シスター二号ドゥーエと　仮面シスター四号クアットロは現在までにわかった事実を再確認しながら作業を行っていたが…

「ドゥーエお姉さま、これ以上調べるには専門家、せめてスクライア一族がいないと無理ですわ…」

飛鳥と蓮がお互いに戦うのを防ぐべく調査をしていた仮面シスター四号、クアットロは悔しそうに呟いた

「…スクライア一族…あ！」

「ど、どうしましたかお姉さま？」

いきなり声をあげるドゥーエに驚くクアットロ

「そうよ、飛鳥の魔法の師匠ってスクライアの名前だったじゃない　クアットロ！Ｊに直ぐ連絡してウフフフ♪待っててね飛鳥♪」

ドゥーエは飛鳥の魔法の師匠がスクライア出身であることを思いだし

そして飛鳥への妄想しながら身悶えするその姿を見て引き気味の

クアットロにＪへの連絡を頼むのだった

海鳴市

聖祥大付属小学校

教室に入った飛鳥はいっも以上の騒がしさにため息をつきながらなのは達に聞いてみたのだが

「今日、転校生が来るみたいだよ」

としか答えしか帰ってこない…

「…転校生ね、それにしても眠い…」

あくびを噛み殺すとチャイムが鳴り響くと先生が教室に入ってきた

「は～い皆、おはようございます　今日からこのクラスに転校生が来ます」

先生がそう言い終えると教室が騒がしさに包まれる

（…もう駄目だ眠気が…）

今朝（幕間参照）も劣化版Ｄと戦い終え急ぎテスタロッサ家に戻ったのだがフェイトはおらず

仕方なくリニスが用意した制服を着てプレシアとリニスに見送ら

れ学校に来たのだった

「では、入ってきてください」

扉が開き入ってきたのは…

「自己紹介をしてくれるかしら」

「フェ、フェイト・テスタロッサです、よろしくお願いします」

クラスが騒ぎ包まれる中なのは達は喜び飛鳥は眠気が一気に覚めた

昼休み

「大丈夫?フェイトちゃん?」

「う、うん…私と同じくらいの子達がこんなにいるのに驚いちゃった…」

「全く、あんなに集まってフェイトに質問するなんてね!」

「フェイトちゃん困っていたよね」

フェイトは休憩時間になる度にクラスメイトからの質問攻めにあっていて

それを見かねたアリサが順番決めして事なきを得たのだった

「兄さん遅れてごめん…！！」

フェイトを見て驚いていたが直ぐに落ち着く蓮

「あ、初めましてフェイト・テスタロッサです！（飛鳥の弟？だよね）」

「…は、はじめまして新田蓮です（この人シグ姉と戦った人だよね）」

蓮とフェイトが互いに自己紹介を終え、いざ弁当を食べようとしたときだった

「しまった、弁当わすれちまった…」

「こ、これリニスが飛鳥にって！」

フェイトが差し出したのはお弁当箱だった

「…ありがと、フェイト」

弁当を受け取ると皆で頂きますを言い終え　食べる飛鳥の顔をチラチラと見るフェイト

「ん？どうしたフェイト俺の顔に何か付いてる？」

「な、何でもないよ！？」

その光景を見たなのは達はというと…

「ねぇ、なのは…飛鳥って今日初めてフェイトと会ったのよね」

「う、うん！そうだよアリサちゃん」

「フェイトちゃんと飛鳥君初めてあった筈なのにもう仲良くなってる…」

「…兄さん、フェイト姉と仲が良いんだね（もしまた戦うことになったらどうしょう？）」

賑やかに昼食を食べ終え五人は教室に戻るのだったが

「わ、私達のアイドル蓮君にまた悪い虫が増えた」

「こうなれば、再び強行策に出るしかないわね」

「…あの金色の死神？許さない…」

「蓮君、蓮君、蓮君蓮君蓮君蓮君蓮君蓮君蓮君蓮君…」

「う（ー ー；）？」

…蓮は何時も以上の上級生達（肉食獣）の視線と声を感じビクつきながらだったが…

午後最後の授業が終わり帰り支度を終え飛鳥は蓮を呼びに教室に向かったのだが先に帰ったとクラスメイトに言われ不審に思い携帯に掛ける

「蓮、今何処にいるんだ？」

『い、今はや姉の病院にいるんだ』

「病院？八神足以外に悪い病気あったのか」

『うん、さっき石田先生からはや姉が倒れたって電話…があって…検査入院する事になったんだ…』

携帯の向こう側で今にも泣きそうな蓮の声を聞いた飛鳥

「…蓮、時間が許す限り八神に付き添ってやれ」

『え、でもおじいちゃんに言わないと…』

「じいちゃんには俺が説明するから安心しろ、八神は人前では笑ってても見てない所で一人で泣くタイプの人間だ。だから側に居てやれ蓮」

『う、うん解ったよ兄さん』

そう言い通話を切ると飛鳥は少し難しい表情をしながら考える

（俺の勘が正しければハンマードちび達の主は…八神で間違いねぇ…蓮が何故協力しているのかがわからん？『闇の書』ってなんなんだ？今日の帰りにクロノや師匠に聞かないとな）

今まで得た情報を頭の中で纏め飛鳥はなのは達の待つ校門へと向かうのだった

蓮視点

海鳴大学病院　同屋上

兄飛鳥との通話を終えた蓮、しかしシグナム達は内心焦っていた

「シャマル姉、僕からまた生命エネルギーの蒐集ができるのは後何日後？」

「……今日を入れて後二日経てば可能よ蓮君」

それを聞いた蓮は少し安心しながらシグナム達の方を向いた

「シグ姉、後一回僕から生命エネルギーを蒐集すれば闇の書のページは完全に埋まると思う」

「だけど、蓮それをやってこの前倒れたじゃねえか！」

ヴィータの怒声に驚く四人だったが蓮は静かに言葉を続ける

「心配してくれてありがとうヴィー姉、僕は大丈夫だから気にしないで」

「蓮、済まない私達の主の為に…」

シグナムは自分達の主八神はやての為に命懸けで助けようとする蓮に感謝しきれない程の礼を心の中でするのだった

はやて病室

シグナム達は一度家に帰り着替え等を持ってくるといい病室を出ていった

「みんな心配しすぎや～少し車椅子から落ちただけやのに…」

「…はや姉本当は痛いんでしょ」

その一言で顔を俯かせ少しの間を置き頷くはやて

「…何故判ったん蓮ちゃん?」

「…はや姉の顔を見ればわかるよ…」

半年以上前、図書館で蓮は八神はやてと初めて出逢った時　何かに耐えるような表情をしていたのを思いだし確信に至ったのだ

「え？」

はやては突然何か暖かいものに包まれそれが蓮に抱きしめられたのに気付くまで数秒を要した

「…はや姉、此処に居るのは僕だけだよ…だから今は思いっきり泣いていいんだよ」

「れ、蓮ちゃん……うち…うち…死ぬのは嫌や、折角家族が出来たのに…ウ、ウウウ」

（はや姉も辛かったんだよね、大丈夫だよ僕とシグ姉達が必ず助けるから）

只ひたすらに蓮は優しく激しく泣きじゃくるはやての頭を優しく撫でながら

絶対にシグナム達と共にはやてを助けると誓うのだった

同時刻

「闇の書」捜索本部

飛鳥は現在クロノ達から闇の書についてわかっている事実を聞いていた

「…以上が闇の書について今現在僕達が知っていることだ飛鳥」

「…クロノ、随分と物騒な奴なんだなこの百科事典は」

「…百科事典ってまあ遠からず近からずだね」

闇の書、魔力蒐集型ロストロギア、６６６項に魔導師や魔法生物のリンカーコアから魔力蒐集し全ての項が埋まったとき主に無限の力を与えると言うらしい

「流石にこれ以上は僕にも判らない、ユーノ実は君にしか出来ないことを頼みたいんだ」

「僕に？」

クロノの方を向き聞いてみるユーノ

「無限書庫で闇の書の調査を頼みたいんだ」

同時刻　管理外世界？？、

秘密研究施設兼移動拠点基地『ファクトリー』

此所はＪ達の秘密拠点であり移動基地として運用されていた

「…よし後はＡＩを移して３・２・１起動」

Ｊは現在ジェイダーから唯一無傷で回収したＡＩを新たなボディ

に移植し起動させるとポットから妖精?が出てきた

「おはようございます、J私はどれぐらい寝ていましたか?」

「だいたい二日って所だ、ジェイダー具合はどうかな?」

体の具合を聞くJに体を動かしたりしながら確認したジェイダー

「体に異常はありませんよJ♪」

「良かった、早速で悪いんだが飛鳥の…」

「わかりました♪では行ってきま~す♪」

「あ、待つんだジェイダーって行ってしまったか…」

最後まで聞かずに転送ポートに入り飛鳥の元へと向かったジェイダー?に溜め息をつくJだった

第九話「復活の超マシン！激突、飛鳥と蓮！！」（前編）（後書き）

おまけ

リニス
「フェイト、飛鳥さんどうでしたか？」

学校から帰ってきたフェイトに聞いてみたリニス

フェイト
「…飛鳥、何も言わなかった美味しくなかったのかな…」

リニス
「フェイト、そんな事ありませんよ」

フェイト
「え？」

差し出された弁当箱の中はきれいに食べられていたのに驚くフェイト

リニス
「飛鳥さんは美味しいものを食べると無口になるんです、だから自信を持ってくださいフェイト」

フェイト
「う、うん　私頑張るよリニス」

リニス

「その意気です、フェイト」

第九話　「復活の超マシン！激突、飛鳥と蓮！！」（中編）（前書き）

蓮、遂に怒る！

第九話　「復活の超マシン！激突、飛鳥と蓮！！」（中編）

管理局本局［無限書庫］

「…ここが全ての次元世界の始まりと終わりまでを記したデータベース通称『無限書庫』か」

クロノの魔法と近接戦闘の師リーゼアリア、リーゼロッテに無限書庫に案内されたユーノは膨大な書庫を目にしてそう呟いた

「調べるには数年単位でチームを組まないと調べられないのよ」

「私達も教導の仕事が入っているから余り手伝う事は出来ないのごめんね」

二人は済まなそうに頭を下げた

「構いません、僕検索魔法を使えますから」

検索魔法を展開し早速調べ始めるユーノ

「確か君スクライア出身だったね」

「はい、僕達スクライア族は発掘調査が得意ですから」

喋りながらも凄い勢いで検索を掛け数冊の本を調べ始めるユーノに感心する二人だったが教導の時間が来たといいユーノを残しその場から去って行き暫く時間がたったときだった

「……貴方がユーノ・スクライアかしら？」

背後から首元にピアッシングネイルを当てられたユーノ

「…そうですけど貴方は？」

「私は仮面シスター二号、貴方に『闇の書』の調査に協力して貰いたいの」

少し間が空きユーノは口を開く

「…いいですよ、貴女達の事は飛鳥から『自慢の姉さん達』だって聞かされています」

「そう、飛鳥がそんな事を（ウフフフ、私？の事を自慢のお姉様だなんて）」

「あの～二号お姉さま～、早く調べものをしないと…」

「ハ！そうだったわ！私達と貴方が掴んだ情報を交換しましょうか」

突然現れた仮面シスター四号に促されユーノと二号は今までわかった情報を交換しあい三人一組で調べるのだった

同時刻、海鳴市街中心部

某ビル屋上

「…さて…準備はいいですか、使い魔さん達?」

「…わかったわ、デュランダルもあと少しで完成する…」

「お父様の計画を成功させるために」

二人は別な姿に変えるとそれぞれ別方向へと飛び去って行く

「…闇が覚醒する時は近い精々頑張ってください…私の為にね」

そう言い残しドクターLは姿を消し屋上から誰もいなくなり一陣の風が舞うだけだった

海鳴大学病院

八神はやて病室

「シグナム～♪早く蓮ちゃん来ないかな♪♪」

「主、もうじき蓮は来ますから落ち着いてください」

蓮が来るのを心待にして浮かれるはやてをなだめる　シグナムは異様な気配が病室に向かっているのに気づいた

「主!!」

ドゴオォォ!

シグナムがはやてを庇うと同時に凄まじい轟音が病室に響き渡り土煙が舞い上がった

「く！何者だ！！」

土煙が晴れ其処に居たのは

「……」

仮面ライダーD？がその場にたたずんでいた

「貴様！何が目的だ！」

はやてを安全な場所に避難させたシグナムはレヴァンティンをD？に構え警戒する

「……！」

何も答えずレヴァンティンを構えるシグナムに拳を打ち込むD？

「く！なんて重い拳だ私が押されるとは」

「……！！」

当たる寸前に拳をレヴァンティンで受けるも病室の外に吹き飛ぶシグナムにD？はさらに拳、裏拳、蹴りの連打を息つく間を与えず追撃し徐々に追い込まれるシグナムにD？はある構えをとった

「なっ？これはバインド？！」

「……ライダーキック」

「うわあああああ！」

無数のチェーンバインドで体を縛られ身動きを取れないシグナムにD？は必殺技であるライダーキックを決められ騎士甲冑が破損し血を流しながらシグナムは倒れた

「……」

それを眺めD？は更なる追撃を与えようとシグナムに拳を降り下ろしたときだった

ピキィィィン

拳が氷塊に包まれ背後から凄まじいほどの凍気を感じたD？が見たものは

傷だらけになったシグナムを抱えた仮面騎士コルトだった

「…シグ姉、ごめん遅くなっちゃった」

「蓮、主…は無事…なのか？」

「うん、だから安心して休んでてシグ姉」

そう言うと安心したのか気絶したシグナムを安全な場所に寝かせ、D？の方を向く

「…貴方がシグ姉をこんな目に会わせたんですか…」

静かにそして響き渡る蓮いや仮面騎士コルトの声には恐ろしいほどの怒気がこもり　その声に体を震わせるD？

「…仮面シスターさん、シグ姉とはや姉を守ってくれるかな…僕あの人を全力で潰すから…」

「…わかった蓮、あの二人は僕達に任せて…」

「り、了解したっす、レンレン」

仮面シスターズはシグナムを抱えその場を後にしたのを確認し再びD?をみるコルト

「…僕の大事な家族に手を出したらどうなるか…」

ビキビキィ

魔力で氷が発生しD?の膝下まで凍りつきゆっくりと双剣を構えたコルトが近付いてくる

「…教えてあげるよ…」

そう言い終えた瞬間D?に双剣で斬りかかるが寸前で氷の拘束を砕き蹴りをいれたときコルトが砕け散った

「……！！」

余りの事に呆気にとられ反応が遅れるD?次の瞬間背中を斬りつけられ更に正面から逆袈裟から袈裟斬りをされ吹き飛び壁に打ち付けられる

「…何が起きたかわからないみたいだね…」

「……！！」

吹き飛ばされた先には既にコルトが居た事に驚くD？

「…貴方が蹴り砕いたのは僕の魔力が産み出した氷像…」

それと同時に無数のコルトの氷像がD？の回りを囲むように現れそれを砕くが…

「…砕けば砕くほど…」

砕いたはずの破片が氷刃になりD？めがけ襲いかかる

「貴方は傷付いていく！」

あらゆる方位からの氷刃を砕くが追い付かずダメージを受けていくD？は後悔していた

（あの男が言った通り、こいつに手を出さなければよかった！）

「…名付けるなら『フリジット・シュペルター』かな…」

全身を切り裂かれ凍傷になり身動きが取れないD？

「…貴方が何故はや姉達を襲ったのかを聞かせて…」

問い質そうとコルトが近寄った

「……！！」

「つ、しまった！」

最後の力を振り絞り投げた魔力弾を双剣で切り払った瞬間光に包まれ収まったときにはD?はその場から消えていた

「…ディーヴァあの人の魔力辿れるかな」

＞ええ、この前戦ったときの魔力パターンは記録ずみよ…蓮！貴方まさか?＜

「…今あの人は何処にいるのディーヴァ?」

＞…此所からあまり離れていない場所にいるわ蓮＜

蓮、いや仮面騎士コルトの氷のような静かな怒りを感じたディーヴァはコルトと共にD?のもとへと向かうのだった

時間は遡り、数十分前

某高級マンション

ロストロギア『闇の書』捜索本部

「なあ～クロノ頼むよ～」

「…駄目だ」

「師匠がいないからクロノにしか頼めねえんだよ～」

食い下がる飛鳥にため息をつくクロノ

「…なのはやフェイトにでも頼めばいいだろ」

「…フェ、あいつら修理が終わったデバイス取りに本局にいってるからさ～」

なのはとフェイトはアルフを伴い修理が終わったデバイスを取りに本局に行き現在リンディ、エイミィ、クロノの三人しか居なかったのだ

「だから僕に魔法の訓練をつけてくれと飛鳥は言いたいんだな…」

「た～の～む～よ～クロノ先生」

遂には正座をして頼み込む飛鳥にクロノは遂に折れた

「…わかったから頭を下げるのは止めてくれ」

「！教えてくれるのか！！」

「まあ時間が空いた時だけどいいか？」

「ありがとう！クロノ先生！！」

「…先生は止めてくれ飛鳥」

喜ぶ飛鳥を見たリンディ達はと言うと…

「あの二人まるで兄弟みたいねエイミィ」

「ハハハ、そうですね艦長」

とお茶（リンディ茶）を飲みながら和んでいた

同本部屋上

「…改めて君の姿を見ると凄いとしか言えないな」

クロノ先生（笑）と訓練すべく変身しおえ体を動かす飛鳥の姿を見ながら呟く

「…なあ先生、この姿怖いか」

「…先生は止めてくれ、今の姿が嫌いなのか？」

黙り混む飛鳥を見たクロノは語りかけた

「…僕達が使う魔法はこの世界の人にとって異質な力だ、姿は変えることは出来ないけど本質的に言えば君と僕達は同じなんだ…」

「……」

「最初は怖いと思った、けど此だけは忘れないでくれ、飛鳥は僕達の頼もしい仲間だ」

「…ありがとよ、じゃあ早速始めよう…？…先生避けろ！！」

青白い無数の魔力弾が襲う寸前でクロノを抱え回避に成功した飛鳥は飛んできた方に目を向け驚いた

「……」

仮面騎士コルト?が魔力が放たれた場所に居たことに驚きを隠せなかった

「あれは一体何者だ?」

「…先生、この周辺一体に結界を張ってくれ」

「君はあいつを知っているのか?」

抱えているクロノ先生が突然現れた仮面騎士コルトの事を聞いてくる

「彼奴の名は『仮面騎士コルト』…なのはを襲った奴等の仲間だ!」

「な?!」

話終える前に再び魔力弾が雨のように飛鳥達に降り注ぐ

「結界発動!!」

結界を素早く発動させたクロノはバリアジャケットを展開しS2Uをコルトに構え魔力弾を放つも素早くかわされバインドで縛られる

「し、しまっ…」

「……!」

その隙を見逃さずコルト?は魔力弾を放ち爆発に包まれるクロノだったが

「ふ~間一髪だったぜ」

>全くだ、大丈夫かクロノ先生?<

「ああ、助かったよ…」

当たる寸前飛鳥は体を楯にしクロノを攻撃から防いだのだった

「…おい、お前コルトじゃ無えな」

「!?」

「何故わかったかって顔だな?」

自分の事を偽物と当てられ体を震わすコルト?に更に言葉を続ける

「…コルトの攻撃を受けると体が凍っちまった感覚がするんだよ、
だが手前の攻撃にはそれがない」

「……!」

「…さっさと正体を現せ偽物!」

分が悪いと悟りにげたすコルト?だったが

「……!」

無数の設置型バインドに縛られ身動きが取れないコルト

「…一つだけ教えてやる」

ゆっくりと確実に歩み寄るD

「お前が何者かは知らないが、その姿で俺の前に現れたのだけは…」

（誰かを守る為にあの姿になった蓮の覚悟を汚したお前だけは…）

空高く飛翔し翼と全身のスラスターを全開にし回転し始め、紅く熱い焔に包まれ先端に幾重にも魔方陣が展開する

「…許・さ・ね・え・！！」

回転が限界を超え幾重に展開された魔方陣を貫き顕れたのは…

それは不死鳥＞フェニックス＜

焔纏いし不死鳥が大空を舞いその姿は神々しさ溢れる

不死鳥の力を宿した一撃
その名は―

「ブレイズ・フェニックス！！」

「……？！」

焔纏いし不死鳥が偽りの騎士を貫き去った後には焔が残り全身から焔を立ち上がらせた仮面ライダーDの姿だけだった

「飛鳥！大丈夫か？」

ガコン！　プシュュウゥゥ！！

全身の装甲を展開し冷却する飛鳥に駆け寄るクロノ

「…すまねえクロノ、ダメージは与えたが取り逃がしちまった」

コルト？がバインドを引きちぎり転移する瞬間確実な手応えを感じたが取り逃がした事を気にする飛鳥

「いいさ、あの偽物は何をしに来たのかが僕は気になる…ん？」

クロノが偽物の行動を考えてる時だった、空から雪が降り始めたのは…

「雪？……まさか！」

「…やっと見つけたよ…」

Dとクロノが振り向いた先には圧倒的な凍気を撒き散らし周りを凍り付かせながら此方へと歩み寄る青白い影

「…仮面騎士コルト」

大事な家族を傷つけられ鬼神と化した本物の仮面騎士コルトが二人の前に現れたのだった

二人の兄弟同士の戦いが今始まる…

第九話　「復活の超マシン！激突、飛鳥と蓮！！」（中編）（後書き）

おまけ

オットー
「……ウェンディ、さっきの蓮怖かった？」

ウェンディ
「…そうッスね、レンレンがあんなに怒ったのを見たのは初めてッスね…」

オットー
「ウェンディ、蓮の事が心配だから行ってくる…はやてさんとシグナムさんの事をお願い…」

ウェンディ
「…任せるッス、レンレンの事をお願いするッスね」

オットー
「…うん」

第九話　「復活の超マシン！激突、飛鳥と蓮！！」（後編）（前書き）

兄弟対決終了！！＆ａｍｐ；ジェイダー復活！！

第九話　「復活の超マシン！激突、飛鳥と蓮！！」（後編）

時空管理局本局

無限書庫内

「あった…ありましたわ、お姉さま、ユーノさん！」

無限書庫で調査を開始して数日、三人はＪから依頼された「あるもの」を探し出し見つけたのだ

「本当に見つけたの四号！早く見せて、いや寄越しなさい！そして飛鳥に…ハアハアハア」

「…二号さん、いつもああなの四号さん？」

いきなり身悶えする二号を見てユーノは四号に尋ねた

「は、恥ずかしながら…其よりも、早くこれを…『空白の書』を飛鳥達に届けないと…」

「……俺が届けよう、仮面シスターズ…」

「あ、貴方は誰ですか？」

カーボゥイハットを被り　紫色のサソリロボを肩にのせた青年がたたずみユーノの問いに静かに答えた

「…俺の名は……」

海鳴市、結界内

「……」

「……」

雪がちらつく中、赤と黄の瞳が互いを牽制しつつ、拳と双剣を構えるDとコルト

（……蓮、お前と戦う事になるとは思ってもいなかったぜ）

頭の中では様々な思い出が溢れたが、其を振り払う飛鳥

「…来い、仮面騎士コルト」

「……逝きます」

それが合図だと言わんばかりに互いに向け走り出し拳と双剣を繰り出す

「オリャアアア！！」

「セヤアアアア！！」

拳と双剣がぶっかりあった瞬間凄まじい衝撃波が結界全体をを震わせた

「な、なんて戦い方なんだ」

その光景を見たクロノの呟きは再び起こった衝撃波にかきけされた

「…やりますね、シグ姉にあんな酷いことしただけはありますね…」

「……何の事だ（くそ、左腕の装甲が凍ってやがる）」

コルトは右胸装甲が焼け焦げへこんだ部分をDに見せながら呟く

「……何の事だって…」

双剣を握りしめ一気に間合いを詰め斬りかかるコルト

「…貴方がシグ姉にしたことを忘れたと言うんですか！！」

「だから、何の事だ！！」

型とは言えない斬撃で肩、右腕、左足が傷つき凍傷になりながら致命的ダメージを捌くも血が流れ落ちるD

（蓮の奴、久し振りにキレてやがる…今の状態じゃ話を聴かねぇだろうが…仕方ねぇ！）

Dは傷付きながら斬撃の嵐の中から必死に強化された目で繰り出される双剣を掴んだ

「…！見えた！！」

「え？！しまった？」

Dは素早く双剣を持った腕を掴み、焦ったコルトは凍りつかせようとするが遅かった

「仮面騎士コルト！…いや蓮…いい加減頭を冷やせえぇぇ！！」

Dはコルトに頭突きをし互いのメットから鈍い音と火花が飛び散りよろめく

「くうう！目がチカチカするぜ！」

「い、痛た……ってに、兄さん？いや、兄さんがあの人な訳ない！」

再び双剣を構え斬りかかるがすべてDの拳に弾かれ再び腕を掴まれビルに向け加速し二人とも突っ込んだ

「ぐああ！」

「蓮！俺だ飛鳥だ！！」

飛鳥はビルの壁を壊し抜けながら必死に蓮に呼び掛けたが…

「嘘だ！この人が、兄さんな訳ないんだあああああ！！」

反対側に壁を壊し抜けた蓮は、飛鳥から離れ必殺技を放とうと弓を構える

「…く、蓮えぇぇん！ハアアアアア！！」

飛鳥も必殺技の構えを取り互いに引けず炎と氷の魔力光が夜空を染め上げながら高まっていく

「「飛鳥（君）！」」

リンディから連絡を受けバリアジャケットを展開したなのはとフェイトが飛鳥達に近付こうとするが…

「来るな！！」

「え、でも…」

「飛鳥君、何故なの！」

飛鳥からの拒絶の声を聞きなのは達は体を震わせ

「……仮面騎士コルト、いや蓮を止められるのは俺だけだ！」

「え？あの人って蓮君なの？飛鳥君！！」

「……そ、そんなの嘘だよ…あの優しい蓮がコルトだなんて」

「飛鳥止めるんだ！兄弟同士で争うんじゃない！！」

驚きを隠せないなのは達を他所に飛鳥と蓮が動く

「フリージング……」

「ブレイズ……」

魔力が極限迄高まり、必殺の一撃が今放たれる

「ドラグーン！！」

「フェニックス！！」

「「「やめるんだあぁぁ（てえぇぇぇ×２）！！」」」

悲鳴は飛鳥と蓮に届かず不死鳥と氷龍がぶっかり凄まじいほどの魔力の奔流が結界を軋ませる

「うおおおおおお！！」

「せやあああああああ！！」

互いの必殺の一撃は均衡を保ちながら押し合うが次の瞬間

「うわああ！？」

「ぐううう！？」

必殺技の均衡が崩れ余波を受け、二人は別々に吹き飛ばされビル張りつけられ壁が崩れ落ち埋まる

「うぅ…ま、まだだ！！」

双剣を杖がわりにし立ち上がる蓮、飛鳥も瓦礫を退けながら立ち上がり
装甲がひび割れ互いに血を流しながら二人は構えた

「…もう、もうやめて！…飛鳥！蓮！」

「フェイトちゃん…」

「不味い、次の一撃で決めるつもりだ…」

なのは達はただ二人の戦いを見守るしかなかった

「うわあああああ！！」
「うおおおおおお！！」

飛鳥と蓮はボロボロの体にむち打ち、最後の一撃を極めるべく走りだし、拳と剣を互いに振りかざした瞬間　二人の間に紫色の閃光が割って入る

「……そこまでだ二人とも！」

蠍を模した紫の装甲を纏った人物に急所へ剣をつき当て身動きできない二人に彼？は名乗った

「……俺の名はサソード、『神に代わって剣を振るう男』だ」

「…神に代わって…」

「…剣を振るう男…」

そう呟き構えを解いた二人の前でサソードの剣から蠍ロボが離れ装甲が消えカーボゥイハットを被り剣を二振り構えた青年が姿を表した

「…またの名を杉崎鍵だ…飛鳥、蓮。君達の事は数ヶ月前から見守っていたんだ」

サソードいや、杉崎鍵は事件の真相を語り始めた、

「全ては十年前ロストロギア『闇の書』移送時に暴走した闇の書と当時輸送艦艦長「クライド・ハラオウン」をギル・グレアム提督がアルカンシェルで輸送艦もろとも消滅させたのが事の発端だ…そ

うですよね、ギル・グレアム提督と双子猫ども」

「ああ、君の言う通りだよ…」

「ぐ、グレアム提督それにアリアにロッテ？何故貴方がここに？」

「私が連れてきたのよ、クロノ執務官」

プレシアがグレアムと双子猫を連れここにいるのにクロノは驚きを隠せなかった

「…話を戻すが、グレアム提督…貴方はあの事件直後から独自に闇の書の転生先と主を調査し特定しただが完成していない闇の書と主を押さえても意味がない、完成前に破壊しても転生機能で新たな主を見つける、そして貴方は見つけた闇の書の永久封印方法を」

杉崎に問われたグレアムは重い口を開いた

「…両親を失い体を悪くしたあの子を見て心が痛んだが、運命だと思った…孤独な子であればそれだけ悲しむ人は少なくなる」

「…だから父の友人を名乗り生活援助していた訳か…」

「永遠の眠りにつく前くらいせめて幸せにしてやりたかった」

そう言い黙り混むグレアムに杉崎は話を続ける

「だが、貴方の計画に予想外の事が起きた…半年前に飛鳥と蓮が八神はやての前に現れた事だ」

「ああ、アリア達に二人の存在を知らされたが、しかし彼らに関して全くわからなかった」

アリア達に知らせを受けたグレアムは飛鳥達を調査したが全く解らなかった

「解らんのも無理はなかろう、儂がリンディさんに口止めして貰ったからの」

「「じいちゃん？」」

結界をどうやって通り抜けたのかは解らないが瓦礫の上に腰掛けグレアムを源三はなっかしそうに見る

「久しぶりじゃの、グレアム君、クライド君の葬儀以来かの」

「やはり貴方でしたか、新田先生…」

飛鳥達の祖父、源三はグレアムと知り合いみたいだった

「…永久封印方法は覚醒した主と闇の書を凍結魔法で凍結し異空間へ封印という所だな、違うかグレアム提督」

永久封印方法を聞くや否や蓮は双剣を素早くグレアムに突き付け、それを見た飛鳥は慌てて蓮を後ろから羽交い締めにする

「…あなたは、あなたは間違っている！悲しむ人はいない？そんなのあるわけない、はや姉の為に悲しむ人はいるんだ！！」

仮面越しに蓮は泣きながら、グレアムに叫ぶ

「…提督、貴方のプランは間違えている、闇の書の主は完成前は犯罪者じゃない、違法だ…封印する方法があるなら逆もある」

「そのせいで、そんな決まりのせいで悲劇は繰り返されてるんだ…クライド君だって、あんたのお父さんだってそれで！」

「ロッテ…」

クロノの言葉にロッテが声を張り上げるがグレアムに止められる

「蓮、俺は君に残念な事実を言わないといけない…闇の書は過去にある人物達に悪意ある改変を受け壊れてしまいこのまま完成しても現状のままでは、八神はやて君を助ける事ができない」

「……じゃあ僕たちがやって来たことは無駄だったの杉崎さん！？」

闇の書が悪意ある改変を受け壊れてしまっている事実を告げられ蓮は自分達の行いが無駄だと悟りがその場に崩れ落ちた

「まだ手はある！蓮これを、ユーノ君達が無限書庫で見つけ出した『空白の書』なら闇の書を本来の『夜天の書』に戻すことが可能だ」

杉崎鍵が差し出した『空白の書』を見た蓮は再び立ち上がりそれを受け取った

「…杉…鍵兄、ありがとう僕必ずはや姉を助けて見せる！！」

「その前に謝る人がいるだろう蓮…」

鍵が顔を向けた先を見ると飛鳥がゆっくりと近付いて来た

「に、兄さん…」

「…蓮…フン！」

反応する前にゲンコツを受けうずくまる蓮は痛む頭を押さえ飛鳥をみた

「これで勘弁してやらあ、もう一人で抱え混むんじゃねえ、わかったな蓮」

「兄さん…ごめん、ごめんなさい…にいざあああん」

ひたすら謝る蓮を慰めた終えた飛鳥は杉崎鍵の方を向いた

「杉崎兄さん、俺と蓮を止めてくれてありがとう…あのまま続けていたら俺は蓮を…」

「いいさ、飛鳥…其より気づいているか…」

「ああ、杉崎兄さん、この感じ…白衣野郎！じろじろ見てんじゃねぇ！！」

飛鳥はあるビルの一角に激を飛ばすとあの声が響いて来た

「フフフ、まさか其処まで調べるとは貴方を甘くみていましたよ」

「…ドクターL、猫供に知恵を貸したのはお前だったのか！」

薄い笑みを浮かべ頷くL

「さて、問題で～す…私は今何処にいるでしょうか♪」

「そこにいるだろうが！白衣野郎！！」

飛鳥が殴りかかるもすり抜けた先にあった壁にぶつかる

「ホ、ホログラフィー？」

「…蓮、これは一体どうしたの？…貴方は！！」

はやて達の護衛から離れ戻ってきた仮面シスターはドクターＬを睨む

「おやおや、失敗作がまだ生きていたとはね…正解は病院の屋上ですよ、ＤｅＡＭＯＮ」

その場から姿が消え代わりに写しだされたのは

バインドで縛られ蒐集され一人ずつ消えていくヴォルケンズ

『…お願いや…もう皆に酷いこと…』

涙を流し必死に止めるように懇願するはやてが写し出されていた

「はや姉！みんな！！」

「！二人の戦いに目を向けさせ、八神はやての守りを手薄にさせる事が目的だったのか！！」

『フフフ、ご名答ですサソード…ですが貴方が来ることは予想外でした……が、今はこの娘にもっと絶望を与えないと…ね♪』

『いや、駄目！やめて…やめてえぇぇぇ！！』

『フフフ、駄目ですよ…蒐集開始！』

ヴィータの蒐集が終わりその姿が砕け消えた

『う、うぅあ！うわあああああああああああ！！』

はやての悲しみに満ちた叫びが夜空に響きわたり凄まじいほどの魔力が溢れそこにいたのは…

「また…全てが終わってしまった…一体幾つものこんな悲しみを繰り返せばいいのか」

銀髪に赤い瞳、漆黒の翼と甲冑を持ち顔には悲しみに彩られた女性が現れる

「我は闇の書…我が力の全てを…主の願いの其のままに…」

その顔には涙が溢れていた

『これで闇の書は覚醒しました、後はデータ取りは確実に行う為に私は此処で失礼します…精々頑張って下さいねＤｅＡＭＯＮ』

そう言い残しドクターＬは消え去り闇の書がその場に残った

「……はや姉！！」

「おい、待て蓮！！此処からじゃ距離がありすぎる」

はやての元へ向かおうとする蓮を止める飛鳥、しかし自信も足がないことに気付き焦る

「せめて、ジェイダーがあれば彼処迄行けたのに」

だがジェイダーはＪの元で修理中だったのを思い出し歯噛みした時だった

「呼びましたか、マイスター飛鳥？」

飛鳥が振り向くと目の前に妖精少女がふわふわと浮き見つめていた

「……お前誰だ？」

「嫌ですね～私ジェイダーですよマイスター飛鳥♪♪」

ニコニコしながら自分をジェイダーと名乗る妖精少女を見て叫んだ

「ウソダロオオオオ！！」

「本当ですよ、信じてくれませんね～そうだ少しだけ待ってくださいね……フュージョン♪♪」

妖精少女は近くにあったバイクに融合し形を変えていき現れたのは飛鳥の愛車ジェイダーだった

『これで信じてくれましたか？マイスター飛鳥♪♪』

「あ、ああ…ジェイダー…蓮！後ろに乗れ八神の所まで飛ばしていくぜ」

「解ったよ！兄さん！！」

ジェイダーに跨がり蓮を後ろに乗せ八神はやての所に行く前にサソードエクステンダーに乗った杉崎兄さんに呼び止められた

「飛鳥、蓮。勝手で済まないが俺はドクターLを追う、奴の事は俺に任せてくれ」

「杉崎兄さん。何から何まで俺達の為に尽力してくれて本当にありがとう」

飛鳥は杉崎兄さんに頭を下げ礼を言った

「蓮、必ず八神はやて君を助けるんだ、はやて君は君を待っている」

「解ったよ、鍵兄さん！」

お互い拳を合わせると其々の戦場へと走り去りそのあとになのは達がついて来た

「飛鳥、私達も行くよ」

「まるであの時みたいだね飛鳥君」

「ああ、少し足りないけど二人がいればなんとかなるさ。頼んだぜ！なのは、フェイト」

なのは達と共に、はやていや闇の書がいる病院の屋上へと向かう飛鳥と蓮

今、ロストロギア「闇の書」を巡る戦いの最終決戦の火蓋が切っ

て落とされた

第九話　「復活の超マシン！激突、飛鳥と蓮！！」（後編）（後書き）

おまけ

闇の書の元へと向かう途中ジェイダーに飛鳥は質問してみた

飛鳥
「なんで、妖精少女なんだジェイダー？」

ジェイダー
『ボディは完全にダメだったので無事だった超ＡＩ本体をＪが作った融合騎に移植したんですよ♪』

「そうだったのか…これからもよろしくなジェイダー」

ジェイダー
『はい、マイスター飛鳥♪』

ジェイダーは嬉しそうにライトを点滅させながら飛鳥と喋っていたのを見たフェイトはと言うと…

「…ジェイダーって飛鳥と随分仲が良いんだね…」

［サー！？お願いです！私を壊さないで！！］

ミシミシとバルディシュ・アサルトを握り潰さんばかりに握り締めジェイダーに嫉妬するフェイトさんだった

第十話　「決戦、闇の書の意思！！…夜天の主の目覚め」（前書き）

夜天の主、覚醒

第十話　「決戦、闇の書の意思！！…夜天の主の目覚め」

某高級マンション

ロストロギア『闇の書』捜索本部

「艦長、源三さん……何故飛鳥と蓮の存在を上層部に秘匿するんですか？」

あれから本部へグレアム提督とロッテ達を伴い戻ったクロノは開口一番に源三へ疑問を投げ掛けた

「！クロノ執務官、今聞くべき事柄ではありません。私達は此から本局へアースラを受け取り地球軌道上で待機を…」

しかしクロノの目を見た源三にリンディは止められ黙りこんだ

「…クロノ君、今から言うことは他言無用で頼む…これは君の命が二、三回いや…十回は軽く吹き飛ぶ…それでも聞く勇気があるのならば…」

「…覚悟は出来ている、僕は飛鳥の仲間、いや友達だ、彼奴の抱えている問題が何かを知りたいんだ」

その真剣な真実を知る覚悟を秘めた目を再び見た源三は全てを語る決意をした

「全ては数年前、儂等の家族は…」

源三の口から語られた真実を聞きクロノの体は怒りに震え声を荒げ叫んだ

「そんな、そんな事を管理局が!?」

果たしてクロノが源三から聞いた真実とはそれはいつか語られるだろう

海鳴市、結界内

病院屋上

「……来たか……」

バイクのエンジン音を聞き彼女、闇の書は背後を振り向き目にした

「はや姉!助けに来たよ」

「八神…俺を覚えてるよな!」

「…我が主と守護騎士の家族…若き騎士コルトいや蓮…それと!」

蓮に穏やかに語りかけ終えた直後闇の書は飛鳥を見て態度を変えた

「…お前は、鉄縋の騎士に背が伸びない、一生このまま、赤鬼、ドちびでちんちくりん等言ったな…」

「……ハンマーどチビに言った事を何で知ってるんだ?…」

「…我と騎士達は無意識下で繋がっている、勿論お前と戦った時の事と烈火の騎士にあのような事をしたのもな…」

闇の書はいいきるや否や殴りかかる、

「撃ちあいなら負けねえ!」

それを拳で撃ち返そうとしたが力負けし吹き飛びビルにめり込む飛鳥

「ぐあ!」

「待って!この人は僕の兄さんなんだ!!」

「…若き騎士の兄か…だが烈火の将を傷付けた罪は重い…」

闇の書は手を空に掲げ魔力を集中させた

「…デアボリック・エミッション…闇に染まれ」

闇が空一面に広がり飛鳥がめり込んだビルを包む

「…隠れたか…」

闇の書は涙を流しながらもそう呟いた

「大丈夫？飛鳥、蓮、なのは」

「ああ、其よりなのはとフェイトと蓮怪我してねぇか？」

「私は大丈夫…」

「大丈夫だよ、兄さん」

「大丈夫。あの子、広域攻撃型だね、避けるのは難しいかな…」

確かに分が悪い、しかも此方にに恨みがあるかのようだ

その証拠に真っ先に狙ってきた事を考えある提案をする飛鳥

「俺が囮になる、その間に闇の…いや夜天の書を止めて八神を助けないと…」

「夜天の書？確か鍵兄さんが言ってたね」

「私も聞いた、夜天の書ってのが本当の名前なの？」

「杉崎兄さんが言ってたんだから間違いない」

「なのは！」

「待ちくたびれたぜ、師匠！」

遅れて到着したユーノ達に飛鳥達は今までの経緯と状況を話し、先程考えた作戦を伝える

「…確かに、飛鳥に恨みがあるのはわかるよ」

「…それはないぜ師匠、じゃ打ち合わせ通りに行こうぜ皆！！」

「「「「「解った（よ）！！」」」」」

同時に結界が展開され閉じ込められなのは達は其々の持ち場へ散

って行く

「この作戦の鍵はお前だ、一回が無理でも二回、三回でもやるんだ…俺たちがフォローするから心配するな蓮」

そう肩を叩き蓮と別れ持ち場へ向かう途中念話が届いた

［飛鳥…絶対無茶しないって約束して…］

［フェイト…解った約束する、この事件が終わったら買い物でもなんでも付き合ってやるよ］

［え！？］

［…約束したからな、また後で］

一方的に念話を切ると闇の書、夜天の書の前に立ちはだかり拳を構えた

「お前が探しているのは俺だよな？」

「…ああ、若き騎士の兄を手に掛けたくはないが許せ…」

「仮面ライダーDだ」

「仮面ライダーD…いい名だな…」

「あんたの名は？」

「我は闇の書…さあ始めようか」

構える闇の書とDは其々金と黒の翼を広げた瞬間

「オラオラオラオラ！！！」

一気に間合いを詰め飛鳥がパンチを一秒間に三十発を叩き込むが、
それを極小展開した障壁で防ぐ夜天の書

「いい攻撃だが、私には通用しない…」

「どうかな…師匠今だ！」

「これはバインド？」

チェーンバインドが絡み付きその場を動けない闇の書

「…砕け…？なぜ砕けない！？」

「…ギガチェーンバインド」

アイギスに変身したユーノが半年の間に編み出し改良した技であり、例えランページフォームでも千切る事が出来ない強度だった

「いまだ！なのは！フェイト」

「ディバイィィンバスター！！」

「サンダースマッシャー―！！」

ユーノ師匠の合図を聞きなのはとフェイトは砲撃魔法を放ち

「……！」

光の直撃を受け爆煙に包まれる闇の書の意思

「やったの？」

「…多分かな？」

煙が晴れ闇の書の意思はその場にはなく、探すなのは達の頭上に桃色の光が輝いたのをみて驚くなのは達

「あれって、まさか?!」

「スターライトブレイカー?」

闇の書の意志はあの直撃を耐えきり煙に紛れて上を取ったようだ、
その手に光が集まっていく

「咎人達に滅びの光を…星よ集え…全てを撃ち抜く光となれ…」

「不味い、早く距離をとらねえと!」

「アルフ、ユーノを!」

「あいよ」

スターライトブレイカーから距離を取るために散開するが蓮だけいつまで経とうとも動こうとしなかった

「なんで、なんで貴女はそんなに悲しい顔をしてるの…」

「おい!早く此所から離れるぞ蓮!!」

無理やり腕を掴み翼を展開し離れるが、Dから最悪な知らせがもたらされる

＞飛鳥！さっきバルちゃん？から連絡が来た。結界内に二人が取り残されている＜

其れを聞くや否や飛鳥は二人がいる場所へと向かうとなのは達が見つけたようだ

「なのは、早く二人を……ってアリサとすずかが何故此所に！？」

「！アリサ姉にすずか姉なんでいるの？」

二人が何故此所にいるかを考える暇もなく闇の書の意志は収束され集まる光を飛鳥達の方に向け放った

「…スターライトブレイカー」

凄まじい魔力の奔流が迫り二人に障壁を張り更に飛鳥、蓮、なのは、フェイトの順で並び障壁四段構えで展開し耐え続け漸く時が過ぎて収まった

「…大丈夫か？二人とも」

「は、はい…大丈夫です」

「あ、ありがとう…って！なんでなのはとフェイトが此所にいるの、それにアンタ達まさか…飛鳥と蓮なの！？」

（（何故俺（僕）の正体解ったの？））

アリサは更に質問しようとするがエイミィの転送魔法でその場から居なくなる

「ばれちゃつたね」

「うん」

「「どうしょう、ばれちまった（よ）」」

なのはは二人のことを師匠に頼むと同時に、エイミィから連絡が入る

闇の書の主、八神はやてに投降と停止を呼び掛けるようにとクロノからの伝言を受け取った飛鳥達は闇の書の意志と対峙し呼び掛けるが

「我が主は、この世界が自分の愛する者達を奪った世界が…悪い夢であってほしいと願った…我は只其れを叶えるのみ…主には穏やかな夢の内で永久の眠りを…」

「やめてよ…」

更に続けて言おうとしたとき蓮が呟いた

「やめてよ、はや姉はそんなことを望んだりはしない！」

その声に体を震わした闇の書の意志を蓮は真っ直ぐな瞳で見据える

「それがはや姉の願いだっていうの夜天の書さん！だったら何故そんなに悲しい顔をするの答えてよ！」

「…我をその名で呼んだのはお前だけだ、若き騎士よ…」

「今からでも遅くないよ、だからはや姉を解放して夜天の書さん…」

蓮は必死に闇の書いや夜天の書の意志に呼び掛け、　其れを飛鳥となのは達は見守る…だが

「…私は道具だ、ただ主の願いを叶えるだけだ…若き騎士よ我が内で主と共に眠るといい…」

夜天の書が手をかざすとベルカ式が展開し蓮を内に取り込もうとする

「待って夜天の書さん！僕の話を聞いて！！」

「蓮を取り込むんじゃねぇ！！道具だからなんだ？今だってお前泣いてるだろが？…それでも道具だ？心が無いって言うのか！答えろ！夜天の書！！」

蓮の片腕を掴んだ飛鳥は夜天の書に必死に呼び掛ける

「…若き騎士の兄、仮面ライダーD…兄弟共々我が内で眠れ…覚めることのない幸せな夢に抱かれて…」

「「うわあああああ！？」」

夜天の書は式を更に強力に展開し遂に二人は取り込まれ光と共に消え去ったのをなのは達は只見ているだけだった

？？？？？

朝日が差し込む部屋に二つのベッドが並びその一つが動き出したかと思うといきなり布団がはねあげられた

「ハッ！此所どこだ…それになんか回りが高く見えるな…ん？」

彼は鏡を見て驚きあちこちをさわり確認しだした

「なんで、俺小さくなってんだ？　そう言えば夜天の書が眠れって言っていたな…蓮！起きろ！！」

「う～ん、はや姉～ゴスロリはやめてよ～ナースはもっと駄目～」

「……蓮、お前苦労してんだな…其より起きろおおお！！」

「な、何？何が起きたの！？」

やっと起きた蓮にため息を吐いた時ドアが開かれ二人の前にに現れた

「飛鳥と蓮が早起きなんて珍しいな、今日は雨でも降るかな？」

「と、父さん？！」

「…お父さん……」

二人の前にいた人物は、新田シンヤ、二人の死んだ筈の父親だった

「どうしたんだい、僕の顔に何かついてるかな飛鳥、蓮？」

「な、何でもないよ…父さん…」

「お父さんの顔にはな、何もついてないよ」

その反応を見てシンヤは微笑みながら顔を洗うようにいい残し部屋を去った

「兄さん、これって…」

「蓮の思っている通りだ多分……取り敢えず顔洗ってリビングに行くか…」

「うん……」

顔を洗った二人はリビングに向かうとある人物が何かを準備をしながら何かを弄っていた

「え～と飛鳥と蓮の着替えは良し、あとは私たちの荷物を車に積

んで……あらおはよう飛鳥、蓮」

「お、おはよう、お母さん」

「母さんおはよう、所で何の準備してるの？」

女性、二人の母新田マリアは飛鳥と蓮を金色の瞳で見ていきなり抱き締めた

「ちょ、母さん？」

「お母さん？どうかしたの？」

「早速朝の飛鳥と蓮成分補給開始～♪」

マリアは二人を抱き締めるや否や飛鳥＆ａｍｐ；蓮成分なるもの充電？している

「ちょ、母さん恥ずかしいよ」

「が～ん、貴方～飛鳥が飛鳥が反抗期にはいったわ～え～ん」

わざとらしく泣きながらシンヤに抱きつくマリアを慰める姿をみた二人はただ眺めるしかなかった

結界内、海鳴市街

「全ては安らかな眠りの内に…」

「飛鳥、蓮…！！」

すでに暴走の前兆が起こりつつある中

＞バリアジャケット・パージ＜

フェイトはソニックフォームになると夜天の書に瞬時に近づきバルディシュをで切り結んでいた

「返せ…飛鳥と蓮を返せ！！」

「エイミィさん！！」

エイミィによると飛鳥と蓮は闇の書内部空間に閉じ込められ命に

別状はないと聞きなのははは落ち着きを取り戻すがフェイトは取り乱していた

「フェイトちゃん、飛鳥君と蓮君はまだ生きてるよ。今エイミィさんが救出方法を探しているから落ち着いて！！」

なのはに諭され夜天の書から距離を取る

「エイミィ、お願い早く飛鳥と蓮を…」

『解ったわフェイトちゃん、けど今は闇の書を市街地からなるべく遠ざけて』

「…わかった、なのは夜天の書を市街地から遠ざけよう」

「うん、フェイトちゃん！」

二人は夜天の書を市街地から遠ざけるべく動き出した

？？？？？

「…う…」

意識が微睡みながらも重い瞳を開けると　銀髪で赤い瞳の女性がはやてを見下ろしていた

「そのままお休みを、我が主…貴女の望みは全て私が叶えます…目を閉じて心静かに夢を見てください…」

その言葉を聞き再び意識は深い眠りにつき女性ははやてを見守るように佇むのだった

？？？？？

「う～ん補給完了、さあご飯を食べたら行くわよ」

「え、出掛けるって何処に？」

「今日から家族旅行くって忘れたのかい？」

家族旅行という単語を聞いた瞬間、飛鳥と蓮は体を震わせたが直ぐに隠し冷静さを装った

「今日は飛鳥と蓮にみて貰いたい物があるんだ」

「見せたいモノってなんなのお父さん？」

飛鳥はあの時の朝と同じ光景を思いだし両親と蓮の会話を聞いていなかった

「…鳥、飛鳥？気分が悪いの？」

「い、いや。大丈夫だよ母さん」

「フフ、ご飯食べたら初めての家族旅行に行くわよ～飛鳥、蓮」

そういいながら時間は過ぎて行き車に乗り目的地へ向かう新田一家、飛鳥と蓮の様子がおかしいのにマリアが気付いた

（（駄目だ…このまま行ったら…父さんと母さんが…））

その時暖かい温もりに包まれ顔を挙げるとマリアが二人を優しく抱き締めていた

「大丈夫、怖くないからね飛鳥、蓮」

そうしている内に夜になり車は目的地へと着いた、

新田一家はしばらく歩くとある場所にでた

「「うわあああああ……」」

「すごいだろ、飛鳥、蓮…」

様々な花が辺り一面を埋めつくし、夜空には二つの月が輝き幻想的で美しい風景が広がり、まるで新田一家を迎えているみたいだった

「…父さん、母さん…これ夢なんだよな」

「…気付いていたのかい…飛鳥、蓮」

シンヤは微笑みながらも頷き、マリアは飛鳥と蓮に向き語りかける

「…飛鳥、蓮…たくさん傷いて心が傷付く現実よりも此所に居たほうがずっといいじゃない…」

しかし飛鳥と蓮の答えはもう決まっていた

「父さん、母さん…ごめん無理だよ…」

「僕、助けたい人がいるんだ…」

二人はシンヤとマリアに体を向け真っ直ぐな瞳でみた

「「だから俺（僕）、行くよ…お父さん、お母さん」」

少しの空白、兄弟と父母は互いの瞳を見つめ合う

「…そう言うと思ったよ、飛鳥、蓮。流石は僕とマリアの子だ」

「…飛鳥、蓮。私達は何時も貴方達を見守っている、それだけは忘れないで…」

そう言い涙ぐむシンヤとマリア達をみて飛鳥と蓮は黙って頷く

「飛鳥、蓮！これを忘れているよ」

そう言い二人に渡したのは待機状態のDとディーヴァ、受けとると起動させ被ると構えた

「「変身！」」

龍の角に赤い瞳、鋭さと厚みを増した白と黒の装甲には金のラインが走り背中には金の翼が目立つ異形と…

鬼の角に黄色い瞳、蒼と黒の厚い装甲に騎士を思わせる漆黒のマントが目立つ異形がシンヤとマリアの前に現れ名乗りをあげた

「仮面ライダーD！！」

「仮面騎士コルト！！」

二人はその姿を怖がらず、只優しく見つめやがて光に包まれ消え始める

「飛鳥、蓮。その力を……」

最後は風に消されたが飛鳥と蓮の耳にはしっかりとのこり微笑みを残し消えた後、飛鳥と蓮はその場を後にした

結界内、同市海上部

三色の閃光が海上を空を駆け巡る、一つは闇の書又は夜天の書の

意思

「フェイトちゃん！」

「フォトン・ランサー、ファイヤ！！」

「……楯……」

金色の魔力弾が夜天の書の意思を襲うも楯に防がれる、

「フェイトちゃん、カートリッジは後どれぐらいある？」

「…残り２４発、使っているのを含め３０発だね…」

あれから海上に戦いの場をうつし、なのははエクセリオン・モードで、フェイトは攻撃するも決定打に欠けていた

（早くしないと飛鳥と蓮が……）

その時、夜天の書の動きが止まり念話が響いた

『外の方！管理局の方！そこにいる子の保護者、八神はやてです』

「はやてちゃん？」

はやての話によると現在魔導書本体から制御を切り離したが表に出ている防御プログラムを何とかしないと管理者権限が使えないと言う

『なのは、フェイト分かりやすく伝えるよ、今から言うことをなのはとフェイトが出来れば、はやてさんと飛鳥、蓮も外に出られるよ』

ユーノが言うには目の前にいる防御プログラムを魔力ダメージでぶっとばすと言うものだった

「全力全壊、手加減無用で！」

最近ユーノは飛鳥の熱い性格に影響されたみたいだった

「さすがユーノ君、分かりやすい！」

レイジングハートをなのはが構え、フェイトはザンバー・モードを起動させ構える

闇の書内部

「夜天の主の名において、汝に新たな名を送る」

夜天の書の意思の頬にてを添えその赤い瞳を見ながら告げるはやて

「強く支える者、幸運の祝風、祝福のエール…リィンフォース」

同時刻内部

「蓮、俺に合わせられるか？」

「任せて、兄さん！」

お互いに構え技を放つべく空へ舞う

それは二対の螺旋、炎の螺旋と氷の螺旋が空を舞い

すべての因縁、数多の呪いを打ち砕く二対の螺旋

その名は

「「ライダーダブルキック！！」」

同時刻　海上

「エクセリオン・バスター！フォースバースト！…ブレイクシュート！！」

「疾風迅雷…スプライト・ザンバー！！」

桃色の極光と金色の斬撃が当たると同時に赤と青白い螺旋が現れ空を舞い姿を表す

「ふう、何とか出れた…蓮大丈夫か」

「うん、兄さんこそ大丈夫？…はや姉……」

夜天の書内部

『新名称リィンフォースを認識、管理者権限の使用が可能になります』

『ですが防御プログラムの暴走が止まりません管理から切り離された膨大な力が直暴れだします』

「うん、まあなんとかしょう…行こうか、リィンフォース」

『はい我が主よ』

はやては夜天の書を抱き光に溢れ転移するのだった

同海上

「飛鳥、蓮！怪我はない大丈夫！？」

「当たり前だ、怪我なんかしてないから、心配性だなフェイトは…（それって斬艦刀だよな？）」

脱出に成功した飛鳥達の元になのは達が駆け寄り　心配したフェイトに詰め寄られあたふたする飛鳥を見て笑う一同だったが…

「それより、まだ終わってないみたいだぜ皆…」

「え…これは！？」

結界が消えずさらには空間に振動が伝わり何かが現れようとしていた

第十話　「決戦、闇の書の意思！！…夜天の主の目覚め」（後書き）

おまけ

ウェンディ

「助かった～トーレ姉さんありがとうッス」

トーレ

「全く、あの時ジェイダーがお前に気付かなかったら危なかったんだからな」

あの時デアボリック・エミッションを受けたビルにいたウェンディに気付いたジェイダーがギリギリで回収したのだった

ジェイダー

『全くです、ウェンディ姉さまも少しはトーレ姉様を見習ったらどうですか』

ウェンディ

「め、面目ないですッス」

第十一話　「長い夜の終わり…そして悪魔は姿を顕す―ＤｅＡＭＯＮ―」（前書）

遂に覚醒、ＤｅＡＭＯＮ。

第十一話　「長い夜の終わり…そして悪魔は姿を顕す―ＤｅＡＭＯＮ―」

同時刻

地球軌道上

次元航行艦『アースラ』

ブリッジ

アースラは現在地球軌道上にいる、リンディは現地から送られてきた映像と情報を確認しその手元を見る

「アルカンシェル…使う事がないと良いけど…」

発射キーを握りしめながらある事を想う

（…クロノ貴方まで巻き込んでごめんなさい…）

現場に向かっているであろうクロノにリンディは謝るのだった

同時刻　海上

なのは達の目の前に黒く澱み巨大な球体が海上に浮かび何かがうごめいていた

『皆、下の黒い澱みが暴走の始まる場所になる。クロノ君が着くまで無闇に近づかいちゃ駄目だよ』

「はい！」

なのはの声を聞き俺たちは気を引き締め恐らく最後になるであろう戦いに集中するのだった

夜天の書内部

光に満たされた空間に少女、はやてと夜天の書はいた

（…管理者権限発動）

―防衛プログラム進行に割り込みを掛けました、数分程度ですが暴走開始の遅延が出来ます―

リィンフォースの言葉に頷くとはやては次の行動に移った

（うん…それだけあったら十分や）

「…リンカーコア送還、守護騎士システム破損修復…」

回りに四色の光、リンカーコアが現れ輝きを増すと消える

「おいで、私の騎士達」

同海上

防衛プログラムの近くに激しく輝く光が現れその眩しさに目を瞑るが蓮はその光に向け跳んでいったの見た飛鳥は悟った

「蓮、八神が無事で良かったな」

「え、シグナム？」

「ヴィータちゃん！」

はやての回りにはシグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラが護るように並び其処に蓮が辿り着く

「はや姉！良かった…無事で本当に良かった？…はや姉どうしたの？」

「……何であんな無茶したんや…リィンフォースに聞くまで知らんかったで…これが終わった後で、しっかりと［お話し］しょか…蓮ちゃん…？」

「あ、主！？」

余りの剣幕のはやて（邪神？）に蓮はひたすら頷き、それを見たシグナム達は怯えるのだった

「飛鳥、僕逃げて良いか？」

「待て、先生…俺に考えがある、『お～い蓮、八神にこう言えゴニョゴニョ』」

『…本当にそう言えば大丈夫なの、兄さん』

『ああ！』

蓮はため息をつき、はやて（邪神？）に向いた

「…はや姉、此を早く終わらせたら二人っきりで何処か行かな…」

「シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ！気合い入れて早く終わらせるんや！！どうすれば良いんや管理局の方！」

蓮の言葉を聞いた瞬間、はやてはすごく気合い十分になりクロノに詰めより聞いてくる。

「あ、ああ…停止プランは２つある、１つ極めて強力な氷結魔法を用いて停止させる、２つは軌道上で待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシェルで消滅させる、これ以外方法がない…他に良い手は無いか？闇の…」

「闇の書って名前じゃないぜ…『夜天の書』だ先生…」

「…すまない、改めて夜天の書の主と守護騎士の皆に聞きたい」

飛鳥に言われクロノは本来の名で呼び方法を尋ねた

「え～と最初のは多分難しいと思います、主の無い防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させてもコアがある限り再生機能は停まらなん」

「アルカンシェルも絶対駄目！こんな所でアルカンシェル撃った

らはやての家迄ぶっ飛んじゃうじゃないか！！」

ヴィータは腕で大きくバツテンしながら反対した

「そんなにすごいの？」

なのはの疑問にユーノは分かりやすく説明し始めた

「発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅起こさせる魔導砲て言うとだいたいわかる？」

其を聞きなのはとフェイトはクロノに詰め寄ってくる

「あの、私もそれ反対！」

「同じく、絶対反対！！」

「…以下同文だぜ、先生」

「僕も反対だよ！クロノさん」

「僕も、かあ…艦長も使いたくないよ…でもあれの暴走が暴走が本格的に始まったら被害が遥かに大きくなる」

「暴走が始まると触れた物を侵食して無限に広がっていくから」

防衛プログラムの暴走を止め、更には被害がでないようにするか、途中エイミィから暴走開始まで１５分を切ったと報告を受けても何も浮かばない

「あ～あ！何かごちゃごちゃうっとおしいな～皆でズバッとぶっ飛ばしちゃうわけには行かないの？！」

しびれを切らしたアルフの言葉になのは達は何かを思いついたようだ

「ズバッと…ぶっ飛ばす……」

「ここで撃ったら被害が大きいから撃てへん…」

「でもここじゃなければ…」

「！そうか…その手があった！！」

「に、兄さん？」

なのは達と飛鳥はクロノに向き直り尋ねた

「クロノ君、アルカンシェルって何処でも撃てるの？」

「何処でもって、例えば」

「今、アースラがいる場所」

「軌道上、宇宙空間で！」

『管理局のテクノロジーを舐めてもらっちゃ困りますなあ～撃てますよ…宇宙だろうが何処だろうが！』

通信の向こうでサムズアップしているエイミィが見えた気がするが、クロノはまさかと言う顔をする

「おい、ちょっと待て君らまさか！？」

その問いに自信を持ってうなずくなのは達だった

沿岸部

「なのはちゃん達と飛鳥君と蓮君大丈夫かな」

海上を見つめるアリサ達は少し落ち着きながらなのは達を心配していた時だった

「月村、バニングス何故此処にいる？」

「五月先生？」

振り替えると大型のバイザーをつけ装甲が着いたボディスーツの上にコートを来た聖祥大付属小学校化学教師、新田五月がいたのに驚く二人

「…此処は危ないから私と来るんだ…」

「あ、あのその姿は一体？」

「…今の私は仮面シスター五号だ、其れよりも早く離れるぞ月村、バニングス」

「仮面シスター？仮面ライダーDは五月先生じゃないんですか」

「仮面ライダーDは…今アソコで戦っている…この街とそこに住む

人々の明日を守るために…」

そう言い指差した場所では黒い澱みが弾け姿を現す異形、光が走ったのを見た二人を伴い去っていくのだった

同海上

クロノはリンディになのは達が考えた案を伝えた結果、実現可能言う答えを聞きあきれながらも考えた作戦、先ずは防衛プログラムのバリア魔力物理複合四層式を全て破壊、

本体をなのは、フェイト、はやての最大出力砲撃後露出したコアをユーノ、アルフの強制転移魔法でコアをアースラ前方に転移させてアルカンシェルで蒸発させるという作戦が決まった

「先生…さっきの言葉『今を戦って未来を変える』良い言葉だったぜ」

「ああ、だが今は！！」

「コイツを何とかしねえとな！！」

遂に黒い淀みから姿を現した防衛プログラムへ攻撃を開始するな

のは達、先ずは打ち合わせ通り。なのは、ヴィータコンビが行く

「ちゃんと合わせろよ、高町なのは」

「ヴィータちゃんもね」

そして防衛プログラムに向けデバイスを構える

「鉄鎚の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

カートリッジを数初ロードし姿を巨大なハンマーに変え降り下ろす

「鋼鉄爆砕！ギガントシュラーク！！」

降り下ろされ第一層が砕け続いてなのはが構える

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます」

足元にミッド式を展開し、カートリッジを数発ロードする

「エクセリオンバスター！ブレイク・シュート！！」

極太の閃光が第二層を貫通し砕け防衛プログラムは声を?あげる

「次!シグナムとテスタロッサちゃん!!」

シャマルの指示に従いシグナム

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣、レヴァンティン…刃と連結刃に続くもうひとつの姿……」

レヴァンティンを構え鞘を柄に接続しカートリッジロードし、その姿を弓へと変え構える

「駆けよ!隼!!」

>シュッルム・ファルケン<

炎を宿した矢は真っ直ぐ防衛プログラムの第三層を粉々に打ち砕く

「フェイト・テスタロッサ、バルディシュ・ザンバー行きます!」

ザンバーを軽く振り足元にミッド式を展開し防衛プログラムに一回転しザンバーを振りバリケード?を切り払う

「撃ち抜け、雷刃！」

＞ジェット・ザンバー＜

上段から構え振り下ろされた刃はその体をを袈裟斬りにし防衛プログラムは悲鳴をあげるが反撃を試みるも

「楯の守護獣、ザフィーラ！攻撃なんぞ撃たせん！！」

「はやてちゃん！」

待機していたはやては夜天の書を開き詠唱を始める

「彼方よりきたれ、宿り木の枝…銀月の槍となりてうち貫け！石化の槍ミストラルティン！！」

上空に展開したベルカ式から無数の槍が防衛プログラム本体に突き刺さりそこから石化し動きを止めるも再生し始める

「次は…俺と…蓮が行くぜえええええ！！」

飛鳥と蓮は防衛プログラム本体を間にして向き合うように互いに

構える

「れえええん！タイミングはお前に任せた！ウオオオオオ！！」

各部の装甲を展開し魔力放出と共に回転し炎の螺旋が空を舞い魔方陣を突破する、

「行くよ、兄さん！！」

同時に蓮も弓を構え魔方陣が矢の先端に２つ展開し凍気が収束し始める

「ブレイズ・フェニックス！！」

「フリージング・ドラグーン！！」

限界まで高め放たれた不死鳥と氷龍が防衛プログラム本体に突き刺さるのと同時に炎と氷の相反する魔力が凄まじい爆発を起こし衝撃波が伝わり、爆煙から飛鳥が仮面ライダーＤが空を舞う

「合体必殺技！スーパーノヴァ！！」

スーパーノヴァ、前回の兄弟喧嘩時、互いの必殺技の相反する属

性が連鎖反応起こし膨大なエネルギーを産み出したのを見て閃いた技だった

（ぶっつけ本番でうまくいったぜ、けど必殺技三回使いきってもう変身維持分しか魔力が持たないぜ…）

「な、何て無茶苦茶な事するんだ…けど折角飛鳥が作った勝機！」

クロノは飛鳥の無茶に呆れつつデュランダルを構え詠唱し放つ

「悠久なる凍土、凍てつく棺の地にて永遠の眠りを与えよ…凍てつけ！」

＞エターナル・コフイン＜

防衛プログラム本体が徐々に凍てつきそして本体をも凍らせ動きを止めたのを見たなのは達は各々のデバイスを構える

「いくよ、フェイトちゃん、はやてちゃん」

その言葉に頷き防衛プログラム本体への最後の攻撃が始まった

「全力全壊！スターライト…」

「雷光一閃！プラズマザンバー…」

「響け終焉の笛！ラグナロク…」

三人の魔力が極限まで高まりそして放たれた。

「「「ブレイカー！！」」」

三色の凄まじいまでの魔力砲撃が防衛プログラム本体を削り爆発したその衝撃で海は荒れ狂い、そして遂にコアが露出した

「本体コア露出、捕まえた！」

「長距離転送！」

「目標軌道上！」

「「「転送！！」」」

シャマルの声を合図にユーノ、アルフ、シャマルはコアをアースラの射線上に転送し、リンディはアルカンシェル発射体制を整える

「アルカンシェル発射！」

生体部品を再生しながら射線上に転送されたコアにアルカンシェルが着弾し声ならぬ声をあげ原始レベルまでに分解され消滅し反応が完全に消えた

それを確認したエィミィの報告を受け、なのは達はハイタッチし事件が終わったのを喜びなかヴィータ達の叫びが響いた

「はやて！」

「はやてちゃん！」

「しっかりして、はや姉！そうだシャマル姉これを…」

「蓮君、これは？」

「これは『空白の書』だよ、夜天の書さんを直す事ができるって鍵兄から渡されたんだ」

そういいシャマルに空白の書を手渡し、はやてを心配する蓮の前

にリインフォースが現れる

「…若き騎士よ、知っていたのか私が壊れているのを…」

「うん、けどこれを使えば夜天の書さんは生きる事が出来る…」

「無理だ、数多の命を奪い悲しみを振り撒いた私に生きる権利は…」

「違う！」

蓮の声に驚くリインフォースに更に続ける

「僕は、貴女が長い間苦しんできたのを知っている。はや姉がその言葉を聞いたら悲しむよ…折角貴女に、新しい家族に会えたのにお別れなんて嫌だよ…僕はどんな罪を犯したとしても貴女に生きていて貰いたいんだ…」

蓮の表情は仮面越しだが　涙を流している、リインフォースは蓮の頭を撫でながら尋ねる

「若き騎士よ、私は生きていいのか…」

「良いに決まってるよ！貴女はどうしたいの！？答えてリインフォース！」

蓮と守護騎士達の目をみて赤い瞳から涙が溢れだした

「わ、私は、私は生きたい…主と守護騎士達、蓮と共に生きたい！」

涙を流し生きたいと言う言葉を聞いた蓮と守護騎士達は優しく微笑みリインフォースを迎える

「おやおや、お涙頂戴の三文芝居は終わりですか…ＤｅＡＭＯＮ」

声が響いた方向に振り向くとあの白衣の男、ドクターＬが空に浮いていた

「白衣野郎！なぜここにいやがる？！」

「何、貴方達の実戦データを録りに来たんですよ…ＤｅＡＭＯＮ」

「俺と蓮をそんな名前で呼ぶんじゃ無ぇ！！」

飛鳥は翼を広げ間合いを積め殴るも拳は空しく空を切りすり抜けた

「またお得意のホログラフかよ！」

「待つんだ、ドクターＬお前の目的はなんだ！」

「おや、切り札君じゃないですか～ますますクライド君に似てきましたね～特別サービスで教えてあげましょう…実験ですよ。私のＤと新田シンヤのＤ、どちらが上かをね…」

父新田シンヤの名前が出たことに驚く蓮と飛鳥に何時もの歪んだ笑みを浮かべた

「ＤｅＡＭＯＮ、これは私からの置き土産です…ここにある防衛プログラムの残骸と戦ってもらいましょう…ではご機嫌よう…」

姿をかきけした直後防衛プログラムの生体部品の残骸がひとつになり徐々にに人形になり現れた

「う、嘘だろ…」

「何故、俺たちと同じ姿をしてやがる！」

龍と鬼の角に黒い瞳、装甲を禍がしく突起が目立ち血のように赤い装甲、六枚の黒翼が目立つ異形

悪魔の異形が姿を現した

「なのは！皆を連れてアースラに引き上げるんだ！！急げ！！」

「飛鳥！私も残……」

「駄目だ！フェイト達はさっきの砲撃でカートリッジと魔力が底をついてるだろ」

「そうだけど…飛鳥君と蓮君だけじゃ……」

「…なのは行こう、はやてをアースラに連れて行かないと、正直私も魔力があまり無いんだ」

飛鳥にアースラに引き上げるように言われ食い下がるが正直魔力とカートリッジがあまり無い事実をフェイトに言われアースラに引き上げるなのは達、飛鳥にフェイトからの念話が届く

『飛鳥……お願いだから絶対無理はしないで…約束して…』

『…解った、フェイトは相変わらず心配性だな。約束するぜ、じゃあまた後でな』

『…うん』

念話を切り飛鳥と蓮は防衛プログラムライダーと対峙する

「D、変身維持どれぐらい持つか?」

＞…正直、後３０分って所だ、それに必殺技は使えないぞ飛鳥＜

＞そうね、D…蓮も魔力が底をついてるわ…＜

「兄さん、必殺技はもう使えない、どうしたら…」

「蓮…例え勝つ可能性がゼロでも諦めるな…二人なら…！」

二人に防衛プログラムライダー?がその黒翼を開き迫るのをみて構えるが、飛鳥がその体を羽交い締めにされ暴れまわる

「いまだ！蓮！！」

「兄さん、うまく避けて！ハアアアア！！」

蓮が切りかかる直前に飛鳥は防衛プログラムライダー？から一瞬で離れ、蓮は双剣で逆袈裟、袈裟、右斜めに切り上げ一回転し左斜め切り下げると、その間隙を縫って飛鳥は右斜めに蹴りあげるとある構えを執った

「楓姉さん直伝！レイソニック・ウェーブ！！」

その拳は、強く、しなやかにそして一点に打撃を集中し、防衛プログラムライダー？に打ち込まれそして人語にならない叫びを挙げ海面に叩き込まれた次の瞬間海がはぜた！

「や、やった！初めて成功した（楓姉さん、この技を教えてくれてありがとう）」

「た、倒せたんだよね？兄さん」

蓮の問いに頷き海面を見ると防衛プログラムライダーの破片が浮かび上がりそれに安堵する飛鳥

「じゃあ、皆の所にかへ？！」

「に、兄さん！！」

蓮がみたのは兄飛鳥の胸を貫き握り開きをする血に染まる手、その元に居たのは体の生体部品を修復する倒した筈の防衛プログラムライダー？だった

「がはあああああ！？」

ずるりとその手が抜けると同時に海中に沈み海面にはおびただしいほどの血が浮かび上がるのをみた蓮の中でなにかが切れた

「に、兄さん…う、う、うあああああああああああ！！」

蓮の叫びが兄飛鳥の沈んだ海に空しく響き渡るのだった

（く、くそ…力が出ない……此処までな…の…か…）

＞あ、飛鳥しっかりしろ！飛鳥カ・カ・カ……特殊ナノマシンＤ移植者ノダメージレベルオヨビマリョクレベル、レッドゾーントッ

パヲカクニン…ジョウキョウダハノタメ…ＣＯＤＥ：ＤｅＡＭＯＮ…キドウショウニン＜

意識を失った飛鳥の中でナニかが脈打ち赤い瞳が黒へと変わる…

「うあああああああああ！」

蓮は叫びながら兄を倒した防衛プログラムライダー？と双剣で激しく切り結ぶがすべてを紙一重でかわされている

＞蓮！落ち着きなさい！！怒り任せに剣を振るうのをやめなさい蓮！＜

「よくも、よくも兄さんをおお！ハアアアア！！」

蓮の頭には兄を倒した防衛プログラムライダー？にたいする怒りしかあらず、ひたすら力任せに剣を振るうが遂に…

「しまった！！うあああああああああ！？」

双剣を弾かれ無防備になった胴体に防衛プログラムライダーの重い蹴りが決まり海面に叩きつけられ、一瞬気を失う蓮に追撃をかけ

ようとした時、防衛プログラムライダー?の動きが止まり蓮から視線を外しある一点を見ていた、それにつられ蓮はみてしまった

「に、兄さん?」

＞…いえ、アレは……＜

龍の角は禍しいまでに歪に生え、赤い瞳は漆黒、闇色に染まり、各装甲はさらに刺々しく鋭角さと禍しさを併せ触れただけで全てを切り裂く、金色の翼は漆黒に染まっていた

「%%%$$＼＼&

＞…蓮、アレはもう貴方の兄さんではないわ…＜

「どういうことなのディーヴァ？」

蓮の問いにディーヴァは重い口を開いた

＞…思いだしたわ落ち着いて聞いて蓮…アレは、あの姿は……呪われた大都市殲滅用生体兵器ＤｅＡＭＯＮ……私達Ｄ本来の姿よ…蓮＜

ディーヴァの言葉、驚愕の真実に驚きを隠せない蓮、今ここに悪魔が、呪われた大都市殲滅用生体兵器ＤｅＡＭＯＮがその覚醒の産声をあげた瞬間だった

第十一話　「長い夜の終わり…そして悪魔は姿を顕す―ＤｅＡＭＯＮ―」（後書き）

おまけ

「待っていましたよ！この時を！！これで私の最高傑作は完成しますよ！！」

薄暗い室内に狂気の笑い声をあげ空間スクリーンに写し出された飛鳥、ＤｅＡＭＯＮを見て息がきれするまで笑い声をあげる

（…あれが…私のお兄様……）

生体ポットの中で紫の髪の毛の少女が浮かびながらその金色の瞳で飛鳥を見て呟いた事にドクターＬは気付かなかった

第十二話　「金色の想い届く時、悪魔は人へと戻る」（前書き）

飛鳥の暴走終了＆ａｍｐ；今回、蓮の助っ人に、ジャンさんの所の南大地君が登場します

第十二話　「金色の想い届く時、悪魔は人へと戻る」

地球軌道上、次元航行艦「アースラ」メインブリッジ

『ウガアアアアア！！』

アースラのスクリーンに仮面ライダーDが雄叫びを上げ悪魔へと変貌を遂げたのを、なのは達、アースラクルー一同は呆然と見ていた

「いかん！飛鳥を早く元に戻さんと大変なことになる！！」

「どういう事かしら…源三博士…」

リンディの言葉に黙りこむがしばらくして意を決し源三は重い口をひらいた

「…このままの状態が続けば飛鳥は…心を失い破壊マシーンに成ってしまう！！」

「え…源三さん、飛鳥が破壊マシーンに成るって…う、嘘ですよね…」

しかし源三はフェイトに何も告げずスクリーンに写る飛鳥を、悪魔へと変わった仮面ライダーDを悲しい目でただ見続けた

同時刻　海上

「ウ、ウ、ウガアアアアア！！」

「＃％＄＄％＃＃％＄＄％！！」

雄叫びを上げ飛鳥？は翼を広げ恐ろしいスピードで防衛プログラムライダーに襲いかかると、その両腕を掴み力任せに引きちぎった

「％＄％＃＃％％＃＃＄＄＃～～！！」

声にならない悲鳴を上げるのにもお構いなしに頭を掴み海面に何度も何度も叩きつけられるもその間に再生した両腕に捕まれ逆に叩きつけられる飛鳥？

「グ、グガアアアア！！」

だがお返しとばかりにクラッシャーを大きく開けた飛鳥？は、その首筋に噛みつきを食いちぎる、

「$#%＼#＼$#%$!!」

首筋から吹き出した血を押さえ飛鳥を見据え距離を離したのを、蓮はただその戦いを見ているしか出来ずにいた

「ディーヴァ、僕も何時か兄さんと……」

＞違うわ！蓮のお兄さんは意識を失って［D］システムに呑み込まれて要るだけよ…＜

防衛プログラムライダー？とD飛鳥は傷がなおると同時に構えた

「あ、あれはまさか！ライダーキック！？」

「#$%#%$#$%$#%#＼#%!!」

防衛プログラムライダーは飛鳥？より早く空へ飛びその身を黒い螺旋へと変える、D飛鳥は其を見て構えると足元に赤黒いミッド式を展開し回りを黒炎が走る

「ハアアアアア…ウガアアアアアア！！」

「%＼%&@？@＜@＼&%$%$%&-#!!」

空から黒い螺旋が向かうと同時に幾重にも現れた赤黒いミッド式魔法陣を突破し現れたのは……

黒炎の不死鳥が黒炎を撒き散らしながら黒い螺旋に向かう

ソレは人が、歪な悪意が産み出した黒炎(アクマ)の不死鳥

すべての命を黒炎で焼き付くし、己が命をも削る必滅の一撃

「ウ、ウ、ウガアアアアア！」

「#%&$@@$##$$%%&&!!」

黒い螺旋と黒炎の不死鳥ぶっかりあい、互いに拮抗したが僅かに黒い螺旋が押し始め、防衛プログラムライダーは勝利を確信したかに思った

「ウ、ウ、ウガアアアアア！！」

「&$$###**@@$&%$~~

～～～～？！？！」

D飛鳥が纏う黒炎が勢いを増し黒い螺旋を打ち砕き、無防備の防衛プログラムライダーに最後の一撃を与えるべく空を舞い急降下する

「ガアアアア！！！」

「――――――――――――――！……」

最後の一撃、「エターナル・カオス」を受けた防衛プログラムライダーはその身を黒炎で焼き付くされ完全消滅したのを見たD飛鳥は凍てついた海面に降り立つ

「に、兄さん？」

「……ウ、ウ、ウガアアアアアア」

飛鳥はいきなり蓮に攻撃を仕掛け、紙一重でなんとかかわすも先程自分がいた場所が一瞬で蒸発した

「兄さん！正気に戻ってよ！！兄さん！！！」

「ガアッ!?」

しかし蓮の体力と魔力が無く体勢が崩れD飛鳥の拳が迫るがその瞬間、鈍い金属音が当りに響き渡った

「飛鳥!自分の弟になにしてやがる!!」

「だ、大兄!?何でここに?」

蓮の目の前に白い装甲、Dアーマーを身に纏った人物、南大地が剣で飛鳥の拳を防ぎ蓮を守るように立っていた

「!!」

大地から殺気を感じたD飛鳥はその場から離れると警戒しながら二人の様子を伺う

「蓮、細かい話は後だ…ディーヴァ…飛鳥、寝坊助を止める、または起こす方法は何か無えか?」

＞…可能性は低いけど方法はないわけじゃないわ、大地＜

「あるの！だったら教えてディーヴァ！！」

ディーヴァの言葉に希望を見た蓮は大地と共に方法を聞く

＞……腰にあるバックル、Ｄバックルに強い衝撃を与えて！もしかしたらシステムが停止して意識が戻るかも…ただあと一人魔導師、騎士がいれば…＜

「私も協力しょう…ディーヴァ、若き騎士よ」

「り、リィンフォース、はや姉についていたはずだよね？それにどうやって此処に？」

リィンフォースがいることに驚く蓮はその背後にジェイダーに後一人が乗っているのに気づいた

「蓮、私も協力する、飛鳥を皆で助けるよ」

「フェイト姉まで…でも魔力とカートリッジがないんじゃ…」

「ジェイダーに乗れば魔力を使わずにすむから…それより動き出し

たみたいだ」

心配する蓮にそういうと、その視線の先には様子を伺うD飛鳥が見ている

「グルルルル…」

「そう見てえだな…まてあと一人魔導師か騎士が居ないと…ってまさか!?」

「若き騎士、蓮…今こそ私と一つに、ユニゾン・イン!」

「え!?」

蓮とリィンが光に包まれやがて収まりそこにいたのは…

金と蒼の双角に黄色から赤へと変わった瞳、各部装甲に金色の甲冑が追加され、マントに代わり黒い六枚の翼に金のラインが追加し展開した蓮、仮面騎士コルトの新たな姿を表した

その姿からは先程迄空に近かった魔力と体力が膨大に満ち溢れる

『…蓮、お前の中はすごく暖かい…まるで春先の陽射し…ん？』

＞ちょっと！私の許可なしに勝手な事しないでくれるかしら！＜

「二人とも…頭に、頭に響くからやめてよ」

Ｄメットの耳？当りを押さえる蓮は二人に懇願していると…

「…蓮、寝坊助（飛鳥）が来るぞ！！」

「ウガアアアアアア！」

獣のように襲いかかるＤ飛鳥の打撃をかわし、別な場所へと降り立つ二人

「ちっ！あんなに動き回られると狙いがつけられねぇ！」

「大兄！僕に任せて、リィンフォース！！」

『解った…動きを止めるには…蓮！これを使え（アンク風？）！

！』

蓮の目の前に三個の色違いのカートリッジが浮かび其を新たにリボリバーシリンダーがついた弓に装填しロードすると同時に音声が響く

『バインド！』

『フリージング！』

『ネット！』

新たなる弓、『夜天の醒弓』を構え引き絞り叫ぶ

「フリージング・ネット！！」

飛鳥に向け放たれた矢は途中拡散し手足に当たると同時に絡み付きながら凍りつく

「ガ、ガアアアア！？」

「大兄！んあんわあああん！！」

「蓮?!…んあんわわわああん!!」

何時の間にか意思疏通ができるようになった蓮と大地は距離を取ると構える

（…狙いは、寝坊助の腰にあるDシステム中枢を司る『Dバックル』…）

（…チャンスは一度切り…同じ箇所同時に衝撃を与える…一人の力じゃ無理でも二人なら…）

「「出来る!!」」

大地は銃を、蓮は弓を構え魔力を高め一点に、Dバックルに狙いを定め解き放つ

「アース・グラビトン!!」

「フリージング・ドラグーン!!」

飛鳥の腰にある「Dバックル」に向け高密度に集約された魔力が向かい凄まじい音と共に命中する

「ウガアアアアア！！――――――」

D飛鳥は雄叫びと共に凄まじい爆発と閃光に包まれ、煙が晴れるとその中心に膝まずくように踞っていた

「あ、飛鳥！」

「バカ野郎！まだ近づくんじゃねえ！！」

「え！？」

「ウガアアアアア！！」

大地の制止を聞かずジェイダーから降り不用意に近づいたフェイトの首を掴みD飛鳥は締め上げた

「…あ、飛鳥…」

「兄さん！やめてフェイト姉に何してるの！！」

「ちっ！このまま攻撃したら死が…テスタロッサに当たっちまう…ディーヴァ！話が違うじゃねえか！！」

＞わ、私だってこれ以外の方法は知らないのよ！＜

『待て、奴の様子がおかしい…』

リィンの言葉を聞いた蓮と大地は飛鳥とフェイトの様子を伺う

「あ、飛鳥…前にも言ったよね、何度でもあなたを人間だって言うって……」

「ウ、ウウウ……！」

首を締め上げられ息も絶え絶えになりながら飛鳥に必死に呼び掛けるフェイト

「母さんを…助けた…時だって…倒さ…れても…何度も…立ち…上がっ…てきたよね…」

「グウゥ、ウウウ！？」

「私は…信じて…る…Ｄシステムに…飛鳥は…」

「ウ…ウウウ…！？」

徐々にだが締め上げる力が弱まっていき、フェイトは飛鳥の瞳を真っ直ぐ見据えいい放った

「飛鳥は、Ｄシステムになんか絶対に負けない！私は飛鳥を信じる！！」

フェイトの言葉がＤ飛鳥の心に、意識に届いたかのように首から手を離し、黒く染まった目が赤色に戻り始めたが…

「ウガアアアアアア！！」

「兄さん！やめてえぇぇ！！」

「やめろ！バカ飛鳥アアアア！！」

（私は、飛鳥を信じる！）

蓮と大地の叫びが響き渡り、再び赤から黒く染まり固く目を瞑るフェイトに、その拳を降り下ろそうとした時だった

「フ、フェ…イト…ニ…ゲ…ロ」

「あ、飛鳥？意識が戻ったの！」

自らの右拳を左手で止めると其のままDバックルを掴むと

「ウ、ウオオオ！！」

無理やり引きちぎるとフェイトを突飛ばしたのと同時に飛鳥は爆発に包まれ暫くすると煙の中から人影が浮かびDメットだけを被った全裸の飛鳥が出てきた

「飛鳥！」

「兄さん！」

「ったく、世話が焼けるぜ…よっと！」

ふらつき倒れる寸前の飛鳥を大地は抱き抱え、心配そうに見るフ

エイトと蓮を伴いアースラへと向かった

「…俺が出る幕はなかったみたいだな…ドクターL、飛鳥と蓮の運命を狂わせた罪は重い…必ず見つけてやる」

少し離れた場所ではカウボーイハットを被った青年、杉崎鍵はそう呟くとサソードエクステンダーにまたがると何処へとなく走り出すのだった

アースラ内、メディカルルーム

あれからすぐに源三とプレシアの精密検査と治療を受けた飛鳥はベッドに寝かされ、その脇には蓮、大地、フェイト、ユーノ、なのは、クロノ、源三、プレシアの順に飛鳥が目を醒ますの待っていた

「う～」

「大兄、フェイト姉！兄さんが目を覚ましたよ！」

「飛鳥！大丈夫？どこも痛くない？ねえ飛鳥！！」

「待て。死が…テスタロッサ、病人をあまり揺らすんじゃねえ…」

ベッドから体を半分おこした飛鳥の肩を揺らし容態を聞くフェイトに意外な言葉が投げ掛けられた

「お前…誰だ？」

「え？」

第十二話　「金色の想い届く時、悪魔は人へと戻る」（後書き）

おまけ

Ｊ
「……」

ウーノ
「Ｊ……」

Ｊ
「ウーノ、私は無力だ…飛鳥の暴走を予測出来なかった！あの子を私は…」

鈍い音が響きウーノは音の元を見るとＪの拳がディスプレイを砕き血がにじみ出ていた

ウーノ
「Ｊ、暴走は…大地さん、蓮さん、フェイトさんのお蔭で止まりました…予測出来なかったのは私も同罪です…全てを一人で抱え込まないでください」

そう言いＪの手の傷を手当てをしながらウーノは彼の苦しみを共に背負うと心に誓ったのだった

第十三話　「失われた記憶（想い）」と新田屋敷の新たな住人達と語られるR計画

源三、遂に語る

第十三話　「失われた記憶（想い）」と新田屋敷の新たな住人達と語られるR計画

「お前…誰だ？」

目を覚ました飛鳥がフェイトに向け発した言葉…その言葉を聞き唖然とする一同

「飛鳥、私だよ…フェイト・テスタロッサ…」

「テスタ…ロッサ？……う、ううう？」

「…いかん！飛鳥、今日は疲れたじゃろ…ゆっくり休むといい」

「…う、うん…わかった、じいちゃん…」

頭を押さえながら源三の言葉に飛鳥は頷くとそのままベッドに横になると直ぐに眠りについた…しばらくして一同はメディカルルームから出た

「先生、飛鳥君の症状は…」

「プレシア君の考えた通りじゃ…おそらく飛鳥は一年前から現在までの記憶を失っている…」

「源三さんよお、どうやったら飛鳥の記憶は戻るんだ？」

大地の問いに源三は渋い顔をしたが、答えた…

「…時間を掛ければ記憶が戻るはず…だがいつ戻るかがわからん…」

「…可能性は零って訳じゃ無え訳か…（姉貴だったらなんとか出来そうだが今此所には居ねえ…）」

壁にもたれ掛かり考え込む大地を他所にフェイトは悲嘆にくれていた

「う、嘘だよね、母さん？飛鳥が記憶を…」

「しっかりしなさいフェイト、飛鳥君の記憶喪失は一時的なものよ」

「…そうじゃ良いこと思い付いたぞプレシア君！」

何か閃いた源三はプレシアに耳打ちするとどんどん良い笑顔にな

ってきた

「先生、ナイスアイデアです！フェイト今すぐ引っ越しをするわよ」

「え、何処に引っ越しするの母さん？」

「新しい引っ越し先はね……」

プレシアの言葉を聞きフェイトは驚きを隠せなかった

海鳴市郊外、新田屋敷

「う、俺の部屋の天井だ…」

目を擦りながらベッドから降りた飛鳥は何時もの様に食堂へ向かう途中在ることに気付いた

「…この部屋だけ何故女の子っぽいんだ…其より朝御飯食べないと死んじまう…」

食堂へ着くと既に蓮と源三は席に座っていた

「遅いぞ、飛鳥待ちくたびれたわい」

「おはよう、兄さん」

「おはよう。じいちゃん、蓮」

席に座ると朝食が運ばれ、そこに遅れてある人物達が姿を表す

「お、おはよう…飛鳥」

「じいちゃん…俺まだ寝ぼけているのか？何故こい…テスタロッサがいるんだ？」

「ああ、言わんかったかの…今日から儂らの屋敷に住む事になったプレシア・テスタロッサ君と娘のフェイト君だ仲良くするんじゃぞ飛鳥、蓮」

「よろしくね、飛鳥君、蓮君」

「よ、よろしくお願いします」

「……今日初めて聞いたよ、じいちゃん…とりあえずよろしく…テスタロッサさん」

互いに軽い自己紹介を終えた新田一家とテスタロッサ一家は食事を食べ終え、飛鳥と蓮は学校に行く準備をしていると…

「あ、飛鳥…蓮一緒に学校に行かない？」

少し戸惑いながら訪ねるフェイトに対し、飛鳥の答えはと言うと…

「いいぜ、テスタロッサ…蓮、準備いいか？」

「うん、わかった」

「兄さん、急がないとバスが行っちゃうよ」

「テスタロッサ、行くぞ！」

「え？　飛鳥！？」

フェイト手を掴みバス停迄駆けていく飛鳥達を見送る源三、プレ

シア、リニスに大地（暫く新田屋敷に留まる事を決めた）が話しかけてきた

「なあ、あれで良かったのか源三さんよお…」

「…フェイト君と飛鳥の絆を信じるしかない…」

「仕方ねぇな…其より聞きてぇ事がある…『R計画』ってなんだ？」

プレシアと源三は大地を書斎へと招き入れ扉の横にあるスイッチを押すと別な場所へと転移した

「此所は？」

「新田屋敷の地下じゃよ…そして儂の秘密研究所だ…」

そこは最新鋭の機材がすべてがオートメーション化され、サポートロボがあらゆる場所で稼働しそれらの稼働状況は各立体モニターに写し出されていた

備え付けのテーブルに三人が座って暫くするとハロ？っぽいのが

器用に様々な種類の飲み物を運んできた

「大地君は何をのみたいかの？」

「コーヒーを頼む…にしても凄い設備だな」

ミッドの科学水準を遥かに越えた技術（例えば数秒で世界中のネットワークを掌握する親指大の有機ＣＰＵ、外見や重さからは機械だと判断出来ない程の精巧な義肢、超ボルテッカに耐えうる新素材、クリスタルフィールド推進システム？）を見た大地に源三は話を切り出した

「…Ｒ計画、多目的医療用ナノマシンＤ、特殊災害、人災にあらゆる状況、環境に対応可能な特殊装着型デバイス『Ｄ・Ａ・Ｓ（デバイスアーマーシステム）』…これ等は人々を病や災害などから救う為に儂、シンヤ、マリア、プレシア女史、Ｊ君の五人で考え生み出した夢の計画だった…」

「だった？」

「Ｒ計画を儂等の夢を奴等によって歪められ悪魔の計画に代わり…協力を拒んだ儂等に対する見せしめにシンヤを…息子夫婦達が事故に偽装され…奴等に！」

怒気を波乱だ声が室内に響き渡ると同時に源三の手にあった湯呑みが鈍い音をたて握り潰され床に血が滴り落ちる

「せ、先生落ち着いてください…ごめんなさい大地君」

「別にいいぜ…まさか飛鳥達もその事故に巻き込まれたのか…」

「…病院に収容され直ぐにシンヤとマリアは亡くなりＩＣＵから飛鳥達は消え奴等、最高評議会の手で大都市殲滅用生体兵器『ＤｅＡＭＯＮ』に改造され…二年後に儂とＪ君が助け出した時は心が壊れる寸前だった…」

其処まで話終え、源三は　一息つく、聞き終えた大地には一つ疑問があった

「待て、何故二人が改造されなきゃいけねえんだ？」

『…それは私が答えよう南大地君』

目の前にスクリーンが現れ写し出されたその顔を見た大地は驚いた

「…ジェイル・スカリエッティ（何故だ、何故蓮と面影が似ているんだ？）」

『…飛鳥と蓮は私の妹…マリア・スカリエッティと新田シンヤとの間に生まれた子供だ…」

驚愕の真実がJ、ジェイル・スカリエッティの口から大地に明かされた瞬間だった

第十三話　「失われた記憶（想い）と新田屋敷の新たな住人達と語られるR計画」

おまけ

飛鳥
「なんとかバスに間に合ったな…蓮、テスタロッサ…どうしたテスタロッサ？」

フェイト
「飛鳥、痛いから手を離して…」

飛鳥
「ご、ごめん…痛かったよなテスタロッサ」

フェイト
「う、うん大丈夫…（飛鳥……）」

蓮
「……（フェイト姉、兄さんの事を頼んだよ…記憶が戻るまで僕がこの街の人達を守るから）」

蓮は知らない…飛鳥が街の人達を守る度にその人達から『化け物』言われていたことを…

第十四話　「驚愕の真実、心傷つく騎士の涙」（前書き）

蓮、試練の時！

第十四話　「驚愕の真実、心傷つく騎士の涙」

「飛鳥と蓮の伯父が…お前だと…」

『…南大地君…本題に戻ろう』

「あ、ああ…」

大地は唖然となりながらJ、ジェイルは語り始めた

『…奴等、最高評議会は医療用ナノマシンDを戦闘用特殊ナノマシンDへモデルチェンジし、新薬テストと称して集められた多くの大人と子供を含めた披検体に同時期に移植したが長期間定着せず大人、子供の順でDは体内から排出された…』

「その戦闘用特殊ナノマシンDに飛鳥と蓮は何故適合したんだ?」

『…適合した理由は私とマリアが持つアルハザード人の遺伝子だ…侵食する異物を逆に取り込み強化する特性因子に気付いた最高評議会はアルハザードの遺伝子をマリアから受け継ぐ子供…飛鳥と蓮に目をつけた…』

源三、Jことジェイルに協力を拒まれた最高評議会メンバーは見

せしめと確保（またの名を誘拐）の為だけに事故を起こし
瀕死の飛鳥と蓮を拐い戦闘用特殊ナノマシンDの移植に成功したのだった

「…Dは元々医療用ナノマシンだ、移植後に重大な傷は全てなおった、が有ることが起きた」

「…あることだと？」

『…リンカーコアがDに分解されてしまい、再構築ができず焦った奴等はD-メットを装着させDeAMON起動テストを強行した…』

「さっきからその、DeAMONって言葉…まさかあの時の飛鳥の姿が…」

『…そうだ、DeAMONとは、強力な自己再生機能、膨大な魔力、魔力変換資質を備えた生体兵器の名称だ……発動前は一般人に成り済ますことで都市中枢に潜り込み一度発動すれば、一人でクラナガンクラスの都市を二日で陥落可能な生体兵器……だが起動テストはうまくいかず私と先生が助け出す前日迄続けられていた…もっと早く見つけ出していれば…！』

スクリーン越しのジェイルの表情は助け出した時を思いだし怒り

と後悔に満ち溢れていた

「…これが儂とJ、ジェイル君が知っている本来のR計画と歪められたR計画の全てだ、大地君」

R計画、飛鳥と蓮にまつわる話を聞き終えた大地は冷めたコーヒーを飲み終えた時、背後から気配を感じ振り替える

「「「「……」」」」

「…ナン、仮面シスター、俺になにか言いたいことあるのか？」

「頼む、今聞いたことは誰にも特に飛鳥と蓮には黙っていてくれ」

「二人の姉として頼む！」

「…僕からもお願い」

「私からも一生のお願いするッス！」

「私からもお願いするわ」

トーレ、チンク、オットー、ウェンディ、プレシアの五人に頭を

下げ必死に頼み込まれ大地は困惑しながら

「……飛鳥と蓮が事実を受け止められる時迄は言わねえ、約束する」

源三、プレシア、ジェイル、仮面シスターズにそう約束し秘密研究所から書斎に戻り、屋敷に宛がわれた部屋に戻った

聖祥大付属小学校、屋上

「記憶喪失ですって!?」

「飛鳥くんが?でも何故?」

大きな声が屋上に響き回りにいた生徒達が発生元であるアリサ達に視線が集まる

「アリサちゃん、声が大きいよ…飛鳥君一年前からの記憶が無いの…」

「じゃあ私たちと初めて会った頃の記憶しかないって事!?」

「そうみたい、だって…」

皆から少し離れた場所で飛鳥は弁当を食べ終えると、まだ食べ終わらないなのは達を見て喋りかける

「高町、月村、ツンデ…バニングス、早く食べないと時間がなくなるぞ…」

「記憶喪失なら仕方ないわね…って誰がツンデレよ～～！コイツ絶対記憶喪失じゃないわよ！！」

「ア、アリサちゃん落ち着いて、記憶喪失だから仕方ないよ」

怒り出すアリサをすずかがなんとかなだめる姿を見ながらフェイトは蓮に尋ねた

「蓮、飛鳥って昔はあんな感じだったの？」

「…一年前になのは姉達と会ってからは良くなったんだけど…ごめん僕止めに行ってくる」

そう言うと、アリサ達の元に仲裁へと向かい、一人残されたフェイトは想いを巡らす

（何故一人でいようとするのかな…わたしが飛鳥の側にいてあげなきゃ駄目だよね）

そう結論を出しフェイトは飛鳥の側に向かうのだった

時刻は過ぎ放課後、なのは達と別れた蓮は何時ものように八神家に向かい、新たな家族リインフォースのささやかな歓迎会をしていた

「では、八神家の新しい家族、リインフォースに乾～杯～」

「あ、ありがとう…主はやてに守護騎士達…そして蓮」

はやてと蓮、守護騎士達に囲まれ若干頬を赤くしながら礼を言うリインフォースは嬉しそうだった

あの後、闇の書…夜天の書を空白の書に移しバグを完全消滅させリインフォースはこうして八神家の一員になった…が事件自体は解決したものの守護騎士達が起こした蒐集が問題視され　現在は観察と管理局への協力をすると言うことで決着はしたが、それに対し一部の人間は騒ぎ立てたが

ある人物からの闇の書、夜天の書に悪意ある改変をしたのが過去の管理局上層部だと言うデータが詳細に記されたのを送られた直後沈静化した

データには紫の蠍と二対の剣がデザインされた画像が示されていたそうだが…

「はや姉、足の方は大丈夫?…あの後石田先生に怒られていたよね」

「…うん、石田先生にメッチャ怒られた…足の方はリハビリをすれば自分の足で立てると言うとったよ」

「僕が、はや姉の車椅子を押してあげる事ができるのは後少しだけだね…」

押してあげることが出来なくなる事実に少し寂しそうな顔をする蓮は車椅子に乗ったはやてを見ていた

「けど、歩けるようなったら蓮ちゃんと一緒に学校に行けるから、うちは嬉しいんや」

「その前にリハビリをしっかりしないとね、はやてちゃん」

「そうです、主はやて」

「リハビリには蓮が付き合うんだろ」

「うん、はや姉が一人で立てるようになるまでリハビリに付き合うよ…シグ姉、シャマル姉、ヴィー姉……あれザフィ兄は?」

ザフィーラが居ないことに気付く蓮はシャマルに目を向けた瞬間、思いっきり反らされた

「シャマル姉、まさか…ザフィ兄に……」

「れ、蓮……」

足元がおぼつかず大型犬モードのザフィーラが蓮の足元に来ると同時に倒れ泡を吹きながらピクピクしていた

「…シャマル姉、ザフィ兄に何を食べさせたの……」

「れ、蓮君!?私は新作のケーキを食べさせただけよ!?」

取り出したのは毒々しい色をしたケーキ?と言う名の物体だった

「……シャマル姉…自分で味見してから皆に食べさせてって…僕は前にも言ったよね…」

背後から氷龍のオーラを浮かばせシャマルに詰め寄る蓮に怯え始める

＞蓮、悪いけど奴等が、劣化版Ｄが出たわ！＜

「！シャマル姉、話は後でするね…ディーヴァ！Ｄ－メット起動！！」

＞ＯＫ、蓮行くわよ＜

「変身！」

蓮の体内にある特殊ナノマシンＤがリンカーコアを再構築すると同時に服が弾け、体が大人サイズに変化と同時にＤ－Ａ－Ｓ（デバイスアーマーシステム）が展開装着されその姿を現す

鬼の角に黄色い瞳、蒼と黒の装甲を身に纏い

その背には漆黒の外套（マント）が翻る

夜天の主に名を授かりし若き騎士

それは未知の可能性を秘めた幼き馬の名

「仮面騎士コルト！！」

「蓮ちゃん、行ってらっしゃい！」

その声に蓮は頷き八神家の玄関からでると空へと飛翔し出現ポイントへと向かう

「た、助けてくれ！」

『キシャアアアア』

＞いけない！人がいるわ！＜

「く、アイス・バレット」

飛翔しながらコルトは双剣の柄を繋げ弓に変え構えワニ擬きの融合体にアイス・バレットを放つ

『ギガガアアア！？』

放たれたアイス・バレットを受けワニ擬きの融合体は凍傷になりもがき苦しむ

「ディーヴァ、ツインソード展開！」

弓を分離し双剣モードに換えるとワニ融合体に双剣を構え動きを伺う

『ギガガアアア！！』

「く！ガハア！！」

ワニ擬きの融合体はその強靭な尻尾双剣を構えるコルトに叩きつけ壁へと吹き飛ばした

＞蓮、しっかりしなさい…来るわよ！＜

勢い良く突進するワニ擬きの体当たりを受け意識を一瞬失いコルトはさらに壁にめり込まされるが双剣から魔力光が溢れだす

「…フリーズ・ブレイク！」

『ギガガアアア！？』

ゼロ距離射撃に吹き飛ばされると同時に足元が凍りつき、抜け出そうとするワニ擬きにコルトは双剣に凍気を青白い魔力を纏わせる

「ハアアアア…セヤアアアア！！」

一瞬で間合いを詰めると斬撃の嵐を繰り出しワニ擬きは防御する間もなく氷に包まれる

同時にミッド式が展開し最後の斬撃を抜き胴で切り払った

「…アブソリュート・スラッシュ」

声をあげる間もなくワニ擬きは砕けちりその後には…

「イ、イグアナだよね…ディーヴァ？」

＞そうね、蓮…＜

季節外れのイグアナがそこにいたがやがて逃げ出した、

背後に気配を感じコルトは振り替えると襲われた人が腰を抜かし震えていた

「あ、あの大丈夫ですか？けがはありませんか？」

手を差し出したが、振り払われ、次の瞬間コルトいや蓮は聞いてしまった

「ち、近寄るな！……化け物！！」

「え！？」

そう言い立ち上がると逃げ去っていく人をただ呆然と見るコルト

やがて雨が降り始め仮面に雨が伝う様はまるで黄色い瞳から涙が流れるように見えた

「…化け物…僕が……化け物…ウワアアアアアアアアアア！！！」

蓮、仮面騎士コルトの絶叫が辺りを雨が降りしきる中に響き渡った

第十四話　「驚愕の真実、心傷つく騎士の涙」（後書き）

おまけ

蓮
「ディーヴァ…僕は…やっぱり化け物なのかな？……」

ディーヴァ
＞違うわ！蓮は化け物じゃないわ！！＜

蓮
「でもさっきの人…僕を見て「化け物」って…兄さんも同じ思いをして…たん…だよね……」

雨の中、蓮はただ雨に打たれその場にたたずんでいた…

「う…う…うう」

微かにおしころした泣き声が聞こえていたが、やがて激しさを増した雨音にそれはかきけされた

新オリライダー及び仮面シスター設定（前書き）

現在まで出ているオリライダーと仮面シスターの設定です

新オリライダー及び仮面シスター設定

仮面ライダーコルト
（仮面騎士コルト）

もう一人の主人公、新田　蓮が変身するライダー。
【イメージ的にはＴＨＥ・ＦＩＲＳＴの二号にマスク部の複眼に鬼の角を生やし、クラッシャー更に鋭利に凶悪に、肩と腰にアーマーを追加しマントを着けたイメージ】

変身には飛鳥と同型（デザインや色が異なる）Ｄ－メットを頭部に装着することで体内の血液内にある特殊ナノマシン＞Ｄ＜が活性化。

同時に細分化されたリンカーコアの再構築、
同時展開したＤ－Ａ－Ｓ（デバイスアーマーシステム）を身体に装着することで誕生する。
基本スペック

身長１９０？
体重　８５？

パンチ力　２トン
キック力　６トン
百メートルを１０秒

（魔力放出時、８秒）

ジャンプ力
ひと飛び１２０メートル
（魔力放出時１９０メートル）

アブソリュート・スラッシュ（双剣の一撃一撃は弱いが蓮の成長次第で威力が上がるので計測不能）

フリージング・エクスキューション
（蓮の魔力変換資質（絶対零度）で生成した矢に魔力を集束したもの、その威力も蓮の成長次第である）

フリージング・ドラグーン

（上記と同じだか撃った瞬間矢が氷龍と化し相手を飲み込み瞬間凍結させ劣化版Ｄのみを破壊分離する）

欠点は各必殺技の使用が一回の変身につき三回（現状）迄が限度で全スペックが下がる

変身の度に服が破ける（大人サイズになるため）等は兄飛鳥と同

じである

コルトという名前は八神はやてが変身後の蓮の為に寝不足になりながら考えた名前である

（名前を考えて頂いた天使さん、ありがとうございます）

Ｄ－メット（正式名不明）

蓮の変身用デバイス。

一年前、＞Ｊ＜から送られてきた装着型特殊デバイス。　待機状態は仮面を模した色違いのペンダントで機能は飛鳥のと同じ。

女性人格ＡＩを搭載しており闘いに不慣れな蓮をサポートをする

愛称はディーヴァ

同型のＤ同様機能の殆んどがブラックボックス化しており未知の可能性を秘めている。

仮面シスター八号

蓮の護衛にＪに無断で来た感情が少し乏しい少女

主な任務は蓮の通う学校の上級生（肉食獣）から蓮と八神家（基

本的に蓮の大事な人達）を守る事

必殺技は「レイストーム」

仮面シスター十一号

Ｊから八号と共に護衛に付くように頼まれた語尾に「～ッス」をつけるのが特徴の女の子

八号と共に蓮と八神家の面々を八神家上空から見守っている

装備は「ライデイングボード」

必殺技は先端から放たれる三連魔力砲

仮面シスター二号

主に管理局内に潜む最高評議会及びドクターＬの所在と動向を潜入調査している

飛鳥や蓮に対して極度のブラコンで移動拠点『ファクトリー』の自室には等身大の飛鳥＆ａｍｐ；蓮の抱き枕、更にはＪの私室から

無断で飛鳥、蓮の画像データを持ち出している

四号談「これさえなければ尊敬できるお姉さま」

特殊装備「ライアーズマスク」は全く別人になることが可能である

武器は「ピアッシングネイル」

仮面シスター四号

闇の書、夜天の書の調査のため二号と共に無限書庫に潜入したシスターズ一の情報操作のスペシャリスト、性格は明るく甘ったるい言葉で場を穏やかにし、少しいたずら好きな一面をもつ

飛鳥と蓮がたがいに戦うのを防ぐため尽力した

特殊装備「シルバーカーテン」

この装備のお陰で管理局のセキュリティに気付かれることなく潜入でき、飛鳥の魔法の師ユーノ・スクライアと協力し夜天の書補修プログラム『空白の書』の発見に成功した

仮面ライダーD-BLAZE［ブレイズ］

仮面ライダーD、新田飛鳥が体内にある特殊ナノマシンDを進化させ生まれた新たな姿

進化作業中に心肺停止ししたがフェイトのナノマシン（無意識下での感覚共有）に反応した特殊ナノマシンDが再活性化し蘇生と同時に超進化した

進化後は装甲と魔力スラスター出力が［ランページフォーム］より強化され更に魔力変換資質［紅炎］に目覚める

【イメージ的にはTHE・FIRSTの一号のマスク部の複眼部の龍の角が二対に、クラッシャー更に鋭利に凶悪化、肩と胸、腕、脚部アーマーが厚く鋭利に全身の装甲内に魔力変換内蔵スラスター（フルバーニアンの様に開くイメージ）が付いている】

進化後のスペック

身長１９０？

体重　９０？

パンチ力　２．５トン

キック力　　６．５トン

百メートルを１０秒
（魔力放出時、８秒）

ジャンプ力

ひと飛び１２０メートル
（魔力放出時１９０メートル）

ブレイズ・ライダーパンチ
１０トン

ブレイズ・ライダーキック
２５トン

ブレイズ・フェニックス

全身の強化魔力スラスターを全開にし魔力変換資質［炎］を極限に高めミッド式魔方陣をブレイズ・ライダーキックで撃ち抜けると同時にその身を不死鳥へと変え相手を蹴り貫くと同時に劣化版Ｄのみ

を焼き尽くす必生の技

仮面ライダーＤ-ＢＬＡＥＺ最大の技であるが使用が一回の変身につき三回（Ａ-Ｓ時）迄が限度。　三回使用した後は全スペックがダウンする

更に変身の度に服が破ける（大人サイズになるため）弱点はいまだになおってはいない（笑）

尚ＢＬＡＺＥの名はこの時点では着いておらずある少女に名付けられる予定

夜天の騎士コルト

仮面騎士コルトがリインフォースとユニゾンした新たな姿

各部に金色の装甲と装飾、マントが六対の黒翼にそして双剣と弓に六連リボルバーシリンダーカートリッジが追加され大幅なパワーアップを遂げた

［基本スペックはほぼ同じの為記載は無し］

最大の特徴は各種カートリッジを［夜天の醒弓］のリボルバーに装填し放たれる特殊魔法攻撃

例（氷結、疾風、雷光）の組み合わせで「サンダーブリザード」等幅広い組み合わせが出来る

しかし長時間のユニゾンは蓮の体力と魔力（現時点）を著しく削るため八神はやての許可がなければ使用できない（初ユニゾンして兄飛鳥の暴走をとめた後、アースラでユニゾンアウトした瞬間倒れてしまったため）最大三十分（成長次第では延長可能）が限度である

新オリライダー及び仮面シスター設定（後書き）

おまけ
移動拠点「ファクトリー」

J専用工房

J
「か、完成だ、飛鳥のジェイダー用追加パーツと蓮の新たなマシンが……」

ここ数日不眠不休で作業をし完成したマシンに満足しながら倒れそうになるが誰かに抱き止められた

ウーノ
「J、危ないですよ…」

J
「…ありがとう、ウーノ…私は少しだけ眠らせて貰うよ…調整を頼んでもいいかな…」

ウーノ
「わかりました、J…今はゆっくり休んでください」

J

「あ、ああ…」

第十五話　「夜天の主の願い、忌まわしき過去と甦る赤い瞳」（前書き）

飛鳥復活！！

第十五話　「夜天の主の願い、忌まわしき過去と甦る赤い瞳」

八神家　玄関

「…蓮ちゃんどないしたんやろ…」

蓮を見送り二時間余りがたち未だに帰ってこない蓮にはやては不安を感じていた

「…主はやて、私が見てきましょうか…」

「ありがとうリイン、けどもう少し待とか…」

脳裏にあることが浮かんだが其れを頭から消しひたすら蓮を待った

「……ただいま…はや姉……」

変身を解かず雨に濡れたコルトが玄関に入ってきた…

「おかえり蓮ちゃん、なかなか戻ってこんから心配したんよ…蓮ちゃん…何かあったん?」

蓮の様子がおかしいのには気づいたが…

「だ、大丈夫だよ…はや姉、変身を解くからお風呂借りるね…それと…ただいま…」

バスルームに向かった蓮の背中が苦痛に満ち溢れているのを感じとり扉の前に来ると耳を宛て様子を伺うはやて

「シャワー使うなんて珍し……蓮ちゃん?」

八神家に泊まりに来たとき蓮はシャワーを使わない　その事を思いだしはやては耳を澄ます

「う…うう…ひくっ……うう…」

シャワーの水音に混じり聞こえてきたのは蓮の泣き声だった…
蓮の様子と行動、状況を頭の中で整理しある結論へとたどり着く

「蓮ちゃん!」

「……はや姉!?」

車椅子を降り這いずりながら扉を開け服が濡れるのを構わず浴室

に入ったはやてが見たもの…

変身を解きシャワーを頭から浴び顔を俯かせ泣いている蓮の姿だった

赤く腫らした目ではやてを見た瞬間、蓮は顔を背けた

「ど、どうしたの前にも言ったじゃないか…お風呂に…はや姉?」

「…蓮ちゃん、我慢しなくていい辛かったんなら思いっきり泣いていいんや…」

蓮を抱きしめそう呟いた瞬間、堰を切ったかのように泣きはじめた…

はやてはただ黙ってそうするしかなかった

八神家リビング

「……」

泣き疲れた眠ってしまった蓮をリインフォースと一緒にバスルームから連れ出し服を着せソファーで寝かせその髪を撫でながら考えていた

「なあリイン、蓮ちゃん…お兄さんと同じ言葉を言われたかもしれん…」

「…原因はそれしかありませんね…主はやて…」

あの様子からしてそう判断したはやてとリインは蓮を見る

泣き腫らし眠る顔に痛々しい程に二人は心を締め付けられ　蓮が受けた心の傷がどれ程のものかを悟った

（お兄さん、蓮ちゃんの心がすごく傷ついとるんや…早く、早く記憶を取り戻してください…）

今はやてが出来る事は飛鳥の記憶が早く戻るのを祈り、蓮が怖い夢を見ないように側にいてあげるしかなかった

翌日

新田屋敷　飛鳥部屋

「…今日はどうするかな…ＰＧゴッドジンライ組み立てでもするか…ん？」

静かに扉がノックされ飛鳥が扉を開くと

「あ、飛鳥、今日暇かな…」

綺麗にめかしこんだフェイトが少し顔を赤くして立っていた

「…まあ暇だけど…」

「だ、だったら私と街に　か、買い物に付き合ってくれないかな…駄目な…」

「いいぜ、少し着替えるから玄関で待っててくれ…テスタロッサ…」

「うん！待ってるね飛鳥！！」

そう言い部屋の扉が閉まると駆けていく足音が聞こえるのを聞き、クローゼットから服を取り出し着替え飛鳥はテスタロッサと海鳴市内へと向かった

ショッピングモール内　服屋

「ねえ、飛鳥…これ似合ってるかな？」

「……ん、ああ！似合ってるぜ…テスタロッサ」

半年前ジュエルシードの暴走地点から少し離れた場所にある服屋に二人は来ている

何故フェイトが来たのには理由があった

―飛鳥の記憶を呼び覚ますには君と馴染みがある場所を回るしかない―

―馴染みがある場所ですか？―

―例えば君と逢った場所等に行けば思い出す可能性がある…引き受けてく…―

―わかりました！私が飛鳥の記憶を必ず取り戻して見せます！！―

―で、では頼むフェイト君…―

という理由でフェイトは飛鳥を街まで連れ出し記憶を取り戻させようとしたのだが…

（…考えてみたらこれってデートだよね…ってなに考えてるの、今は飛鳥の記憶を取り戻すのを考えなきゃ…）

「…ッサ…テスタロッサ、気分でも悪いのか？…よっと！」

「あ、飛鳥！？」

あせるのも無理もない、飛鳥が自分のおでことフェイトのおでこをあわせ熱を計っていたのだ、当然顔も近い

「ん～熱は無いみたいだな…どうしたテスタロッサ？」

「…う～ん…」

「しっかりしろテスタロッサ！？やっぱ熱があったのか？」

店内でいきなり湯気を出しフェイトは倒れてしまい、迷惑がかかる前におんぶすると飛鳥は速やかに店を出ていくのだった

「ん～此所は…飛鳥！？」

しばらくして目を覚ましたフェイトはどういう状況か理解した

（私、飛鳥に背負われているの！？）

再びパニクるが今いる場所に見覚えがあった

此所は半年前二度と逢うことが出来ないと思っていたリニスと再び逢えた場所だった

「ん、気が付いたのか、テスタロッサ？」

「うん…」

夕方になり人もおらず此所にいるのは二人だけ、飛鳥はベンチにフェイトを降ろすと、飲み物を買ってくるといいその場から去る飛鳥

「……飛鳥の記憶戻らないのかな…ううん、絶対取り戻さなきゃ…」

手を握りしめ胸の前に置くとフェイトは小さく呟くのだった

「自販機、自販機…あった！テスタロッサは紅茶でいいか…グハァ！？」

自販機に硬貨を入れ買おうとした時だった

背後からなにかが風を切り背中を重い何かに殴られた飛鳥はまる

で紙屑のように吹き飛ばされた

「――――――――――！」

余りの激痛に声をあげられずに地面に転がる飛鳥は痛む身体をなんとか立ち上がらせる

「ぐ…ガハ！？」

胸からなにか込み上げ吐いたもの…それは自身の血だった

飛鳥は膝をつき自分に攻撃をした存在をその目で見た

巨大な体を強靭な殻で多い、その力の現れである大きく狂暴なまでな鋭さを備えた鋏を持つ巨大な蟹が其所にいた

「な、なん…なんだよ…この…化け蟹は…ゴホ…」

先ほど飛鳥を殴り？飛ばした鋏を開閉させながらにじりよる化け蟹？

「グハア…か、体が動かない…あの時みたいに死ぬのかよ……死ぬ？…あの時？…うう」

血を吐き身動きすらとれない飛鳥に、化け蟹の鋭く分厚い鋏が真上から降り下ろされた

（…あの時…なんだなにかって…）

意識と記憶が混乱する飛鳥に向け、巨大な鋏が降り下ろされた瞬間鈍い金属音が辺りに響きわたる

飛鳥の目の前に居たのは

「……？テ、テスタロッサ！？」

ザンバーで化け蟹の巨大な鋏を受け止め守るようにテスタロッサが立っていた

「…飛鳥には指一本も触れさせはしない…ハアアアア！！」

ザンバーに巨大な鋏が切り払われ後退する化け蟹に警戒しながら、フェイトは血だらけの飛鳥を抱き抱える

「…私が一緒にいればこんな怪我をさせなかったんだよね…ごめん、ごめんなさい飛鳥…」

フェイトは謝りながら飛鳥を安全な場所に下ろし治療と防御を同時に行う術式を展開すると化け蟹を見据え構える

「私があなたの相手になります…」

フェイトは化け蟹から飛鳥を守るため、これ以上飛鳥を傷つかせないためザンバーを右に奮い構えた

「や、やめてくれ…お前じゃ…フェイトじゃ無理…だ…何故名前読んでんだ、うう!?…あ、の時…父さん…母さん…の…時みたいに…」

傷だらけの飛鳥の脳裏にはあの日、両親が自分達を庇い瀕死の重傷を負いながらも守った光景が流れ、更にもう一つの光景が流れた

―戦闘用特殊ナノマシンD移植を開始する…ククク、君達はどんな喜び（悲鳴）を聞かせてくれるかな?無限の欲望に連なるガキ共―

重症を負い命の灯火が消えかける二人の身体に繋がったケーブル内に飛鳥には真紅、蓮には青白い液体が注入された瞬間、二人の顔、腕、からだ全体に無数の線が浮かび上がり…

―うあああああああああああああ!!―

二人の絶叫が手術室全体に響き渡った

―ハハハハ！　良い声です!!　子供の悲鳴ほど最高の音楽はありませんねえええ!アハハハハハハハハ―

両手を拡げ白衣を揺らしながら狂ったように笑う男の顔、ドクターRの顔を飛鳥が痛みに苦しみながら見ていたのに気付くと頭をわしづかんだ

―…生意気な目をしてますね～一つ教えてあげましょう…あなた方の親を事故に偽装して殺すように仕向けたのは私なんですよ……ガキ共、まあ知った所で無駄ですがね…これから心なんて不確定要素を破壊するのですから……―

どれぐらいの時がたったのだろう場面は移り変わり白い部屋に飛鳥と蓮はDメットを装着し大小様々なケーブルに繋がれ座らされていた…この一年半で二人の瞳からは光が消え始めていた

「必ず助けが来る」其だけを希望を胸に秘め互いを励ましていた

―D‐01、02準備完了しました―

―此れより1043回、DeAMON強制発動テストを開始する…カウント開始5秒前…―

秒読みが開始されカウント0に達した時、二人に常人なら一瞬で即死の電流が流され電光が二人を包み込んだ…が発動はせず管制室にいたドクターRは指示をした

―何故発動しない！！―

―なかなか死なないね～恐らくは人間としての心が残っているからだね～―

―ならば精神破壊措置をするかR―

この日、飛鳥と蓮の二人の心が壊れた…皮肉にもJ達が助け出される前日の事を飛鳥は思い出した

「く！？あんな巨大さで動きが素早い…」

化け蟹と戦うフェイトはサンダーレイジを放つも寸前でかわされ、巨大な鋏を右から左からとじわじわと追い詰められていた

（…ソニックフォームだったら倒せなくても、なのは達が来るま

での時間は稼げる…）

＞バリアジャケット・パージ＜

ソニックフォームに姿を変え化け蟹を右へ左へ様々動きで撹乱し固い甲殻の隙間、主に足などの間接部分にザンバーを当て確実にダメージを与える

「フェイトちゃん！」

「フェイト！」

「まさか！？ギガンテス級なのか！」

「ユーノ君、あの蟹がなにか知っているの？」

「以前、仮面シスター五号さんから聞いた事がある」

現場についたなのは達は化け蟹を見たユーノが発した「ギガンテス級」について聞いてみた

「ギガンテス級は劣化版Ｄが第二形態に進化した姿だよ、進化体よりも遥かに強く飛鳥や蓮の最大攻撃のダメージを与えないといけな

いんだ」

「そ、そんなに強いのかい、フェイト飛鳥はどうしたんだい？」

「…飛鳥はあの蟹に襲われて今…あ、飛鳥！？」

フェイトが見たもの、それは術式から出て、顔を俯かせ血だらけに足を引き摺りながら飛鳥が化け蟹に向かっていた

「酷い怪我をしているのに出てきちゃ駄目だよ！飛鳥君！！」

なのはの制止も虚しく飛鳥は化け蟹にその距離を詰めるとその正面に立った

「飛鳥！逃げて！！」

フェイトの叫びが響いた瞬間だった

「また、また奪うのか…」

「え？どうしたの飛鳥」

静かにそして怒りに満ちた言葉が響き、同時に飛鳥は待機状態のDを首からはずす

（父さん…母さん…の命を奪ったばかりか…俺と蓮の運命を…今度はなのはやフェイトたちを！）

「行くぞ！D！！……」

＞ああ、何時でも行けるぜ飛鳥！＜

同時にDメットが起動しそれを被り、飛鳥は右腕を真横に左腕をその下に構える

「……変……」

（父さん、母さん…）」

右腕を時計回りに動かし右斜め上で止め、左腕と平行になるように止め

「……んんっ……」

（俺はこの『化け物』の力を……人間『新田飛鳥』として…）

素早く右腕を腰に引き左腕を右斜め上にかざす

「……身……！！」

（…奴等の行いで普通の、当たり前の幸せを大事な人を奪われ悲しむ人達の為にこの力を使う！）

飛鳥の体内にある特殊ナノマシンＤが活性化と同時に化け蟹のダメージをも修復、服が弾け飛び大人化と同時にＤＡＳが展開装着し有機結合した瞬間炎が荒れ狂い消え、其所にいたのは

力強く四対に増えた龍の角、その瞳は赤く輝き鋭き牙を模したクラッシャー

肩、腕、胸、足は白と黒が混じった鋭く分厚い装甲を纏い身体には金のラインが走る、背中には金色の翼持つ者

辛い過去と記憶を取り戻し『化け物』と呼ばれても人々を守る仮面の戦士

「…仮面ライダーＤ！！」

新田飛鳥、仮面ライダーD…此所に復活

「…飛鳥…記憶が戻ったの……？」

恐る恐る聞いてくるフェイトに、飛鳥は優しく答えた

「フェイト…俺を守ってくれてありがとう…また今度買い物にいこうぜ…今は…」

こちらの様子を伺う化け蟹に対し
飛鳥、Dは拳を、フェイトもバルディッシュを構える

「「皆で化け蟹を倒してからだ（ぜ）！」」

第十五話　「夜天の主の願い、忌まわしき過去と甦る赤い瞳」（後書き）

おまけ

三号
「五月！速くしないと飛鳥が大変なことに…」

五号
「解ってる、だがこれを終わらせないと…」

五号の手元に有ったものそれはテストの回答用紙だった

三号
「後で私も手伝うから速く行くぞ五号！（すっかり先生が板についてきたな…）」

五号
「解った、では行くぞ三号！！」

二人は変身を終え飛鳥の元へと向かった

第十六話　「立ち上がれ蓮！二大ライダーと新たなる力！！」（前書き）

蓮復活！そして二大ライダーの新たなる力発動！！

第十六話　「立ち上がれ蓮！二大ライダーと新たなる力！！」

飛鳥、仮面ライダーDが復活する数分前

八神家　リビング

蓮は悪夢にうなされていた
暗闇の中、蓮いやコルトは無数の人達に囲まれていた

―来るな！化け物！！―

―バ、化け物だ！！―

耳を押さえうずくまる蓮の背後に誰かが姿を表し振り替える蓮

―はや姉！？―

―……やっぱり蓮ちゃんは化け物やったんよ、だから…うちらにもうちかずかんといて……さよなら―

「うあああ!?……何で此所に?お風呂にいたはずなのに」

汗だくになり起き上がろうとすると手に違和感を感じた蓮、手を見てみると

「…ん…起きたんか蓮ちゃん…」

蓮の手を包むように握ったまま寝ていたはやてが目を覚ました

「…はや姉…ずっと僕の手を!?」

「嫌やった?…そやホットミルク作るから一緒にのもか蓮ちゃん」

キッチンへと向かうはやてを見ながら夢の内容を思い出した蓮は不安になっていた

(……僕は…いつかはや姉から…バ…化け物って…)

「蓮ちゃん、お待ちどうさま熱いから飲むとき気をつけてな~」

「…ありがとうはや姉、いただきます」

ホットミルクを冷ましながら、静かなリビングには二人の息しか聞こえない

＞蓮、劣化版Ｄが現れたわ…＜

蓮の体がビクっと震え、それを見たはやては理解した

蓮が再び『化け物』と呼ばれる事を恐れている事を

＞聞いて蓮、今貴方のお兄さんが劣化版Ｄ進化形態ギガンテス級と戦っているわ…＜

ギガンテス級…聞きなれない言葉を聞いたはやてを気にせずディーヴァは続ける

＞…このままじゃ貴方のお兄さんも、なのはちゃん達も危ないわ…ギガンテス級はお兄さんと蓮二人の必殺技がないと倒せないわ＜

兄が飛鳥が戦っている…

それを聞いた蓮はある疑問が浮ぶ

何故兄は化け物と呼ばれ続けても戦う事ができるのか

「何で、何で兄さんは戦えるの！…化け物ってよばれても…僕は…
もう戦うのは嫌だよ…！」

「蓮ちゃん！」

はやての叫びと同時に乾いた音が響いた

顔を俯かせ肩を上下させるはやて、

蓮は何が起きたかを理解するのに数秒かかった

「…痛！はや姉…な…」

「…蓮ちゃん…化け物って痛みを感じるもんか？…違うやろ…」

顔を俯かせ静かに蓮に語りかけるはやて

「…蓮ちゃんのお兄さんは蓮ちゃん以上に言われ続けた…なのに今
まで戦う事が出来た…何故だと思う？」

そう言い顔をあげ蓮を見るはやて

「…そう呼ばれても、守りたいモノが…自分を犠牲にして迄守りた

い人たちがいたんや…」

「…その人達から信じて貰えなくてもその人達を信じる…蓮ちゃんのお兄さんは其を信じて戦っている…」

（と、父さんと同じ言葉!?）

はやての口から発せられた亡き父シンヤの言葉に驚く蓮にさらにはやては続けた

「…だからうちは、うちらは蓮ちゃんを人間だって信じる…世界を敵に回してもうちらが蓮ちゃんを人間だって声をあげて言う!」

はやての言葉を聞き、蓮の心の中で何かが芽生え始めた…

自分は何の為に戦うのか、

自分は何を守りたいのかを、

そして脳裏に浮かんだのは…

―蓮ちゃん―

自分に笑顔を向け微笑むはやて、そして守護騎士達が脳裏に浮かび、やがて蓮は目を開けた

「…はや姉、僕は…」

＞…『ライダーキック！！ぐあああああ！？』……どうしたのD？＜

＞＞どうしたのこうしたも無い！飛鳥が病み上がりなのにまた無茶しやがった！！＜＜

＞『くっそ～固えなぁ！来い！蟹野郎、蟹すきにして皆で食ってやる！！』＜

ディーヴァの回線を通し飛鳥が化け蟹の胴体にライダーキックを決めるも輝すら入らず苦戦してる様子だった

「ディーヴァ！行くよ！！」

蓮は立ち上がるとディーヴァをDメットへ変え被ろうとした時だった

「え？はや姉！？」

いきなり引っ張られ蓮の頬に柔らかいなにかが触れ離れた

「おまじないや…蓮ちゃん、お義兄さんを助けにいってあげて」

「うん、はや姉！」

玄関から勢いよく飛び出し庭に出ると右腕を左斜め上に、左腕を斜め下に構える

「……変……」

（…僕はもう迷わない……）

右腕を半時計回りに回し左腕と水平に構え

「……ン……」

（……僕を人間だって信じてくれる大切な人達がいる世界を……）

素早く右腕を腰におき、左腕を右斜め上に構え力ある言葉を紡いだ

「……身……！」

（大切な人達がいる世界を守る為にこの力を使う！）

特殊ナノマシンDの活性化と同時にリンカーコアが再構築、服が弾け大人化しDASが展開装着した瞬間吹雪が起こり晴れた先にいたのは…

鬼の角と黄色い瞳が目立つ仮面、各部に蒼と黒の装甲を纏い背中に漆黒の外套（マント）を翻し現れた戦士

夜天の主に名前を授かった騎士

その名は―

「仮面騎士コルト！」

蓮、仮面騎士コルトが此処に復活し、
同時に目の前に光と共になにかが姿を表した

青と黒のカラーリングに各部に接続プラグが目立つスズキのカタナに似たバイクが蓮の側まで来る

まるで乗れと言わんばかりにライトを点滅させる

＞蓮、Ｊから貴方に贈り物みたいよ…『…此れに乗って飛鳥の元に急ぐんだ…蓮』ちょっと割り込まないでよＪ＜

ディーヴァの会話にＪが割り込みをかけ飛鳥の元へ急ぐよう促した

「…ありがとう、ジェー伯父さん」

バイクに跨がると蓮は兄飛鳥がいる場所へと甲高いエンジンをあげ走りさった

ショピッングモール同結界内部

「くっそ～なんて固さだ…やべ！」

「！飛鳥下がって！…サンダースマッシャー！！」

爪が飛鳥に降り下ろされる寸前フェイトの砲撃魔法に阻まれ、距離を取る化け蟹

「砲撃したらかわされ、接近戦は殻が固過ぎて通らないね…」

「…それに動きを止めないと当たらないみたい…」

「師匠、ギガチェーンバインドで足を止めてくれ！！」

「わかった！アイギス、ギガチェーンバインド展開！！」

アイギスのギガチェーンバインドが化け蟹の足に絡まり動きを止めたのを見た飛鳥は構え空へ跳んだ

「ハアアアアア…」

金属音が響くと同時に全身のスラスターを展開、回転を始めやがて赤よりも紅い炎の螺旋（ドリル）と化した

「ウオオオ！ライダーキック！！」

真紅の螺旋（ドリル）と化した飛鳥が身動きの取れない化け蟹に向かったその時だった

「なに！？」

化け蟹はその爪を逆回転させたそれをライダーキックにぶっけ相殺し…

「ぐあああああああ！！」

渾身のライダーキックが破られ宙を舞う飛鳥に巨大な爪が迫った時だった

「飛鳥！逃げて！！…」

甲高いエンジン音が結界内に響き渡り化け蟹に向かって青白い光が爪に体当たりし吹き飛ばした

「大丈夫兄さん？」

「れ、蓮！？何でお前が此処に？」

青白い光の正体、それはバイクに跨がった蓮だった

「ま、待つッス…レンレン」

「…飛ばしすぎは交通法違反だよ…蓮」

そこに仮面シスター十一号、八号が現れ…

「この世界でギガンテス級と戦う事になるとはな…」

「ディエチがいたらなんとかなりそうだが、今は…」

三号、五号も現れ仮面シスターズが飛鳥、蓮の回りに集まる

「姉さんギガンテス級の動きを止めていられる時間が…」

「まだ諦めるな…高町なんとか…スターライトブレイカーはまだ撃てるか？」

「なのはです！五号さんあと一回だったら撃てます！」

それを確認した五号は飛鳥と蓮に向いた

「飛鳥、ジェイダーを呼べ」

「？…わかったジェイダー！！」

『ハイハ～イ、貴方の愛車で起きたときから寝るまでお側にいるジェイダー参上！』

陽気な声と同時にあらわれ、近くにあったカタナと融合し飛鳥の側まで来た

「…三号姉さん、ジェイダー壊れたみたいだ…」

「…そうだな、Ｊに調べて……」

じょ、冗談ですよ～其より先程Ｊから追加パッケージがインストールされました…まさか此を使う気ですか！？』

追加パッケージと聞き飛鳥が尋ねようとしたとき化け蟹がバインドを引きちぎりなのは達に襲いかかる

「危ない、ランブルデトネイター大乱舞！！」

何時もより多くのクナイが化け蟹の爪に当たりその巨体を揺らしながら化け蟹がなのは達から後退する

「く、ジェイダー！ぶっつけ本番で追加パッケージを使うぞ！」

『りょ、了解！追加パッケージ起動！！』

飛鳥がジェイダーに跨がると同時に光がジェイダーを包み現れた姿は…

弾丸いや、砲弾を模した装甲が前部を後部には巨大な筒型魔力エンジンを左右併せ十個装備された装甲に包まれた姿

これが対ギガンテス級パッケージ『G‐ユニット』仮面ライダーD、ジェイダーの新たなる力が生まれた瞬間だった

「すごいね、バイクって言うかロケットみたい…」

フェイトがジェイダーを見てそう呟き、飛鳥はそれに跨がり化け蟹を見た

「確かにロケットみたいだな…さて行ってくるか、師匠、フェイト援護を頼んだぜ！」

そう言うと十個のブースターに火がついた瞬間　凄まじい轟音と速度で突っ込んだ！

「うおおおりゃあああ！！」

その凄まじい加速に耐え飛鳥は体当たりをジャンプし在るときは急降下し体当たりを縦横無尽に繰り返し化け蟹に徐々にダメージを与える

「八号さん、僕のバイクにもパッケージはあるのかな？」

「…その子にはもう付いているよ…蓮」

其を確認すると蓮はバイクに語りかけた

「いきなりで悪いけど…君の力を貸してくれるかな？」

すると「いつでも良いですよ」と言わんばかりにライトを点滅したのを見た蓮は叫ぶ

「いくよ、パッケージ起動！！」

蓮の声と同時に前輪と後輪がボディーに収納されると同時に前後左右からパーツが転移しプラグに接続されると変形し装甲が各部に付き現れたのは…

白銀のボディに装甲をつけ、その頭にドリルが付いた一頭の馬が蓮を背中に乗せ姿を現した

「名前がないと不便だよね…ユニコーン、ゲイル・ユニコーンでいいかな?」

その名前を聞き嬉しそうに嘶くゲイル・ユニコーンを見て頬笑み、手綱を引き化け蟹に目を向けた

「行くよ!ユニコーン!!」

蓮の言葉を聞き駆け出すユニコーン、駆ける度に蹄から氷が弾け化け蟹に向かう様は騎士そのものだった

「兄さん!」

「俺に合わせろ!蓮!!」

その言葉に頷くと飛鳥と蓮は互いの新たな必殺技を繰り出すべく準備をする

「ジェイダー！ギガンティック・ナックル展開！！」

『ギガンティック・ナックル展開します！！』

ジェイダーの後部エンジンユニットが変形し巨大な手首が両肩に付くと魔力の腕が発生（イメージ的に言えばＩＳアーマーみたいな感じ？）する

「ユニコーン！」

ユニコーンの頭部が外れ展開し姿を現したのをは巨大なドリルが付いた重槍になり蓮の手に握られ構えタイミングを狙う

「…今だギガチェーンバインド×１０」

「今だ！高町なんとか！！」

「な・の・はです！三号さん！！全力全壊スターライトブレイカー！！」

ユーノのギガチェーンバインドで動きを止められた化け蟹に殲滅魔砲が直撃、更に…

「…行くよレイストーム…」

「食らえライドインパルス！！」

「姉の一撃を受けるがいい…ランブルデトネイター！！」

「私って技名が無いんッスよ…取り敢えずビーム発射！！」

「…フォトンランサー・ファランクスシフト！打ち砕けファイア！！」

仮面シスターズとフェイトの砲撃と近接魔法による攻撃と言う名のフルボッコで流石の化け蟹も堪らずフラフラとするが未だ終わりでなかった

「ハアアアアア…これが俺の拳…楓姉さん直伝レイソニック・ウェーブ！」

巨大な腕から繰り出される無数の拳は化け蟹の一点に集中的に叩

き込まれる

―ダメだよ、そんな力任せにジャブするだけじゃ…強く…しなやかに…そしてただ一点を狙って…―

「打つべし！うおおおりゃあああ！！」

楓姉さんの教えを反芻し撃ち込む飛鳥の耳に鈍く乾いた音が聞こえてきた

「今だ！ユニコーン、ハアアアアア！！」

嘶くと巨大なドリルが凄まじい風と音を上げ高速回転しその回りには竜巻が発生しドリルに其を纏わせ化け蟹に突撃する

「ハアアアアア、ゲイル・ブリザード！！」

ドリルが付いた重槍を突きだし化け蟹の甲羅に入った皹にめがけ突っ込むと同時に無数の穴が甲羅に穿たれその先から凍り付き化け蟹は悶える隙も与えなかった

「「此れで終わりだあああああ！スーパーノヴァアアアア！！」」

飛鳥の拳と蓮のドリルが交差し互いに化け蟹をすり抜けた瞬間
凄まじい爆音と共に化け蟹が弾けその体を散らした
「終わったな…蓮」
「うん、兄さん…なのは姉フェイト姉危ない！！」
爆散した破片がなのは達に向け落下しょうとした瞬間閃光が走り
落下物を消滅させた
「あ、あの閃光は一体なんだ？」
「…まさか…大兄かな…」
少し離れた場所では一台のトレーラー、いや上半身だけ変形させ
た迅雷が銃をおろし元の姿へと戻ると青年、南大地が姿を現した
「ふう、最後まで気を抜くなよ…戦いってのはこういう不測の事
態があるんだ…後で後悔したんじゃ遅いんだ…飛鳥、蓮、其を忘れ
るなよ」
迅雷に乗り新田屋敷に向かう大地

（立ち直ったみたいだな蓮、こっちのばあさんが何かしてくれたのかもな…飛鳥の場合は…ショック療法だったが…）

そう考えをまとめると今日もリニスの作るお菓子を楽しみにして帰る大地だった

「ふう…あ、あれ？」

化け蟹を倒し、追加パッケージを解除した瞬間体力がつき倒れそうになる飛鳥をフェイトが抱き止めた

「サンキュ、フェイト…俺重くないか」

「ぜ、全然重くないよ…飛鳥…（これからも私が支えていくから…）」

＞…飛鳥済まない…変身維持がもう限界だ…＜

「「え？」」

二人の声が合った瞬間、飛鳥は全裸になり其（？）をモロにフェイトは見てしまい結果…

「キ、キャアアアア！？」

「ま、待て？フェイト……グペポ！？」

平手打ちが顔に炸裂しギュルギュルと回転しながら地面に落ち気絶する飛鳥

「は！？ご、ごめんなさい飛鳥！」

気絶した飛鳥を懐抱しひたすら謝るフェイト

それを見て仮面シスターズと蓮達は苦笑いするしかなかったのだった

第十六話　「立ち上がれ蓮！二大ライダーと新たなる力！！」（後書き）

おまけ

「…さてフェイト何があったか聞かせてもらいましょうか？」

気絶した飛鳥を自室に運んだリニスは凄くいい笑顔でフェイトに質問した

「え…あの…その…実は…」

フェイトから事情を聞いたリニスは溜め息を付いた

「…やっぱり魔力コントロールがまだダメみたいですね…フェイト、飛鳥さんに魔力コントロールの訓練付けてあげてください」

「え？でも私じゃ…」

「…いいですね」

「う、うん解ったから怖い顔しないで」

リニスの言葉に頷き自室に戻るフェイトを見送り
大地にお菓子を振る舞うべく食堂へ向かうのだった

第十七話　『フェイト先生と飛鳥の訓練と飛鳥……』（前書き）

飛鳥が遂に…

第十七話　『フェイト先生と飛鳥の訓練と飛鳥……』

クリスマス迄あと数日となった海鳴市
その郊外にある新田屋敷では…

「…フェイト、今日はよろしく頼む」

「う、うん…じゃあ始めるよ」

飛鳥はフェイト指導のもと魔力コントロール訓練を始めていた

其から数十分後……

「…訓練は上手くいってるでしょうか」

「上手くいってもらわなきゃ困るわリニス…将来飛鳥君は私の義息子になるんだから」

プレシアの最後辺りの言葉を聞き流しトレーニング室の前に着くと、　扉の向こうから何やら声が聞こえてくる

「飛鳥…もう少し…もっと優しく…」

「こ、こうか？」

「…これが…飛鳥の…暖かい……」

「く、流石に…きついな…もうダメだ」

「…まだ我慢して…飛鳥…あと少し持たせて……」

「…もう無理っぽい……」

トレーニング室の中から漏れてくる声を聴いた次の瞬間二人は自動扉を魔法で思いっきり吹き飛ばした

「あ、飛鳥さん！エッチなのはいけないと思います！！」

「ま、まだソレはあなた達には早いわよ！！…って…え？」

二人が見たものそれは…

変身した飛鳥が赤い魔力スフィアを無数に展開し、それに触れているフェイトだった

「か、母さん、何でここに？」

「ま、不味い！フェイト、プレシアさんとリニスさんに障壁を！！」

そう言った次の瞬間、飛鳥のスフィアが弾けトレーニング室が炎に包まれた

「フェイト、飛鳥さん…あんな事言ったらいけません！」

現在黒こげになったトレーニング室？で二人を説教するリニス

スフィアが暴発寸前、フェイトが張った障壁のお蔭で無傷ですんだが、説教の原因が先ほどの会話だった

「…フェイト、そういう事は後十年経てば飛鳥君とやっていいわよ…」

「プ、プレシア！貴女自分の娘に何を言うんですか！」

「…そうやって大人の階段を登っていくのね…」

「プレシア！」

やや暴走気味なプレシアに盛大につっこむリニス、それを見ている飛鳥たちはというと…

「…なあ、フェイト何で俺達怒られてるんだっけ…」

「…私にも解らないよ…」

何故説教を受けているのか解らないようだった

「あ、あのさ、この前フェイトの前で変身解けちまって…」

「え、わ、私こそあの時殴ってごめんなさい…痛くなかった…？」

「ん？ああ大丈夫だフェイト…訓練どうする？」

「…今日は中止にしょうか…まだ母さんとリニスお話しているし…」

未だに「まだ早いです！」、「私は早く義母さんと呼ばれたいわ！」とお話？する二人、何故か回りに魔力が満ち始めていた

「う～ん…だったらいい場所があるぜ！」

「え？」

新田屋敷の裏山のとある場所に連れてこられたフェイトは驚いた

「こ、ここって何かが落ちた跡なの？」

「…此所は必殺技の特訓場なんだ…」

少しだけ開けた場所の回りを見ると
無数の穴が空いた巨大な岩、丸太が無数に吊り下げられた木々…更に地面には大小様々なクレーターが無数に穿たれていた

「…飛鳥の必殺技って何時も一人で考えてるの？」

「…じいちゃんと組み手した時、なのはのスターライトブレイカー（未完成）をライダーキックで相殺した時とか、殆んどが偶然で出来たやつをぶっつけ本番でやっているな…（楓姉さんに教えてもらった技は特別だな…）」

体を伸ばしながら答えるとフェイトは何か言いたそうな顔をしている

「体は大丈夫なの？…飛鳥が傷つく姿を私は見たくないよ…」

今まで飛鳥の必殺技を間近で見ていたフェイトは心配しているようだ

「…心配してくれてありがとなフェイト…じゃあ早速始めようぜ」

「うん、じゃあさっきみたいにスフィアを作ってみて」

飛鳥が構えるとその回りに無数の赤色のスフィアが浮かぶ

「飛鳥は必殺技を出すとき余計な魔力を放出してしまうから…この前…見たい…に…変身…が解けちゃうんだ…今日は魔力制御を体で覚えてね」

あの時（フェイトの前で全裸になった時）を思い出し顔を赤くするフェイトに対し、飛鳥は無数のスフィアを長時間安定化させる訓練に目を閉じて集中している

フェイトは数あるスフィアの一つに触れてみる

（これが飛鳥の魔力…まるでお日さまみたいにポカポカして気持ちいい…もっと触れていたいな…あの時みたいに…）

化け猫に襲われその場から離れる時飛鳥に抱き抱えられたのを思い出し、

クリスマス間近だと言うのに顔が熱くなるのを感じ手でパタパタと仰いだ

（なんか眠くなってきた…飛鳥の魔力ってポカポカしてて…それ

に…なんだか…凄…く落ち…着…く…）

やがてフェイトはスフィアを胸に抱き木に持たれるように眠ってしまった

「…なあフェイトそろそろって…眠ってるしかもスフィアを持ったまま…仕方ないか…D、スフィア消してくれ」

＞…嬢ちゃんが持っているのも消すぜ…アレ何で此れだけ消えないんだ？＜

「マジで消えないな…仕方無いか…フェイトを起こさないようにしてアソコに連れていくか」

優しくフェイトをいわゆる『お姫様抱っこ』をして立ち上がるとある場所へ向かった

「…うん、此所は？」

「…目ぇ覚めたかフェイト…」

フェイトは自分が飛鳥にお姫様抱っこをされているのに気づくと

顔を真っ赤にする

「あ、飛鳥？な、何で私抱っこされてるの！？おろ…」

「おし、時間だ…フェイト、アレ見てみなよ…」

飛鳥の目を向けた先に視線を移しフェイトの目に写ったものそれは…

夕焼け空と夜空の境目が綺麗に混ざりあい、太陽が海に沈む光景だった

「どうだ凄いだろフェイト…」

「うん、私初めて見たよ…綺麗だね…」

「此所は俺しか知らない秘密の場所なんだ…フェイトに見て貰いたくて今日連れてきたんだ…」

徐々に太陽が海に沈み空の色は様々な変化をしやがて夜色一色になった

やがてフェイトが口を開いた

「…何で私をこの場所に連れてきたの？」

「…こんな馬鹿のために訓練付き合ってくれた礼みたいな…んであの時暴走を…あ～も～！？何で上手く言えないんだ…」

空いた手で頭？を掻き悩む飛鳥、其れを見てフェイトはクスリと笑った

「…え～と、あの時暴走を止めてくれたお礼かな…もしフェイトが必死に呼び掛けてくれなかったら俺は本当の化け物に…」

「飛鳥は化け物なんかじゃないよ…だって…」

フェイトは飛鳥のゴツゴツとした体を触りながら、おもむろに胸に耳を当て優しく小さく語りかけた

「…こんなに暖かくて心臓の音が優しく聴こえて…一緒にいるとポカポカして暖かい気持ちになれるんだよ…だから飛鳥は化け物じゃない…」

その言葉を聞いた飛鳥もフェイトに胸の内に溜まっていた想いを言葉に変え語り始める

「……あの時、フェイトが居なかったらダメだった…一緒にいると

なんか…こうスゴく落ち着くんだ…だから…フェイト？」

いつの間にか飛鳥の腕の中で眠ってしまったフェイト

その穏やかな寝顔を見ながら飛鳥は呟いた

「…だから俺は…フェイトの事が好きだ…」

＞そういう事は本人が起きてる時に言えよ…飛鳥＜

「そうだなD…今日は畢が活きのいい大物の鯛を釣り上げたから、鯛尽くしの料理だってリニスさんが言ってたな…早く戻らないとフェイトが風邪ひいちまうからな…よ！」

飛鳥は木の上から飛ぶとフェイトを起こさないように屋敷へ優しく飛ぶ

帰りつくと、なぜか八神家とリニスがなにやら揉めていたが

「はやてさん、プレシアになんて物を渡すんですか…」

「これでフェイトちゃんとお兄さんの仲が深まるならええやないか」

「はや姉、リニスさん…喧嘩をするのはやめて～」

蓮が仲裁に入ったお蔭で収まり、その後目を覚ましたフェイトと八神家と夕食を賑やかに食べたのだった

ただ食事中、ずっとフェイトが顔を赤くしながらチラチラと飛鳥に視線を向け

それを見たプレシアとリニスが何故か「よし上手くいった！」的な笑顔を終始していたのを飛鳥は気付かなかった

第十七話　『フェイト先生と飛鳥の訓練と飛鳥……』（後書き）

おまけ

二号
「…此れで十四ヶ所…またハズレだわ…」

現在仮面シスター二号と四号は潜入した管理局関連施設の調査がまた空振り終わり深くため息をついた

四号
「二号お姉さま、最近各次元世界に出ていた劣化版Ｄの出現率が低下していて余りにも不自然な感じがしますわ…一度ファクトリーに戻ってＪお父様の指示を伺いませんか？」

二号
「そうね、一度ファクトリーに戻りましょうかクアットロ…久し振りに飛鳥と蓮の抱き枕を使って眠りたいわ…」

四号
（…お姉さま、最近ブラコンゲージが上がりまくっていますね…これさえなければ飛鳥達の所に行けたんですよ～）

第十八話　「携帯電話とそれぞれの進展……」（前書き）

飛鳥にハプニング、グレアムさん真相を知る

第十八話　「携帯電話とそれぞれの進展……」

次元空間内、移動拠点「ファクトリー」ブリーフィングルーム

「J、全員揃いました」

『ファクトリー』内ブリーフィングルームには各次元世界において劣化版Dへの対応をしていた仮面シスターズが一同に会し、其処にはグレアム提督の姿も見えた

皆の顔を一人一人見回してから、Jは口を開いた

「皆、久しぶりだね…積もる話もあるが…現在の劣化版D出現率低下、ドクターL、プロフェッサーR及び最高評議会の調査状況確認をしょう…」

J、仮面シスターズは今までの報告を始めた…そしてグレアムは真実を知る…クライド・ハラオウンの死の真相を……

12月22日、クリスマス迄あとわずかと迫った海鳴市は様々な光に彩られていた

そんななか、一人の少年が駅前で誰かと待ち合わせをしていた

「…皆遅いな、時間間違えたわけないよな？」

少年、新田飛鳥は時計を見ながら今だ来ない友人、なのは達が来るのを寒空のなか待つていた

あの化け蟹出現以降、劣化版Ｄの出現率が減り、安息な日々が続いていた

飛鳥にはひとつ不安があった…

（あれ以来白衣野郎が動きを見せていない…最近劣化版Ｄ出現も減っているけど油断は出来な…）

そう考えていると……

「飛鳥、遅れてごめん…あれ、なのは達は？」

「フェイト？なのは達と一緒じゃないのか？」

「え？先にいくってなのは達が言ってたから一緒にいるものだと…」

首をかしげるフェイトを見て、どうやら行き違いになったみたいだと感じた飛鳥とフェイトはやむ無く目的地へ歩く

しかしその姿を見つめる四つの影に二人は気づかなかった

某携帯ＳＨＯＰ

「携帯って色んな機種があるんだね」

「なあこれなんかフェイトにぴったりじゃないか？」

悩むフェイトに飛鳥が差し出したのは、黒を基調とした金色のラインが入った携帯

それをじっとフェイトは見ていた

「なんかライダーの色に似ているね…」

「言われてみればそうだなぁ…違うのにするか？」

「ううん…これでいい、手続きしてくるね」

そのまま手続きに向かうフェイトを見送り、店の外に目を向けた飛鳥の視界になにかが見えた

「……蓮の姿が見えた気が……」

店の外では…

「バカ！あと少しで飛鳥に気付かれる所だったじゃない！！」

「ご、ごめんアリサ姉…」

「フェイトちゃん達が店を出たよ」

「バレないかな…飛鳥君勘が鋭いから…」

飛鳥とフェイトを尾行していた人物とは　なのは達と蓮だった

何故尾行する事になったかと言うと…

―ねえ、なのは…あんたの目から見て飛鳥とフェイトはお互い意識してるって見えるわよね―

―う～ん言われてみればそうだね、アリサちゃん―

―だけどお互いこういうの苦手みたい―

―…あ～あもう！！二人の態度見てるとイライラするのよ！…皆少し耳を―

―面白い話をしているわねあなた達―

―誰！？……ってプレ…

―いえ私はレディーＰ！プレシア・テスタロッサ、フェイトの母ではないわ―

突然表れた？レディＰも参加し話し合いが行われ作戦名『二人っきりにさせて距離を縮めよう』（立案者アリサ＆ａｍｐ；レディＰ）が現在進行していたのだった（蓮とユーノは強制参加）

「…フェイト、気付いてるか？」

「うん…多分なのは達だね…」

ちらりと後ろを見るとバレバレな尾行をする四人？を見てため息をつく飛鳥

「なにやってるんだあいつ等…蓮と師匠も……」

「…どうしょうか？」

すると飛鳥はいきなりフェイトの手をつかみ走り出す

「え、ち、ちょっと飛鳥！？」

「絶対手を離すなよ！」

人混みのなかを走る飛鳥とフェイト、

それを追いかけるなのは達だったが、二人を見失い遠くからアリサの悔しがる声が聞こえたが気にせず走ったのだった

しばらく走りやっと巻いたのを確認しとりあえず近くにあったベンチに座った飛鳥とフェイト

だがフェイトの様子がおかしい

「あ、あの…手…」

「あ、ああ、悪い…痛かった…って前にもこんなことあったな…」

「クス…そうだね」

繋いでいた手を離し、それを思いだし笑う飛鳥につられフェイトも笑いだす

しばらくして落ち着くとフェイトが口を開いた

「…ねぇ飛鳥って夢とかあるかな…」

「…夢か…夢ならある…」

「じ、じゃあ教えてくれるかな…飛鳥の夢」

顔をぐいと近付け飛鳥の顔をみるフェイトに……

「笑わないで聞いてくれよ…俺の夢は…科学者になりたいんだ」

「科学者？どうしてなの飛鳥」

少し黙り混みゆっくりと話し始めた

「父さんが科学者って知ってたっけ？」

「うん、母さんから科学は命を救うために使うべきだと言っていた人だって聞いた…」

「…いっぱい勉強して父さんみたいに科学を、命を救うための科学者になりたいんだ…」

飛鳥の真っ直ぐで純粋に夢を語るその瞳を見た瞬間、フェイトの胸が高鳴った

（…飛鳥の目を見ているとすごくドキドキする…そうか…私は…）

飛鳥と再会してから今日に至るまで感じていたモノ…

飛鳥が暴走したと聞いた時何も考えずその場へと赴き体を張って止め、

記憶を失った飛鳥を守った時等々…

その都度、何故か解らない感情に突き動かされ行動していたフェイトはやがて一つの結論にたどり着いく

（……私は飛鳥の事が……）

「…～い…って…聞こえてないな…久しぶりに、えい！」

「ふぅみゅうう！？」

フェイトの両頬を指でつまむと横へと伸ばし始める飛鳥

「ふゃしゅはあ？らあめへ！？」

「……柔らかいな、それによく延びるし…最高だ……」

しばらくそれを繰り返し手を離すと…

「……ひどい、ひどいよ飛鳥……」

涙目になり軽く飛鳥をにらみながらポカポカと胸や頭を軽く殴る

フェイト

「あ、ああ、な、泣くなって!?痛い?…やめろったら!?」

あわてふためきながら必死に飛鳥は殴るのを止めさせるべく腕をつかんだときだった

「あ?」

「え?」

体整が崩れベンチから落ちそうになるフェイトを守るように目を瞑り飛鳥は体で受け止める

唇に何か柔らかく暖かいものが触れたのを感じ目を開け視界に入ったのは…

「「……」」

赤い瞳に、金色の髪…見慣れた顔……

何時も自分の隣に居た少女、フェイトの顔だった

同時刻

移動拠点『ファクトリー』
同　ブリーフィングルーム

「…クアットロの算出したデータ通りならばこの数年、いや十年以内にに奴等が…最高評議会が本格的な活動を開始するね…」

「あの、少しお知らせしたいことが…」

一通り意見交換したとき、ウーノがあるデータを空間スクリーンに出す

それを見たＪの表情が怒りに染まっていく

「戦闘機人計画…まだ続けられていたのか……」

「はい、ですが最近になって管理局による捜索が行われたみたいです」

データによると管理局の戦闘機人関連の事件を追う部隊に違法研究所は摘発され、

その場にいた二人の子供らは部隊員の養子になったらしい

「その二人はまさか？」

「……間違いない、あの時叩き潰した筈の戦闘機人計画を元に誰かが完成させたんだ…」

二人の子供と養子として引き取った人物の写真と詳細なデータに目を通すとＪは安堵した表情になる

「…だが二人ともいい人達の元に養子になったようだ…ゲンヤ・ナカジマ、クイント・ナカジマか…」

「その子達には幸せになって貰いたいですね…」

「そうね……Ｊ、何故グレアム提督が此処に？」

ドゥーエの視線の先にはグレアムとその使い魔ロッテ、アリアを伴って椅子に座っていた

「…君達は何故私達を此処に連れてきたのかね？」

「…貴方も分かっている筈だ…私達は管理局の闇、最高評議会と

戦っている…」

Jは今まで最高評議会が関与したと様々な事件、魔力炉心ヒュードラ暴走事故、各次元世界における違法研究、そして……

「…十一年前の『闇の書』移送時の事故はクライド・ハラオウンの殺害を偽装するために仕組まれたものだった」

「！な、クライドが殺された？」

「…彼は独自に管理局に潜む闇、最高評議会を調べ『ある計画』を知ってしまった…」

「ある計画？それはいったい……」

「…遥か昔に失った己の体を再び得る計画……R計画（リジェネレイト）、すべての違法研究はこの為だけに行われ数多くの人々が犠牲になった…その事実をしってしまったが為、クライド君は事故に偽装されドクターLに殺されてしまったんだ……」

その真実を聞いたグレアム、アリア、ロッテは声を出せなかった

第十八話　「携帯電話とそれぞれの進展……」（後書き）

オマケ

なのは
「ユーノ君、アリサちゃん達とはぐれちゃった…」

ユーノ
「蓮の姿もないみたいだ…どうしょうかなのは？」

なのは
「…ユーノ君、少し寄り道しない？」

ユーノ
「別にいいけど…」

なのは
「じゃあ行こう、ユーノ君！」

そう言うとなのははユーノの手を強引に引きそのまま店を廻るのだった

各種登場用語など（前書き）

本編登場用語など

各種登場用語など

戦闘用特殊ナノマシン【D】

新田飛鳥、蓮の血液および骨髄内に存在する戦闘用特殊ナノマシンD

新田シンヤ、マリア夫婦が開発した最新の医療技術であり体への負担なくありとあらゆる部位への治療と移植臓器又は人工臓器の拒絶反応を完全に無くし、身体機能を万全にする画期的な技術だった

しかしその技術に目を付けた最高評議会が戦闘用特殊ナノマシンへとモデルチェンジした結果

肉体の瞬間再生及び（切断部位同士を接触再生も可能）常人の数十倍の力を得ることが可能となった

（注、D活性化時のみの効果であり不活性時は擦り傷が一瞬でなおる程度）

そのせいかは解らないがリンカーコア迄も細分化しD内部に保存され活性化時のみリンカーコアは現れる結果となってしまった

元となった医療用特殊ナノマシンDには未知の可能性（例えば同型のD移植者との無意識下での精神リンク、進化等）を秘めている

デバイス・アーマー・システム
ＤＡＳ

デバイスアーマーシステム略称ＤＡＳ、

新田シンヤ、Ｊが共同開発した多目的レスキュー用装着型デバイスであり状況に応じて仕様変更が可能で　更に魔力変換資質を持たない低ランクの魔導師でも起動可能という利点がある

飛鳥達のＤＡＳ及びＤ‐メットはドクターＬ、プロフェッサーＲが戦闘用に開発したものであり二人にしか起動は出来ない。

仮面シスターズ

謎の男、Ｊの娘達で構成され主に各次元世界に現れる『劣化版Ｄ』と飛鳥達のサポート兼護衛を担当しているが、それ以上に家族として見守る

現在、四人が飛鳥達の護衛兼サポートをしている

劣化版Ｄ

オリジナルDの製造失敗品

単体では長時間存在できないが原住生物を取り込み強化進化し怪人体、更に第二段階へいくと巨大化しギガンテス級へと進化する

ギガンテス級はまれに現れるが攻撃、防御が数倍以上に跳ね上がり対ギガンテス級装備『G‐ユニット』を使わないと決定打を与えることが出来ない

（過去にギガンテス級と戦って、三人がかりでなんとか倒せたがシスターズにも怪我人が出た）

ファクトリー

J、仮面シスターズの移動拠点兼［家］

次元空間内を自由に行き来出来る万能拠点

飛鳥達のライダーマシン開発整備、更に広大な居住区迄備えている

R（レスキュー）計画

新田源三、新田夫婦、プレシア、Jの五人が考え産み出した計画

医療用特殊ナノマシンD、多目的レスキュー用デバイスの開発…
これらは人々を守り、更には命を救うために産み出された夢の計画
だった

R計画（リジェネレイト）

最高評議会メンバーが次元世界掌握の為の大都市殲滅用生体兵器
『DeAMON』を生み出す為の計画

高魔力、瞬間再生、魔力変換資質等の要求され其れをクリアする
事ができず頓挫寸前にR計画の技術とアルハザードの遺伝子を受け
継ぐ二人の子供…に戦闘用特殊ナノマシンDを移植し成功するもD
は起動せず

更にJと源三により二人を奪還、データベース、ジーンマップを
破壊され計画は完全に消滅したのだが……

DeAMON

飛鳥と蓮の変身後の姿、その正体は大都市殲滅用生体兵器であり、
一体でクラナガンクラスの都市を二日で陥落させるスペックを誇る

しかし本当の目的は別にある……

新田屋敷

海鳴市近郊にある古い作りの屋敷で新田源三、孫の飛鳥、蓮、リニス達が住んでいる

屋敷の地下には源三の秘密研究所があり最新鋭の医療設備、各次元世界における劣化版Ｄ出現を関知する次元センサーも置かれている

屋敷には幾重にも展開された高密度の結界とセキュリティ、侵入者にたいしては強制転移システムが発動する

（家族が認めたものだったら普通に入れる）

新田第二研究所

月の裏側にある第二の新田研究所

そこではある遺跡を現在源三とワークロイドが発掘中で　緑色の巨大な原石を見つけ出す

現在の調査では未知の無限情報サーキットである事が判明した

ジェイダーハウス

飛鳥が特殊ユニゾンデバイス【ジェイダー】の為に作った家…バスルームからベッド、キッチン、リビング、更には薄型テレビまである贅沢な仕様

ジェイダー？

ジェイダーがＳＵＺＵＫＩのＫＡＴＡＮＡとユニゾンし完成する仮面ライダーＤ専用マシン

各種登場用語など（後書き）

多分追加するかも……

第十九話　「クリスマス会とサプライズ…ようこそ光太郎さんファミリーＩＮ新宿」

今回、光太郎さんファミリー登場！

第十九話　「クリスマス会とサプライズ…ようこそ光太郎さんファミリーＩＮ新田屋敷」

１２月２４日、クリスマスイブ早朝

新田屋敷の近くに光が溢れ、やがて光が収まり若い男女と子供がその場に現れた

青年は辺りを見回しながら呟いた

「ここが飛鳥君達の世界か、あまり変わらないなあ」

「光太郎さん、早く新田さんのお家に行きましょうよ！」

青年、南光太郎にそう促すのは、超元気と言う言葉が似合う少女『スバル・ナカジマ』そして……

「ここに飛鳥ちゃん、蓮ちゃんがいるんだね…もう一人のちっこいのも……ジュルリ……」

と涎を啜りながら会うのを楽しみ？にしている女の子、畢・ナカジマ

三人は飛鳥に必殺技を教えてくれたお礼にと源三から招待状が届いたのだ

「リニスさんの作る和菓子って美味しいんだ～あたしすごく楽しみ！」

「アハハ、じゃ行こうかスバルちゃん、畢」

リニス特製和菓子の味を思いだし笑顔になるスバルに苦笑しながら、光太郎に促され新田屋敷へと三人はむかうのだった

同時刻

新田屋敷、同廊下

「あ…」

「お、おはようフェイ……」

「／／／／／／／／！」

声をかけらるとビクッと体を震わせ、顔を真っ赤にして逃げるフェイトを見て飛鳥はため息を付いた

「ハアアアア～…昨日のアレからずっと避けられてる…」

事故とはいえキスしてしまった直後、フェイトは飛鳥を残して逃げるようにその場から去った

…屋敷に戻ってからも顔をあわせようとすると逃げられる…この繰り返しが昨日から続いていた

「大地兄、こう言う場合どうしたらいいんだ?」

「……取り敢えず話を聞かせろ飛鳥、はしょり過ぎて分からねえ」

現在、新田屋敷に滞在中の『頼れる大人な兄貴』南大地に飛鳥は詳しく説明する

それを聞き終えると少し考えしばらくして大地は口を開いた

「飛鳥…死にが、テスタロッサの事好きか?」

「……好きだ…」

「だったら答えは決まっている筈だ…当たって砕ける覚悟で逝ってこい!（骨は拾ってやる飛鳥）」

「…！…ありがとう大地兄！」

そう言うと部屋から飛び出す飛鳥を見送る大地に背後から声がかけられる

「…すいません、飛鳥さんのために相談に乗ってくれて…」

「…構わねえよ、其より解ってるなリニス……」

「はい、お砂糖たっぷりのお菓子を用意しておきますね」

ニコリと笑うとお菓子の用意をする為リニスは去り、部屋に一人残された大地は呟いた

「…うまくいくといいな飛鳥」

と少しだけ笑みをうかべ上手くいくこと祈るのだった

時間はこれより少し遡り…フェイト私室では

「ううう～飛鳥の顔がみれないよ…私…飛鳥とキ、キス…はううう」

ベッドの上を枕で顔を隠しながら寝転び縦横無尽にゴロゴロ動き回る

その姿は普段のフェイトからは想像できないものだった

「フェイト、どうかしたの？」

「か、母さん？何時から其所に！？」

「…飛鳥君の名前とキス……って辺りかしらね」

「は、はううう……」

枕で顔を隠すも湯気みたいなものが立ち上るんではないかと思うぐらい顔が熱くなるのを感じるフェイト

実はミツキさんからの写真（盗撮写真で勿論焼き増し済み）で詳細を把握しているプレシアは知らないふりをして聞いてくる

「一体何があったのフェイト、母さんに話してみて？」

「う、うん…実は……」

話を聞き終えたプレシアはフェイトの瞳を真っ直ぐに見ながら尋ねた

「……フェイト、飛鳥君の事どう思っているの？」

「……好きだよ、私…飛鳥の事…」

顔を真っ赤にし頭から湯気みたいなものを出しながら答え、それを聞いたプレシアは頭を撫でた

「フェイト、人を好きになる事は悪いことじゃないわ…けど飛鳥君から逃げるのはダメよ」

言葉を区切り優しく諭すようにフェイトに柔らかく語りかけた

「…飛鳥君も恥ずかしい筈なのに声を掛けてきた…だったらフェイトもそれに答えなきゃいけないわ…」

「…私、飛鳥探してくる！」

ガバッとベッドから起き上がり立つとパタパタと足音を立て　部屋からでるのを見送るとプレシアは溜め息をついた

「…フェイトと飛鳥君を見てるとシンヤ君とマリアの時を思い出すわね…」

―プレシア～どうしょう～シンヤさんに嫌われたかも～―

―…落ち着きなさいマリア…で、今度はなにやったの？―

―…プレシアに教えて貰った通り裸エプロンで迫ったらシンヤさん、鼻血出して倒れちゃったの…それ以来顔も会わせてくれない…ううう嫌われちゃったよ～―

―……マリア、シンヤ君にそれは刺激が強すぎるわ…やるなら白Ｙシャツ＋黒オーバーニーからよ…―

―！ありがとうプレシア～早速やってみるね♪―

「…二人がくつつく迄苦労したわね…」

昔の事を思い出しながら苦笑するのだった

新田屋敷門前

「ここが新田さんの屋敷か、流石に大きいなあ」

南一家は現在新田屋敷の門前につき、その大きさに驚いていると…

「あれ？光太郎兄さんだよね…其れに畢ちゃんと…」

「はじめまして！あたしスバル・ナカジマって言います！！」

「あ、はじめましてスバルさん、新田蓮です」

リハビリを終え八神家の皆を連れ帰ってきた蓮に元気よく挨拶するスバルに驚きながら蓮と八神家の皆も挨拶する

門を抜け屋敷内に行く道中…

「あの～うちの顔に何かついとりますか？」

「い、いえ何でもありません！（八神部隊長って小さい頃はこんなにかわいかったんだ）」

スバルとはやてのこういうやり取りが行われ更に…

「……ちっこいのどこ居るかな…ジュルリ」

同時刻　飛鳥自室

ビクウゥ！

「ま、まさか…ひ、畢ちゃんが来たんですか！？」

畢ちゃんセンサー（？）が働いたのか、身の危険を感じ震えまくりなジェイダーだった

そんな感じで屋敷の門をくぐり居間に通された南一家と八神家の面々は互いに紹介をしていると…

「はあ、何処にいったんだろフェイト…あれ八神？其れに光太郎兄さんまで！？」

「飛鳥君、久しぶりだね…何か取り込み中みたいだけどどうかしたのかな？」

飛鳥の様子を見た光太郎に言われ、

「そうだ光太郎兄さん、フェイトみなかった？」

「テスタロッサさん？う～ん僕は見てないな～」

それを聞くな否やガックリと肩を落としうなだれる飛鳥

「に、兄さんしっかりしてよ…」

その光景を見た、八神家の皆の反応はというと……

「またフェイトちゃんとなんかあったんやな～」

「あれが蓮の兄か…ただ者ではないな…」

「フフ、蓮君お兄さんと仲がいいのね」

「……出来るな……」

様々な言葉が出るなか一人、視線で人を殺すような目で飛鳥を見る人物、ヴィータ

「ふん、いい気味だ…コルトの偽物」

「なんか言ったか…ハンマー・ド・ち・び!!」

ブチッ……

何かが切れる音と同時にいきなりアイゼンを飛鳥めがけ降りおろした

「うわぁ!あぶねえ!?」

「避けるな!」

風切り音を鳴らしながら降り下ろされるアイゼンを必死にかわす飛鳥、それを鬼のような顔で襲いかかるヴィータ…赤鬼だった

「いい加減当たれえぇぇ！」

「誰が当たるかあああ！ハンマードちび！！」

「私を赤鬼でちんちくりんで一生背が伸びないって言うなあああ！？」

「言ってねえだろ！ハンマードちび！！」

……結局、二人の大乱闘を止めたのは、新田家最強家政婦（？）リニスさんのサンダーセイバーで鎮圧されたのだった

「……飛鳥さんにヴィータさん…室内で暴れるのはいけません！今日はお客様を招いての食事会だと言うのに……」

「「ご、ごめんなさい…」」

二人は仲良く頭にコブを作り床に正座し、リニスさんの説教を受けていると、

「ヴィータ、お兄さんの事なると随分ムキになるんやな…もしかして…」

なにやらにやつくはやて…タヌキの耳と尻尾が見え隠れしているのは気のせいだろう

「ち、違う！あたしはこんな奴の事なんか…」

「…取り敢えず、食事会の用意をしますから二人は部屋へ戻ってください…」

食事会の用意をするため二人の説教をやめ厨房へと向かおうとすると…

「リニスさん、僕も少しだけお手伝いしますよ」

「え、ですがお客様の手を借りるわけには…」

「見たところ、かなりの量が必要になりそうですよ…」

光太郎の視線の先に居たのは…

「早くクリスマス会はじまらないかな♪」

「……そうだねお母さん…ジュルリ…」

……『あたし達の胃袋は∞大♪』な二人だった

それを見たリニスはすべてを悟ると、何度も謝りながら光太郎と共に厨房へと急ぐのだった

新田屋敷、同庭

「どこにいるのかな飛鳥…」

＞サー、少年の行きそうな場所の心当たりは？＜

「……わからないよ、バルディッシュ…はああ」

勇気を振り絞り飛鳥を探しに庭まで出たのは良いが肝心な探し人が見つからず、今日で何度目かのため息をついた

＞サー、Dからメールが入りました『フェイト嬢ちゃん闇雲に探すのはよくないな…クリスマス会が始まれば飛鳥と会えるから時間まで待ってみな…』……以上です＜

「そうだね…時間までまとうか、バルディッシュありがとう…」

バルディッシュに届いたメールを聞きフェイトは自分の部屋へと戻る

（…これで良かったのですかD）

（ああ、互いに少しだけ時間が必要だからな…お互いマスターに苦労するなバルちゃん）

（…バルちゃんは止めてくださいD）

（じゃあ…バルさ……）

（……バルちゃんでいいですD…）

等と苦労人？なデバイス同士の会話が交わされていた

しかしクリスマス会と飛鳥の事で頭が一杯なフェイトは気付かなかった

屋敷内、源三書斎

「そうか、彼も協力すると言ってくれたのかJ君…」

『…はい、その間に奴等の情報と証拠集めを終えなければ…』

「……じゃが一筋縄じゃいかんな…ドゥーエちゃんからの情報は何かないかの?」

『…そう簡単には尻尾を出さないみたいです…調査は続けていきます…先生、今日は飛鳥達の誕生日でしたね…』

其の言葉を聞き源三は表情を緩ませる

「そうじゃな…あれから三年経つなJ君…」

『はい…プレゼントの用意は万全ですよ♪』

『J、今度はあたしが行っても良いか?弟達を鍛えたいし…』

『『……』』

『ディード、セッテそれにノーヴェ…怪我が治ったばかりだ?む、無理はいけないよ』

超次元通信の向こう側では、三人のシスターズを必死になだめるJの姿を思い浮かべて笑い出す源三

「J君、良い家族が出来たじゃないか…じゃ後の事は頼んだよ」

『ありがとう先生、では失礼し…ま、待つんだノーヴェ…チンク何とかしてく……――』

「……賑やかで良いのJ君、さてと」

通信が切れしばらくしてから、源三は空間スクリーンを立ち上げあるものを見ていた

白くとてつもなく巨大な舟の内部構造、動力機関のデータと概念図が詳しく写し出されていた

「…いずれ使うことになるかも知れんな……」

動力機関の概念図の中心には【J】とも読み取れる宝石が輝いていた

「…超弩級多次元航行特殊艦【J・ミラージュ】…」

そう呟くとスクリーンを閉じプロテクトをかけ書斎を後にするのだった

新田屋敷、応接間

八神家とスバルと畢ちゃんは互いに話をして盛り上がっていると…

「よく来てくださった、スバルちゃん、畢ちゃん…ん？光太郎君は今何処に？」

応接間に入った源三はスバルと畢ちゃんに挨拶し光太郎の居場所を尋ねた

「…お父さんなら厨房でお手伝いしてる…源ちゃん…」

「ひ、畢！？ダメでしょ源ちゃんって言っ…」

「ははははは、構わんよスバルちゃん…畢ちゃん儂の事はお祖父ちゃんとも呼んで良いんじゃよ…」

謝るスバルに気にしてないと明るく笑いながら、ひよいと畢ちゃんを肩に乗せる源三

「それに孫がもう一人増えたようでうれしいからの…クリスマス会迄時間があるからゲームでもするかの畢ちゃん？」

スバルと八神家を交えた格闘ゲーム大会が行われ遅れてなのは達とハラオウン家も参加し

「行くわよ、廬山百龍波！！！」

「まだまだ！ペガサス彗星拳！！」

クリスマス会開始迄の間、白熱した時間をおくるのだった

その頃、飛鳥はというと……

「ここをこうしてと…加工開始とポチっとな」

データを打ち込み開始キーをポンと押す

飛鳥は現在、源三の地下研究所内飛鳥ラボ（この前作ってもらった）で何かを加工していた

加工しているのは前回消えずに残った魔力スフィア、其れが徐々に形に成っていき…

「……出来た！」

出来上がったものを完成度を見て表情が綻び笑顔になる飛鳥

果たして飛鳥が作ったものとは？

其の二に続く

第十九話　「クリスマス会とサプライズ…ようこそ光太郎さんファミリーＩＮ新宿」

おまけ

ファクトリー、レクリエーションルーム

ウェンディ
「Ｊ～、ツリーはこんな感じでイイッスか？」

Ｊ
「うむ、そんな感じだね……ドゥーエにウーノ…その格好はナンダイ？」

其処にはサンタいやミニスカサンタのコスプレをした二人が、ウーノとドゥーエが立っていた

ドゥーエ
「フフ、似合ってるわよウーノ姉様♪」

ウーノ
「ド、ドゥーエこれ短いわよ…Ｊあまり見ないでください／／／／、何処でこういう服を？」

ドゥーエはウーノに訪ねられある本を取り出し見せた

『クリスマス定番衣装百選大人篇』著者Ｍ・Ｓ

ウーノ

「……クアットロ、この出版者を調べなさい…今すぐに…」

笑顔だがその背後に鬼が浮かび震え捲るシスターズだった

第十九話　「クリスマスとサプライズ、ようこそ光太郎さんファミリーＩＮ新田」

お客様いらっしゃ～い

第十九話　「クリスマスとサプライズ、ようこそ光太郎さんファミリーＩＮ新田屋敷」

クリスマスイブ、新田屋敷では熱い戦いが繰り広げられていた…

「いまや！聞け獅子の咆哮！ライトニングプラズマや！！」

「甘いよはやてちゃん！全力全壊！スターダスト・レボリューション！！」

激しいコマンド入力音が室内に響きわたりアリサや八神家、大人組も二人が操作するキャラ、シオンと童虎のすさまじい技に目を奪われている

…現在、熱く小宇宙（コスモ）を燃やしゲーム『聖闘士星矢～冥王ハーデス十二宮編』に熱中してる新田屋敷ではもう一つの戦いも終わりを迎えていた…

「光太郎さん、本当にすいません…お客様に手伝わせるなんて家政婦失格です…」

料理も出来上がり後は運ぶだけとなり、一息を着くと新田家最強家政婦（？）リニスは光太郎に頭を下げあやまろうとする…

「リニスさん、困った時はお互い様ですよ…それに僕も久し振りに楽しめましたから…ん？」

厨房の扉が開かれるとカーボーイハットを被った青年とポニーテールが目立つ少女が手に何かを持ち入ってきた

「貴方は飛鳥さんと蓮さんの…」

「はじめまして、俺は杉崎鍵、隣にいるのが…」

「は、はじめまして…篠ノ之箒です…」

二人が紹介を終えると、立派な七面鳥をリニスに手渡した

「わざわざありがとうございます。杉崎さん、箒さんも一緒にクリスマス会に参加しませんか？二人とも喜びますよ」

「いや、俺たちはこれで…」

二人は最初は断ったのだが…新田家最強家政婦リニスさん最大の武器『柔らかい微笑み』の前に陥落し参加する事になったのだった

新田屋敷、クリスマス会会場

「あ、鍵兄さん！久し振りだ…って箒ちゃんも来てくれたんだ」

「蓮、久し振りって感じは余りしないな…所で飛鳥はどうしたんだ？」

蓮の側に飛鳥が居ないこと気付き辺りを見回し訪ねる

「…兄さんなら地下のラボで何か作ってるみたいだよ…多分フェイト姉に…」

「蓮ちゃん！ここにいたん…こちらのお兄さんは誰なん？」

はやてが車椅子を押し近づき杉崎を見て尋ねた

「はや姉、この人は杉崎鍵さん…兄さんと僕の戦いを止めてくれた人なんだ…」

「！そうだったんか…杉崎さん、うちは八神はやて言います…二人の戦い止めてくれてありが…」

お礼を言おうとするはやてを杉崎が止めた

「…俺は二人が兄弟同士で戦い逢うのを止めたかった…ただそれだけなんだ、八神君」

「ぷっ…杉崎さん、蓮ちゃんのお兄さんと同じ風にうちを呼びますね…」

「そうかな?…箒どうしたそんなに怖い顔して?」

箒は辺りを、鋭い目を更に鋭くしながらある一点を見つめていた

「随分と盛り上がってるな…フェイトはどこにいるかな?」

熱いコスモ?が充満する室内を見回しフェイトの姿を探す飛鳥は自分に向けられる気配、いや殺気に気付いた

殺気の大元をみて驚いた飛鳥、何故なら…

「見つけたぞ、新田飛鳥!!」

木刀を構えた少女…篠ノ之箒が間合いを積め飛鳥めがけ木刀を上段に構え降り下ろした

「うわ！何すんだ！！」

「く、やるな新田飛鳥！」

降り下ろされた木刀を真剣白羽取りの要領で受け止め競り合う

「私は、私はあの時の事を忘れて無いぞ！」

「……あの時いった事は謝るから！…そんなにカリカリしてると一夏に…」

一夏という言葉がでた瞬間、木刀に込められた力が緩む

其の隙を見逃さず木刀を奪い取る飛鳥

「…しまった！？」

「篝、今日はクリスマスイブだ…それに飛鳥も謝っているだろ？」

「……師匠……さっきは殴りかかってすまなかった…新田飛鳥」

「…いや俺も悪かった、本当にごめん篠ノ之…今晩は杉崎兄さん……ところであれなんだ？」

飛鳥の視線を二人が追うと某潜入ゲームみたいな段ボールが、その場には似合わないウサ耳がついた段ボールがそこにはあった

「「……」」

「…なんだこれ」

箱に近寄り飛鳥が持ち上げると……

「ハロハロ～みんなのアイ……」

「……」

…ウサ耳と眼帯、更にはスニーキングスーツを着た少女を見た飛鳥は言い切る前に箱を再び被せた

「…なんだ只の箱か……」

「只の箱って失礼だよ～あっ君♪」

背後を振り向くとウサ耳少女がピースサインしながら笑顔で立っており、それを見て頭を押さえる鍵と箒

（い、何時の間に俺の後ろを取ったんだ？）

「あっ君、あっ君♪凄く面白い体してるんだね、このみんなのアイドル束さんに見せてくれない？」

「ち、ちょっと待った？あ！ソコはやめて！？」

背後を取られたのに驚く飛鳥、それにお構いなしに矢継ぎ早に体を触りながら聞いてくる

其処に……

「おや、杉崎君も来てくれたのか…其の子達は？」

源三が鍵の所に来ると篠ノ之姉妹をみて訪ねた

「わ、私は篠ノ之箒です…今あいつの体を触っているのが…」

「箒ちゃんのお姉ちゃんで天才の束ちゃんだよ……で、あなたは？」

緊張する箒と違い砕けた感じで束は挨拶する二人に笑顔になる

だが源三は束の中にナニか危ういモノをかんじた

「儂は新田源三、束嬢ちゃんがさわっとる子の祖父じゃよ」

互いに自己紹介を終え源三は杉崎に改めて挨拶すると同時に扉が開かれた

「お待たせしてすいません、用意ができましたのでこちらへ…」

準備ができたことを告げられると、ゲームに熱中していたなのは達、八神家、光太郎さんファミリーはリニスの案内で会場へ移動する、

「……取り敢えず行くか…」

ようやく束から解放されるも……

『今度、あっ君の全てをこの束さんに見せてね♪』

……という言葉に体を震わせながら、地下ラボで作ったあるもの…フェイトへのプレゼントをポケットに在るのを確認すると、なのは達のいる所に向かうのだった

この時誰も知らなかった…幾重の高密度の結界に守られた屋敷の屋根に月夜に照らされた三人の男女?の姿があったことに……

果たして三人の男女の正体は?(笑)

其の三に続く!

第十九話　「クリスマスとサプライズ、ようこそ光太郎さんファミリーＩＮ新田」

おまけ

フェイト
「これ飛鳥に似合うかな…」

フェイトは屋敷から出て有るものを購入していた…なぜ買い物しているのかと言うと…

リニス
『フェイト、今日は飛鳥さんと蓮さんの誕生日です…』

フェイト
『え？今日が飛鳥の誕生日なの？リニス』

リニス
『はい……フェイト、私は今手が離せないので、代わりに飛鳥さん達のプレゼントを選ぶのを頼んでいいでしょうか？』

という理由で現在二人のプレゼント選びをしていた…

蓮へのプレゼントは決まったのだが、飛鳥へのプレゼントは何軒

か回り漸く見っけたのだった

フェイト

「…飛鳥喜んでくれるかな…」

頬を赤くしながら包装された箱を紙袋に入れ胸に抱くと店を嬉しそうに出るフェイトだった

第十九話　「クリスマスとサプライズ、ようこそ光太郎さんファミリーＩＮ新田屋敷」

新田屋敷に侵入者？　クリスマス会終了～

第十九話　「クリスマスとサプライズ、ようこそ光太郎さんファミリーＩＮ新田屋敷」

カチャカチャ…カチリ

新田屋敷の屋根の上で人影がケーブルになにかを繋いでいる……

無数のケーブルを手早く正確に繋ぐのは一人の少女？やがて最後のケーブルを接続し動作チェックし笑顔になり軽く背伸びをする

「……ふふふ、これでよしと」

「…なあ本気でやるのか？姉貴……」

「当たり前じゃない、厳重なセキュリティを突破してここまで来たのよ…ところでノアは？」

「……ジェイダーの所にいったぜ姉貴」

新田屋敷　クリスマス会会場

「今日は集まっていただきありがとう……肩苦しい挨拶はなしで今日はみんなはしゃいで騒いで楽しんでくれ！！」

源三の言葉という開始の挨拶が終わると同時に、大人組と子供組に別れた

子供組では……

「篠ノ乃さんってなのはと声がにているわね」

「そんなに似ているかな？…この束さんに？」

（確かに姉さんと声がにている）

なのはと束を両方の声を聞き首をかしげる箒、そして……

「蓮ちゃん、はいあ～んして…あ～ん」

「は、はや姉？皆見てるからやめて…一人で食べれるから……」

「蓮ちゃん、うちのこと嫌いなんか……」

…はやての涙目＋上目遣いで見られては蓮はあがらう事が出来ず……

「…いただきます…はむ…ングング…」

と微笑ましい蓮とはやてのやり取りが繰り広げられている一方、
ヴィータはというと……

「……この料理マジでギガウマだぜ…」

光太郎さん&

その頃、大人組では……

「高町さん、杉崎君に光太郎君も一杯いこうかの？」

グラスに酒を注ぎ入れ、三人にそれを差し出す、

三人はグラスを受け取りキンと軽くあわせ飲み干しテーブルに置く

「新田さん…今日は招いてくれてありがとうございます」

頭を下げようとする杉崎を手で制する

「いいんじゃよ杉崎君、今日はクリスマス…賑やかな方がいいに決まっておる……ナイアも喜ぶ」

源三が目を向けた先には写真たてがあり、源三と金髪の若い女性、その膝には飛鳥に似た子供が抱かれた姿が写っていた

「源三さん、その人は？」

「儂の妻、ナイアじゃよ…」

少しだけ目を潤ませながら光太郎に語る源三、

「ナイアは儂の教え子だったんじゃ…賑やかなのが大好きで、こんなじいさんを何時も大好きって言う娘だった…」

少しだけ照れ頬を掻きながらながら話す源三を見た士郎は……

（源三さんと奥さんってどれぐらい年が離れてたんだ？）

と考えていた、一方杉崎はと言うと……

「……友達が出来て良かったな箒……束（虫）にも出来たのは以外だったが……」

グラスに酒を注ぎ入れながら、なのは達と篠ノ乃姉妹が楽しく会話し笑いあう様子をつまみにして飲んでいた

そして女性陣（母親）でも賑やかにある会合が開かれていた、その内容は……

「桃子さん、この間のケーキすごく美味しかったわ」

「お口にあって良かったです…上手くいってますか？」

「…後一押しなのよね…いい方法ないかしら」

「何だか面白い話をしてるわね、私もいいかしら？」

「じゃあ私も参加しま～す」

……いつの間にか意気投合し桃子さんとプレシアさん、更にはリンディさん、エイミィさんまで参加しなにやら怪しげな会話する

ヴォルケンズはと言うと……

「わ、私よりも美味いなんて……」

「シャマル…リニスさんに料理を教えてもらったらどうだ？」

「……そうした方がいいな（……毒味役は勘弁して貰いたいからな……）」

合作料理を食べその美味しさに愕然となるシャマルに二人（ザフィーラは人型になっている）からそう言われ落ち込むシャマル

様々な会話が入り乱れるなか飛鳥はフェイトの姿を探す

「ん？あれは……」

杉崎兄さんの持ってきた七面鳥に幸せな顔してかぶりついている
アルフに声をかけ、フェイトの居場所を聞くと

「フェイト？…大きな紙袋を大事に抱えてあんたを探していたよ
…」

「今何処にいるかわかるか？」

「なのは達の所に向かってたよ、アリサとすずかって子達に魔法
の事を教えるって言ってたから」

食べかけの七面鳥を皿におきそう答えるアルフに「ありがとう」
を言うとなのは達の所に向かった

「え～と…彼処か」

なのは達と篠ノ乃姉妹はいつの間にか仲良くなり笑い声が聞こえる
…やはり女の子同士は仲良くなるのは早いなと考え飛鳥はフェイト
の姿を探す

「あ、飛鳥君だ！」

「遅いわよ、飛鳥！」

「飛鳥くん、メリークリスマス♪」

「あ～あっ君だ！えい！！」

ギュッ…サワサワサワ

皆が飛鳥の姿を見て手招きし皆の輪にはいると、同時に束が抱きつきさわりまくってくる

「ま、待て束姉さん！？なにやってんの！？」

「ん～友達同士のスキンシップって奴だよ、あっ君♪」

サワサワサワ…ギュ…スリスリ…サワサワワ

「や、止めろったら？あ！？そこは！そこだけはヤメテ！！」

飛鳥は束からスキンシップいう名のセクハラを受け色んな所をまさぐられ、更には顔まで頬擦りをされた時だった

ジャキ……

飛鳥の首筋に死神の鎌…否金色の刃が当てられた

ギギギギギ

冷や汗を掻きながら振り向くと底には…

「……飛鳥、その娘はダレナノカナ？カナカナカナ」

バルディッシュを起動させその刃を当てるフェイト…目が単色になり更にはそのツインテールが揺らめいているのは気のせいだろうか？

「ま、待てまずは落ち着いてくれフェイトさん？」

「…あっ君、この人は誰かな？もしかしてあっ君の彼女かな！？」

「か、彼女!?わ、私が／／／／／／」

カタンッ……

バルディッシュが手から落ち、顔を赤くするフェイトの足元に大きな紙袋をみた飛鳥は拾い上げるが…

「あ、それは……」

飛鳥の手から素早くフェイトは取ると袋から箱を取りだし

「あ、飛鳥…誕生日おめでとう!?」

顔を赤くしながら箱を胸元に押し付け、少し驚きながら受けとる飛鳥

「…そうか今日は俺の誕生日だったな…ありがとうフェイト、開けていいかな?」

「え、うんいいよ」

ガサガサゴソゴソ…

箱を開けて中を確認すると、黒いコート（イメージ的には牙狼の涼邑零コート）が入っていた

「早速着ていいかな？」

フェイトがコクりと頷いたの見た飛鳥は袖を通し着こごちと動きやすさを確認する、

「フェイト、黒って大好きな色なんだ、大事に着させて貰うよ」

「う、うん喜んでもらえて嬉しいよ」

（ううん、飛鳥の顔を見たらドキドキするよ…）

笑顔でお礼を言う飛鳥の顔をみて胸が高鳴るフェイトにポケットからあるものをその手に握らせた

「飛鳥これは？」

「…俺からのプレゼント、あ、開けるのは部屋に戻ってからで

…いいからな」

顔を赤くしほほを掻きながらそう言いながら、近くにあった飲み物を一気に飲み干した

「飛鳥、少しいいか…」

「ここじゃ不味い話みたいだな…悪いフェイト少し話してくる」

クロノに話しかけられその場から離れた場所へと移動する、しばらく黙り混みやがて口を開いた

「……君は管理局をどう思う？」

「どう思うって…管理局ってのは次元世界の治安と平和を守りロストロギアを封印する組織だろ…」

「…僕は正直そう思えないよ…管理局の裏では不正や違法研究が横行している……そのせいで苦しむ人達がいる、最近になって僕はその事実知ったんだ…どうすればいいのかわからなくなってきたよ…」

飛鳥は深く息を吐くと誰にでも語ると言う感じではない風に喋り始める

「…そう思うんなら変えればいいじゃないか…例え何年何十年かかってもさ…先生は変えたいんだろ？今の管理局を…」

「……無理だよ僕一人の力じゃ…」

「何も一人でやる必要はねえよ…皆の力を合わせて変えればいい…二人が無理なら三人、三人が無理なら四人、みんなとがむしゃらにつつぱしればいいんじゃないか……ま、後はなるようになるしかないと思うぜ…じゃ戻るぜ先生…」

そう言い終わると飛鳥はその場から去っていきクロノだけがその場に残される

「…一人じゃ無理でも皆の力を合わせれば変えられるか……ありがとう……親友…」

そう呟き、何十年かかろうと管理局を変える決意を胸に秘めるとクロノはクリスマス会場へと戻るのだった

「へぇ～ユーノって人間だったんだ…」

「…私知らなかったな」

「（ガタガタブルブル）」

現在、ユーノはアリサとすずかによる魔女裁判？を受けていた…

しかしそこに白い救世主が現れる

「アリサちゃん、すずかちゃん…ユーノ君をいじめたらダメだよ……」

凄まじいオーラをまといながら迫るなのはに二人は怯えウンウンと頷くばかりだった……思えばこのときから白い悪魔…（ジャキン！ヒイイ！？ごめんなさい作者）もとい白い女神だったのだとユーノは後に語ったと言う

「ま、マスター…ノアお姉さまの気配がします…」

フェイトの料理を取りに向かう途中、ジェイダーが飛鳥に辺りからノアの気配がするといった時だった

ヒュン

ドゴオオオ！！

いきなり飛鳥とジェイダーの間に『十トン』と書かれたハンマーが飛来し会場がざわめくと思いきや……

「なんじゃ？何かサプライズかの？」

「ははは、クリスマスですからね、さあさあ杉崎くんも…」

「た、高町さん？これ以上は…」

「新田さんの家のサプライズか～賑やかでいいですね」

とサプライズと勘違いしながら他の大人組も面白そうにして見ている

其処に…

「やっと見っけた！よくも…」

ブウゥン！

「アタイを！」

ブウゥン！！

「畢に売りやがったな！ジェイダー！！」

影の守護者から来たノアがジェイダー目掛けハンマーを振り回すも紙一重でかわすジェイダー

「ノ、ノアお姉さま!当たったら危ないじゃないですか!」

「うるさい!さっさと当たりやがれ!」

ハンマーを振り回しジェイダーを追いかけ回すノアお姉さま……しかし背後からくる捕食者の気配に気付かなかった

ガシッ

「ま、まさか……」

「…ちっこいの捕まえた…もう一人のちっこいの…協力ありがとう……」

「…まさかこんなにうまくいくとは思わなかったです」

体を手でがっしりと捕まれ冷や汗を滝のように流し振り向くとちっこいの大好きな畢ちゃんが空いた手にケーキを持ちノアに熱

い視線を送っている

「ま、待て畢！まさかアタイをケーキと一緒にする気じゃ…」

その言葉に耳を貸さず、ノアをケーキに入れる畢そして……

「…すべてのちっこいのに感謝して…イタダキマス……」

ハムハム……

ノアケーキ?を口に入れ食べる畢を見たジェイダーはと言うと

「お姉さまの尊い犠牲は忘れません…ガシッ…あれ畢ちゃん?」

「ヒェアア……バフ……メマ（もう一人も……いただきます）」

「イヤアアアア！?」

哀れジェイダーも畢ちゃんの口の中へと入れられでノアお姉さまとなにか言い合ってた

「これでわかっただろアタイが畢に食われる気持ちを！」

「は、はいノアお姉さまあぁぁ！」

二人は畢の母であるスバルに助け出されるまでこのままだったと言う…

後日ジェイダーは『畢ちゃん怖い畢ちゃん怖い』とジェイダーハウスのベッドでうなされたそうだ

「ジェイダー…強く生きろよ…其よりフェイトに料理を持って行かないと…」

ジェイダーを心配しつつ飛鳥は料理を皿にとりフェイトのもとへと向かう

「ほら料理取ってきたぜ」

「…ありがとう飛鳥」

皿を受け取ったときいきなり照明が落ち、ざわめく室内にしばらくして明かりが点る

「あれって空間スクリーンだよな？」

「うん、あれ何か写し出されたよ飛鳥」

Ｍ・Ｓ・ＭＯＶＥＳとロゴが流れ写し出されたモノをみた瞬間、飛鳥とフェイトの体が固まった

『うん、初めて見たよ…綺麗だね…』

『此所は俺しか知らない秘密の場所なんだ…フェイトに見て貰いたくて今日連れてきたんだ…』

『…何で私をこの場所に連れてきたの？』

『…え～と…もしフェイトが必死に呼び掛けてくれなかったら俺は本当の…』

『飛鳥は……なんかじゃないよ…だって…』

『…こんなに暖かくて心臓の音が優しく聴こえて…一緒にいるとポカポカして暖かい気持ちになれるんだよ…だから飛鳥は…』

『……あの時、フェイトが居なかったらダメだった…一緒にいるとなんか…こうスゴく落ち着くんだ…だから…俺は…フェイトの事が好きだ…』

何故かは分からないが秘密の場所でフェイトをお姫様だっこした姿と会話のやりとりが映像で流れる

其れを見たなのは達と大人組は、飛鳥が以外と大胆なんだと改めて感じ見ていると映像が切り替わる

石の様に固まってしまった二人は更に驚いた…何故なら……

『あ?』

『え?』

ベンチから落ちそうになるフェイトを身を呈し守った直後の光景
…つまりは飛鳥とフェイトがキスする瞬間が写し出され其れをみた
瞬間

「「……」」

プシュウウウウ～

バタン……

二人は頭から湯気見たいなモノを出しながら倒れてしまった

映像が終わりしばらくすると……

『…皆様楽しんでもらえたかしら♪飛鳥くんとフェイトちゃんの
嬉し恥ずかし映像集…二人がうまくいくことを心から応援してるわ
～…この映像はＭ・Ｓ、Ｍ財団の提供でお送りしました～それでは
また～♪』

音声メッセージが終わるとスクリーンが消える

飛鳥とフェイトは起き上がり互いの顔をみる

二人とも顔がリンゴみたいに赤い……

「あ、あの……飛鳥…」

「お、おう…」

しかしそこから先が続かず二人とも黙り混むが……

「…フェイト！」

「え？」

ガシッ

名前を呼ぶと手をつかみ室内の外へと走り出す

室内にいたなのは達は呆然と見送るなか、プレシアはと言うと……

「…ミツキさん、やってくれたわね…私が先にやろうと思ったのに…」

と悔しがる姿を見て空になったお皿を取りに来たリニスはあきれながらも飛鳥とフェイトの事を心配するのだった

新田屋敷、庭

「……飛鳥…痛い」

「あ、ああ悪い…」

手を離す時何故か残念そうな顔をするフェイト、それを不思議そうに感じながら二人は庭のベンチに座る

「「……」」

暫しの沈黙が支配するなかやがてフェイトは何かに気付く

「…あ、雪…降ってきたね…」

空を見上げると雪がチラチラと降ってくる…

「……クシュン……え？」

軽くくしゃみをした時フェイトの肩に何かがかけられた…見ると飛鳥にプレゼントであげたコートがかけられていた…

「…風邪曳くと折角の冬休みが楽しく過ごせなくなるだろ…」

「うん……だけど飛鳥は大丈夫？」

「…これぐらいへっちゃら…って言いたいけど寒いな…ん？」

急に暖かさを感じ横を見るとコートを一緒被るフェイトが隣にいる、お互いの心臓の鼓動が聞こえるような距離にいるのに気付く

「…こうすれば暖かいよ…」

「…そ、そうだな…」

互いにドキドキしながら降り始めた雪をみる二人

「「あ、あの？」」

同時に言葉を発しお互い気まずくなる…が飛鳥が先に喋った

「…あのさフェイト…」

「うん……」

深く、深く深呼吸し飛鳥はやがて意を決した

「…俺…俺はフェイトの事がす…」

好きだ…といいかけた時、飛鳥の場合都合が悪いことがかさなるようだ

＞悪い、飛鳥…劣化版Ｄが出た……＜

劣化版Ｄ出現を聞くや否や飛鳥は一瞬戦士の顔に代わる…しかしすぐに何時も通りの顔に戻りフェイトの方を向いた

「……俺はフェイトの……フェイト・テスタロッサの事が大好きだ！！」

「え？ええ……、飛鳥…が…私の…！？」

そう言い切るとコートをフェイトに預け変身の為Ｄを起動した時だった

チュ…

メットを被ろうとうとした時頬に柔らかいものを感じ振り向くと顔を赤くしたフェイトが目を真っ直ぐみながら立ち……

「あ、飛鳥…頑張ってね」

「…ああ、行ってくる……変んんっ身!!」

服が弾け全裸になると炎が渦巻き消えると赤い瞳が目立つ戦士、仮面ライダーＤが姿を表す

「仮面ライダーＤ!」

名乗りと同時に金色の翼を広げ劣化版Ｄの出現ポイントへ向かう

「……私も飛鳥の事、大好きだよ…」

顔を赤くしその姿を見送るとフェイトはコート大事に着て屋敷に戻っていく…

その姿をみている二人の気配にフェイトは気付かなかった

「私の作戦通りうまくいったわね～ユウ♪」

「…確かに上手くいったけどよ…このガードロボどうする気だよ…姉貴」

二人の回りには無数のガードロボ取り囲んでおりまさに絶対絶命だったが

「こんなこともあろうかと…ポチっとね♪」

怪しげな端末を押すとガードロボが一斉に沈黙し二人は雪が降るしきる中、屋敷から離れる

「……ノアはどうするんだ…」

「それならプレシアさんに頼んであるから大丈夫よ」

その言葉に呆れつつユウはミツキと共に闇夜にまぎれ姿を消す…
後日ノアはプレシアさんの手により無事に帰ってきた
ただかなり怯えていたが……

こうして新田ファミリーの海鳴で二度目のクリスマスイブの夜は
過ぎていくのだった

…次の日、源三と士郎さん、杉崎さん、光太郎さんは揃って二日酔
いになり現在……

「うぅ…リニスうぅ～み、水うぅ…」

「すいません、俺にも水いただけますか…」

「リニスさん、僕も……」

「私にも、水ください…」

「はああ……判りましたから少しだけお待ちください…」

死屍累々もとい、二日酔いの四人を見て、ため息をつきながらもかいがいしくお世話をするリニスだった

クリスマス編終了

第十九話　「クリスマスとサプライズ、ようこそ光太郎さんファミリーＩＮ新田

おまけ

今回は新キャラ紹介

新田ナイア　（享年３１）

新田源三の妻で元教え子、優れたエネルギー工学のスペシャリストであり、新田兄弟の父シンヤの母であり祖母

学生時代に源三の講義を受けたのがきっかけで談義するうちに惹かれ卒業後に結婚、後にシンヤを授かる

ミッドチルダの月で観測された魔力とは違う未知のエネルギーの調査の為、源三を説得し第一次調査団と共に月へ向かうが到着直後に通信が途絶え消息をたつた

余談だが家事などは一月交代制となっており、源三がたまに忘れ大喧嘩になることが度々あった

近所では美女と野獣夫婦とも呼ばれていたらしい

幕間　「起動！魔導アーマーその名もソルテッカマン！！～飛鳥の運用試験日記～」

クリスマス編後のお話

幕間　「起動！魔導アーマーその名もソルテッカマン！！～飛鳥の運用試験日記」

…飛鳥がフェイトに自分の思いを告げたクリスマスから二日後の早朝…

新田屋敷、地下秘密研究施設『飛鳥ラボ』

「♪♪～♪～♪♪♪～♪」

鼻唄混じりに黒に黄色いラインが入ったツナギを着た飛鳥が熱心にいじってるモノ、それは楓姉さんからデータ取りを依頼された魔導アーマー二号機『ソルテッカマン』の稼働テストをここ飛鳥ラボで行うためだ

ガシュン！…ガシュン！！

ケーブルに繋がれたDを介しマニュピレーター反応速度を確認する飛鳥、その目は真剣さに見ち溢れていた

「…流石は楓姉さんだ…動きに無駄がない…あれ？」

装着し一歩踏み出した途端に床に倒れ込む飛鳥、

ガシャア～アアン！

痛くはないが回りに工具が散乱し、本体とケーブルが絡まり身動き

がとれない

『……ケーブル外してからやった方がよかったかな…』

と呟く飛鳥、なんとか絡まったケーブルをほどくとメンテナンスベッドまでゆっくり歩く

「ふう、なんとかベッド迄たどり着いた～」

＞飛鳥…先ずは歩行練習からやったらどうだ?＜

ソルテッカマンから出た飛鳥に提案するD、その意見に飛鳥はうなずくしかなかった

再びソルテッカマンの胸部アーマーを展開し飛鳥は滑り込むように内部に入った

「D、先ずはどうすればいいんだ?」

D

＞先ずは裏山までホバークラフトなしで歩くんだ…もちろん転ばずに……＜

飛鳥、ソルテッカマンはゆっくりとラボからでて裏山まで歩き出す…

『D、オートバランサーって作動してるのか？』

＞ああ、作動してるぜ…＜

実際にはDはオートバランサーを切っていた…そうした理由は体に感覚を覚えさせた方がいいて考えたからだ

『裏山まで後どれぐらいだD？』

最初に比べると大分ましにはなってきたが…少しでも気を抜くと転んでしまう…其れを頭に考えながら聞いてみる

＞十分だ…飛鳥＜

…そういうやり取りをしながらやっとたどり着いたソルテッカマンは地面に座り込んだ

『はあ、はあ……つ、疲れた…』

＞よく頑張ったな、飛鳥…だがかなり汚れたな…＜

、あちらこちらが汚れまくったソルテッカマンを見た飛鳥は肩を落とし、

再び装着すると、歩きながらラボへと戻っていくのだった

飛鳥ラボ

「はああ、スッキリした…シャワーって最高だな…其れよりデータチェックと…」

今日のテストで蓄積された稼働データを椅子に座り牛乳を飲みながら確認する……がその表情は曇ったままだ…

「…やっぱり装着経験者じゃないと、この数値は出せないか…まだまだ修行が足りないな…俺」

飛鳥はコンソールを操作しながらソルテッカマンのオートメンテを開始する

＞…飛鳥、今日はソルテッカマンの起動テストをしたの初めてだったんだろ……＜

「うん…楓姉さんになんか申し訳無いな…」

落ち込む飛鳥にDは在ることを言う

＞人間最初からうまく出来るわけないだろ…お前だって必殺技何回も練習して物にしただろ…だから落ち込むなよ＜

「…そうだな、劣化版Dがでない時は極力ソルテッカマンを着けて動かして見るか」

＞その意気だ、飛鳥！＜

もう一度気合いを入れがんばると言う飛鳥の様子を見てDは少し罪悪感を覚えつつ嬉しく感じていた

時間がたちソルテッカマンの掃除とワックス掛けを終えた飛鳥はラボからでると同時に照明が落ちる

…そして誰もいなくなったラボからはピカピカになったソルテッカマンのオートメンテの音だけが聞こえるだけだった

余談だがオートバランサーを切ったことがバレたDはひたすら飛
鳥に謝ったそうだ

おまけ

翠屋店内

アリサ
「ねぇフェイト、飛鳥のどこが気に入ったの？」

フェイト
「え？それは…優しいところかな…」

すずか
「けど、飛鳥くん誰にでも優しいよ」

なのは
「…普段はいい加減なとこが目立つけど…」

現在買い物を終え翠屋でガールズトークに花を咲かせていたなのは達は、フェイトが飛鳥のどこをみて好きになったかに話題を変え聞いてくる

フェイト

「そんなことないよ…凄く真っ直ぐで暖かくお日さまみたいに…
…ってなに言わせるの？」

途中まで言い掛けたのを飲み込み、顔を赤くしながらなのは達を見るフェイト

アリサ
「ハイハイ、全くどれだけ飛鳥を見ているかが判ったわよ…そんなフェイトにこれをあげるわ」

アリサが手渡したそれは二枚の映画チケットだった

フェイト
「え、いいのアリサ？」

アリサ
「私は興味ないけど、飛鳥がこう言うの好きだってのは知っておいた方がいいわ」

フェイト
「…アリサありがとう…」

すずか
「良かったねフェイトちゃん…あれ？なのはちゃんあれってユーノ君？」

すずかに言われてみた先にいたのは…

女性客A
「ねえ、君此処でバイトしてるの？」

ユーノ
「は、はい」

女性客B
「仕事が終わったらお姉さんと遊びにいかない？」

言い寄られ照れるユーノの様子を見たなのははと言うと…

なのは？
「…ユーノ君、後でゆっくりお話しょうか……」

そのあまりの変貌にフェイト達は震え上がるのだった

第二十話　「光奪う異形、光を失った仮面ライダーD！！」前編（前書き）

飛鳥最大の危機？

第二十話　「光奪う異形、光を失った仮面ライダーD！！」前編

１２月２７日、海鳴市

ＰＭ２０：００

陽も完全に落ち真っ暗な道を道を仕事帰りであろう男が一人歩いていた

「…何時も明け方からお日さまが消えるまで働かせやがって…」

愚痴を漏らしながら歩く彼…最近、日が上る前から日がどっぷり消えるまで働かせられ、正直うんざりしていた

「…全く他の連中はいいな日が上るのと沈むのを拝める…く！こいつら見てるとイラつくぜ…」

足元にあった缶を蹴りそう呟いた時だ

「…ならばそいつらから光を、其れを見られる目を奪えばいい…」

その声に驚き振り返ると赤い手術着の男が彼の背後にたっていた

「だ、誰だあんたは！」

「……お前に力をやろう…陽を拝める奴らが妬ましいんだろ…」

まるで彼の質問に答える気等ない…そう言わんばかりに男は彼に素早く近寄ると手に持った銃を首筋に当てなにかを打つた…

プシュッ…

「痛っ何すんだ？…ウ、ウガアアアアアア！？」

打たれ瞬間からだが脈打ち叫び声と共にその体を異形へと変えた……

「さあ、欲望のままに光を奪え…Ｄ‐ネクスト…仮面ライダーＤ、テメエの性能を見させてもらおうか！アギャギャギャ！！」

…マスク越しの表情歪に歪め叫び声あげると男はその場から姿を消す

残された異形は回りの家電製品を取り込み姿を変えると人から光、

視力を奪うべく街へと動き出したのだった

同時刻　新田屋敷、飛鳥ラボ

今日もソルテッカマンのオートバランサーをカットした機動、射撃データを取り終えた飛鳥はソルテッカマンをメンテナンスベッドに置く、何時ものように綺麗に掃除をするため洗浄用品に手を伸ばした時だった

＞飛鳥！やつらが出たぞ＜

「わかった！行くぞD！！」

てを戻しD‐メットを起動させ被ると同時に腕を構えた

「変んん身！」

叫ぶと服が破け、ＤＡＳが展開装着され現れたのは赤い瞳の戦士、その名は

「仮面ライダーD！！」

変身を終えるとラボからでてガレージへと向かう、すでに融合を終えたジェイダー？【セカンド】がアイドリング状態で待機していた

―追加捕捉、ジェイダーは旧ジェイダーのＡＩを特殊ユニゾンデバイスに移すことで誕生した…それと同時に女の子だったのが判明し名前を変えようとしたが

『せっかくマスターに貰った名前を変えるのは嫌です、今まで通りジェイダーと呼んでくださいマスター♪』

（ジェイダーの名前の由来は旧ジェイダーのボディに【Ｊ】と大きく書かれていたのを見て飛鳥が決めた…流石は父親譲りのセンスとしかいえない）

ジェイダー？に跨がるとアクセルを吹かすＤ

「行くぞ！ジェイダー！！」

『ラーサー♪』

ガレージから走り出すジェイダーを駆り甲高いエンジン音を挙げながら現場に向かった飛鳥とＤが見たものは……

「ヒカリ…ウバウ…ヒ…カリ…ウバウ！！」

片言で叫びながら街中で人を襲い暴れまわる劣化版D？

しかし何時もと、なにかが違うと感じた飛鳥だったが、その考えを振り払い、アクセルを吹かすとジェイダーで体当たりをする

ヴオオオオオ！

ドぐガアアア！！

「ウガアアアア！？」

キキィィィ！！

ジェイダーの体当たりで吹き飛ぶ劣化版D

ドリフトしながらジェイダーを止め、遠くまで吹き飛したのを確認すると回りにいる人たちに向け声を掛けたら

「早く逃げるんだ！早く！！」

「う、うあああ！」

「は、はい！？」

飛鳥の言葉を聞き逃げ出しその場から完全に逃げたのを確認すると　フラフラと起き上がった劣化版Ｄに視線を向け驚く

「な、なんだありゃ…」

驚くのも無理もなかった、ライトや蛍光灯カメラのフラッシュが肩や胸足など至るところについた劣化版Ｄ、飛鳥もＤも初めて見るタイプだったからだ

＞油断するな！今までの劣化版Ｄじゃない…しかも人を取り込んでやがる＜

「ガアアアア？ヒカリ…ヒカリィィィ！？」

「Ｄ、行くぞ！」

ライト怪人（飛鳥命名）は正拳、下段げり、踵落としを織り混ぜた攻撃を仕掛けてくる

「セイ！ハア！セイヤアア！！」

其れを拳、チョップ　、裏拳で打ち崩し耐えきれずライト怪人の体制が崩れそれを逃さず

「トオ！シャアアア！！」

バキッ！

ジャンプと同時に頭？らしき所に回しげりを決める飛鳥

「ぐがあああああ！？」

＞今だ飛鳥！＜

「コイツで決めるぜ！ハアアアア！！」

腰を落とし力をためると同時に足元にミッド式が展開され足に赤い光…炎が宿る

「ハアアアア、トオリャアアア！！」

ジャンプと同時にライト怪人にチェーンバインドが動きを封じス

ラスター全開の真紅の螺旋と化し、必殺ライダーキックを放とうとしたときだった

「オ、オマエノ…ヒカリヲウバウ…ウオオオオ」

ピカアアアアアア！

叫ぶと同時にライト怪人の全身から目も開けられないほどの閃光が飛鳥の目を襲った

「ぐ！ラ、ラァイダアアアア！キイックウウウウ！！」

「ガアアアア！？」

凄まじい閃光に目を焼かれながら、必殺真紅の螺旋『ライダーキック』をきめた瞬間二人は炎に包まれやがて炎の中から誰か出てくる…

「ぐ、グウウ、ヒカリ…ヒカリィィィ……」

足元に倒れ気絶する飛鳥に目もくれずよろめきながらその場から去るライト怪人

しばらくして…

＞おい飛鳥、しっかりしろ！＜

「うう？D、奴は何処だ？何処にいる！？」

Dの呼び掛けでようやく気がつくと飛鳥は体を起こした、

だが様子がおかしい、なぜか手探りをしながら立ち上がる

「D、何でこんなに暗いんだ…まわりが、まわりが暗くて何も見えない…」

＞…飛鳥、お前まさか！！＜

…飛鳥はライダーキックを繰り出した瞬間、ライト怪人の凄まじい閃光で視神経を焼かれてしまったのだった…

その激しい光は強化された目には多大なダメージを与えるほどの閃光だった

「D、奴は何処に……う、うう…ウワアアアアアアアア

！？」

誰も居なくなった街中に光を失った飛鳥の悲痛に満ちた叫びが空しくこだまするのだった

第二十話　「光奪う異形、光を失った仮面ライダーD！！」前編（後書き）

おまけ

新田屋敷、食堂

プレシア
「…飛鳥君どうしたのかしら…リニス何か聞いてない？」

リニス
「いえ、飛鳥さんからは何も…」

源三は外出しており二、三日は家を空けると言って出かけ現在、屋敷にはリニス、プレシア、フェイトしかいなかった

バルディッシュ
＞サー、Dから緊急通信です【フェイト嬢ちゃん！早く来てくれ、飛鳥が……】＜

フェイト
「え？…バルディッシュ！わたしを飛鳥の所まで案内して！！」

最後まで聞かずにバリアジャケットを展開すると飛鳥のもと向かうべく屋敷から飛び立つた

D

＞ここだ、フェイト嬢ちゃん！＜

…Dの案内で飛鳥の姿を見つけフェイトは安心するが様子がおかしいことに気づいた

飛鳥

「…フェイト？…何処だ…何処に…」

その手が空しく空を切り其の様子を見たフェイトは愕然とするが意を決し飛鳥の手を握る

フェイト

「…大丈夫…私と一緒に帰ろう飛鳥」

無言の飛鳥の手を引き空へ飛翔するフェイト、其れを追いジェイダーは屋敷へと向かうのだった

第二十話　「光奪う異形、光を失った仮面ライダーD！！」　後編（前書き）

飛鳥の介護＆amp;畢ちゃん伝授の必殺技

第二十話　「光奪う異形、光を失った仮面ライダーD！！」　後編

新田屋敷、プレシア自室兼書斎

様々なケーブルがついた医療機材を頭から被る飛鳥

現在、劣化版Dライト怪人の攻撃を受け失明？した目の診察をプレシアから受けていた

「……ふう、」

空間モニターに様々なデータが示され、其れを片時も目をはなさずプレシアは見つめていた

「…飛鳥君、もういいわよ」

「プレシアさん、俺の目はもう……見えないのか？」

「…飛鳥君の視神経はあの閃光、高密度に収束された光を強化された目で見たせいで視神経が焼ききれているわ…」

飛鳥に取り付けられた医療機材を置きながらプレシアはしゃべる

「けど今はナノマシンDが焼ききれた視神経の治療をしてくれているわ」

ガバッ

「俺の目は見えるようになるのかプレシアさん…あ!?」

其れを聞き立ち上がるが何しろ目が見えない飛鳥はバランスを崩し倒れそうになる

ギュ…

誰かに抱き止められそのまま飛鳥を椅子に座らせたのはフェイトだった…

「…落ち着いて、飛鳥」

現在、目の見えない飛鳥はわからないがフェイトすごく心配そうに顔を伺う

「悪い…フェイト…ありがとな…」

「…診察結果から言うと全治3日よ…その間は変身したらダメ、治療用ナノマシンが戦闘用に変わると治りが遅くなるわ…」

「…でも、そんなこと言ってたら劣化版D襲われて失明する人が！…」

「大丈夫よ、D（とミツキさんの提供した高画質画像）のデータ解析したら飛鳥君のライダーキックのダメージが抜ける迄、後3日は動きはないわ…今は治療に専念しなさい」

プレシアに治療に専念するよう諭され考え込む飛鳥だったが…

「…わかったよプレシアさん、治療に専念するよ…」

「…Dはフェイトに預けておくわ…」

＞飛鳥、休むことも治療だ…ま、楽しみな＜

Dの意味深な言葉に頭をかしげながらも、治療に専念する事になった…しかしこの三日間は飛鳥にとって悪夢になるとは思わなかった

新田屋敷、大浴場

「飛鳥さん、染みますから目をつぶってくださいね」

「……」

カポ～ン…バシャアア～

現在、飛鳥達?は大浴場で頭を洗われている…

洗っているのはリニスさん（タオルは巻いています!）…

何故こうなったかと言うと…

―飛鳥さん、目が見えないですから私が体を洗いますね―

―いいって!一人で体洗えるから!?―

しかし有無を言わさず飛鳥の服を脱がされ大浴場に入れられ現在に至る

「はい、次は体を洗いますね…」

しかも逃げないようにバインドをかけられていた

（だ、誰か俺を助けて…）

兄飛鳥がそう願っている時に、蓮はと言うと……

「行くよシグ姉！ハアアア、セイヤアアア！」

ギィイイン！

「…まだ甘いぞ蓮！はあああ！！」

ギャリイイイン！！

八神家の庭で管理局の仕事を終え帰宅したシグナムと高い金属音を挙げながら稽古をしており互いに剣を切り結んでいた

新田屋敷、大浴場

大浴場から上った飛鳥にリニスは着替えを取りに行くと言いしばらく経ち引き戸が開かれた

「リニスさん…俺の服渡してくれないかな…どうかしたのか？」

さっきから気配はするが黙り混んでいるリニスさん？だったが服を手渡される

（あれ？リニスさんこんなに背が低かったかな…ま、いいか）

と服を受けとると着替え始めるが上着のボタンがうまく付ける事が出来ない

するとリニスさん？が飛鳥の手を取るとボタンを掛けていく

（…リニスさん、こんなに手が小さかったかな…まさか……フェイトオォォォ！？）

そのまさかだった……

目の前で飛鳥の手を取りボタンを掛けてるのは茹で蛸見たいに顔を赤くするフェイト、ボタンをかけ終え手をはなした

「…フェイトだよな…？」

「…うん」

気まずい空気が流れるがフェイトは無言で飛鳥の手をひくと飛鳥の自室へと向かう

（飛鳥の部屋に入るの私初めてだよ…）

飛鳥の部屋についたフェイトは回りを見渡した

科学技術関連の本棚、隣にはＰＧゴッドジンライにソルテッカマン【１／１６】が飾られ、机の上には最新のパソコン【Ｊ特製】とそして……

（写真立て？）

手に取ると、源三と三歳ぐらいの子供を抱いた男女、それを見守るようにバイザーを付けた男性が写っていた

（この子ってもしかして飛鳥と蓮…じゃあ二人を抱いてるのが飛鳥と蓮のお父さんとお母さんなんだ…だけど、この人は誰なんだろ？）

「フェイト…どうかしたのか？」

飛鳥に呼ばれ現実に戻ると写真立てを机の上に置くとベッド迄連れていき寝かせ自身は近くの椅子に座ると

「…フェイト、少し頼みたいことがあるんだ」

「え、何？」

少し間を空けフェイトにある頼み事をする飛鳥

その内容を聞き少し悩む、そして…

「…私ができる範囲だけならいいよ…けど本当に一人でやるの？蓮にも…」

「…蓮に傷ついて貰いたくないんだ…じゃ今から頼むフェイト」

「…うん、まずは……」

二人はなにやら打ち合わせをし始める、飛鳥の部屋から明かりが消えたのは明け方近くだった

早朝、屋敷「飛鳥自室」

「…寒、……もう朝か…」

冬独特の寒さに震わせながらは飛鳥は体を起こそうとするが…何故か体が動かない…

「…体が重い…」

体に何かがのっかている…仕方なく手探りで其れをさわってみる

「……ん……」

小さく声が聞こえ、飛鳥はまさかと感じ恐る恐る揺らしてみる

「…んん～…此所は？……」

「…フェイト…すまないけど早く退いてくれないかな……」

飛鳥に抱きついてる事に気付くと顔を赤くし飛鳥から離れる

「お、おはよう」

どぎまぎしながら挨拶するフェイトは何故こうなったか思い出す

（…確か飛鳥と……のイメージトレーニングしてて…そのまま寝てしまったんだ…うう恥ずかしいよ）

…トレーニングの途中で寝てしまいしかも抱きついていた事実に赤い顔をさらに赤くする

「…取り敢えず顔洗いにいこうか…」

と、手を差し出すと少し戸惑いながらフェイトは手を握り洗面所へと向かう

洗い終えると、また手を引かれ食堂のテーブルについた時問題が起こった

「…どうやってご飯食べよう…」

今の状態では箸は愚か食器のある場所迄わからないそこで……

「飛鳥、私が食べさせてあげる…あ、あ～ん」

「……」

フェイトがご飯を箸につまみ口まで持ってくる…背に腹は代えられず飛鳥は口にした

これを繰り返しながら食べ終えたが飛鳥は明〇のジ〇ョー見たいに真っ白になった

（…これがあと二日も続くのか……耐えられるのか…）

と心の中で呟くのだった

二日後…

「長かった…ようやく治る日が来たぜ、」

今日までの間、フェイトによる朝昼晩の食事時『あ～ん』とリニスさん&

聞くや否や飛び出そうとする飛鳥、しかし腕を強く握られた

「行かないで、まだ飛鳥の目はまだ……」

「…知ってるさ、だけど電球野郎に取り込まれている人を、襲われている人達を助け守らないといけないんだ…」

その言葉に秘められた決意を感じやがて…

「…わかったよ、だけど私も行くからね」

フェイトの言葉に頷くと　待機させたジェイダーの所へ向かうとアルフも着いてきた

「…フェイト、あたしも行くよ（プレシアに未来の息子を守ってて言われたら行くしかないじゃないか…）」

アルフに二人は感謝しジェイダーと共に現場に向かうのだった

海鳴市、繁華街

「ヒカリ、ヒカリイイイイ！！」

「く、来るなあああ！」

「イヤアアア、誰か！」

いきなり現れた電球野郎にパニックを起こす人々は我先に逃げ出し人混みの中

「ひ、ひぐっお母さん、どこ……きゃっ？」

母親とはぐれた女の子が何かにつまづき転ぶ…それは電球野郎のケーブルだった

「ヒカリイィィ！！」

女の子に向け拳が降り下ろされようとしたときだった…

ヴオオオオオオン！！

甲高いエンジン音が聞こえるのと同時に…

ドゴオオ！！

鈍い衝撃音が聞こえ恐る恐る女の子は目をあけ見たものは……

深紅のバイクに跨がる龍の角と赤い瞳を持つ仮面の戦士だった

「…大丈夫か？」

やはり怖いのだろうか少し間を空け女の子はうなずく

「…フェイトはこの子を…アルフは逃げ遅れた人たちを頼む…あと耳と尻尾を隠せよ」

ジェイダーから降りフェイトたちが去った気配を感じていると、電球野郎はふらつきながら立ち上がり向かって来る

「ヒカリイィィ！！」

電球野郎の拳が顔面に迫る…が

『飛鳥、正面右斜めにかわして！』

フェイトからの念話に従い電球野郎から顔面への攻撃かわした…

何故交わしたかと言うと、飛鳥は二日間、フェイトと空間把握イメージトレーニングをしていたのだ

『…そのまま正面に向けて拳を打ち込んで、左斜めにキック、更に……』

「ウオオオオ！ハア！セイ！セヤア！！」

念話に従い的確に電球野郎にパンチ、キック、回し蹴りを加えダメージを与えていく…

「モ、モウイチド…ウバッテヤルウウウウウ！！」

再び全身のライトを収束させ視神経を焼こうとするため光を放つ

カアアアアアア！！

激しい光が仮面ライダーDを襲い、その閃光を離れた場所でフェイトは助けた女の子と見つめている

（……飛鳥……？）

ギュ……

服の裾を震えながら握りしめる女の子の頭を優しく撫でる

「大丈夫だよ、あの人が仮面ライダーDが皆を助けてくれるよ」

「仮面…ライダー…？」

そう言うフェイトを見て女の子は仮面ライダーDを見つめる

光が収まると同時に…

『…そのまま十メートル走り込んで…左に回ってキック！』

「ハアア！セイ！！」

ドゴオオオ！！

重い蹴りが電球野郎の背中にヒットし堪らず体制を崩す

（フェイトの指示で俺が攻撃する…まさかこんなにうまくいくなんてな…今の俺達は二人で一人の仮面ライダーかもな）

『今だよ飛鳥！正面に真っ直ぐ必殺技をきめて仮面ライダー！！』

そして飛鳥は新たな技を繰り出す

畢ちゃんから教わった飛鳥の新たな技

―いい飛鳥ちゃん水餃子を沈める原理を利用して―

「とおお！はあああ！！」

高くジャンプし急降下着地する

「はあああああ……」

―この時の着地の反動を身体一杯に溜め込んで―

着地の反動を溜め込む足元にミッド式が展開し両足に赤い光が炎が宿る

―腰のバネを全開で利用して一気に決める―

畢ちゃんから教わった必殺技その名は！

「ライダアアアア・ロオォケエエェットォ・キイイイイイック！！」

「ヒカリイィィ！？」

限界まで溜め込んだ反動を解き放ちながら突進力と瞬発力、更に捻りを加えた畢ちゃん直伝新技「ライダーロケットキック」の凄まじい一撃を胴体に受け、同時に取り込まれた人と劣化版Ｄを分離消滅したのを念話で聞きほっとする

やがて助けた女の子と分離され気絶する男性を安全な場所へ連れてフェイトに手を引かれ去ろうとする飛鳥に…

「あ、あの…助けてくれてありがとう！仮面ライダーＤ！！」

先ほど助けた女の子の声を聞き再び女の子の頭を優しくなでる

「エへへ♪」

怖くないというのがわかったのか安心したのか笑顔になる女の子を残し、ジェイダーにフェイトと一緒に乗りアルフを伴い去って行く姿が消えるまでずっと見送っていると

「リン！無事だったのね！！」

「お母さん！」

互いに抱き締め会う親子そして…

「お母さん、私を仮面ライダーDが助けてくれたんだよ」

其れを聞き母親は娘を助けてくれたこの場にいない仮面ライダーDに感謝するのだった

後日、劣化版Dの移植者は事件後、仕事を変え新しい職場で明るく元気に働いているそうだ

新田屋敷、プレシア自室兼書斎

「飛鳥君、私が怒っている理由わかるかしら…」

「…はい、でも…」

現在飛鳥はプレシアとの約束を破ってしまったという理由でかれこれ一時間も説教を受けていた、フェイトも連帯責任で一緒に受けてる

「…とまだまだ言いたいことはあるけど、無事に戻ってきてよかったわ」

「ごめん、プレシアさん」

これですべて一件落着かと思ったときプレシアにある一言が告げられた

「いい忘れてたけど、目が治るのあと二日延びたから…二人にしっかりお世話して貰いなさいね、飛鳥君」

ガシッ

いきなり腕を捕まれ引きずられる飛鳥

「飛鳥、き、今日こそはわ、私があ、洗ってあげるね…」

「だ、誰かタスケテエエエエ！」

ズルズルズルズル……

「プレシア…やりすぎじゃないかい？」

大浴場に引きずり込まれる目の見えない飛鳥を見送るプレシアを見たアルフ

悪魔の羽と尻尾を見たのは気のせいだろうか…

二日後すべてを守り抜きり？（添い寝等は仕方なかった……）無事に飛鳥の目は完治した

だが……

「…参ったな…カラコン買おうかな…」

後遺症なのかわからないが飛鳥の瞳は真紅に変わっていた…

「ま、いっか…其れより大掃除しなきゃな」

大掃除に向け、少しずつ部屋の片付けをする飛鳥だった

第二十話　「光奪う異形、光を失った仮面ライダーD！！」　後編（後書き）

おまけ

高いビルに二つの影、一人はドクターL…

L
「やれやれ、Rめあと十年は動かないと指示されたのに勝手に動くとはね…」

???
「…ドクター…あの人が私の……お兄様ですか…」

隣にたつのは……

緑の瞳に龍と鬼の角、女性の特徴が目立つ白と紫色の装甲を纏った異形

L
「確かに君のお兄様だよ……が繋がったね」

???

＞お嬢、あんな弱いやつが兄上である訳がありませんぜ…＜

緑色の瞳が明滅し声が響く

???

「黙りなさい、アス……お兄様、私のためにもっと強くなってください…」

彼女の横ではＬが不気味にそして歪に顔を歪め笑う

???

「強くなった…お兄様達を…用済みの試作品をバラバラに壊すのが私の…支配者【ＤｅＵＳ】の役目…なのですから…」

仮面越しの表情は何もわからない

ただ言葉からは無と言う感情しか読み取れなかった

幕間　「年越しと新年明けましておめでとう…八神家編」（前書き）

年越しと新年、新キャラ登場

幕間　「年越しと新年明けましておめでとう…八神家編」

１２月３１日大晦日

年の瀬迫る海鳴市、八神家では

「シグ姉～二階を掃除機かけてくれるかな」

「あ、ああ…（き、機械は苦手だ）」

掃除機を持ち二階へと向かうシグナムを見送り蓮は拭き掃除を始める、

今日は大晦日、八神家全員で新年を迎えるための大掃除の真っ最中だった

「蓮、窓ガラス吹き終わったぜ～」

「ヴィー姉、お疲れ様」

ヴィータの掃除用具を受け取り蓮は次の場所へと向かう…

「…ザフィ兄とシャマル姉、ちゃんと掃除してるかな…」

蓮が向かうのは庭と家の周りを掃除するザフィラーとシャマルがいる場所

「シャマル、庭の掃除は終わった…」

「私も終わったわザフィラー…後は……」

掃除を終えた二人の所に蓮が現れる

「ザフィ兄、シャマル姉も終わったみたいだね」

「ええ、さっき終わった所よ蓮君」

「我もだ…」

掃除を終えたこと確認すると二人と一緒に家の中に戻る

「蓮、私に手伝えることはないか？」

八神家の新たな家族、リインフォース（以降はリイン）が戻ってきた蓮たちには尋ねるが…

「う～んリイン姉には…そうだシグ姉の手伝いを……」

バカアアン

蓮がリインに言いかけた時、二階から爆発音?が聞こえ向かうと…

「す、すまん蓮…掃除機を壊してしまった…」

そこには埃にまみれたシグナムが掃除機だったもの?を片手に持ち立ち尽くしていた

「…シグ姉ってもしかして…機械苦手なの?」

ギクッ！

「あ、ああ…」

申し訳ない顔をするシグナム、機械が苦手なら言えばいいのにと

思う蓮だったが、まずは片付けを…そう考えると皆で掃除を始めるのだった

そして夕方になり…

「みんな～お疲れ様や～」

隅から隅まで綺麗になった部屋を見てはやては満足そうにうなずき、皆にお茶を出す

「…みんなにとって初めての大晦日や、」

両親と死別し今まではやては一人で過ごしてきた…今は守護騎士の皆と蓮がいる

（…こんなに賑やかな大晦日過ごせるんはお父さんお母さんが亡くなって以来や…）

そして……

「バア…八神、買うものはこれで全部か」

「大兄、おかえりなさい」

少し不機嫌な顔をしながら戻ってきた大地を蓮は笑顔で出迎える

実は八神家の年越しに蓮が大地を誘ったのだ、最初嫌だと言ったがスイーツがでると聞き参加することになったのだった

「蓮、家の方はいいのか？」

「うん、おじいちゃんが『家の掃除は自分達でやるから蓮は八神君の所に手伝いに行ってきなさい』って言われたんだ」

其れを聞き納得する大地、その頃新田屋敷では…

『あや取りが出来る様になった…フェイト次に要らない本を渡して』

「うん…ソルテッカマンってかっこいいね」

『ありがとな、さあ大掃除頑張ろうぜ』

ソルテッカマンで要らなくなった本をフェイトから受け取ると縛るついでに指先の細かな動作データを飛鳥は取りながら大掃除をするのだった

戻って八神家では…

「蓮ちゃん、味醂とって」

「はい」

「あ、主はやて、盛り付けはこんな感じでいいですか」

現在はやて、蓮、リインはおせち料理の準備をしている、三人並ぶと仲のよい親子にも見える

やがて時間は過ぎ２３時４５分、準備を終えた三人は皆のいるリビングに集まり炬燵に入る

「さて今年もあと少しで終わりやな～」

「そうですね、主はやて」

「本当に色々ありましたね、はやてちゃん」

「そうだなあ、あたしは彼奴に逢ったのが嫌だけどな…」

「我は主に出逢えて嬉しかった」

「私も主はやてと、皆と蓮に会えてよかった…本当に…」

涙ぐむリインをはやては肩を軽く触りながら

「うちも皆に会えて良かった…うちは幸せや」

「僕も皆にシグ姉、シャマル姉、ヴィー姉、ザフィ兄、そしてリイン姉とはや姉に会えて嬉しいよ」

はやてとリイン、守護騎士達に笑顔で少し離れた場所に座る大地にも言う

「大兄にもね！」

「…そうか」

そう言われ少し笑みを浮かべる大地はスイーツを食べる

ピンポ～ン

「はや姉、僕が見てくるね」

玄関に向かい扉を開けると年越しそばを抱えた光太郎さんが立っていた

「蓮君、クリスマスパーティ以来だね今日は八神さん家に年越しそばを持ってきたから皆で食べて」

「ありがとう光太郎さん、そうだ一緒に食べませんか?」

「う〜んそうしたいのはやまやま何だけど、新田さんのお家にも届けないと…」

どうやら蓮の家にも届けないといけないらしい

「わかりました、年越しそば、ありがとう光太郎さん…」

「どういたしまして、蓮君よいお年を」

「光太郎さんもよいお年を」

年越しそばをリビング迄運び光太郎さんは皆に挨拶すると皆に見送られ蓮の家へと向かった

「こ、このお蕎麦美味しいやないか！ツユを二回寝かせたんやな…」

「美味い、光太郎さんありがとう」

「この蕎麦ギガウマだぜ！」

「美味しい、私も作ってみようかしら？」

「……シャマル、蕎麦打ちは難しいぞ」

「主はやて、こんなに美味しいものを食べたのは生まれて初めてです」

「……悪くない……」

「美味しいね、はや姉」

光太郎さん特製年越しそばを食べ終る、蓮、大地、八神家の一同はまさに口福の時を味わう

そしてテレビから新年迄の秒読みをアナウンサーが始める

『十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、0！新年明けましておめでとうございます！！』

「皆、新年明けましておめでとう、これからもずっと皆で楽しく過ごそうなぁ」

はやての挨拶の後、皆は互いに新年の挨拶をする

（これからもずっと、はや姉やシグ姉達に、大兄、兄さん、おじいちゃん、なのは姉達とプレシアさん、リニスさん、ユー兄、クロ兄達と楽しく過ごせるといいな）

そう考えてると…

「蓮ちゃん、明けましておめでとうや、これからもずっとよろしくや」

「うん、はや姉」

笑顔で蓮とはやては互いに新年の挨拶をする…こうして古い年は終わり新しい年がくる

…はやては去年までは一人ぼっちだった…

…今は違う沢山の家族と友達、そして好きな人が出来た

（お父さん、お母さん…うちは、今すごく幸せや）

海鳴市　????

黒くアメーバ状の塊がそこにあった…

『キ…キエ…タクナイ…カカ…メン…ライ…ダ…コ…ル…ト……！オ…オマ…エ…』

「…闇の残りカスか、テメエに力をやろう…」

赤い手術着の男…プロッフェッサーRは試験管を取り出しそれを

アメーバに掛け…歪んだ笑みを浮かべる

「アギャ……D‐？、？に十年は手を出すな…んなの聞ける訳ねぇだろL！俺はなあのガキ共の苦痛と悲鳴が聞きてえんだよお！！……このカイ・リューノスにあの時みたいに最高の音楽（悲鳴）を聞かせてくれよ……アギャギャギャギャギャギャギャ！！」

新たな悪意が静かにそして確実に動き始めた瞬間だった

幕間　「年越しと新年明けましておめでとう…八神家編」（後書き）

新キャラ紹介

プロフェッサーR
（本名カイ・リューノス）

生命操作、人体改造等の悪魔の科学を信奉する狂気の科学者

『科学の発展のためなら命を犠牲にしてもいい』という考えを持ち数多の生体改造実験を行う、

主に子供にたいしては高圧的で実験動物として扱い、被験者の精神破壊後に行う生体改造と悲痛な叫び声に最高の快楽と生き甲斐を感じる性格破綻者

医療用ナノマシンDを戦闘用ナノマシンDにモデルチェンジし瀕死の飛鳥と蓮に移植手術を施した張本人

移植手術時の飛鳥と蓮の叫び声を最高の音楽と評する

現在、上からの十年は待機又は様子見と言われたがそれを無視し行動を開始し水面下で何かを進めている

幕間「年越しと新年明けましておめでとう！…新田家編」（前書き）

新田家編です、

幕間「年越しと新年明けましておめでとう！…新田家編」

１２月３１日、大晦日…飛鳥と蓮の家…新田屋敷では大掃除に追われている

飛鳥はと言うと……

『よいしょっと…各種センサー異常なし、オートバランサー正常…ソルテッカマン・リフトオフ』

ソルテッカマンを起動しメンテナンスベッドから離れ立ち上がると屋敷の外へと歩く、向かった先は……

『…うし、始めるか』

ソルテッカマン指先と慣性稼働データ取りを兼ねた屋敷の外窓ふきを始める……力加減がかなり難しい危うく雑巾を絞り切りそうになる

『なんとか慣れてきた…動作データも大分貯まってきたな……後で楓姉さんにデータを送ろうかな…』

「あ、飛鳥…私も手伝おうか」

振り替えると動きやすく汚れてもいい格好したフェイトが掃除用具を持って立っている…けど何故体操服なんだ？

ジーッと俺をソルテッカマンを見ている

『あ、フェイトはソルテッカマン見たことなかったんだな…ヘッドギアオープン』

モーター音と同時に現れた俺の顔を見てフェイトは恐る恐る装甲や手にさわってくる

「この子ソルテッカマンっていうんだ…」

「楓姉さんからデータ取りの機体を頼み込んで貰ったんだ…近い内に色を塗り替えようかなあ……其よりも早く大掃除終わらせようぜ…装着！」

再び装着するとフェイトと共に屋敷の窓ガラスの大掃除をはじめて三十分後……

「あ、あ、飛鳥しっかり支えてて…」

『お、おう……』

何をしてるかというと…フェイトを抱えて高い所にある窓を拭いている

足場はかなり不安定、当然少しでも体勢が崩れればただじゃすまない…

（ここさえ終われば後はいらない本を…）

「きゃ！？」

体勢が崩れ倒れそうになり支えようと無理したのが悪かった

とっさにフェイトを抱き抱え落ちる…水を被る音が聞こえ目を開けた？俺が見たものは

「つ、冷たいよ…クシュン」

バケツの水を被りクシャミするフェイト…しかも色々とヤバイ事に……

『フ、フェイト!?は、早く着替えないと!!』

フェイトを抱えソルテッカマンで全力で大浴場へ向かい入り口で下ろした数分後

「…待たせてごめんなさい飛鳥」

『べ、別に構わねえよ…そ、それより要らなくなった本を片付けよ…う…ぜエェェェ!?』

振り返ると着替えを終えたフェイトが立っていた…何故かメイド服を着てるしかも黒…

「に、似合うかな…母さんに薦められたんだけど…飛鳥?」

(プ、プレシアさ~ん!なんて物を……まさかアレを…)

同時刻　プレシア自室

「フフフ、飛鳥君…こういうのはまだ早いわよ~」

そのまさかだった……その手には『メイドロワイヤル』と書かれ

た本…飛鳥が本棚の裏に隠してたのを見つけフェイトに黒メイド服を着るよう勧めたのだった

「…後でお話と言いたいですが…フェイトと仲良く掃除したら許してあげます』

既に二人（ミツキさんも含める）の術中に飛鳥は嵌まりつつあった

『……あや取りが出来る様になった…フェイト次の要らない本渡してくれ』

「はい…（飛鳥、さっきから私を見ないけどどうしたのかな?）」

（駄目だ黒メイド姿のフェイト…可愛すぎる…）

黒メイド＋フェイトは余りにも似合いすぎる…そう思いながら時間はあっという間に過ぎ夕方になる

「すまんの皆、今戻った」

『あ、お帰りじいちゃん』

「源三さん、お帰りなさい」

「先生、学会の方はどうでしたか」

「うむ、なかなか面白かったぞ…生化学者の結城丈二君といい話が出来たからの…若いのに将来有望……」

何やら今日出席した学会でじいちゃんと話が合う結城と言う人の話をしながら屋敷の中に戻った

リニスとテスタロッサ親娘がおせちの準備をするため厨房に向かった時チャイムがなった

「…誰だろ？」

「こんばんは飛鳥君」

玄関にいたのはハラオウン一家、話を聞くとじいちゃんが一緒に年越しをと誘ったらしい

「先生にエイミィさん、リンディさんこっちだぜ」

三人を広間に案内し、おせちの準備を終えたリニスさんとテスタロッサ親娘も集まり自然と会話が始まる

楽しく笑いあう皆を見ながらこの半年の出来事を思い返す…

（ジュエルシード事件からだよな…なのはや師匠、先生、リンディさん、エイミィさん、アルフ、プレシアさん、リニスさん、闇の書事件の時は、杉崎兄さん、八神、大兄、ヴォルケンズ（ハンマードチビ）、姉さん達、ノア、ジェイダー、そしてフェイト…思えばいろんな人たちに会ったな…）

暴走し記憶を無くしたり、失明は仕掛けるわ…けど良い思い出がなかった訳じゃなかった

（俺はいや俺達は皆に支えて貰ったからこそ戦う事が出来た…今度はこっちが支えなきゃな…）

「飛鳥、どうかしたの？」

相変わらず心配そうに顔を見るフェイトに「大丈夫だ」と言うと広間のテレビを目を向けると紅白歌合戦をやっていた

『続いては赤組、緒方理奈「…』

どうやら赤組は緒方理奈が歌うみたいだ…

『♪～♪♪♪～♪♪♪～♪～♪♪』

だけど何処かで聞いた声のような…う～ん？

カランカラ～ン♪

考えてると誰かが着たようだ、一旦考えるの止め玄関に向かうと光太郎兄さんが立っていた

「今晩は飛鳥君、皆に年越し蕎麦を持ってきたよ」

「ありがとう、光太郎兄さん…もしかして八神の所にも？」

先に八神家に年越し蕎麦を届けて家に来たようだ

「そうだ、光太郎兄さんも一緒に年越しやらない？」

「ごめん飛鳥君、この後スバルちゃんと畢と年越しの約束してるんだ」

申し訳なさそうな顔をする光太郎兄さん…家族と過ごす時間は大事だよな

「じゃあ次の機会で…年越し蕎麦を中へ運ぼうぜ光太郎兄さん」

その言葉にうなずき屋敷の厨房へ二人でお蕎麦を運び終えると

「では光太郎兄さん、よいお年を！」

「新田さん達もよいお年を！」

リニスさん、ハラオウン一家とテスタロッサ一家、光太郎兄さんはお土産（帰り際にじいちゃんから畢ちゃんへのお年玉とおせちをお土産に渡している）を抱えて帰るのを姿が見えなくなるまで見送ると俺達は屋敷に戻り、皆で光太郎兄さんが持ってきた年越し蕎麦の美味しさに舌鼓をうちながら食べ終えた時だった……

ゴ～ン～ゴ～ン～ゴ～ン♪

遠くから除夜の鐘の音が聞こえるとじいちゃんが立ち上がった

「え～ごほんごほん、新年明けましておめでとう！今年も皆よろしくじゃ！！…さて、飛鳥にフェイト君にクロノ君、明けましておめでとうこれは儂からのお年玉じゃ♪」

俺とフェイトとクロノにお年玉を渡すじいちゃんから渡されたその袋を珍しそうに見るフェイトとクロノ

そう言えばミッドチルダにお正月は無い筈だよな？

「…源三さんありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

…少しぎこちない感じはするけど喜んでいるみたいだ

「フェイトよかったね…源三じいさんあたしにも…」

「アルフ、貴女にはこれよ」

「ありが～と～うプレシア♪」

プレシアさんから渡されたのは骨っ子?…アルフそれはお年玉じゃなくてお年骨?だよな

「新年明けましておめでとう、飛鳥」

「飛鳥、新年明けましておめでとう」

「こちらこそ新年明けましておめでとうな、先生、フェイト」

カランカラ～ン♪

互いに新年の挨拶を終えたとき、呼び鈴がなる

誰かが来たみたいだ…再び飛鳥はリニスを伴って玄関にいく、扉を開けると杉崎兄さんが箒を背負い片手に甘酒を下げてたっている

「こんば…新年明けましておめでとう飛鳥、リニスさん」

「杉崎兄さん……箒も居るって事はもしかして…」

「…大丈夫だ飛鳥、虫（束）は此処にはいない…リニスさん此れを」

「何時もありがとうございます、杉崎さん…箒さんが風邪を曳いてしまうので中へどうぞ」

甘酒を受け取るとリニスさんは箒を抱き抱え中に案内し広間につくとソファーに箒を寝かせ辺りを見る

何かおかしい…特に鏡餅が異様に大きいしミカンの代わりにでかいニンジンが刺さり紐がついてる、その先には紙があり『ひっぱってね？』って書いてある

「…杉崎兄さん、あれってまさか…」

「そのまさかだ…何時の間にこんなのを…」

呆れて何も言えないという感じでため息をつく…しかし

（この前『クリスマス編』で友達になったし…ええいままよ！）

「…まて、飛鳥！」

友達がいないであろう束姉さんの為紐を思いっきり引く

グイ…パンパパパ～パ～パンン！！

ニンジンから広間一杯にクラッカーの音と紙吹雪がまう、流石にじいちゃん達も驚いたその時！

「あっ君確保～♪」

「ま、またこれかいいいい！？」

どうやらニンジン？は注意を向けるためのトラップだった

「クリスマスと忘れ物を届けに来てくれた時以来だね…新年明けましておめでとうあっ君♪」

おめでとうと言いながら体をまさぐるのは止めてくれ束姉さん！？早くしないとアレが……

ジャキッ……

「……飛鳥から離れてくれるかな…害ち…束さん」

単色になった二代目死神がバルディッシュ【サイズフォーム】片手に現れた…お願いだから首に当てるのは止めてくれ

「なにするのかな…あっ君は私の友達なんだよ」

「…友達だからってまさぐるのは止めてください……私もやりたいのに」

最後辺りが聞こえ無かったが既に一触即発な状況に回りはと言うと…

「さあさあ杉崎くんもう一献…」

「あ、あの新田さん二人を止め…ング！？」

酔っぱらったじいちゃんと酒を無理やり酌み交わされむせる杉崎兄さん…

「あら随分楽しいことしてるわね…エイミィ？クロノにもアレぐらい迫らないと…」

「ハハハ、そうですね」

「フェイト、愛は力ずくで奪い取るものよ…リニス、私のデバイスを」

「はい、フェイト私も援護します」

「フェイト～がんばれ！」

……どうやら女性陣は二人の戦いを観戦するつもりだ…

先生に助けを呼ぼうと姿を探すが

「げ、源三さん…ヒック…もう飲めませ～ん…」

酔っ払いじいちゃんの犠牲になった先生を見て打つ手なしと考えた時

（そうだ！ジェイダーが居た！＞ジェイダー今すぐこっちに来てくれ＜）

しかし念話が通じない…その頃ジェイダーはと言うと……

「わかるか？アタイは畢にサンドイッチの具にされたり、ふやけるまで口の中に…」

「…その気持ち私にもわかります、ノアお姉さま！」

現在、影の守護者「ひなぎく」でユニゾンデバイス同士による新年会が催されそれにジェイダーは参加していたのだった

（ま、不味い…この状況を打破する方法はなにかないか？考えろ俺！！）

孤立無援な状況…更にはセクハラ魔王束に体をまさぐられ、バル

ディッシュを首筋に当てられ冷や汗を流し必死に考えそして……

「…フェイト…何でも一つだけ願いを聞くからバルディッシュ下げて…」

「え、何でも……じゃあ今日一緒に寝てくれる……」

「却…」

「ダメかな……」

バルディッシュを首筋から離しまるで子犬みたいな目で見るフェイト…腹くくるか

「…わかった今日だけだからな」

ガチン！

そういった瞬間、体にフープバインドが掛かった…

「な、なんだこりゃあああ！？」

「リニス、飛鳥君を運んでね」

「わかりました、じゃあ飛鳥さん行きましょうか」

「じゃあこの束さんも…アレレ？」

ガキィィン

束姉さんの体を紫色の何かが覆い磔みたい壁に固定された

「……ふう…久し振りに使ったわね『磔刑』」

デバイスを構えたプレシアさんが立っている…あの服ってバリアジャケットだったんだ…

「じ、じゃあ行こうか飛鳥」

「だ、誰か…ヘルプミイイイイイイイイイイ！？」

バインドをかけられ身動きすらできずリニスさんの手でベッドに運ばれ暴れるが、無駄だと悟り顔を赤くしたフェイトと眠りについた

こんな感じで古い年は終わりと新年は賑やかに平等に訪れた

早朝、目を覚ました飛鳥はフェイトに再び抱き枕にされているのに気付き顔を赤くし湯気を出し再び気絶してしまい、リニスとプレシアに起こされるまでそのままだった

幕間「年越しと新年明けましておめでとう！…新田家編」（後書き）

『…はっ！此所は？…』

空は暗く辺り一面には焼け落ち崩れ落ちたビルが並び立ち

辺りからは嫌な臭いが立ち込めていた…

カリッ…

気配を感じ振り向くと母さんに良く似た少女が紫色の大鎌を抱えたっている…

そんなの持ったら危ないぞ

『……はじめまして飛鳥お兄様…そして試作品の役目は終わりです……』

待てと言おうとした瞬間、降り下ろされた鎌に俺の体を真っ二つに切り裂いた…

「ハッ！……夢？…なんて初夢見るんだよ…」

第二十一話　「獅子と豹の挟撃…敗北と特訓！！」前編（前書き）

穏やかな正月と新種の劣化版Ｄとの対決

第二十一話　「獅子と豹の挟撃…敗北と特訓！！」前編

正月、元旦といえばやる事は一つ…

「初詣に決まっている」

＞誰に言ってるんだ飛鳥？＜

現在俺達…新田家、テスタロッサ家、高町家、八神家、ハラオウン家勢揃いで長い石段を登り終え神社で願掛けをし絵馬に願い事を書いている

「……これでよし」

自分の願い事を書いた絵馬を掛けると隣を見る

なのは達も書き終え掛けていたが……フェイトだけ何書こうか迷っている

「なに悩んでんだ？」

「ひう？あ、飛鳥？」

そんなに驚かなくてもと想いながらある物に気付いた

「フェイト、髪に差してあるそれって…俺があげた簪だよな…」

フェイトの髪に差してある簪（詳しくは無印編最終話を）は半年前に渡したものだった

「に、似合うかな…」

「……すごく似合ってる…」

フェイトの格好はリニスさんが仕立てた黒に色鮮やかな花が織り込まれた振り袖を着ている

…フェイトにはやはり黒が似合う、時おりみせる仕草も含めて可愛いし…

ヤバい何か顔が熱くなってきた

「うわあ～お兄さん顔真っ赤や…確かあの振り袖はフェイトちゃん似合っとるなあ」

「そうだね、はや姉…なにお願いしたの？」

「みんなとずっとおられるよう願ったんよ…蓮ちゃんは？」

「…秘密だよ」

八神と蓮は絵馬をかけ終えたようだ…ヴォルケンズは少し戸惑いつつ絵馬を掛けている

（…内容は皆同じなんだろうな…八神、家族が出来て良かったな…）

ユーノ師匠に視線を移すと…

「ユーノ君、こっちだよ♪」

「ま、待ってなのは？そんなに引っ張らないで！？」

なんだかんだでユーノ師匠（人間形態）と仲がいいようだ

「で、出来た…」

どうやら絵馬を書き終わったようだ…絵馬をかけ終えフェイトが離れたのを見計らい絵馬を見た

（な、何て書いてあるんだ？）

見たこともない文字で書かれていた……じっと見てもわからず皆に呼ばれその場を後にした

尚、絵馬にはミッド語でこう書かれていた…

『飛鳥とずっと一緒にいられますように』

と

迅雷内

「ごめんね大兄、送り迎え迄させちゃって…」

「いいさ、迅雷は伊達じゃねえって事だ、蓮」

確かに伊達じゃない…楓姉さんが作っただけあって内部は広く最新のカラオケ迄ある

「ねえ、フェイトちゃん歌わない？」

「え、でも歌っていいのかな？」

カラオケを見たなのはがフェイトに歌おうと誘う

大兄を見ると振り向かず左手をあげＯＫサインを出している

歌っていいって事だよな…

早速迅雷内でカラオケが始まる一番手は……

「い、一番フェイト・テスタロッサ…『ＳＯＵＮＤ　ＯＦ　ＤＥＳＴＩＮＹ』歌います…」

『♪～♪♪～♪♪～♪』

去年の紅白で緒方理奈が歌っていた曲だな

最近ドラマにも出て恋人が出来たって聞いた…けど今は歌を聞こう

「♪～♪……」

何か決めポーズをフェイトが取った直後拍手が沸き挙がる

素人目でも上手すぎる…けど声まで似ているのは気のせいか？

次はなのはの番だ……

「二番手、高町なのは『Ｅｎｄｌｅｓｓ　ｓｔｏｒｙ』歌いま～す」

『♪～♪♪♪♪♪～♪♪♪♪♪♪♪♪♪～♪♪♪』

可愛らしく『呪うぞ♪』的な歌だった…ユーノ師匠はなのはに見惚れているし

『♪♪～♪♪♪♪～♪』

曲が終わるとユーノ師匠のもとへ駆け寄るなのは…鬼いちゃんが凄い目で見ている……

「飛鳥は歌わないの？」

「…俺、歌って……」

そう言い掛けた時

＞飛鳥！劣化版Ｄが出やがった…待て複数出現しただと？＜

＞私も感じたわ、Ｄ！二手に別れましょう…大地、蓮に付いてってくれるかしら？＜

「……わかった、蓮行くぞ！」

「うん、大兄…はや姉行ってくるね」

迅雷をじいちゃんに任せた大兄は蓮とユニコーンに乗り別な場所に向かう、俺は零コートを脱ぎ出ようとする

「飛鳥、僕も行くよ…アイギス行けるかい？」

＞何時でもいいですよマイスター・ユーノ＜

「…いいのか師匠？」

「…僕は君には及ばないけど、人を…命を守る楯【アイギス】がある…行こう飛鳥！」

ユーノ師匠の言葉に込められた『守り抜く』決意を感じとり現場に向おうとする

「飛鳥…が、頑張って、私待ってるから」

何故だろう…フェイトの言葉を聞くだけで力が湧き上がる

それを感じながら変身を終えた俺と師匠は現場に着き見たもの…

獅子と豹が融合した新たな劣化版Ｄが建物と電柱をところ構わず破壊し人々が逃げ回る

「師匠！！」

「ああ、アイギス、スケイルシールド広域展開！」

師匠…アイギスの肩と腕、サイドスカートの楯状のパーツが分裂展開し逃げ遅れた人達の頭上に飛来し障壁を張る

※スケイルシールド、アイギスの身体についた楯を模した装甲パーツが分離飛来しシールドを展開しながら移動する事が可能、災害時の落下物から人々を守る為の装備※

「飛鳥、障壁展開終わったよ」

「わかった！行くぞD！！」

＞おう、だが油断するなよ……誰かさんみたいに初見の敵を…ましては未知の敵を『楽勝で倒せる』なんて言うなよ！＜

誰かさんって…『楽勝』なんて言葉をライダーが一番使ってはいけないのは知ってる

何処のどいつだ、そんなふざけたこと抜かす奴は？と構えながら考える

「ガオオオオオオ！！」

獅子豹…面倒くさいから獅子舞（飛鳥命名）は雄叫びをあげ鋭い爪を伸ばし間合いを一気に詰め降り下ろす！

ブオオオン！

『ガアアアア！』

ガキイイイン！！

「グ！今までの劣化版Ｄとパワーとスピードが違う……」

左腕を楯がわりに防ぐが重く鋭い爪が装甲を切り裂き血が地面にポタポタと落ちる

…痛い、だけど劣化版Ｄに襲われ傷つく人々の痛みにに比べれは…俺の受ける痛みは……

「痛くねえんだよおおお！ハアア！！」

ドゴオオオ！！

『ガアアアアアアア』

腰を僅かに沈め空いた右腕に体重を乗せ獅子舞の腹を殴り飛ばす

「グ……」

殴ると同時に拳に痛みが走る…見るとアーマーが砕け血が滴る

おかしい…進化後装甲が強化された筈…つまりだ
コイツらは現時点での俺達の力を知り尽くした上で……だとすると
蓮と大兄があぶない！

＞蓮！聞こえるか…蓮！！＜

＞飛鳥、念話が妨害されている！＜

つまり、俺達は敵の手に乗ってしまった訳か

『ヴヴヴヴヴヴ！』

考え混んでる内にうなり声をあげ立ち上がる獅子舞何か様子がおかしい……

早く大兄と蓮の元に行かないと…嫌な予感が頭をよぎるが今は目の前の獅子舞を倒すのみ

迷わずチェーンバインドを何時もより強めに絡ませ動きを止めたのを確認し構える

「はあああああ！」

高く跳躍し着地すると腰を沈めミッド式が紅く輝き展開され赤い光…炎が宿り限界まで溜め込んだ力を今解放する……

「ラァァイダアアァァァロゥオオケェエッツトオォキイィィックウゥゥゥ！！」

凄まじい突進力と捻りを加えた畢ちゃん直伝「ライダーロケットキック」があと少しで獅子舞野郎の胴体に直撃しょうとした時

『グ、グ、グガアアアアア！！』

バキイイイイン！！

力任せにチェーンバインドを引きちぎると獅子舞野郎の真ん中から線が現れ別れた

「な！？二体に別れた！」

目の前で金色の獅子、銀色の豹に分離し姿を変え、その間を俺がすり抜ける形になり背後ががら空きになり…金獅子と銀豹が手刀で俺の胸と腹を貫く…

ドス！ドドス！！

胸と腹部から銀と金の腕が這え…いや刺し貫かれ何か熱いモノが込み上げクラッシャーから吹き出す

「ゴボオ！ガハアア……」

「に、兄さん！！」

「な！あ、飛鳥あああああ！！」

「飛鳥！？しっかりするんだ！！」

吐き出した血が空を舞い徐々に意識が薄れていく、大兄と蓮と師匠の声を聞いた気がし意識が途絶えようとした時

―頑張って…私待ってるから―

ガシッ！

「そ、そうだったな…ゴボオ…獅子舞…ゴボ…野郎…ガハッ…男の子ってのはな負けらね時があんだよおおお！！」

意識を繋ぎ止め貫いた事で身動きが取れない金獅子と銀豹の顔面へ砕けた血が滴る拳を握り締め交互にひたすら殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴る！！

ドゴ！ドゴ！ドゴ！ドゴ！ドゴ！ドゴ、ドゴ、ドゴ！ドゴ！ドゴ！

『『グ・グガアアアアア？』』

ズボオォ！！

体から金獅子と銀豹の腕が抜ける嫌な音を耳にする

ぽっかりと二つ空いた穴を傷口を押さえるが、その隙間から血が流れ落ちるのを感じる…

回りを見ると心配そうな顔をする大兄、蓮の姿を見た

「ガハアア…ハア…ゴボオッ…よ、良かった…だ、大兄、れ、蓮無事だったんだな」

俺の執念を込めた顔面への殴打に金獅子と銀豹は顔面をボロボロにしふらつきながら俺達を一瞥すると、ビルからビルに飛びながら去っていく

其れを肩で息しながら確認した瞬間、

「ハア、ハア……あれ？」

体から力が抜けるのを感じながら自身の流した血だまりの中に倒れこみながらその血だまりの冷たさを感じつつ俺は意識を失った

「しっかりしろ飛鳥！」

「兄さん！！」

「飛鳥！！」

三人は血だらけの飛鳥を抱え知らせを聞いた源三が近くに待機させた迅雷へと運ぶ

その姿を遠く離れたビルの屋上から赤い手術着を着た男…カイ・

リューノスは見て呟く

「なぜだァ？あのガキ共の性能を越える劣化版Ｄと素体生物を使ったはずだが……まあいいかぁ…もっと俺に最高の音楽（悲鳴）を聞かせろよ、ガキ共…アギャギャギャギャギャ！」

狂った笑い声がその場に木霊するのだった

第二十一話　「獅子と豹の挟撃…敗北と特訓！！」前編（後書き）

おまけ

新田屋敷、地下医療施設処置室前

フェイト
「飛鳥……」

処置室の明かりが消え源三が出てくる

源三
「ふ～後一日もすれば目を覚ますじゃろ…ま、放っておいても大丈夫じゃ」

フェイト
「！源三さんは飛鳥の事が心配じゃないんですか！」

源三
「孫の心配をせん祖父がどこにおる！！」

フェイト

「え…」

処置室の廊下に源三の声が響き渡り蓮や大地、プレシア、リンディ、リニス、クロノは驚く

源三

「飛鳥と蓮は本来あの時、三年前に死んでる筈だった、だがナノマシンDのお陰で生きておる…飛鳥と蓮はこれからもどんなに傷付いても守る為に戦うじゃろう」

フェイト

「ご、ごめんなさい源三さん、私…私ッ」

源三

「いいんじゃよ…君や皆を守りたいから飛鳥は戦う事が出来る、其れを忘れんでくれフェイト君」

祖父源三の飛鳥への想いを知り涙ぐむフェイトを源三は大きな手で頭を優しく撫でられ慰めるのだった

第二十一話　「獅子と豹の挟撃…敗北と特訓」中編（前書き）

飛鳥、特訓終了！　蓮、獅子舞野郎と交戦！！

第二十一話　「獅子と豹の挟撃…敗北と特訓」中編

新種劣化版D出現から二日たった海鳴市郊外山中……

新田家所有地

「ぐ……も、もう一度だ……」

装甲はひび割れ傷付き、やっとの事で俺はふらふらと立ち上がり拳を構える

辺り一面をまるで爆弾が落ちたようにクレーターが俺の中心にして無数に広がっている

グッ

腰を軽く落とし左手を前に、握り拳を作り右腕を右腰におき構えた俺は正面を見る

『……行くぞ！超振動大鉄球シュート！！』

「ウオオオ！ラアアィイダアァァー・パアァァンチイィィ！！」

叫び声と同時にミッド式が展開され赤い光が螺旋状に拳に展開され、

グオオオオ！！

迅雷に投げられた巨大な鉄球が唸りを挙げ俺に迫る瞬間

赤い螺旋状の光を纏った拳を大鉄球に向け殴り付ける！！

ガカギャイイイイイン！！

螺旋状の光を纏った拳…と大鉄球がせめぎ合うが次の瞬間

ドゴアアアアン！

『……飛鳥！』

凄まじい音と土煙が舞いやがて晴れると人影…仮面ライダーDが

ふらつきながら立っている…

「あ、う……」

力尽きクレーターに倒れる瞬間昨日の事が脳裏に浮ぶ

一日前、新田屋敷地下医療施設

『先生！飛鳥は…飛鳥は！？』

「大丈夫じゃ今はぐっすり眠っとる…完治まではあと少しじゃ…」

…」

其れを聞きＪが落ちつくと扉が開きプレシアがデータ端末一式を抱えて入ってくる

「先生、Ｊ、飛鳥君が戦った劣化版Ｄとミツキさんからのデータが揃いました」

「見せてくれるかの……成る程こいつは厄介じゃな」

繋いだ端末から空間スクリーンにデータを表示され其れを見て顔

色を曇らせた

『…ＤＡＳの組成を脆くする術式『超振動』が新種劣化版Ｄの体表面に常時展開している…』

目の前ではミツキさん提供の映像データが流れる

「そのせいで飛鳥君の強化装甲が脆くなって相手の攻撃が通ったわけね」

スクリーンには飛鳥が刺し貫かれる映像が流れる

其れを見て呟くプレシア…その胸の内は穏やかじゃない

『二体に分離してもその力は変わらないか…今のままでは…』

詳細なデータの羅列が映像と共にスクリーンを流れ、それらに源三は目を通した時だった

「……こ、これは！プレシア君、ミツキ君のスロー映像をもう一度見せてくれ！」

巻き戻された映像をコマ送りで見た三人は飛鳥が獅子舞の顔面に連打する拳を見て驚いた

「先生、これは！この腕はまさか…」

「間違いない…ＤｅＡＭＯＮ発動時のＤＡＳじゃ…だからこそダメージを与えることが出来たのかも知れんな」

ＤｅＡＭＯＮ発動時のみに展開されるＤＡＳがコマ送りにする事で何とか目視できるぐらいに写っていた

「Ｄ‐バックル無しでは発動できんはずじゃ…一度飛鳥のナノマシンＤを調べる必要がある…今回現れた新種劣化版Ｄ出現には彼奴が関わっとるかもしれん」

『彼奴が…生きてたと言うんですか！』

源三の口から漏れたあ奴という言葉を聞きＪは怒りに満ちた顔になった

「…飛鳥達のＤＡＳの構築術式を知っているのは儂らを含めて五人、Ｄ‐メット、Ｄ‐バックルを開発したドクターＬ、プロフェッサーＲ又の名を…」

「『……カイ・リューノス…』」

二人同時に呟くと端末を操作し超振動術式への対抗策を練り漸く導きだした

しかし三人とも浮かない表情を浮かべる

「危険な賭けかもしれんが…いるんじゃろ飛鳥…」

「…何時から気づいたんだじいちゃん」

自動扉が開き現れたのは包帯を頭や腕に巻いた飛鳥だった

「…俺の拳は暴走した時の装甲と同じ形になっていた…じいちゃん、Ｄ‐バックルを渡してくれ」

源三は目線を飛鳥と同じぐらいにしゃがむと真っ直ぐ飛鳥の目を見る

しばらく見つめ、いきなり飛鳥の手を取りナニかを握らせその手を離す

手の中に有るものを見て驚く飛鳥、握られていたのはＤ－バックルだった

「飛鳥…あの新種劣化版Ｄはお前達に特化しておる、現状のままではまた同じ事の繰り返しになる」

端末を操作し画面に在るものを出しじいちゃんは喋り続ける

「…進化した装甲を脆くする術式『超振動』の前では現状のままでは勝てん…Ｊ君」

『ＤｅＡＭＯＮ…『Ｄフォーム』の制御と新必殺技の特訓をするしかない…今ある飛鳥の決められた力を超える……』

「……わ…私は…私は反対です先生！…シンヤ君とマリアの子が何故こんな運命を…まだ九歳なのに…」

Ｊさんの言葉を遮り今まで黙っていたプレシアさんはそう言うと顔を俯かせ泣き出す…

「…プレシアさん、獅子舞野郎のせいで傷つく人達を、大事な人

を傷つけられ涙を流す人を見たくないんだ…」

涙目のまま真っ直ぐに俺の顔に手を優しく添え、目を見る…

「…飛鳥君、これだけは約束してフェイトを悲しみで泣かせないって…」

「…約束する…（大好きな奴を泣かせられるかよ）」

実はここに来る前、目を覚ました俺はフェイトと指切りさせられていた

『ゆび～きった～…約束だよ…もし破ったら…お化け屋敷かホラー映画にバインド掛けてでも連れていくからね！…だから…』

『……お、お化け屋敷とホラー映画だけは勘弁してください！フェイトさん！！』

…雑誌に載るほどの見事な土下座をした俺…なんか情けないな

『飛鳥、此れを』

スクリーンには巨大な鉄球、『超振動装甲鉄球』を持つ迅雷、少し離れた場所に俺、仮面ライダーDに迅雷が投げた鉄球を拳で砕くイメージ映像が流れ其れを見ながら

『金獅子、銀豹の表面には常に超振動術式が展開している…此れを打ち破るにはDフォーム＋対超振動術式を併せ持った新必殺技を産み出すしかない』

説明を終えると扉が開きそこには大兄が立っていた

「この特訓には大地君の迅雷が必要だ、頼んでもいいかの？」

少しだけ飛鳥に視線を移し目を閉じて考え込む…やがて口を開いた

「……やるんなら手加減は一切無しだ…それでもいいか、飛鳥、じいさん…J」

「…大兄、俺なら大丈夫、怪我も治ったから何時でも行けるよ」

俺のその言葉を聴き…大兄、じいちゃん、Jさんは椅子に座り打ち合わせをしやがて準備を終え迅雷に大鉄球を積みじいちゃんの所有する山へと向かった

そして現在に至る

（くそ、痛いな…）

あれから一日たった…だけどDフォームが安定しない…

発動できたのはたったの十秒、其れを超えると強制的に変身解除される、更に対超振動術式構築にも十秒以上かかる……

（くそ、痛いな…けど立ち上がらなきゃ…）

…こうしてる間にも体が意思には関係無く痛みを伴いながら治っていく…

ようやく立ち上がり再び構えた

「もう一度だ！大兄！！」

『……今日は此処までだ、変身解除して休め飛鳥…』

大兄は迅雷を元に戻しそう告げ、俺は其れに従い服を着ると二人で新田屋敷別邸へと戻った

別邸

「大兄、お待ちどう様」

テーブルの上に回鍋肉、麻婆豆腐　デザートに杏仁豆腐を並べていく

「…料理をいつの間に覚えた…」

「ん～畢ちゃんにレシピと中華鍋をもらってから少しずつ練習したんだ……其より冷めないうちに食べようぜ大兄、」

そう言い食事を始める二人…杏仁豆腐を食べた時大兄の目が一瞬大きく見開かれたのは気のせいだろうか？

深夜　迅雷では

『どうじゃ飛鳥の特訓は？』

「……まだDフォームが安定しねぇ十秒を超えると強制解除されちまう…術式構築を十秒以内でやらないと」

『……勝ち目はない…か…』

考え込む二人、その頃飛鳥はと言うと……

「――――――――――」

死んだように眠りについていた

翌日

新田屋敷　蓮部屋

「兄さん、特訓上手くいってるかな…」

＞蓮大丈夫よ、飛鳥を信じなさい＜

特訓をしに新田家が所有する山へと飛鳥と大兄が向かって三日がたった

蓮は飛鳥の特訓が上手くいってるかが気になっていたその時

＞蓮！新種劣化版Ｄが出たわ！＜

「！ディーヴァ行くよ」

弾けるように部屋からでると起動させたディーヴァを被り腕を構え…腕を素早く動かす

「…変ンッ身！！」

服が弾け大人化と同時にＤＡＳが展開装着し氷に包まれ弾ける

現れたのは鬼の角に黄色い瞳、蒼と黒の装甲が覆い背中には黒い外套（マント）

その名は

「仮面騎士コルト！」

変身を終え待機させていたユニコーンに跨がりアクセルをならし出現場所へ向かう

「あの劣化版Dは兄さんを戦ったタイプだね……！危ない！！」

獅子舞はまだ分離せず街をただひたすら破壊しパニックを起こし逃げ惑う人達に向け口から金と銀のエネルギー弾を放つ

ギィィン！ギィィン！！

迫るエネルギー弾を人々に当たる寸前でツインソードを展開し切り払う蓮…しかしソードを見て驚いた

「！……ソードが溶けている…」

＞うそ…あり得ないわよ！＜

見るも無惨にソードの刃が溶け落ちている…薄い魔力を纏わせていたのに関わらずにだ

先程のエネルギー弾がすさまじい熱量を持っていた

…もし間に合わなかったらと思いゾクッとする蓮

＞来るわよ！油断しないで蓮！！＜

「うん！」

『ガアアアアア！！』

再構築した双剣を構えると同時に雄叫びを挙げ獅子舞がコルト目掛け突進する！

＞蓮、避けなさい！＜

避けようとした時

「誰…か…助け……」

声がした方に目を向けると逃げ遅れた親子が瓦礫に足を挟まれ動けないでいた

（ダメだこのまま避けたらあの人達が危ない！）

蓮は、コルトは双剣に魔力を纏わせ同時に雪が降り始め刀身へ集まる

『ガアアアアア』

まるで砲弾のようにすさまじい加速で迫る獅子舞

「ハアアア！アブソリュート・スラッシュ！！」

ぶつかる直前蓮の必殺技『アブソリュート・スラッシュ』の無数の青白い斬撃が獅子舞に撃ち込まれた瞬間

ドガアアアン！

轟音と水蒸気？に二人は包まれた

やがて水蒸気が晴れ人影が見えてきた

「……グハ……」

『ガアアアアア』

獅子舞に手刀で腹部を貫かれ…嫌、双剣で辛うじてガードする蓮だった

しかし衝撃までは打ち消せずダメージを受けていた

（シグ姉とヴィー姉から鍛えて貰わなかったら反応出来なかったよ…今はあの人達から離れないと巻き添えになっちゃう…）

距離を離すと親子に狙いがいく…倒そうにも

（…ツインソードが持ちこたえそうもない……だけど！）

「僕は…まだ諦めないよ！」

既に輝だらけのツインソードを構え獅子舞と対峙するのだった

同時刻　新田家所有地

同山中

『コイツで仕上げだ！いくぞ飛鳥！超振動大鉄球シュート！！』

ゴオウアアアア！！

「ハアアア！ライダーパアアアンチイィィ！！」

飛鳥目掛け迅雷が投げた大鉄球にライダーパンチが撃ち込まれ…

ガギャギャギャャャ…

「プラス！Ｄ・レイソニック・ウェーブ！！」

ドカガガガガガガガ！！

赤い螺旋を纏ったライダーパンチで超振動大鉄球を殴りつける

拳と鉄球との間に隙間が生まれると同時に飛鳥の腕が消え何かの

破裂音が聞こえた瞬間

ビキ、ビキ、ビキキキ…バゴオオオアアン！！

大鉄球の中心に皹が入り一気に広がり破裂し砕けた

「や、やった…遂に出来たぜ…新必殺技…」

「…飛鳥、よくやったな……」

その場に座り込む飛鳥を珍しく誉める大地…何故か立花（Ｖ３）

のおやッサンみたいな衣装を着ている

必殺技完成の余韻にひたっていた時、大兄のDコマンダーが鳴り響いた

『大地君、新種劣化版Dが現れおった…飛鳥の特訓は？』

「今終わったところだ…だが此処からじゃ迅雷じゃ間に合わねぇ…くそどうすれ…」

「大兄！俺をジェイダーごと迅雷で蓮の場所まで投げてくれ！」

「な？飛鳥、お前の体が持たない…」

「こうしてる間にも蓮が、皆が危険に晒されるんだお願いだ！」

俺の目を見た大兄は暫し目を瞑り目をあけDアーマーを装着し迅雷と合体し、融合を終え待機していたジェイダーに乗った俺を手に乗せ投げる体制を取る

『飛鳥、いいんだな？』

「うん、頼むよ大兄！」

『行くぞ！飛鳥！！』

ブウン…ブオオオオオン！！

迅雷に投げられた俺は凄まじい加速を耐えジェイダーのハンドルを握りしめる

「グウウ！ジ、ジェイダージェットモード！！」

＞ラーサー！＜

ジェットモードを起動させ蓮がいる場所…劣化版Ｄ、獅子舞野郎のいる場所目掛けエンジンを全開にする

空を切り飛ぶ様は一発の砲弾の様だ

（待っていろ蓮！今すぐ向かうからな！！）

第二十一話　「獅子と豹の挟撃…敗北と特訓」中編（後書き）

オマケ

トーレ

「J、何故私達は応援にいけないんだ？」

J

「君達のＩＳの診察をしなければいけないんだ、今は我慢してくれないかな」

ウェンディ

「だけど何故チンク姉は良いんッスか～不公平ッス～」

J

「チンクには三人の面倒を見て貰わないといけないんだ…地球での常識を知っているからね」

オットー

「蓮が肉食獣に襲われてしまう！……僕やっぱり地球に戻る！！」

J

「ま、待つんだオットー！？」

数分後Ｊの説得でオットーは何とか落ち着いたのだった

第二十一話　「獅子と豹の挟撃…敗北と特訓！！」後編（前書き）

獅子舞戦終了、蓮の新しい武器登場！

第二十一話　「獅子と豹の挟撃…敗北と特訓！！」後編

蓮が獅子舞と戦ってる同じ頃

次元空間内、移動拠点

『ファクトリー』格納整備エリア

ここは次元航行艦等が十隻は軽く係留可能だが、現在は白く巨大な舟、超弩級次元航行艦【Ｊ・ミラージュ】が急ピッチで修復されていた

同内　？？？ブリッジ

「Ｊ、あの子達はまだ、蓮さんの所には…」

「……まだ着かないと連絡が来た…蓮、チンク達が来るまで耐えてくれ」

しかしファクトリー内に警報が鳴り響きわたる

ブリッジに各種ウィンドウが開きクアットロが写し出される

『Ｊお父様！第十三封印区画で調査中の【Ｄ・ブレード】が次

元転移しました！』

「な、何だって！まさか…蓮の身に何かが？」

D・ブレード…三年前、飛鳥達を違法研究所から救出した際にD-メット、D-バックルと共に奪取したD02…蓮専用拡張用アームドデバイス【D・ブレード】はD-バックルと違い未解明部分が多数見つかり封印と調査されていたものだった

（まさか、蓮のナノマシンDに進化の兆候が現れた？…其れを無意識下のリンクで感じ次元跳躍したのか！）

考え込むが結論が出ない……Jにウーノが語りかけた

「J…蓮さんを信じましょう…私達はあの子達の心と力を信じます」

「……」

Jはただ無言のまま頷くのだった

同時刻

海鳴市

「……」

『グルルル……』

互いに距離を置きにらみ合う蓮と獅子舞野郎……

ジリジリと時間だけが過ぎるなか獅子舞が動いた

ダッ！

『ガアアアアア！！』

＞来るわ蓮！＜

輝だらけの双剣を構える蓮に向け凄まじい早さで突進する

ガキキキィィィン！！

「ぐう！持ちこたえてツインソード！！」

双剣を交差させ突進を受け止める蓮の後ろにはまだ怪我をした親子がいる

ピキッ、ピキキキッ！

力負けし輝が双剣全体に拡がり続け砕けるのも時間の問題だった

「ディーヴァ！リカバリーして！」

＞これ以上は無理よ！＜

ピキキキッ！パキイィィィン！！

『ガアアアアア！！』

「ツ、ツインソードが？ウワアアアア？！」

双剣が粉々に砕け無防備状態の蓮に獅子舞野郎の鋭く重い爪が降り下ろされた次の瞬間

「ブレイズキャノン！」

青白い閃光が降り下ろされようとした腕に命中し更に……

「チェーンバインド！」

無数のチェーンバインドが獅子舞野郎の体全体に絡まりその動きを止めた

「…全く、君たち兄弟は…」

「…一人で抱え込みすぎだよ…蓮」

目の前にはユーノとクロノが蓮を守るように立ちはだかっていた

「ユー兄?クロ兄?何で此所に?!」

突然現れた二人に聞く蓮だが……

「蓮、あの親子を助け出して安全な場所に連れていくんだ」

「此所は僕達が食い止める…早く！」

「う、うん！」

二人に促され素早くその場から離れ親子の元へ向かい急いで崩れないように瓦礫を取り除き助け起こした

「…怪我をしている…ディーヴァ、僕のナノマシンを二人に与えていいかな」

＞いいわよ、傷口に手を＜

手を添えると傷が塞がっていく、其れを確認すると親子を安全な場所に寝かせた時子供が目を覚ました

「あ、あの…」

「あ、まだ無理はしない方がいいよ、お母さんも後少ししたら目を覚ますから安心して」

其れを聞き笑顔になるのを見た蓮はユーノとクロノの元へ戻っていく

「あ、ありがとう！仮面ライダー！！」

少年の言葉を背に受けると腕を挙げると風のように走り出すのだった

「うあああああ？」

「ク、クロノ！？チェーンバインド！！」

無数のチェーンバインドが展開され再び動きを止める獅子舞

だが……

ビキ！ビキキキ！！

「このままじゃ持たない…いくよアイギス！」

＞イエス、マイスターユーノ！＜

アイギスを右腕に装着し素早く動かし構えた

「変ン身！！」

同時に楯と鎖を模した装甲が展開装着され現れたのは、楯を模した仮面に翡翠色の瞳に楯と鎖を併せた装甲を体に纏わせ守りの楯と戒めの鎖を持つ戦士

その名は……

「アイギス！」

名乗ると同時に強化チェーンバインド【G・バインド（グラビティ）】を獅子舞にチェーンバインドの上から巻き付ける

【G・バインド（グラビティ）】…アイギスの新たな技、本来は重力制御、軽減等主に災害時に発生した瓦礫などの撤去に使われるのをバインドに能力付加する事で身動きを封じるバインド技

『ガアアアアアア！？』

アイギスの新技に地面に沈みながら苦しむ獅子舞に…

「今だ！スティンガーレイ！」

回復したクロノが放った魔法がスティンガーレイが直撃し土煙に包まれた

「や、やったのか？」

「まだ油断は出来ないよクロノ…」

『ガアアアアアア！』

叫び声と共に土煙の中から獅子舞が飛び出し二人に襲い掛かった！

「ラウンドシールド！」

獅子舞の攻撃をラウンドシールドでクロノを守る

ビキキ…ビキキキキ！

シールドに輝が広がる…其れを見てクロノはあることを思い出す

―クロノ君、劣化版Ｄと魔導師の戦力差は劣化版Ｄ一体に対しＡＡ＋～ＡＡＡ＋の魔導師、騎士が一人～二人がかりで倒せるか引かせるぐらいじゃ―

―待ってください源三さん、飛鳥達は僕達とのランク……―

―確かにランク的には君達より下じゃ、だが其れを経験と特訓、更には自身を進化、己の限界を超える事で力不足を補っておる…―

―……源三さん、僕は…僕達は無力なんでしょうか…飛鳥達の力にすらなれ…―

―…いや君達は充分過ぎるほど飛鳥達の力になっておるよ…これからもあの子達の事を頼んだよ―

「…僕は、僕達は飛鳥達みたいに…仮面ライダーに変身する力はない、だけどね…」

ビキキキキキ！

「…心、いや魂だけは飛鳥達と…」

シールドの亀裂も限界を超えついに破れる寸前、クロノとユーノは叫んだ！

「「……共にある！！」」

『ガアアアアア！！』

シールドを破り突撃する寸前、青白い閃光が二人の間に割って入った

ガキイィィィン！

「ま、間に合って良かった」

「「蓮！」」

青白い閃光の正体は蓮だった…しかし最後の力を使いきったかのようにツインソードの輝がさらに広がり遂に…

パキイィィィン…カラン…

「危ない、蓮！」

『ガアアアアア！』

折れたツインソードに気をとられた蓮が顔をあげる、獅子舞の鋭い爪が襲いかかろうとした時だった

キイィィィィィン……パリイィィィン！

空間が歪み始め、鏡が割れるような音と共に二振りの剣が主、蓮を護るように現れた

＞ウソ、何故【D・ブレード】が此所に？＜

パシッ！

ガキャアアアン！

現れた双剣【D・ブレード】を迷わず握り、獅子舞の攻撃を受け止めたその時だった

キイィィィィィン

遥か遠くから音が、空を切る凄まじい音とそして紅い閃光が迫ってきた…

「……オオオオオオオオオオ！ジェイダー・トルネード！！」

ドゴオオオ！！

紅い閃光の凄まじい衝撃に獅子舞野郎は吹き飛ばされる

「蓮、先生、師匠無事か！」

「兄さん！」

紅い閃光が収まり現れたのはジェイダーに跨がった飛鳥、仮面ライダーDだった

「師匠、先生…蓮と皆を守ってくれてありがとうな…！野郎分離しやがったな」

飛鳥が目を向けた先を見ると金獅子と銀豹に分離した獅子舞野郎が此方をうかがっている

「…先生、師匠」

「え?クロ兄、ユー兄」

二人は頷くと蓮を連れその場から離れ、飛鳥だけが残される

「さってと……かかってこいやあ!!」

『ガアアアアアア×2』

二体同時に飛びかかってくるが飛鳥は身動きすらしない…徐々に迫り来る金獅子と銀豹

「兄さん!危ない!!」

蓮の叫びと同時にその腕が迫った時、飛鳥の姿が消え銀豹と金獅子は互いに攻撃しダメージを受け苦しむ背後から

「ハアア!」

突如姿を現したＤは金獅子に向け体重を乗せた拳を腹に打ち込む

『ガアアアアア？』

更に回し蹴りを銀豹の延髄に打ち込む！

ドゴオオオ！

声を上げることすらなく倒れ混む金獅子、銀豹を見下ろす飛鳥

「あ、アレって！？」

その腕と脚の装甲が変わっているのに蓮が気づいた

何故なら飛鳥の腕と脚はＤｅＡＭＯＮの装甲に変化していたからだ

（まさかこんな方法でＤフォームが安定するなんて思わなかったぜ）

数時間前…

「くそ、まだ無理か」

Dフォームが安定しない事に悩んでいた、全身に展開出来たとしても十秒で解除されてしまうからだ

「……！D、部分的にDフォームを展開するのって出来るか？」

＞出来ないことは無いが、まさか！＜

そして最期の仕上げの時に展開してみると時間が五分に伸びた……

＞飛鳥奴等合体しゃがった！＜

『ガアアアアア！！』

思い出している内に再び合体し飛鳥に迫る獅子舞

ガキン、ガキン、ギイイン！

素早く重い獅子舞の拳をDフォームを展開し更に薄く赤い光をレンズ状のパーツ【D・ターミナル】から発生させ纏わせた腕と脚で捌く

『ガアアアアアア？』

それらを弾かれ無防備にがら空きになったボディに重く体重を乗せた蹴りを打ち込む！

「ハアアアア！」

ドゴオオオン！

『グギガアアアアア？』

余りの蹴りの凄まじさに地面に倒れ悶える獅子舞に飛鳥は構える

＞飛鳥！今こそ特訓の成果を見せるときだ！＜

「おう！行くぜ…はあああああああ！」

軽く腰を沈め空手の正拳構えをとる飛鳥に……

『ガアアアアア！！』

凄まじい加速で獅子舞が飛鳥めがけ突っ込んだ！……その時飛鳥の、仮面ライダーDの赤い瞳が激しく輝く！

「ライダアァァァーパアンチイィ！！」

赤い螺旋状の魔力エネルギーを【D・ターミナル】に纏い獅子舞の胴体に殴り付ける

ドゴオオオ！

間髪入れず…

「プラス！レイソニック・ウェーブ！！」

楓姉さん直伝レイソニック・ウェーブが打ち込まれた瞬間獅子舞

の動きが止まり

飛鳥の腕が、装甲が変化と同時に【D・ターミナル】が赤く光り輝きミッド式が無数に展開され新たな必殺技が今放たれた

「ハアアアアアア！D（ディメンジョン）・ライダアアアアァァァ・パアンチイィ！！」

無数のミッド式魔方陣を拳で撃ち抜くと同時に【D・ターミナル】に魔力が圧縮されレイソニック・ウェーブの蓄積された破壊力に更にディメンジョン・ライダーパンチが獅子舞の胴体に撃ち込まれた！

ビキビキキビキキキ！ヴアゴオオォォォォン！！

『ガアアアアアア？！』

断末魔を挙げ爆散する獅子舞、やがて煙が晴れると其所にいたのはライオンと豹がピクピクしながら倒れていた

「や、やったぜ……大兄見てくれたか…新必殺技ぶちかましてやっ…た…ぜ」

そのまま仰向けになり倒れると同時に変身が解除された飛鳥だったが満足そうな顔を浮かべながらやがて眠りについたのだった

「けっ！Ｄ０１の野郎、限界を超えやがったな…だがＤ０２のＤ・ブレードが来たのは予想してた通りだったがな…」

ジャキッ！

遠くのビルから飛鳥達の戦いを見ていたカイ・リューノスの首筋に紫色の刃が、サソードヤイバーが突きつけられた

「…カイ・リューノス…これ以上あの子達、飛鳥達をこれ以上苦しめるのを、手を出すのをやめて貰おうか…さもなければ」

ヤイバーに更に力が込められ首筋から血が流れ落ちる

「…さもなければどうするんだ、『革命家杉崎鍵』……いや仮面ライダーサソードさんよぉ！」

振り返り様に無数のメスを投げる、カイ・リューノス

ヒュバ！ヒュバ！ヒュバ！

「甘い！」

ギン、ギン、ギン！

切り払うもその場には既にカイ・リューノスの姿はなかった

「…逃げられたか…プロフェッサーR…カイ・リューノス何を企んでいる…俺は必ずお前達を追い詰める…」

そう言うと杉崎はビルから去っていくのだった

第二十一話　「獅子と豹の挟撃…敗北と特訓！！」後編（後書き）

オマケ

飛鳥
「あ、あのフェイトさん？」

フェイト
「何かな…」

飛鳥
「何故俺にバインドをかけているのでしょうか」

現在飛鳥はバインドを掛けられていた…

フェイト
「私、考えたんだ飛鳥がこれ以上無茶しないためにはどうすればいいかって…」

飛鳥を見るフェイトの目は何故か濁った赤い瞳で見ている

フェイト
「…だから飛鳥は私が一生お世話をしてあげるね…ずっと、ずっと飛鳥の事を……」

身動きの取れない飛鳥にゆっくり歩を進め、頬に手を添えながら言う

「ハッ！……夢か……アレ此所って俺の部屋だよな…ん？」

手に違和感、手を握られていると感じ見てみるとフェイトが手を握りながら布団の上に頭を乗せ眠っていた

幕間　昔話（一）（前書き）

幕間、その一

幕間　昔話（一）

ある晴れた日、春の日差しが柔らかく照らし穏やかな風が流れる
老婆のしろみがかった長い金髪を優しく揺らしうとうとしていた
時だった

「おばあちゃん！」

「……どうしたの……？」

「もう一度あのお話聞かせて！」

黒髪で赤い瞳が目立つ九才くらいの男の子が祖母に体を揺らしお
話をねだってくる

「何のお話かな？」

悪戯っぽく笑いながら尋ねる祖母、じれったくなった少年は少し
機嫌が悪くなる

「…仮面ライダーのお・は・な・し・だよ、おばあちゃん！」

「ごめんなさい、……」

そっぽを向く孫に苦笑いしながら頭を優しく撫でながら老婆は謝る

「……は仮面ライダーのお話しは大好きだね」

「うん、大きくなったら仮面ライダー見たいに皆を守れるくらい強くなりたいんだ」

「……、そうだね…けど私の知ってる仮面ライダーは少し違うかな…」

「「…どんなにボロボロになっても自分を信じてくれなくてもその人を信じ抜いて戦う…フフ」」

二人揃って同じ事をいいキョトンとする、やがて自然に笑い出す孫と祖母

そして祖母は語り出す

―昔々、あるところに二人の兄弟がいました

幼い頃に両親を亡くした二人は祖父と優しいお手伝いさんと一緒に大きなお屋敷に住んでました

だけど兄弟の兄は人知れず自分の住む街を怖いものから守るため戦っていましたが……

助け守った人たちから『化け物』、『赤い瞳の怪人』、『怪物』……と呼ばれその恐く赤い瞳の仮面の下で何時も涙を流し心が傷付いていました

そんなある日、何時ものように怖いものを倒したとき仮面が言いました

近くで人が襲われていると

其れを聞いた兄は迷わず助けに向かうと

その場所につくと杖を持った白い女の子とフェレットが見たことのない怪物襲われていました

兄は二人と協力し怪物を倒すと宝石になりました
その後二人を家まで送ると彼は爽やかな風を残し去っていきました

其れからしばらくして再び二人と会い怪物を倒すのに協力した時でした

彼は自分の技が破られ、新たな技を繰り出しますが相手の固い身体の前に挫けそうになった時

声が彼の耳に届きました

―負けないで仮面ライダー！―

その言葉は今まで名前の無かった彼にとって『化け物』としか呼ばれた事がなかった彼に力を与えました

―ライダアァァァキイィィックウゥ！ー

その一撃は大地をえぐり抜き、相手を生かす…必生の一撃でした

そしてこの日彼は白い少女から『仮面ライダー』と言う名前を貰いました

其れからしばらくして、彼は祖父と共に友達のお屋敷に遊びに行きました

楽しく会話をしていた時気づくと友達の一人とフェレットがいなくなり同時に仮面が怖いものが現れたと言いました

彼が向かうと戦斧を持った黒い少女が猫の怪物に襲われているのを見て咄嗟に少女の前に立ちはだかり、お腹を爪で指し貫かれながらも守り抜きました

―だ、大丈夫ですか―

少女の心配そうに聞いてくる顔を見た彼は思いました

自分が怖くないのかを…

白い少女とフェレットは彼の姿を見ても怖がりませんでした

彼にとって三人目の怖がらない人でした

その後、彼はボロボロになりながらも猫の怪物を倒し同時に黄色

い光が猫に当り体から宝石が出てきました

去ろうとしたとき白い少女に呼び止められ振り替えると一瞬だけ彼を見ました

自分と同じ赤い瞳、だけどその仮面の下では彼が何時も泣いている事に気付けませんでした

「……其れから家に戻った黒い少女は、『彼に助けてくれてありがとう』を言えなかった事を……眠ったんだね……は…」

話の途中で眠ってしまった孫を抱きソファーに寝かせると祖母は……譲りの髪を撫でる

「…皆を守れるぐらいに強くなれると良いね……」

優しく微笑みながら孫の顔を見てしばらくしてから自室へと向かうのだった

これは春の穏やかで爽やかな風が吹く、ある日の出来事

祖母が孫に聞かせた二人の兄弟の昔話

…化け物…と呼ばれても、傷付いた心と流れる涙を仮面に隠しボロボロになりながらも人を信じ抜き、命を守るために戦い抜いた兄弟とその友と…の、赤と黄色と翡翠色と緑の瞳を持つ仮面ライダーのお話…

幕間　昔話（一）（後書き）

オマケ

???

「おじいちゃん、おじいちゃん！」

???

「なんだい？」

???

「仮面ライダーって誰だったのかな？今はどこにいるのかな」

???

「ん～～おじいちゃんはわからないな…だけど此れだけはいえる」

???

「なに？」

???

「…時代が望む時、仮面ライダーは必ず甦る……っておじいちゃんは聞いたことはあるな」

？？？

「…時代が望むとき…か…ありがとう……おじいちゃん」

第二十二話　「バレンタインデーと驚異、ゾル大佐あらわる！？」（前書き）

バレンタインとゾル大佐？参上！

第二十二話　「バレンタインデーと驚異、ゾル大佐あらわる！？」

八神家

キッチンではあるイベントに向け、はやてが何かを作っていた…
やがて

「フフフ、完成や…」

目の前にはココアパウダーをまぶしたチョコレート、それを丁寧に箱に詰めラッピングしカードを添えた

「すべては明日で決まる…そして蓮ちゃんの心と体をＧＥＴするんや！」

ラッピングされた箱を見つめながら、はやては拳を握りしめ叫ぶ、
その姿を見たリインは

「主はやて、蓮に想いが届くといいですね」

ささやかに微笑みながら上手くいくことを願うのだった

第二十二話

「バレンタインデーと驚異！ゾル大佐あらわる！？」

２月１４日、今日はバレンタインデーだ…しかし悪夢の日とも言えるだろう

新田屋敷　早朝六時００分

同厨房

「で、出来た…どうかなリニス…うまくできてるかな」

「はい、上手にできましたね、フェイト」

リニス指導の元フェイトは飛鳥のバレンタインチョコを作り、リニスに褒められ少し安心した顔になった…何しろ初めて作ったバレンタインチョコを誉めてくれたからだ

「ラッピングは私がやっておきますから、フェイトは学校にいく準備をしてください」

「うん、ありがとうリニス」

部屋へ嬉しそうに軽い足取りで戻るフェイトを見送るリニスは早速ラッピングを始めるのだった

聖祥大付属小学校

同校内

「君達、ちゃんと制服を着なさい！服装の乱れは…」

「ごめんなさい、反田教頭先生、時間がないから後で」

走り去る生徒を見てため息をつく男性、反田勇夫（そるたいさお）教頭は職員室へと歩く

「最近の子供達は礼儀正しさがない…はあああ」

「反田教頭、余り気を落とさないでください…姉いえ、私も注意をするので」

「ありがとう…確か君は化学担当の…」

「…新田五月です、反田教頭先生、私は授業の準備があるので失

礼します」

頭を下げ新田五月…またの名を仮面シスター五号は準備室へと向かうのを見送る反田教頭は溜め息をついた

「……最近、生徒達は大人の言うことを聞きませんね…服装の乱れはその現れだというのに…はあああ…嘆かわしい」

「ならば手前ェがそれを教えてやりな！」

「だ、誰です?どこから入ったんですか！」

「んな事気にするなよ…さあ生まれ変われ、アギャ！」

いつの間にか教頭の背後に赤い手術着の男は立ち

素早く懐から銃?を取りだし反田教頭の首筋に

劣化版Dを打ちこんだ

「痛ッ！いったい何……ウアアアア！」

いきなり身悶えしながら壁に寄りかかる、そしてその体を徐々に

変えていきそして……

「ハハハ！私はゾル大佐だ！」

その姿はもはや反田勇夫教頭ではなくゾル大佐のコスチュームを纏い立った、自称ゾル大佐がその場に現れた

「なんだあぁ？また新種か…しかも人間態を維持してやがる…アギャ…ゾル大佐あとは任せるぜ」

「ハッ！大首領様！！すべてはこのゾルめにお任せあれ！」

その言葉を無視しカイ・リューノスは去り際に三つの塊を置いていく

やがて塊は動きだすと別な場所へと向かっていった

…まるで宿主を探すかの様に…

同時刻

飛鳥のクラスでは……

「に、新田くん…受け取ってください！」

「……」

胸に押し付けると去っていく別なクラスの女の子をみてため息をつく

今ので五個めとなるチョコを鞄に入れ席に着く…周りからは修羅達のオーラを感じすごく痛い…

更に……

「……」

フェイトからの怒気が全身に突き刺さってくる…しかも背後にはス〇ンドが見えた気がする

「フ、フェイト?落ち着きなさい?」

「アリサ、私落ち着いてるよ…大丈夫だから」

「フェイトちゃん、飛鳥君が貰ったのは義理チョコだよ…多分」

なのは達の説得でようやく怒気をフェイトは納める…

一方、蓮はと言うと

「な、何なのこのチョコの山は…」

蓮の机にははみ出るほどのチョコがつまれていた

…大部分が非公式クラブ『蓮ちゃんを愛でる会』（主に上級生、噂では中等部にもあるらしい）からのものだ

ピキーン

「……ほう、どうやら蓮ちゃんに悪い虫どもがちかようてきたみたいやな…フフフ、松葉杖やからって甘き見るんやないで…フフフ」

復学早々、なにやらコスモを燃やすはや姉（邪神）が降臨し、それを見たなのは達（フェイトを除く）は震えあがっていた

やがて始業のチャイムが響くと同時に席に座る…

授業を受けながら飛鳥は別な事を考えていた

劣化版Dは誰が何処で作り出しているのか…

作り出しているなら生産拠点が何処かにあるはず…

J達も拠点の発見に重点を置きつつ調査しているのだか一向に見つからないのが現状だった

先月現れた新種劣化版Dは自分達の力を知る人物が作り上げたと源三、J、プレシアから聞きある人物の顔が浮かぶ

（…白衣野郎とあと一人…赤い手術着野郎がなんか企んでやがるとしか思えないな…俺達にナノマシンDを移植したアイツが例え何企んでいようとも絶対阻止してやるぜ）

時間もあっという間に過ぎ、お昼休みになった時だった

『生徒諸君は速やかに体育館集合してください』

放送が終わり、生徒達は体育館に向かう

全員が入った時、いきなり扉がしまり更には証明もきえた事に、ざわめく生徒

ガシャン

いきなりスポットライトが照らされ現れたのは軍帽を被り右目にアイパッチ、軍服をまとった人物

飛鳥はその人物に見覚えがあった

「ま、まさか反田教頭先生!?」

「ハハハハハ、違うぞ新田くん私はゾル大佐だ!」

彼はそう名乗ると壇上に上がる、その背後には鷲の型どった巨大なレリーフがあった

「…私は嘆かわしい、服装の乱れは学校の品位に関わる…よって今後服装が乱れている者は我がショッカーの戦闘員になって貰おう……では始めろ!」

「イイイィィィ×８！」

自称ゾル大佐の後ろにいた先生たちが服に手をかけ脱ぎ捨てるとショッカー戦闘員が姿を表す、そして生徒達がいる方へ近付いてくる

「キャアアア」

「うわあああああ」

いきなり現れた戦闘員の姿に逃げ惑う生徒、飛鳥は変身しょうとするが…

＞やめろ飛鳥、ここで変身しちまったら皆に正体がバレるぞ＜

一方なのは達はと言うと…

『どうしょうフェイトちゃん、はやてちゃん』

『…飛鳥と蓮もどうにかしょうとしてるみたいだよ…だけど』

当りを見回す、回りには生徒…更には先生達もいる、このまま変身したら正体がばれる

『……そうや！なあ、なのはちゃん、フェイトちゃん、確かうちの学校にはお兄さんと蓮ちゃんのお姉さんがおったよな』

松葉杖をつきながら二人の顔を見ながら念話で聞くとうなずくのを見て早速、蓮に念話を飛ばす

『蓮ちゃん、聞こえる？』

『はや姉？』

『蓮ちゃん、よく聞いてな確かお姉さんが先生やっとったよな』

先生と聞いて蓮は仮面シスター五号、またの名を新田五月先生を思いだした

『うん、五号姉…五月先生になにか用があるの？』

『実はな……や』

はやてからの作戦を聞いた蓮は仮面シスター五号、新田五月に念話を飛ばし内容を伝える

『…わかった蓮、この姉に任せておけ少しの間辛抱してくれるか…』

『うん、五月姉も気をつけてね…』

果たしてはやてが蓮経由で五月、仮面シスター五号に伝えた作戦とは?

(……どうする、このままじゃゾル大佐?に学校のみんなが戦闘員に!……変身するにはどうすればいいんだ)

皆の前で変身ができない飛鳥はどう切り抜けるか

そして…

『『『ミ、ミッケタ…カ、カラダ…』』』

カイ・リューノスが残した三つの黒く米粒大の塊がなのは、フェイト、はやての背後から迫る

果たしてこの塊の正体は?

次回に続く！

第二十二話　「バレンタインデーと驚異、ゾル大佐あらわる！？」（後書き）

おまけ

なのは＆amp;フェイト＆amp;はやて
「キャッ！」

アリサ
「静かにしなさい、あんたたち…どうかしたの？」

すずか
「静かにしないと戦闘員？に連れていかれちゃうよ」

なのは
「今何かが手に刺さったんだけど…あれ？なんともない」

フェイト
「私も刺されたけどなんともない……」

はやて
「うちもや…まさか蚊でもおったんかな？…其よりも今は五月先生の合図をまとか」

三人は刺された部分を擦りながらアリサとすずかと好機が来るのを待つ

しかしこの時なのは、フェイト、はやてに少しずつ確実に変化が進んでいるのに本人達は気付かなかった

第二十二話　「バレンタインデーと脅威！ゾル大佐あらわる！？」（後編）（前編）

ゾル大佐編終了！

第二十二話　「バレンタインデーと脅威！ゾル大佐あらわる！？」（後編）

生徒達が反田教頭…もといゾル大佐に囚われた同時期、体育館の外では…

「……以上が五月さん経由で伝えられた八神君の作戦だ…皆、時間あわせはいいな？」

「はい！何時でも」

「此方も準備ＯＫです」

カーボイハットをかぶった彼…杉崎鍵の言葉に頷いた彼らは持ち場へと向かうのを見て

「後は五月さん…仮面シスター五号の合図を待つだけか…待っていろ」

第二十二話　「バレンタインデーと脅威！ゾル大佐あらわる！？」

「ハハハ、戦闘員服装の乱れている生徒を確保するのだ！」

「イイィィィィ×８」

ゾル大佐の指示に従い戦闘員は次々と服装の乱れている生徒を捕まえていく中…

（…まだか五月姉さん、このままじゃ）

飛鳥は変身の機会を伺う…しかしいまだに合図はない

こうしてる間にもゾル大佐の野望成就まで後わずかと迫った時だった

ゾル大佐が視線を向ける…そして

「ん？新田くんも制服が乱れているな、戦闘員つれてきたまえ！」

ガシ！ガシ！

ゾル大佐の命令を受けた戦闘員が飛鳥の両腕をいきなり掴む

「な、は、離せ！？」

暴れるも大人と子供の体格差（変身していない飛鳥）ではなす術もなくゾル大佐の前まで連れていかれた

ゾル大佐は満面の笑みを浮かべ、飛鳥に告げる

「新田くん、なかなか良い面構えだ…君なら大幹部になれる器だ」

「そ、反田教頭先生、正気に戻ってくれ！」

しかし飛鳥の呼び掛けはゾル大佐に届かない、

それをみてある言葉を口にした

「一人では淋しいみたいだ……では君の弟も一緒に大幹部になって貰おう」

「に、兄さん！」

振り返ると蓮が戦闘員に捕まりこちらまで来る、大勢の生徒や教師の前で変身も出来ない二人はまさに絶対絶命…

その時

「ランブルデトネイター！」

ゾル大佐と飛鳥達を掴む戦闘員の回りに煙幕が張られお互い視界を失い、其れをみた生徒や教師が騒ぎ始めた

バンッ！

扉が勢いよく開かれその場にいたのは、ある時は新聞配達員、又あるときはバスの運転手…影から飛鳥と蓮を守っていた人々と青年、杉崎鍵が立っていた

「え～今までのは校内に不審者が入り籠城された場合を想定した訓練です！…そして此れからは反田教頭先生から日頃頑張ってる君達へのサプライズショーが始まるよ！」

「…生徒と教師の皆様方はこちらに設けた特別席までどうぞ」

「慌てずゆっくり、私たちが誘導しますので安心を」

杉崎とその仲間に生徒と教師は誘導されていく

そんな中、

「あ！？」

カタンッ…グシャ

何かが落ち拾おうとするが生徒に踏まれフェイトは落胆する

落としたのは飛鳥に渡すチョコだったもの

「…どうしょう」

フェイトの瞳に涙が溜まる…飛鳥に渡す筈のチョコをどうしょうかと悩むのだった

その頃…

「クッ！煙幕とはなかなかやりますね…ん」

立ち込める煙幕の中、ゾル大佐は辺りを伺う…

その時煙幕越しに影が動いた

腕を構え、素早く動かす二つの影をゾル大佐の目に入り

「「変んっ身！！」」

熱と冷気が煙幕を吹き飛ばしゾル大佐の前に現れたのは

赤い瞳に龍の角をつけ、牙を模したクラッシャーに全身に黒地に金のラインが入った強固な装甲と金翼を持った仮面の戦士

黄色い瞳に鬼の角が生え牙を模したクラッシャーに黒地に蒼き装甲、背後にはマントを翻す仮面の騎士

その名は

「仮面ライダーD！」

「仮面騎士コルト！」

今ゾル大佐の前に二人の戦士が姿を現す

「な、何故ライダーがいる！？」

「ゾル大佐！服装が乱れているという理由で…」

「……生徒の皆を戦闘員に変えるなんて…」

「この仮面ライダー／騎士／D／コルトが許さない／ぜ！」

ビシッと指をゾル大佐に向けて指すD、コルト…

「オノレエェェ！戦闘員ライダーDとコルトを始末しなさい！！」

「イイィィィィィ×8」

ライダーが現れたことに驚くが戦闘員に指示を出しゾル大佐は体育館の外へと駆け出す

「待て！」

「兄さん！今は戦闘員を！！」

「イィィィィィィ！×８」

ナイフを振りかざし二人に襲いかかる戦闘員達

「ハアア！セイ！セイ！ヤアア！！」

ドッ！ドッ！ドッ！

「イィィィィィィ？×３」

降りおろされたナイフをかわし素早く背後へまわり手刀を首筋に打ち込み更にその脇から同時に襲いかかる戦闘員の意識を刈り取るD（勿論手加減して）

「イィィィィィィ×３」

コルトに向け銃を撃つ戦闘員、だが其れを…

「いくよ…コール、D・ブレード！！」

ギュイン、ギュイン、ギュイン

空間を破り現れた二振りの双剣、D・ブレードを掴み巧みに操り銃弾を弾くと間合いを詰め峰打ちで意識を刈り取る

「イ、イ、イイィィィィィ×2」

残された二人の戦闘員がナイフと鉄パイプで襲いかかるが

「ハアア！」

ドカッ！

「セイ！」

ドッ！

すり抜け様に放たれたDの拳が鳩尾に決まり、更にコルトの峰打ちで最後の一人の意識を刈り取る（しつこいようですが手加減をし

てあります）と二人は外に出る

「まさか、戦闘員を倒すとはおのれライダー！」

戦闘員を全員倒された事を知り、鞭をDとコルトに向け叫ぶゾル大佐

「ゾル大佐！もう逃げ場はないぜ！！」

「貴方の野望もここまでだよ！」

二人に追い詰められるゾル大佐だったが、突然笑いだした

「ハハハハハ！まさか此処まで追い詰めるとはその褒美に…俺の本当の姿を見せてやる」

懐から鞭を取り出し其れ円を描くように構え降り下ろした！

ビシイィィン！

「ワオオオオオオン！」

雄叫びと共に煙に包まれやがて晴れるとその場にはゾル大佐の姿はなく代わりに狼男が姿を現す

「ワオオオン！ライダー死ねぇ！！」

腕を構えると指先から無数の弾丸が飛び出しDとコルトに襲いかかった！

ガォン！ガォン！ガォン！

「うわ？」

「くっ！」

Dとコルトは銃弾の雨を右へ左へとかわしながら、徐々に狼男との距離を詰めていく

「トオォォォ！！」

二人は空へ跳躍し一回転し狼男の背後に立つ、振り返った狼男に

拳を叩き込む！

「ウオォンオォ！？」

流石の狼男も堪らず地面に転び回るが立ち上がると二人に襲いかかる

「ウオォ！ウオォ！」

鋭い爪と拳が二人の装甲に当たり無数の傷が出来ていく

「ぐあ？やるな狼男！？」

「つ、強い…え？装甲が砕けてる！？」

狼男の攻撃は飛鳥を苦しめた獅子舞（第二十一話参照）と同じ術式が組まれいたのだ

しかし二人は拳と剣を構え狼男と対峙する

その光景を特別席で見る生徒達の中になのは達の姿があった

「飛鳥…」

「大丈夫だよフェイトちゃん」

「で、でも」

他の生徒達はヒーローショーだと勘違いしているなかなのは達は飛鳥と蓮の心配をするしかなかった

その時だった

「負けるなライダー！」

その声が聞こえた方へ目を向けるフェイトが見たのは、以前飛鳥が助けた女の子

更に

「頑張れ！ライダー！！」

叫ぶのは蓮が助けた親子の子供だった

「負けないで仮面ライダー！」

フェイトも負けじと飛鳥達に声援を送る

「ライダー！」

最初は数人だったがやがて数を増やしそして大声援となり、飛鳥と蓮に、いや仮面ライダーDと仮面騎士コルトにも届いた

「ウオォ？ウオオオ？」

その歓声に驚く狼男、そして…

「蓮、聞こえるか？あの声を…」

「うん、兄さん…力が沸いてくるよ」

二人はその声を聞き腕にそして足に力をこめ狼男に向け走り出した！

「

「ウオオオオオオオン！」

狼男も二人に向かって鋭い爪と腕を大きく構えると走りだす

「コルト、俺にあわせられるか！」

「D！何時でもいいよ」

そのままDは跳躍し同時にDフォームを足に展開し同時に【D・ターミナル】を起動させ足元に無数のミッド式魔法陣を広げ

同時にコルトもD・ブレードの【D・コア】を稼働させる

ヴウゥゥゥン……

ガコン！ガコン！

柄の部分から無数のケーブルがコルトの腕アーマーが鋭い金属音と共に展開し其処に設けられたプラグに接続され何かがコルトの中で脈打つ

（何？体の中で…騒いでる…何なの…コレ…ハ…ナニ…）

飲み込まれそうになるも必死に意識を持たせると構えた

「ハアアアアア！D・ライダーキイィィィックウゥゥ！！」

無数のミッド式魔方陣を破壊し突き抜けると同時に両足の【D・ターミナル】に高圧縮された魔力を纏い狼男を蹴り抜く！

ドゴアアア！

更に…

「……D（ディメンジョン）・スラッシュ……」

ダンッ……シュバ！シュバ、シュバ、シュバ！！

コルトが踏み込むと同時に【D・コア】から高圧縮された魔力を刀身に纏いすり抜け様に無数の蒼い閃光が煌めき、そして……

「……斬……」

「ウオオオオオオオン…ショッカー万～歳！？」

ドガアアアアアン！

紅と蒼の閃光と共に大爆発をおこし狼男は姿を消した

「「「ワアアアア！ライダー、ライダー、ライダー！！」」」

爆発がおさまると、回りの席から生徒や教師からの大歓声を受けるDとコルト

その声に答えるように手を大きく振る

ウゥゥゥゥオォォン……

何時の間にかに現れたジェイダーとユニコーンに跨がり爽やかな風をおこしながら校庭から去るのだった

それから数日後

「いけない、授業が始まっちゃうよ！」

時間がなく遅刻寸前という事実を前に慌てる生徒達は靴を脱ぐが下駄箱に入れ忘れた…

「あ、いけない…靴は下駄箱に」

「あ、制服が乱れてる…乱れを直して…これでよし♪」

すぐに下駄箱に戻るときちんと入れ更に乱れた制服を整えた時だった

パチパチパチパチ

「素晴らしい、其れでこそ聖祥大付属小学校の生徒です」

拍手していたのはゾル大佐、いや反田教頭先生だった…数日前、爆発の煙が晴れる前に五月と杉崎がもとの姿に戻った反田教頭先生を保険室まで運び介抱したのだったが、ゾル大佐の時の記憶はなくなっていた、

それ以降は生徒達の自主性を重んじるようになった

「さあ、早く行かないと遅刻しますよ」

「は、はい反田教頭先生」

反田教頭先生に促され挨拶すると教室に急ぐ生徒達、しかし転びかけた生徒を見て…

「慌てたら怪我をしますよ…静かに早足で教室にいくようにね」

そう言い姿が見えなくなるまで見送り、反田教頭先生は微笑みを浮かべながら職員室へと向かうのだった

第二十二話　「バレンタインデーと脅威！ゾル大佐あらわる！？」（後編）（後編）

おまけ

学校の教室に一人誰かがぽつんと机に座っている

「どうしょう…これじゃ飛鳥に……」

一人教室に残り涙目になるフェイト、目の前には飛鳥に渡す筈だったチョコだったもの…

体育館から避難する時にお昼休みに渡そうとした初めて作ったバレンタインチョコを落とし踏まれてしまい途方にくれていた

ガラッ

引き戸が開かれ振り向き見ると其処にいたのは飛鳥だった

「探したぜ…どうしたフェイト？」

「え、その…あの……」

慌ててチョコを隠そうとするがそれに気づいた飛鳥は素早く近寄ると手を優しく掴む

「…もしかして、俺のチョコなのか？」

「……（コクリ）」

目に涙を溜めながら頷くのを見た飛鳥はフェイトの手からチョコの箱を取ると蓋をあけた

カパッ

「あっ……？」

中身は砕けていたが其れを一つ掴むと口に入れ飛鳥は食べ始める

「…あ、飛鳥？食べちゃダメだよ…」

「……何でだよ」

チョコを口に入れ味わった飛鳥にフェイトは聞こえるかわからないぐらい小さな声で呟いた

「だって…踏まれて…其れに中身だって…」

少しため息をつき、フェイトと同じ目線までかがみ

「形なんか関係ない…食べてみれば一生懸命作ってくれたって解る…すごく美味しいぜフェイト」

そう言い笑顔で次から次へと口に入れ食べていく飛鳥を見てフェイトは泣き出した

「あ、どうしたフェイト?俺なんか嫌な事言ったかな!?」

「ううん、私、凄く嬉しくて…ありがとう飛鳥」

「…残りは家に帰ってから食べるか…フェイトも一緒にな」

「うん!行こう飛鳥、なのは達も待っているよ」

涙を拭きフェイトは飛鳥の手を掴むと、なのは達が待つ場所へ一緒に走り出すのだった

その頃

「つ、強い！」

「あの子狸から蓮君を取り戻すわよ！」

「「「おおお！」」」

現在、校門前では蓮を巡って『蓮君を愛でる会』幹部メンバーと…

「甘い、チョコよりも甘いで…蓮ちゃんはうちのモノやあああああ！！」

松葉杖を器用に使うはやて（邪神）と、蓮を巡る戦いが繰り広げられていたのだった

「は、はや姉？お願いだから止めて！！」

「は、はやてちゃん！」

「やめなさい、はやて！」

「はやてちゃんも先輩達もやめてえぇぇ！！」

蓮やなのは達の制止も虚しく飛鳥とフェイトが来るまでこの不毛な戦いは続けられたのだった

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！！」前編

飛鳥、蓮、ユーノ最大の危機！　九番目の男あらわる！！

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能!?九番目の男あらわる!!」前編

二年前、富士山麓…国際宇宙開発研究所

「ほう…これは素晴らしいのう、まさに人類の夢と地球の未来がここにある」

「ありがとうございます、新田源三博士…宇宙開発は人類、いや地球が抱えるエネルギー問題を解決するためにはプロジェクト『S―1』を成功させないといけないんです」

研究所の設備に感嘆の声を漏らす源三に彼…沖一也は目を輝かせ説明するのを見ていい目をしてると感じた

「沖一也君、君は何の為にS―1に志願したんじゃ?」

「…『夢』の為ですかね」

目を輝かせながら語り始める沖一也、

「宇宙開発は人類の希望であり夢です…現在は月面に立つので精一杯ですが、

いつかは…太陽系を越えて外宇宙に…」

「沖君！儂もその夢に、プロジェクトS―1いや人類の未来のために協力しょう！」

ガッチリと握手する二人…この日以降年代を超えた親友となった

夢を、共に人類の未来を願う者として

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！！」前編

そして現在

海鳴市

「飛鳥、早くしないと映画始まるよ」

「あ、フェイト？ま、待てったら！引っ張るなああ？」

今日は休日、飛鳥はフェイトと市街地にある最近できた映画館に来ていた

以前アリサから貰った【劇場版　空の騎士テッカマンエビル～大空を舞う少女達】のチケットを使い映画を観にやって来た…まあいわゆるデートと言う奴だ

だが飛鳥は最近フェイトの様子がおかしいことに気づいていた

『飛鳥、飛鳥、僕とお風呂入ろ！！』

…とか

『僕はバカじゃな～い！』

…など

たまにだが『僕』と言う言葉が出て更に髪の色が金色から水色に一瞬変わるが直ぐに元に戻ったりした

（そう言えば、師匠と蓮もなのはと八神の様子がおかしいって言ってたな…虫に刺されたのが原因か…それとも……）

考えてると…

ガシッ

「あ～す～か～僕といるのがそんなにつまらないの！」

ブンブンブン！と前後ろにシェイクし始めるフェイト？しかもまた『私』から『僕』になってる

「わ、わかったから頭揺らすのをやめてくれフェイト！」

「はっ？わ、私…またやっちゃった…」

再び『私』に戻りぐったりする飛鳥にフェイトは謝る

「だ、大丈夫だから…ほら映画始まるから早くいこうぜ！」

そう言うとフェイトの手を握ると映画館の受付まで走る…その時フェイトの髪が水色に変わっている事に飛鳥は気付かなかった

ニ時間後……

「面白かったね…絶対に諦めないことをエビルさんが教えてくれ

たね……シンヤさんって飛鳥と顔とか髪型が似てるね…」

「そうかな？じいちゃんは父さん似だって言ってたな…また二人で映画に行こうか…八神、なのは、アリサ、すずか、師匠、蓮覗いてないで出てきなよ」

はやてとなのは、更にアリサ、すずか、師匠と蓮が受付の影から出てきた、何で気づいたのと言う顔をしながら

「まさか、我が考えた作戦を見破るとは……流石はお兄さんや」

「全くです……ユーノさん今度は私と…」

…何かが違う…二人を見てそう思うのは気のせいだろうか…フェイト同様、『我』『私』等々蓮と師匠から聞いた通りの反応だった

その頃、一人の青年がバイクを走らせていた

「新田博士に会うのは久しぶりだな…」

そう呟きながらアクセルを吹かし新田屋敷へバイクを走らせるのだった

「なあ、師匠、蓮何時からあんな感じになったと思うか？」

「多分、バレンタイン以降だ…なのはの様子がおかしくなったのは」

「僕もそう思うよ…はや姉が変わったのはバレンタインからだよ」

あの後、虫？に刺された三人をプレシアと源三が検査したのだが異常が見当たらなかった…

（だがなのはの身体に重度の疲労がこの時の検査で見つかり、現在は管理局の仕事を強制的に休ませていた…リンディさんと先生…クロノの協力がなければ無理だった）

で話は戻るわけだ

現在、なのは達と共に飛鳥達は翠屋に来ている、話の内容は、なのは達の様子が最近おかしいことに対する話だった

「じいちゃん達に再検査してもらうしかないかもな…師匠、最近なのはとはどんな感じな～んだ？教えろよ？」

「え、僕は……なのはとは……友達かな…多分」

少しか慌てながらコーヒーを飲み一息つくとそう答え、それを聞きため息をつく兄弟

「なあ師匠、俺が言える義理じゃないけど……好きなんだろなのはの事？」

ブハア！

「な、なに言うんだよ飛鳥！僕はなのはとは……」

「…本当にそれでいいのかよ……この前なのはの検査結果聞いただろ」

コーヒーを吹きむせる師匠になのは達に聞こえないよう小声で問いただす飛鳥

「ああ、知っているよ…」

あの時の検査結果を聞いて驚いた、何故なら過度の魔力運用（主にカートリッジ、集束砲撃、更に限界を超えた魔法訓練等々）が原因で体がボロボロ寸前だったからだ

正直、飛鳥たちよりも無茶している…

「…師匠は俺達よりも、なのはと付き合いが長いんだ…何で無茶する理由知ってるんだろ？」

少しだけ黙りこみ、やがて重い口を開いた

「あくまでも推測なんだけど…魔法と出会わなければ何の取り柄のない、魔法が使えなくなったら皆が離れていく……だからあんな無茶をしているんだと思う」

辛そうに答えると少し冷めたコーヒーを飲む

「だったら、師匠が無茶しねえように側に居てやればいい……」

「…もしかしたら近いうちになのは姉は無茶して大変な事になる気がする……その時が来てしまったらユー兄、一生後悔するよ…」

飛鳥と蓮の言葉を聞きユーノは考え込む…確かに魔法の知識、技術の基礎を教えたのは自分自身だ…なら自分はどうしたいのか

そして心の中で答えが出た時だった

＞飛鳥！奴等が出やがった！＜

＞すぐ近くに二体…いえ三体いるわ＜

それを聞いた飛鳥、蓮、ユーノは出現ポイントに向かうべく席を立つ

『悪いフェイト、奴等が出た…なるべく早く戻るから此所で待っててくれ』

『うん、わかったよ…僕達此所で待ってるよ♪』

『蓮、必ず我の元に戻ってくるのだ』

『…無事に帰ってきてくださいね』

三人の言葉を聞いた飛鳥達はもう一度検査を受けさせようと心の中で決意しつつ、店を出て出現ポイントに向かう

海鳴市、繁華街

「キィィィ！キィィィ！！」

「ギャギャギャギャギャ！」

「シュシュシュ…」

街の中では三体の怪人がビルや電柱を倒し又は突進し壁を突き壊し又はミサイル？みたいな物で車などを破壊する

「ヒクッ…お母さんどこなの？」

「ミキ～どこにいるの！ミキ～！？」

逃げまどう人ごみの中で母親の姿を探す女の子の耳に自分を呼ぶ声が聞こえ向かう、しかしそこには母の姿はなく黒いライダースーツを着た若い女性だった

「あら～可愛いわね…でも子供って嫌いなのよ！！しゃあああ！！」

そう言うと姿を蟷螂と蜘蛛の特徴を併せ持った姿に変えると両腕の大きく鋭利な鎌を振り上げると女の子に降り下ろす、女の子はもうダメと想い目をつぶった瞬間

ガキィィィン！

鋭い金属音が辺りに響き渡り、恐る恐る目をあける

「あら、貴方いい男ね～」

「……悪いけど小さな子供に手を挙げキツイことというおばさんには興味は、な・い・ぜ…ハアアア！」

ドゴオォッ！

鎌を右腕で受け止めながら蟷螂蜘蛛女の腹に重い蹴りを決め吹き飛ばしたのは、赤い瞳に龍の角が生え口には鋭いクラッシャー、全身を黒に金色のラインが入った戦士

仮面ライダーDが女の子を守るように立っていた

「か、仮面ライダーさん？」

「…さあ早く逃げるんだ」

優しく言うと女の子はうなずき逃げていく

「よ、よくもやってくれたわね…いい男だと思って油断したわあああ！！」

やや猫背になりながら鎌を構える蟷螂蜘蛛女に…

「……」

無言で拳を構える飛鳥、別な場所では…

「アハハハハ、壊れろ、壊れろおおお！！」

叫びながらバイソンと亀が合体したような筋肉質な怪人がビルの壁を撃ち貫きながら破壊していく

更に壁を打ち破ろうとしたときだった

「G・シールド！」

幾何学的模様が浮かぶ壁に阻まれ勢いよく弾き飛ばされるバイソン亀？はしばらくして立ち上がるが鼻息が荒い

「て、テメエエ…俺の楽しみをよくも奪いやがったなああ…なにもんだあああ？」

丸太より太い腕を向け彼？に問う

楯と十字架を模し翡翠色の瞳を持つ仮面、全身を鎖と楯状のアーマーをまとった戦士

「…僕は……」

彼…ユーノはバイソン亀怪人と対峙する……

（…僕には飛鳥たちみたいに戦えるかわからない……だけど…）

「痛いよ…痛い……」

「しっかりしろ、ディード源三さんにメディカルツールを…」

ユーノの目前には崩れ落ちたビル、その瓦礫で怪我を負い苦しむ人々を仮面シスター達が介抱し安全な場所に避難させていた…

先程まで、普通の生活を送り当たり前の小さな幸せを噛みしめながら過ごしていた人々の日常を一瞬で壊された……家族がいないユーノにとって高町家の人々との暮らし（正体を空かした時は士郎と恭也に道場まで連れて行かれそうになったが飛鳥と蓮、源三…更にはなのはが説得？してことなきを得た）は充分感じさせるものだった…だからこそその小さな幸せを、日常を壊した怪人に対し怒りがユーノの胸の内に込み上げていた

「……見過ごせない『今』を救うために僕は戦う！」

勇気を奮い立たせ叫ぶと同時に拳を構えバイソン亀怪人に殴りかかる

「もう、大丈夫だからね…お姉ちゃんが安全な場所に連れていく

から安心して」

仮面シスター十号に運ばれる子供の目に写った姿を見て

「頑張っ…て仮面…ライ…ダー…」

朦朧とする意識の中、自分たちの為に戦おうとするアイギスの姿を見て意識を手放した

更にすこし離れた場所では……

「さあ早く逃げなよ…串刺しにな・る・よ♪アハハハハハハ！！ああ最高！！」

全身に長い針？を生やしたヤマアラシみたいな怪人が逃げる人々に向け笑いながら針を逆立て無数に撃ち込んだ

ヒュバ！ヒュバ！ヒュバ！ヒュバ！ヒュバ！

鋭く鋭利な針が逃げまどう人々に当たろうとした瞬間蒼い閃光が現れる

ギィン！ギィン！ギィン！ギィン！ギィン！ギィン！

辺りに金属音が響き渡り針が地面に落ちた

其所にいたのは二振りの双剣を構えた騎士、黄色い瞳に鬼の角を生やし鋭い牙を模したクラッシャー、全身を黒地に蒼い装甲を纏い外套を翻した騎士

仮面騎士コルトが双剣【D・ブレード】を構え立っている

「何で邪魔するのかな？せっかく楽しんでたのにさ…」

「貴方は、貴方は命をなんだと思っているんですか！」

「プッハハハハハハ！あ～あ可笑しいな…命なんて放って置けば涌いてくるじゃないか」

その言葉を聞いた次の瞬間

ギャリイン！！

「危ないな…君、何でそんなにムキになるのかな？」

蓮…一瞬で間合いを詰めたコルトの肩口と脇腹めがけ無言で降り

下ろされた双剣を針で作った槍で器用に防ぐヤマアラシ怪人

「…貴方がなぜそう歪んだかは知らない、だけど…僕は貴方を止める！！」

「やってみなよ、僕の名前は『四十宮龍之介』、君の名前も聞こ……無駄か、此所で君は死ぬんだからさ！！」

針を逆立て至近距離からコルト目掛け撃つヤマアラシ怪人の針を寸前でかわしながら距離を取る

（強い、だけど負けるわけにはいかない！）

打ち出される無数の針の弾丸を数発喰らいながら距離を詰めコルトは素早く懐に潜り込みは双剣の乱舞を打ち込んだ

ズバ！ズバ！ズバ！ズバズバ！ズバ！

「グウウウ！」

無数の蒼白い斬檄がヤマアラシ怪人を切り刻むと同時に必殺技を放とうとした時、それは起こった

「ディーヴァ！【D・スラッシュ】行くよ！」

＞レ、レン…へ、へン…シンイジガ……ガガガガ！＜

突然ディーヴァの音声が途切れ、ノイズのみが流れた次の瞬間

パキャアアン！

全身の装甲が強制解除され全裸状態の姿が現れ、呆然とする蓮

「…何故変身が解除されたって顔をしているね…僕達の攻撃には君達のD-メット変身制御管制ＡＩに干渉するウイルスが組み込まれているんだ…しかも長期的に持続するタイプがね…さっき僕を止めるって言ったよね…止めてみなよおぉぉ！！」

丸裸状態の蓮に向け無数の針が撃ち込まれるが、辛うじてかわした先で、何かが壁を撃ち抜きながら現れた

「ぐはあ、ラウンドシールドを破るなんて……アイギスが機能停止する！…」

バイソン亀怪人の壁抜きタックルを受けうずくまるユーノ…蓮同

様に変身が解除されていた

「ぐあああああ！？」

叫び声と何かが空から落ちてきた

「ぐはぁ……変身が解けた？どうした！Ｄ！！」

空から落ちると同時に飛鳥も変身解除されＤも機能停止した事に驚きを隠せないでいた

「フフフ…貴方も子供だったんだ…ぶらさげてるピー（表現禁止）は立派ね…」

「……んなことよりヨォ、コイツら潰ししまおうぜ」

「へぇ、君と意見があったの初めてだよ…誰からやる？」

物騒な会話をする三体になす術もない三人に危機が迫りつつある中、

（Ｄが起動できない今、戦うことは出来ない…どうすればいい！？）

「面倒だから三人全員でコイツら殺しちゃおうか♪」

必死に考えを巡らすも妙案が浮かばず、自分達に無邪気な殺意を向け歩みよる三人の怪人

その時だった、遠くからバイクのエンジン音が響き音がした方に振り向く

ヴォオオオオン

キキイイイ！

バイクのフロントカウル中央が展開し飛鳥達と三怪人の間に割って入るとバイクから一人の男性が降りてくる

「飛鳥君、蓮君、ユーノ君無事か！？」

「あ、貴方は？」

ユーノの問いに対し彼は口を開いた

「俺の名は沖一也…其より三人とも早くここから離れるんだ！」

「わかったよ、沖さん」

沖の言葉に飛鳥は頷くと蓮とユーノと共にその場から離れ、それを見届けると三怪人と対峙する

「…誰だい君は…僕達の邪魔をするのかい？」

「ああ…あの子達をこれ以上傷つけはさせない！」

「只の人間があたし達に勝てるかしら？シャアアアアア！！」

その言葉と同時に襲いかかる蟷螂蜘蛛女の鋭い鎌が降りおろされるが

「ハアアア！」

それを水を受け流すかのような動きで鎌をかわすと懐に潜ると同時に正拳を打ち込んだ！

ドゴォ！！

重く鋭い正拳突きを受け蟷螂蜘蛛女はよろめき膝をつく
「俺の相手もして貰おうかあああ　！！」

叫ぶと同時に凄まじいスピードで突進するバイソン亀怪人、其れを紙一重でかわし同時に跳躍し半壊したビルの瓦礫の上に立つ

「いくぞ……変ンッ」

バッバッバッ…バッ！

腕を素早く動かし拳法の構えをとり両腕を正面に伸ばし花を包む形に手のひらを構え……

ゴッゴッゴッゴッ！

「…ンッ身！！」

叫ぶと同時に花を包む形に正面に構えた腕を素早く回すと光に包まれ現れたのは

白銀の仮面に赤い瞳が目立ち、黒字に白銀の胸アーマーとカバーが

閉じたベルトに白銀の腕と脚…人類の夢の為に生まれた【惑星開発用改造人間サイボーグＳ－１】またの名を…

「仮面ライダースーパー１！」

そう叫ぶと同時に地上に降り立つスーパー１、更に…

「…俺も手助けをしょう、スーパー１…」

現れたのはカーボゥイハットを被り、二振りの剣を携えた青年がスーパー１の隣に立つ

「君は？」

「俺の名は杉崎鍵…またの名を」

ピョンピョン！

紫色の小型の蠍ロボ、サソードゼクターがどこからともなく現れサソードヤイバーに飛び乗り溝にセットされる

＞ｓｔａｎｄｂｙ＜

「変身！」

＞Ｈｅｎｓｈｉｎ！＜

ゼクターホーンを押すと同時に電子音が響き、杉崎の体にヒヒイロカネで構成されたアーマーが展開装着され現れたのは、重厚な紫の装甲を纏った戦士

「仮面ライダーサソード！」

剣を構えスーパー1と並びたち、三怪人と相対するのだった

「君も仮面ライダーだったのか…今は…」

「目の前の敵を倒すのみだ、スーパー1！」

二人はそう言うと三怪人と相対するのだった…

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！！」前編

了

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能!?九番目の男あらわる!!」前編

オマケ

「飛鳥、沖一也さんって知ってるみたいだったけど知り合いなのかい？」

「沖さんはじいちゃんの親友で、確か赤心少林拳の達人なんだ」

「兄さん、沖さん大丈夫かな…」

現在三人は五号と共に怪我の治療をしながらメット状態のDとディーヴァ、ナックル形態のアイギスを見ていた

「…D、頼む返事をしてくれ…」

＞……＜

「ディーヴァ……」

＞……＜

「アイギス……」

＞……＜

語りかけるも反応しない相棒に只語りかけるしかなかったのだった

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！」中短

新種劣化版Ｄ改め三大怪人ｖｓ大地、杉崎、沖

飛鳥、蓮、ユーノ特訓開始！

海鳴市、繁華街

「さあ、僕を楽しませてくれるかな」

「あたしはあの紫の男に興味があるわぁ…」

「俺もだ…蟷螂一緒にやる……もう一人居やがるな出て来いよ！」

スタッ！

バイソン亀怪人の声に答えるかのようにもう一人の姿が現れる

「…俺の気配に気づくとはな筋肉ダルマ…」

「すかした態度とってんじゃねぇょ！その白い装甲を赤くしてやるよ」

売り言葉に買い言葉…バイソン亀怪人は標的を白い装甲を纏った戦士、Dアーマーを装着した南大地に定めた

其々、標的を決め三怪人に対し……

沖一也、仮面ライダースーパー1は無言で赤心少林拳の型を構え…

杉崎鍵、仮面ライダーサソードMも無言で剣を上段にし…

大地も銃を構え臨戦態勢を取る

一瞬の静寂支配する

ガラッ！

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！」

崩れ落ちた瓦礫の音がまるで合図かのように三怪人はスーパー1、サソードM、大地に向け地面を蹴り走り出すと同時に襲いかかる

「シャアアア！その固い服剥かせて貰うわあああ！！」

蟷螂蜘蛛女はサソードMに大きく鋭い鎌を降り下ろすが、

ガキィィン！

「無駄だ…」

ドゴォォ！

サソードMは体重をのせた重い拳を鳩尾に叩き込んだ、その重い拳を受け吹き飛び蟷螂蜘蛛女はビルに打ち付けられた

「どうした？白いの！俺とやりあおうぜええ！」

ズシン！ズシン！ズシン！

地響きを挙げながら凄まじい加速で突進するバイソン亀を紙一重…最小限の動きでかわす大地

サソードMが蟷螂蜘蛛女を大地がバイソン亀怪人の相手をしている頃

「僕を楽しませてよ！スーパー1！！」

自身の針を取り巨大化させ槍にするとスーパー1めがけ凄まじい早さで突きを放つが

スッ…ススス…

体を僅かに動かし高速で繰り出される突きを紙一重でかわしながら、槍を持つ腕を上へと弾き懐に潜り込む

「赤心小林拳、正拳突き！！」

ドゴォォ！！

「グハアアア！」

最小限の動きから放たれた重く鋭い一撃が山嵐怪人のボディに刺さり内部に大ダメージを与え、余りの一撃のまえに地面に倒れこんだが……

「や、やってくれたね！串刺しになれえぇぇ！ハアアアア！！」

全身の針を逆立てるとスーパー1目掛け、細く鋭い無数の針を打ち込んだ

シュバ！シュバ！シュバ！シュバ！シュバ！シュバ！！

風を切り無数の鋭い針が迫るなか、スーパー1はある構えを取った……

まるで小さな花を両手で包み込み守る型…

針があと少しと迫った瞬間

ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！

素早く的確に右へ左へ縦横無尽に流れるような動きで針を弾くスーパー1…この型こそ赤心小林拳奥義……

「赤心小林拳奥義、『梅花の型』……これの前にはあらゆる攻撃

も、憎しみと歪んだ悪意ある攻撃も無に等しい…トオオォ！！」

全て弾かれ唖然とする山嵐怪人を他所にスーパー1は空高く跳躍する

「スーパーライダー！」

太陽を背にし叫ぶと同時に拳法の構えを素早く取り体を一回転し山嵐怪人に必殺の一撃を解き放つ

「月面んッ！キイィィックウゥ！！」

重力制御能力で倍加された『スーパーライダー月面キック』が山嵐怪人のボディに決まり吹き飛ばされる瓦礫に突っ込みと同時に土煙が上がるが……

「逃がしたか…だが確実にダメージは与えた筈だ」

土煙が晴れた跡には小さなクレータがあるがその中心には姿がない……

どうやら土煙に紛れて逃げたようだと判断したスーパー1は杉崎…サソードMと大地の加勢に向かう

ブオン！ブオン！！

「やるじゃねえか、白いの！俺のパンチをかわしたのはお前だけだぜ！」

「……筋肉ダルマだけに力だけはあるんだな…」

筋肉ダルマとききイラついたのだろう、力をさらに強め大地をを殴り潰そうとする

「チイ、ちょこまかと！スパイダーネット！」

サソードMの体にスパイダーネットが絡まりその動きが止まり鎌を擦り合わせながらせまってくる

「フフ…切り刻んであげるわあああああ！シャアアアア！！」

鎌を激しく振り上げ蟷螂蜘蛛女は杉崎めがけて走り出しその鋭い鎌が降り下ろされようとした瞬間だった

「……キャスト・オフ」

『Ｃａｓｔ・Ｏｆｆ』

ゼクターホーンを叩くと同時に電子音声が響き渡り

ギギギギッ…パキャアアアン！

スパイダーネットが内側から膨らみサソードＭの装甲がはぜ、迫る蟷螂蜘蛛女にまるで砲弾の嵐のように体に打ち付けられた

ドガドガドガドカガガが！！

「シャアアア！？」

受けたダメージにその場に踞りながらも顔を挙げると同時に電子音声が響く

『Ｃｈａｎｇｅ・Ｓｃｏｒｐｉｏｎ』

サソードMの姿は先程までの重装甲ではなく動きやすく尚且つ洗練された装甲を纏った姿……

これがサソードの真の姿、サソードライダーフォームだ

「……行くぞ、Ｃｌｏｏｋ・ｕｐ!」

『Ｃｌｏｏｋ・ｕｐ!』

電子音声が鳴り響いた瞬間サソードＲの姿が消え姿を探すが見つからない…

ズバ!

「シャアアア?いったいどこから!」

ズバ!ズバ!

更に見えないナニかに斬られ翻弄される蟷螂蜘蛛女に

「これで終わりだ…ライダースラッシュ！」

『Ｒｉｄｅｒ・Ｓｌａｓｈ！』

「シャアアア！？」

タキオン粒子とポイズンブラッドをヤイバーに纏わせた斬撃が蟷螂蜘蛛女の体に横凪ぎで一閃され……

『Ｃｌｏｏｋ・Ｏｖｅｒ』

電子音声と同時にサソードＲが姿を現すと爆発する蟷螂蜘蛛女、しかし……

「……逃がしたか…あの影は一体…」

爆発跡には何もなくただ煙が上がってるだけだった

「…まさかな…」

一抹の不安を頭の片隅に置き、大地の元へ急ぐ杉崎を遥か遠くのビルからみる目…緑色の瞳を持ち大鎌を右に構え片手には気絶した蟷螂蜘蛛女を抱えた異形がたたずんでいた

＞お嬢、何故このようなことを！現在は観察するだけと決められて……＜

「……解らないの…アス…何故私は……何故……」

＞お嬢……戻りましょう＜

アスの言葉に無言で頷くと蟷螂蜘蛛女を寝かせ転移魔法陣で去る彼女…

その頃大地はバイソン亀怪人と交戦していた

「さつきの威勢はどうした！白いのお！！」

「……」

先程からバイソン亀怪人の凄まじく重い拳の連打を無言で回避する、まるでナニかを伺ってるかのようだ…

「考え事なんかするんじゃねえぇぇ！！」

「ぐ！？」

しかしそれも長く続かず遂に重い一撃をくらい鈍い音と同時に吹き飛ばされる

「どうだ？俺様の一撃をもう一発…なんだこりゃあああ！？」

バイソン亀怪人の両手両足を設置型バインドで拘束される…その間に大地は立ち上がると銃を構える

「…筋肉ダルマは所詮筋肉ダルマだな……」

大地はバイソン亀怪人の攻撃をかわしながら多数の設置型バインドを配置し絶妙のタイミングを伺っていたのだった

「くっ…こんなも、何故だ千切れねぇ！？」

「当たり前だ…じいさんが開発したお前ら新種に効く奴だ……お前はやってはいけない事をした一つはこの街をこんな姿にした事、もう一つは…聞く必要はないか」

もう一つとは飛鳥達を傷つけた事…流石に口に出して言うのは恥ずかしいらしい、しかし今は……

「…これで終わらせる…天……地……アース・グラビトン！！」

大地の回りに凄まじいエネルギーの奔流が溢れ銃口へと収束されそれが限界点に達し放たれ、高密度のエネルギーの奔流がバイソン亀怪人を包み大爆発が起こるが…

「……逃がしたか、新種劣化版Ｄへの対策を近いうちにじいさんと何とかしねぇとな」

「無事だったかい…えと君は」

「…南大地だ…あんたは？」

「俺の名は沖一也、新田博士とは旧知の仲だ」

そう言うと沖一也は手を差し出しそれを握り返す大地、そこに杉崎も現れた

「すまない…取り逃がしてしまった」

「ああ、俺もだ…手応えはあったからしばらくは出てこないと思うが油断は…」

「出来ねぇ…か」

黙り混む三人だったが、長居するのは不味いと考え仮面シスター達に事後処理を任せ新田屋敷に戻った

新田屋敷　地下秘密研究施設

同メンテナンスルーム

『チェック1、チェンジメカOK…チェック2、エネルギーメカOK…チェック3、パワーメカOK』

「ふう、異常なしか…新田博士はいつの間にチェックマシンの改良をしたんだ…」

少し疑問に感じながらメンテナンスルームの別フロアへと足を運び自動ドアが開いた時だった

「良かった…Dホントに目をさましてくれて良かったぜ」

＞ああ、わかったから涙と更けえぇぇ！錆びちまうだろおお！！＜

「ディーヴァ…うう…よかったよ…」

＞ほら泣かないの、折角のいい男が台無しよ＜

「アイギス…心配したんだよ」

＞心配をかけてすいません、マイスターユーノ＜

涙を流す飛鳥と蓮にユーノを見た一也は変わらないなと感じながら三人の所まで歩いていき

「飛鳥くん蓮くん二年ぶりだね、元気にしてたかい」

「「沖さん！」」

叫ぶと同時に駆け寄り再会を喜ぶ三人、そこに源三が姿を現れた

「久しぶりじゃの沖君、元気にしておったかの？」

「はい、おかげさまで…所で…」

「君が戦った怪人に関してじゃろ、其れについては後で話そう…飛鳥、蓮、ユーノ君、D達を蝕んでいたウィルスはミツキ君からの解析データのお陰で除去完了した…後でミツキ君にお礼を言うんじゃぞ」

「もちろんだぜ、じいちゃん」

「うん、じいちゃん」

「はい、源三さん」

ミツキさんにお礼を言う約束した三人、数分後源三は念のためにD達の起動テストをする事を告げテストルームに移動する

その頃なのは?達とアリサとすずかはと言うと

「アリサさん、ユーノさんとうまくいくにはどうすればいいでし

ょうか？」

「なのは？あんた大丈夫！？」

「ねぇねぇ、すずか！僕と飛鳥って熱々だよね！」

「何を言う！我と蓮がマグマよりも熱い！！」

「は、はやてちゃんにフェイトちゃん？一体どうしたの！？」

ある意味カオスな状況になりつつあった…

テストルーム

「じゃあ、じいちゃん始めるぜ…Ｄ－メット起動！」

源三、プレシア、大地、杉崎、沖一也が見守るなかＤ－メットを起動させる飛鳥、隣にいる蓮も同様に起動させメットを被る

「「変ンッ……」」

左腕を右斜め下に右腕を水平に伸ばし、足を肩幅まで広げる、蓮は勝手反対に構え素早く左腕を半円を描き腰に素早く置くと同時に右腕を左斜め上に構える！

「「…っ身！！」」

二人は同時に叫ぶ…しかし異変が起こった

「え、変身出来ない…もう一度だ…変ンッ身！！」

飛鳥に起こった異常、それは蓮も同様だった

「…ディーヴァどうして変身出来ないの？」

＞解らないわ…源三、飛鳥と蓮のナノマシンDを解析してくれないかしら？＜

「解った、沖君、プレシア君、すまんが手伝ってもらえんかの？」

源三の言葉にうなずき二人はテストルームの隣のエリア、データルームにてD達と飛鳥達のデータ解析を開始する

一時間後

「奴ら…飛鳥達のナノマシンDにもウイルスを仕込みおったな…」

空間スクリーンには飛鳥達の戦闘用ナノマシンDの未解明部分、ブラックボックスに迄ウイルス分布が示された赤い表示がされていた…これが変身を阻害する原因になっていた…

「先生、ミツキさんから送られた解析データを使えば…」

「それも考えたんじゃが……この三年間どうしても解析出来なかった部分、ブラックボックスにまでウイルスは浸食しておる…迂闊に使うと飛鳥達の命に関わるかもしれん」

『…シンヤとマリアが作り出した夢の技術を……先生、私はもう我慢できません！！』

「待つんじゃ…まだ時は満ちてはおらん、耐えるんじゃ」

源三に諭されＪは少し冷静になる、一也はスクリーンに表示されたナノマシンＤの詳細なデータを見ていた

（新田博士から聞いたことがあったが、ここまで高度な医療技術は見たことがない…人々を病苦から救う素晴らしい技術だ）

一也は二年前、源三からナノマシンＤの話を聞いていたのだが実物を見るのは初めてだったせいかやや興奮していた…

（…飛鳥君達のナノマシンＤ、三つのオリジナルＤに手を加え悪魔のＤに変えた人物…カイ・リューノス、夢を汚しあの子達の運命を狂わせた事を俺は許さない）

夢の技術を汚し二人の運命を狂わせたカイ・リューノスに対し怒りを静かに燃え上がらせ一也はある事に気付いた

「博士、何故Ｄ－メットは起動できたのでしょうか？」

「恐らくＤ－メットに登録された魔力波形パターンと生体認証のお陰じゃよ…」

Ｄ－メットが起動は可能…生体認証、魔力波形パターン…その時一也にある経験が脳裏に浮かんだ

「博士！飛鳥くん達がもう一度変身可能になる方法が一つだけあ

ります」

「沖君、それは本当か？」

「その為に１ヶ月三人を俺に預けさせてくれませんか」

「まさか沖君…アレをやる気ではないじゃろうな」

その言葉にうなずく一也、源三はその目をまっすぐ見据える…

そして……

「解った沖君、場所は家の所有する山を使ってくれ…くれぐれも飛鳥と蓮とユーノ君を頼む」

「はい、新田博士」

そう言うと一也は準備をするためにデータルームから出ていく

「新田さん、あの三怪人が姿を現すまでの期間はどれぐらいですか？」

「…沖君と君達が与えたダメージから予想して回復まで一月強…

ギリギリ間に合うぐらいじゃ」

「どう言うことだ、じいさん？」

ギリギリ間に合う…その言葉に今まで黙って聞いていた大地は口を開き尋ねた

「…沖君は変身システムを起動させるのに専用のコンピューターが必要だった…」

源三によると専用コンピューターを破壊され自力での変身不能になった一也は幼少期を過ごした赤心寺で赤心小林拳極意『無念無想』を会得する事で変身の呼吸を身に付けた

つまり今の飛鳥達の状態はまさにそれに該当していた

「要するにだ…D達のサポート無しでのナノマシンDと同調、『変身の呼吸』を身に付けさせようと言うわけか」

「なるほどな…だがユーノ迄連れていくのは何故だ」

「…沖君はユーノ君から何かを感じたのかもしれん…其より儂等は新たに現れた三体…仮に「ジェネラル」級と名付け対抗策を皆で考えよう」

そう言い源三達は新種劣化版D…『ジェネラル』への対応策を考える

尚、なのは達に飛鳥達が修行に出たと伝えたところ

「酷いですユーノさん…」

「僕も修行に行きた～い！追いかけていいよね！？」

「我をおいていくとは…蓮覚悟しておくのだな」

なのは？達の余りの変貌に気付いた源三達は検査をするも異常が見られなかったが、しばらくしていつものなのは達に戻ったという

新田家所有地

同山中

「沖さん、準備できたよ」
「…飛鳥くん、蓮くん今日から1ヶ月間、此所で赤心小林拳極意『無念無想』を会得するための修行を俺がつける」
「あ、あの沖さん、何故僕も…」
ユーノがおそるおそる手を上げ一也に聞いてくる
「ユーノくんのデバイス『アイギス』には重力を操る機能がついていたね…君には二つの技を伝授する」
「…僕は飛鳥達みたいに強くは……」
「…ユーノくん、君の中にある、思い描いてる強さとはなんだい？強さとは色々な意味がある、それは自分にしか見つけられないと俺は思う…其れをこの1ヶ月間の修行で見つけるといい」
其れを聞いたユーノは自分自身の強さを見つけると心の中で誓い、手早く胴着に着替え飛鳥達と一緒に一也の前に立つ…
「「「よろしくお願いします沖さん！」」」

「押忍！此より赤心小林拳の修行を始める…先ずはランニング行くぞ！！」

「「「押忍！」」」

この日から一也と飛鳥達の1ヶ月間の修行が幕を開けた…果たして飛鳥と蓮は変身の呼吸『無念無想』を身に付け、ユーノは力の意味を見出だすことが出来るのか？

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！」中編（一）

了

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！」中編

おまけ

移動拠点『ファクトリー』

同解析ルーム

J

「…明らかになのは君、はやて君、フェイト君の様子が違う…先生、彼女達のリンカーコアも検査しましたか？」

源三

『いや、まだ検査はしておらん…念の為にJ君にもリンカーコアのデータを送ろう…其よりも奴等の劣化版D生産プラントはまだ見つからないのかの？』

J

「今現在、クアットロ、ドゥーエ、ノーヴェ、セイン、セッテに調査をさせていますが所在はいまだに…」

源三

『……奴等の事だ、そう尻尾は見せんじゃろ…それと頼んでおいた

あれは仕上がっておるかの？』

J

「…アイギス用強化デバイスは後一月で微調整が終わります…」

空間スクリーンには銃器…回転式シリンダーが内蔵された籠手が映されていた

J

「…ユーノ君、新たな力を手にする前に心と身体を鍛えるんだ…力をみいだした時、この『D・ガントレット』を君に託そう…」

アイギス用強化デバイス【D・ガントレット】…果たしてユーノは手にすることが出来るのか

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！」中編

飛鳥、蓮、ユーノ、修行開始

ユーノ目覚める！

謎の青年＆amp;三怪人再びあらわる！

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！」中編

新田家所有地

同山中

奥深くにある大滝の前に映る三つの影…否、三人の影が滝に向け構え右拳、左拳…正拳を繰り出している

「「「哈！哈！哈！哈！哈！」」」

素早く正確に正拳を繰り出していたのは飛鳥、蓮、ユーノ（無限書庫には休暇を出している）は一也の指導のもと赤心小林拳を学び半月がたっていた……

「よし、今日はここまでだ」

「「「「押忍！」」」」

三人は正拳を止めると呼吸を整え一也と共に滝から離れ、近くにある山小屋へと戻っていく

その三人の姿を見て一也は

（この半月、よくついて来てくれた…ユーノ君も頑張っている…三人には今後降りかかる苦難を乗り越えるだけの『心』と『体』を鍛えなければ…ん？）

考えながら一也は山小屋へと戻りながら途中気配を感じ辺りを探るが敵意を感じなかったためその場を離れた

「ば、ばれたかと思った…」

「ノ、ノアお姉さま…少し場所を変えませんか？」

「…そうだなジェイダー」

山小屋から離れた場所で四人の様子を撮影するのはジェイダーとノア、二人はプレシアから依頼され現在盗さ……もとい撮影していたのだ

夕食を終えた四人はしばらくして近くに湧いていた温泉に入り修行の疲れをとっていたのだが……

「……己を大気と……」

湯に浸かりながら呟くのは赤心小林拳極意『無念夢想』の口伝……

飛鳥と蓮は言葉の意味を理解しょうと頭を捻らせる一方

「……」

岩肌に背を任せユーノは眠っている、この半月で飛鳥達には及ばないが確実に強くなっており、湯に浸かりながら一也もその成長には驚いていた

（もしかしたら、ユーノ君にアレを伝授出来るかも知れないな…）

いかなる苛烈な戦況下にあっても、大地に芽吹く草花を慈しむ心を失ってはならない

赤心小林拳の極意を表した型『梅花の型』伝授を考えていた

（…明日からはユーノ君に別なメニューを組むか……飛鳥くん、蓮くんが自身の身体にあるナノマシンDの呼吸…息吹を掴むには……）

温泉に浸かりながら三人のメニューを考える一也はゆっくりと湯に身をまかせ　しばらくして温泉から上がり山小屋に戻り座禅を一時間ほどしてそれから眠りについた

もちろん、三人の寝顔は忍び込んだノア&ａｍｐ;ジェイダーにしっかりと写されていたが…

翌日、早朝

朝食を食べ終えた三人が座禅の為に大滝へ向かおうとした時

「ユーノくんは今日から別なメニューに移ってもらうよ」

そう言うとユーノを連れだって別な場所へと向かう
しばらく歩き一也は足を止めた、辺りにはまだ花を咲かせない桜と梅の木が並び、その中心にはお堂がポツリと建っている

「……今日から此所で一人で鍛練をするんだ」

「え、僕一人で…？何故なんですか！？」

その言葉に驚き、一也の顔を見るユーノだったが表情を変えず語り続ける

「……この半月で赤心小林拳の基礎を納めた君に与える課題だ…
…冷気の中に身体を清める……それが君の求める力の答えになるだ
ろう」

そう言い背を向けると一也はユーノを残しその場から去っていく、
一人残されたユーノは……

「……わかりました沖さん、僕は自分の求める力を見つけて見せ
ます……哈ァ！哈ァ！」

お堂に荷物を置き胴着に着替え構えると正拳突き、飛び蹴り、回
転廻し蹴りを繰り出すたびに風を切る音が辺りを支配し日がくれる
までそれは続いたのだった

「「……ハアアアア…セイ、セイ、ヤアアア！」」

深く体全体に行き渡るように呼吸をした瞬間、正拳、上段膝げり、
廻し蹴りを繰り出す飛鳥と蓮、しかし動きに迷いがあった

（（……己を虚しゅうして自らの身体を大気と化す……氣に転
ずる……氣に転ずる！））

しかしその言葉の意味を理解しょうとするほど迷いが深まっていく
これを解せねば自身の変身が出来ない…二人は修行に行き詰まり始めていた

「……二人とも今日はここまでにしょう」

「沖さん、俺はまだ……」

「まだ半月ある、焦りは迷いを生む…」

「兄さん、沖さんのいう通りだよ…」

「…わかった蓮…」

一也と蓮に促され、頷くと三人は山小屋へと戻った、その夜、飛鳥は一人抜け出ししばらく歩く、昼間鍛練をしていた大滝に着くと、服が濡れるのにも構わず進んで行き歩みを止め構えた

（……何故だ、何故変身出来ない……）

真っ直ぐ、体重をのせた正拳が滝に向け撃ち込まれる…しかし激

しい水流の前に弾かれ手を押さえる

「……くそ！」

再び撃ち込むも弾かれまた繰り返す内に拳から血が流れ始めるも構わず撃ち込もうとした時腕を止められた

「…やめるんだ、飛鳥くん」

「沖さん、お、俺は……」

「…とりあえず戻ろう飛鳥くん、今は身体を休めるんだ良いね？」

「……」

無言のまま頷き、一也と共に山小屋へと戻る二人…その晩、飛鳥は初めて挫折感を抱いたまま眠りについた

そして十日後、

「ん、朝か…」

深夜まで修行をし力尽きたように眠りについたユーノはゆっくりと寝袋から出るとお堂の外に出ると穏やかな陽気と共に風が吹き春の香りを運んだ

「スウゥゥゥ……ハアアアアア」

それを胸一杯に吸い込むとあるものがユーノの目に写った、それは一輪の梅の花…ゆっくりと近づき其れを包み込むように手を添える

この十日間、ユーノは山を駆け、身体を動かし時に激しく時に静かに、自身が求める力を模索していた

そんな自分が目にも止めなかった花…小さな梅花を何気なく包み込むように手を添えている……

其れを見た瞬間答えが出た

（…そうか、僕が求める力は…大切な人達を守る為の力だ！）

「…ユーノくん、それが赤心小林拳極意『梅花の型』だ…」

「お、沖さん？飛鳥たちは！？」

「飛鳥くん達は最後の壁に当たっている、其れを越えない限り変身は出来ないだろう…だが俺は二人を信じる、此れより赤心小林拳極意『梅花の型』を伝授する、構えるんだ」

一也の花を包み込むような構えとその流れるような動きにユーノも合わせ梅花の型を教わる…此処に赤心小林拳の新たな若き拳士『ユーノ・スクライア』が生まれた瞬間だった

その頃、新田家所有の山中にある青年が姿を現す

年からして２０代中頃だろうか？服はまるで動きやすさを重視した作りで腰には変わった形状のベルトが巻かれていた

「…沖、此処にいる・あの二人もいる…」

片言だがしっかりした言葉、そう呟くとベルトの真ん中のパーツを外し手に持つと形が代わり其れを樹に向け投げた

すると先端からロープが伸びまるでターザンみたいに樹から樹へと移動する

果たして彼の正体は？

同時刻、同山中

「「……」」

大滝に打たれながら二人は座禅しながら自然の息吹を、自身の息吹を感じ取ろうとする

意識を回りと一体化し自身の息吹を…ナノマシンDの息吹を感じ取ろうとする

―ナノマシンDは生きている―

飛鳥たちが修行に出る前、源三が告げた言葉

ナノマシンDは生体部品で構成されており理論上その数は減ることはない…【しかし変身時に放つ必殺技に分離術式と分離した直後に相手の体に治療用ナノマシンDを打ち込む…その度に数は減り、現状三回しか必殺技が使用が出来ない（現在は四回可能）】

生きているなら命の鼓動、息吹を感じD‐メットと同調し変身は可能だと言う結論に達したわけだった

しかし未だにその息吹を感じる事が出来ず、現在に至る

（（……感じるんだ…生命の息吹を…氣を感じるんだ））

滝に打たれながら息吹を感じ取ろうとする二人……しかし突如爆音が響き渡り遅れて爆風が二人がいる場所にまで届いた

飛鳥たちがいる場所から離れた山の中腹に巨大なクレーターができ、その中心には先の戦闘で戦った三怪人の姿が煙の中から姿を現す

「転移魔法で来たのはいいけどポイントがずれちゃったね……此所にあの二人がいるんだね蟷螂♪」

「間違いないわ、ウイルスの反応が近いわぁ…しゃあああピー（掲載禁止用語）をピー（掲載禁止用語）、ピー（掲載禁止用語）してあげるわ…仮面ライダーD」

「俺はあの翡翠色の目をした野郎を叩き潰す…テメエらはあの二人を殺ってきな」

「ああ～行っちゃった…仕方ないね蟷螂、僕達はあの二人を…」

「「串刺しにして／切り刻んで／やる」」

ユーノを標的に定め先にいったバイソン怪人を見て溜め息をつく二人は残された飛鳥と蓮に定めウイルスの反応を頼りに向かっていく

……今変身が出来ず、赤心小林拳極意『無念無想』を会得していない飛鳥と蓮に最大の危機が迫る

第二十三話「D、コルト、アイギス変身不能!?九番目の男あらわる!」中編

了

第二十三話　「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！」中編

おまけ

？？？

「…沖どこにいる？」

樹から樹へ飛び移りながら青年は一也を探す…しかし爆音と爆風を感じた

？？？

「ガアアアウゥ…沖…わかった、二人、守る…ジャングラー！」

青年はそう呟くと甲高いエンジン音とともに現れたバイク、【ジャングラー】に乗ると飛鳥と蓮がいる場所へ向かうのだった

第二十三話「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！」後編

飛鳥、蓮…目覚める！

六番目の男あらわる！！

第二十三話「D、コルト、アイギス変身不能!?九番目の男あらわる!」後編

飛鳥たちに蟷螂と山嵐怪人が迫ろうとしている同時刻、

次元空間内移動拠点「ファクトリー」ではJ、ウーノ等の手によってアイギス用強化デバイス【D・ガントレット】の最終調整作業が終わろうとしていた

『【D・コア】…D・ガントレット装着完了……』

デバイスルームでは赤と青の無数のケーブルがついた籠手、【D・ガントレット】が鎮座しておりケーブルから疑似魔力が供給され、シリンダー【D(ディメンジョン)・コア】が輝きだす

「…魔力圧縮率、収束率規定値をクリア…」

「【D・コア】稼働確認…同調率、７０、７５、８０、８５、９０、９５、１００!臨界突破…安定稼働成功しました!!」

第二十三話「D、コルト、アイギス変身不能!?九番目の男あらわる!」後編（一）

其れを聞きＪは顔を緩ませた、何故ならこの一月寝る時間を惜しみ【Ｄ・ガントレット】の最終調整に費やしていたからだ

新種劣化版Ｄ『ジェネラル』級の出現は少ない戦力で戦う飛鳥達の弱点をついた作戦を取っている…現在戦力強化の装備も開発中だが五割も出来ていない

そこで本来レスキュー用Ｄ・Ａ・Ｓ【アイギス】を戦闘用へとバージョンアップするため強化デバイスの開発に踏みきり今完成したのだった

もちろんプレシア、源三、Ｊの技術の集大成であるためアイギスの基本スペックを通常よりもはるかに上回り、その力は飛鳥達、仮面ライダーＤ、仮面騎士コルトと並ぶ能力を持つのだ

反面、装着者の技量に依存すると言う欠点もあり今回の一也の修行は渡りに船だった

「後は先生達に【Ｄ・ガントレット】を転送…」

『Ｊ君、不味いことになった！【ジェネラル】級が活動を開始したわい、最悪な事に飛鳥達が修行をしとる場所に現れおった！！』

「なんですって！ウーノ！！」

「はい、チンク達に【D・ガントレット】とマシン【イージス】を転送ですね」

「クアットロ」

「はい、転移座標軸…海鳴市【新田屋敷】……転送開始！！」

【D・ガントレット】を【マシンイージス】後部ラックに格納すると転送ポートへカタパルトで移動し固定と同時に光に包まれ転送された

「チンク、ディエチ、セイン、セッテ…飛鳥達を守ってくれ」

一人、飛鳥達の無事を祈るJの肩に手が置かれ振り返るとウーノとクアットロが立っている

「J、今はあの子達を信じましょう」

「私達の妹達は必ず飛鳥ちゃん達を守りますから…ねJお父様～」

「クアットロ、ウーノ…ありがとう」

Jは二人に微笑むとなんか照れた顔をしたウーノとクアットロは残った仕事を片付けると告げると去り、其所にはJだけが残された

「ユーノ君…君を私達の戦いに巻き込んでしまってすまない…全ては私自身の弱い心のせいだ……それでも私は、私達は戦うしかなかった」

バイザーに手を掛け外すとその金色の瞳から涙が一筋流れ落ちる

「…私達が産み出した夢の技術を『悪魔』へ変えた最高評議会……飛鳥と蓮からシンヤとマリアを奪い生体兵器に改造し、罪なき人々から当たり前の幸せを奪いつづけるお前達だけは許さない……例えこの命が尽きようとも…必ずお前達の野望を打ち砕く！」

Jの静かな怒りを秘めた言葉が彼以外いないデバイスルームに響き渡るのだった

新田家所有地、同山中

「……以上が赤心少林拳『梅花の型』だ…」

花を包み込む型を解き一也がそう告げると、ユーノは一也の正面に立ち拳を手のひらに合わせ一礼をする

「沖さん、赤心少林拳『梅花の型』伝授ありがとうございます」

「修行を終えたとはいえ日々の鍛練を怠らないように…ユーノくん、気づいているかい…」

無言で頷き辺りを見回した時、何かが風を切りながら黒い塊が飛んでくる

それを寸前でかわすと先程まで二人がいた場所が破壊音と凄まじい衝撃を伴い砕け散る

「ちっ！かわしやがったな翡翠色！！」

土煙が晴れると同時に声が聞こえ、大きく抉れた地面の中心にあった黒い塊が動きだし頭と腕と足が生えその姿をあらわす

「劣化版Ｄ…いや新種劣化版Ｄ『ジェネラル』……！まさか飛鳥くん達の所にも！！」

「ああ！今頃蟷螂と山嵐があのガキ共を切り刻んでる頃だぜ…」

「沖さん、飛鳥たちの所に行ってください…あの怪人は僕が引き受けますから」

「…ユーノくん、危ないと判断したら必ず引くんだ…いいね」

「はい…飛鳥たちを頼みます…行くよアイギス！！」

＞イエス、マイスターユーノ＜

現在、変身が出来ない飛鳥たち元へと一也がその場から離れ、ユーノとバイソン怪人がその場に残されアイギスを右手にはめ赤心少林拳の構え

「……変んッ身……」

叫ぶと分子レベルまで分解された楯を模したアーマーと鎖が展開し身体に装着され同時に翡翠色の魔力が起こした風に包まれ弾けあらわれたのは…

翡翠色の瞳に十字架と楯を模した仮面、その体を白い楯と鎖を型どったアーマーを纏った戦士

かつてＪが使っていた試作ＤＡＳ【Ｒ】を基に生まれた人々の命を救うためのＤＡＳ……人を、大切な人達を守りたいと願う少年に、Ｊから飛鳥へ、飛鳥からユーノ・スクライアに託された

人々の命を大切な人達を守ると誓った少年の決意と共に現れたその戦士の名は！

「僕は、仮面ライダー・アイギス！！」

赤心少林拳の構えと同時に名乗りを上げバイソン怪人と対峙する

「お前も仮面ライダーか！丁度いいじゃねえか…リューノスの野郎の思い通りってのは癪だかよ……楽しもうぜぇアイギス！」

地面を蹴りユーノ、アイギスの間近へ凄まじい加速をつけ突進してくるが…其れを紙一重でしかも最小限の動きでかわし、再び突進してくるが右へ左へとかわすアイギス、一月前のユーノだったらシールドで防御するので精一杯だった

しかし今は違う、一也の指導もだが共に高めあう存在、飛鳥達がいたのもプラスとなり短期間での肉体強化…更には赤心少林拳の基礎を納め極意『梅花の型』をも習得したユーノの動きは一月前とは段違いだった

「くそ！ちょこまかと…コイツを喰らいなあああ」

攻撃が当たらない事に痺れを切らし身体を丸め回転し始め先程の黒い球体へと姿を変え縦横無尽に駆け巡りながら襲いかかる

「く、動きが速い…」

その時、脳裏にある言葉が浮かんだ

―ユーノくん、目が見えなければ耳を澄ませ肌で相手の気配を感じるんだ―

（気配を肌で、装甲越しで感じる……）

「どうしたアアア！俺の動きについてこれねえみたいだな！潰れなあああ！！」

凄まじい加速を利用し迫るなかアイギスは静かにある構えを取りあと少しで当たろうとした寸前

「……見えた！ハアッ！！」

翡翠色の瞳が激しく光輝くと同時に動き凄まじい加速でつつこむ
黒い球体をその手で弾き、球体は地面激しくぶっかり姿を元に戻し
倒れた、アイギスが構えた型それは…

「…出来た…赤心少林拳『梅花の型』…」

花を包み込む様な構え…梅花の型を構えながらバイソン怪人を見
る

「潰す、潰してやる…ウガアアアア」

今度は全身から突起上の物を出すと再び突進しょうとした時

「ユーノ！コレを！！」

声が聞こえた方を向くとなにかが飛んでくる、其れを受けとり見
ると籠手だった

「…Ｊから君に託された新たな力【Ｄ・ガントレット】だ」

チンクの言葉を聞くや否や素早くアイギスにセットすると音声が
鳴り響く

＞【Ｄ・コア】コネクト開始…アイギスＶｅｒ・?起動します＜

同時にアイギスの全身の装甲が量子化され新たな鋭く厚い装甲を形成し仮面にも金色の装甲が追加される

アイギスの新たな姿……『仮面ライダーアイギスＶｅｒ・?』が姿を現す

「姿が変わっただと…所詮こけおどしだ！ガアアアア！！」

再びその姿を鋭い突起が生えた黒い球体に変えアイギスに迫るが先程の動きとは断然違う

まるで動きを予想したかのような回避をとった次の瞬間、翡翠色の瞳が輝いた

「…ハアッ、セイヤアアア！！」

襲いかかる球体めがけ鋭くそして体重を乗せた一撃、正拳突きを中心めがけ打ち込んだ

「ガアアアア！？」

「今だ！とおぉぉぉ！！」

たまらず球体から怪人体へ戻ったのを見逃さず空高く跳躍し一回転し構えた

その足先に翡翠色のミッド式魔方陣が展開されると同時に【D・コア】が稼働し重力波がバイソン怪人の周囲に発生し動きを止めた

「ぐ、グガアア…身体が動かねぇ」

「ハアアアッ！グラビティ・ブレイカー！！」

ミッド式魔方陣を蹴り抜くと同時に翡翠色のエネルギーを纏い凄まじい加速と突進力でバイソン怪人の胴体を蹴り抜き地面を抉り抜きやがて止まり振り向く

「ば、バカな…この俺様が……グ、グアアアアア！！」

叫ぶと同時に大爆発が起こりやがて収まると爆発の中心で気絶した人物を見てユーノは思い出した

「確か、二ヶ月前から行方不明だったプロレスラーだったよね…？五号さん」

「ユーノ、Ｊからこれも渡すように頼まれていたものだ…名前はマシン【イージス】性能は飛鳥達のマシンと大差はない使ってくれ」

「マシン【イージス】…Ｊさんありがとうございます、五号さん達は早く飛鳥達の所へ…」

翡翠色のマシン【イージス】に跨がり五号達に促すが…

「強力な助っ人が飛鳥達の元に向かっている…それにあと一人が二人の近くにいる」

強力な助っ人、それを聞いて頭に浮かんだのは仮面ライダーサソード、杉崎鍵と沖一也、仮面ライダースーパー1だけの筈…あと一人とは一体誰なのか、その疑問に答えるように新たな仮面シスター六号が口を開く

「大丈夫だよ…彼もまた仮面ライダーだから…（野生児なだけどね）」

ここに今自分を除き仮面ライダーが三人いる…其れを聞き安心したユーノはまだ見ぬ仮面ライダーに飛鳥達の事を心の中で頼むのだった

その頃…

「あれ?どこいったかな♪…隠れてないで出てきなよ!!」

身体から無数の針を岩に向け撃つと砕け煙が舞い上がる、煙が晴れると飛鳥と蓮がD-メットを被り立ち腕を素早く動かし構え

「「変身!……」」

叫ぶも姿は変わらなかった、無念無想を会得していない二人の前に蟷螂も姿をあらわした

「やああっと見ぃつぅけたああ♪赤い瞳は私の獲物よ…アラシ」

「じゃあ僕は黄色い瞳を串刺しにするか…早く聞きたいなぁ君達の悲鳴が」

まさに絶対絶命…針を槍状に巨大化させ手に持ち、巨大な鎌をな

らしながら迫った時だった

「ガウウゥゥ！！」

森の中からナニかが二人に加速しながら飛びかかってきた

「ぐあ？なんだこいつ！！」

「しゃあああ、何よあんたは！！」

体当たりをしその反動を利用して彼は二人の元へと着地する

「あ、あの貴方は？」

「オレ、アマゾン、沖に、二人を、守る、頼まれた」

「「アマゾン…」」

ニッカリと笑う青年の口から沖の名前が出た…飛鳥と蓮はアマゾンと名乗る青年にいきなり抱き抱えられ跳躍した

先程までいた場所が無数の針が打ち込まれ爆発し消え去る

アマゾンは木々を伝いながら器用に移動し安全な場所におろした

「飛鳥、蓮、沖、ここに来る、だから、ここで待つ」

「わかった、アマゾン…」

其れを聞きニカッと笑うとアマゾンは二体がいる場所へと向かう

「お前達、ここから、先、行かせない」

「只の人間があたしらに勝てると思ってるのかい…ふざけてるわねぇぇ！」

いきなり地面を蹴りアマゾンへ迫りその巨大な鎌を降り下ろすも変則的な動きでかわされ苛立つ蟷螂に地面に手を突きドロップキックを顔へ打ち込む

「しゃあああ、あ、あたしの顔を傷つけたわね！」

「蟷螂、援護してあげるよ」

告げると同時に無数の針をアマゾン目掛け弾丸のように打ち込む、流石にかわしきれず無数の傷を負ったアマゾンはある構えを取った

「ガウウゥゥ…アァ――――マァ――――ゾォオオ――――――ン」

山全体に声が響き渡り同時にアマゾンの姿が変わっていく

蜥蜴を模した仮面、首には白いマフラーが風に揺られ、全身にまだら模様の皮膚と背中には大きなヒレ、両手足は黒い手袋とブーツ　左腕には奇妙な腕輪が填まっている

古代インカ帝国の秘術を用いオオトカゲの能力を持ちインカの秘宝ギギとガガの腕輪を守る守護者…その名は

―仮面ライダーアマゾン―

「何よ！こいつも仮面ライダーなの！？」

「リューノス、仮面ライダーがこんなにいるなんて聞いてないよ…だけど一人で僕たちに勝てると……」

「一人じゃない……」

何時の間にか変身を終えた仮面ライダーサソードがサソードヤイバーを構え立っている

「…サソード、守るぞ…」

「ああ、行くぞアマゾン！」

二人は二大怪人へと相対し同時に戦闘を開始する

一方、一也との合流ポイントで待っている飛鳥と蓮、背後からの音で振り向くとスーパー1が立っている

「沖さんか…脅かさない……うわ！」

風を切る音と同時に本能的に身体をよじらせると先程まであった木の幹に穴が開いている…空けたのは銀の腕、スーパー1の手刀だった

「お、沖さん！どうしたの！！」

「……」

蓮の問いに答えず無言で拳を繰り出すスーパー1、それを紙一重でかわすも胴着の肩口が切り裂かれ血が滲み出てきた

「……蓮！こいつは沖さんじゃない！！」

「え、だ、だってあの姿は…」

「上手く作ったつもりだろうが…細かい部分が違う！うわっ！！」

今度は飛鳥に目掛けて回し蹴りを胴体に打ち込まれるが寸前で後ろに飛びダメージを少なくするがそれでもきつい

「に、兄さん！うわっ、離せ！」

蓮に素早く近寄りその腕をつかみ持ち上げる偽物

「う、うおお！蓮を離せえぇ！ヤアア！！」

飛鳥は跳躍と同時に偽物の顔面に正拳突きを撃ち込もうとするが、逆にその腕を捕まれ蓮同様持ち上げられ移動し始める

「くそ、離せ！おらッ！イタタタ」

変身していない飛鳥たちでは偽物にダメージを与えられず、そして足が止まった

目の前には深い渓谷が広がり飛鳥達は崖っぷちに宙ぶらりんの状態だった

「待て、二人を放すんだ！」

『アギャ、本物がようやっと来たか…動くなよ沖一也…仮面ライダースーパー1でないとコイツらを落としてやるぜ』

其所に一也が姿を現し偽物と対峙する

「沖さん…本物なんだね」

「すまない、途中で俺と同じ姿をした奴と戦っていたんだ…カイ・リューノスその子達を返せ！」

『アギャ！だったら変身を解けよ、そうすれば返してやるよ…さあ変身を解け！』

無言で頷くと一也は変身を解いた、それを見た偽物は意外な行動に出た

『約束通り返してやるよ……受け止められたらなあアギャアギャアギャアギャ！！』

飛鳥達の腕を握ったまま腕を振り回し谷底目掛け投げた

「「ウワアアアアアアアアア！！」」

「飛鳥くん、蓮くん、く！変身！！」

谷底に堕ちていく飛鳥達を助けるため変身した時何かに遮られた

『アギャ、お前の相手は俺だスーパー1！』

「ぐ、そこをどくんだあああああ！！」

スーパー1対偽スーパー1の戦いが始まる中、谷底へ落ちる飛鳥達は死を感じた…変身出来ずにこのまま死ぬのか、死んだら誰が劣化版Dから人々を守るのか…

すべての思い出が走馬灯のように二人の頭に流れた時、心が無に

なった

只あるのは己の心臓の音しか聞こえない…しかしナニかを感じ耳を澄ませる

規則正しい心音に近い音、其れを感じながら二人は悟った、これが自分達の中にある戦闘用特殊ナノマシンDの鼓動…息吹なのだと感じ取った瞬間光が広がった

地面まで後僅か…しかし二人は落下しながら変身の構えを取った

右腕をを水平に左腕を右斜めした構えに対し、蓮は逆の構えを取り腕を素早く回し構えそして息吹を感じ地面まで後僅かと迫った次の瞬間

「「変んっ身!!」」

叫び声と同時に谷底に爆発が赤と蒼のエネルギーが巻き起こった

第二十三話「D、コルト、アイギス変身不能!?九番目の男あらわる!」後編（一）　了

その（二）に続く

第二十三話「D、コルト、アイギス変身不能!?九番目の男あらわる!」後編

おまけ

???

薄暗く地下を思わせる施設に二つの影が揺らめく、

三号
「二号、ここで間違いないんだな?」

二号
「やっと見っけたわ…劣化版D生産拠点『D・プラント』…」

二人は現在、ある世界においてようやくD・プラント発見に成功したのだった…だが場所に驚きを隠せないでいた

三号
「まさか、第97管理外世界にあるとは、灯台もと暗しとはこう言うことか」

二号
「三号、座標マーカーはセットしたから引き上げましょう…」

三号
「そうだな、これで飛鳥達が戦わずに普通の生活を送れるようになるな二号」

二号
「そうね、クアットロ転送お願い」

クアットロ
『わかりましたお姉さま転送しま～す』

光と共に消える二人、しかし飛鳥たちにとって心と体が傷付く戦いへの序章に過ぎなかった事に気付かなかった

第二十三話「D、コルト、アイギス変身不能!?九番目の男あらわる!」後編

アマゾン、スーパー1との共闘!

そして嵐の前の静けさ……

第二十三話「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！」後編

「「変ンッ身！！」」

落下する二人の、飛鳥と蓮の叫び声と同時に紅と蒼のエネルギーの奔流がぶっかりあった瞬間、凄まじい爆発と衝撃が谷底全体に響きわたった

「飛鳥くん、蓮くん！」

『アギャアギャアギャ！よそ見してる場合かぁ！！』

拳と蹴りを織り混ぜながら偽スーパー1と殴りあう一也の目の前で起こった爆発、場所に向かおうにも偽スーパー1…カイ・リューノスがその行く手を防がれ二人の安否を確認する事が出来ない

『どうしたスーパー1！お前の力はそんなものか！！』

「チェーンジ！エレキハンド！！ハア！」

一也が叫ぶとシルバーハンドが青く表面にパネルが付いたブルーハンドへ代わり三億ボルトの高電圧の電撃を偽スーパー1に飛ばす

『何?ギギガアアアア!?』

「どうやらファイブハンドまで再現出来なかったようだな…」

三億ボルトの電撃を受け偽スーパー1は谷底めがけ落ちていくのをみながら一也は呟くと同時に跳躍する

『く、くそ身体が…動かねぇ…奴は…スーパー1は…ハッ!』

落下しながら偽スーパー1…カイ・リューノスが見たのは真昼の月

空には真昼の月の中心に何かが、小さな点が徐々に大きくなっていく

「…打ちえぬ瞬間に…繰り出す…それが極意だ」

『アギャ!ス、スーパー1!?ぐあ?なんだ……これは重力波だ…と…』

重力波が襲いかかり落下するスピードが増していく偽スーパー1目掛け右足を向け…

「スーパー！ライダー！月面キイック！！」

凄まじい加速と重力波を纏った『スーパーライダー月面キック』は偽スーパー1の身体を蹴り抜き谷底に着地すると同時に空中で大爆発を起こし破片が辺りに散らばる

「やったか…飛鳥くん、蓮くん無事でいてくれ！」

先程、飛鳥達が落下した場所に呼び出したVマシンを爆発地点へと走らせた

第二十三話「D、コルト、アイギス変身不能！？九番目の男あらわる！」後編（二）

「痛たた…蓮無事か？」

「うん、兄さん…僕たち変身できたんだね…」

「…あの時の感覚が沖さんが言った赤心少林拳極意『無念無想』だったんだな」

そう言い互いの身体を見る、あのウィルスを打ち込まれる前と大差が無いのが解る

「兄さん、あそこにいるの畢ちゃんだよね」

蓮に言われ強化された目で見ると何かを書きながらこちらを見ている

「取り敢えず念話で話して見るか『お～い畢ちゃん…』」

いきなり念話が届いたのに驚くも飛鳥の説明聞いた畢ちゃんはコクリと頷くと森の中へと姿を消し暫くすると、エンジン音を響かせながらVマシンに乗った一也が二人の近くに止まり降りて歩いてくる

「飛鳥くん、蓮くん、怪我はないかい？」

二人の変身した姿を見てあの時起こった爆発は変身時に発生した魔力エネルギーの奔流だと気付き安堵する

「飛鳥くん、蓮くん今アマゾンと杉崎君が君達を襲った怪人と交戦している、応援に向かおう！」

「「はい、沖さん！ジェイダー／ユニコーン！！」」

頷くとマシンを呼び出す、遠くから甲高いエンジン音を響かせジ

ェイダーとユニコーンが現れそれに跨がり杉崎とアマゾン達がいる場所へ甲高いエンジン音をあげ走るのだった

――――――――――――――――

「ケケ―！」

「…ちょこまかちょこまか動くんじゃないよ！」

全身の針を逆立てアマゾンめがけ打ち出すが木々を蹴り、または楯にしながら山嵐怪人の弾丸のような針を回避し木々を強く蹴り攻撃を仕掛ける

「ケケ―！」

猿みたいな構えと共に飛びかかり山嵐怪人の顔面を引っ掻き回す

「グアアア！？こ、この！！」

アマゾンの素早い動きに山嵐怪人は翻弄される一方

「しゃあああああ！！」

大きく鋭い鎌を杉崎…仮面ライダーサソードに右、左、逆袈裟と風切り音を鳴らしながら振り下ろすもすべて紙一重でかわす

それもキャストオフしていない状態…マスクドフォームでだ…

「ハァ！」

マスクドフォーム時の重さを利用した拳が蟷螂蜘蛛女の鳩尾に綺麗に決まりたまらず膝をついた

それを見ながら杉崎は…

（新田さんが言うには劣化版D…ジェネラルは動物や昆虫の遺伝子に劣化版Dをプラスした物に人を取り込み完成するらしい…その戦闘力はジュエルシードを取り込んだ劣化版Dと同等、それ以上だと言ってたな）

しかも人間を取り込みストレス、負の感情に反応し力を増幅し知性も備え飛鳥達の弱点をついた作戦をとる

（もしジェネラルが飛鳥達の弱点をついた作戦をとるとしたら…ま

さか）

「余所見してる場合かい！しゃあああああ！！」

思考の海から引き戻され見ると再び襲いかかる蟷螂蜘蛛女の一撃を交わし距離を置く

その時アマゾン達と怪人の間に三台のバイクが土煙と甲高いエンジン音をあげ間を割って入る

「アマゾン、杉崎君無事か？」

「スーパー1、それに飛鳥、蓮、遂に変身できたんだな！」

「うん、鍵兄さん…変身できたんだよ」

「アマゾン…一緒に戦おう！」

変身出来た飛鳥達の姿を見て安心する杉崎の所にアマゾンも歩み寄り並び立つ

「沖、飛鳥、蓮、杉崎、…いくぞ」

「うんアマゾン！コール、Ｄ・ブレード！」

「解ったアマゾン、キャスト・オフ」

『ＣＡＳＴ・ＯＦＦ』

「行くぞ！劣化版Ｄ…いやジェネラル！！」

「…いくぜ！」

武器を、又は拳を構え山嵐怪人と蟷螂蜘蛛女と対峙する

暫しの静寂

一陣の風が舞う、まるでそれが合図といわんばかりに地面を蹴り飛鳥達に迫る蟷螂蜘蛛女と山嵐怪人に対し振り下ろされる鎌が、弾丸のような針が打ち出されるも

「赤心少林拳『梅花の型』！」

皆の前にスーパー1が立ちはだかり襲いかかる針の弾丸のを弾きパラパラと地面に落ちその背後から四つの影が躍り出る

「え、う、嘘!!しゃあああああ!」

「ケケ―!大・切・断!!」

「……D・スラッシュ…斬!!」

「ギ、ギシャアアアアアアア!!」

蟷螂蜘蛛女の蜘蛛の糸と鎌の連続攻撃をアマゾンとコルトのダブル大切断?が蟷螂蜘蛛女の身体ごと十文字に大きく切り裂きその横をすり抜け断末魔を挙げ大爆発する

「か、蟷螂!やってくれたね!!」

「飛鳥!俺に合わせろ!!」

「杉崎兄さん!わかった!」

蟷螂をやられた事でヤケを起こした山嵐怪人は二人に襲いかかったときなにかに拘束される

「グ、これはチェーンバインド？ハッ！！」

「ライダースラッシュ！」

「ギアア？」

タキオン粒子とポイズンブラッドをヤイバーの刀身にみなぎらせるて上段に構え山嵐怪人を切り裂き更に…

上空で自身の脚部装甲にDフォームを展開、同時に各部の魔力スラスターを全快にして逆上がりみたいに回転し始め真紅の回転鋸に変わり速度を増し放たれた

「ウオオオ！ライダーワイルドスラッシャー！！」

―ライダーワイルドスラッシャー…体育の授業中に逆上がりしていた時に閃いた必殺技、しかし使用したら必ず犬神家みたいに地面に突き刺さる欠点がある―

ギャャリィィ！ギャギャリイイイン！ギャャリィィ！ギャギャリイイイ！！

「ギ、ギャアアアアア！！」

凄まじい加速と風切り音鳴らし身動きの取れない山嵐怪人の身体を縦横無尽に真紅の回転鋸が切り裂き最後の横凪ぎ一閃を受け絶叫を挙げ爆散する

ボゴォ！

直後、飛鳥は前回同様犬神家みたいに地面に突き刺さった

「「「「あ、飛鳥（くん）／兄さん！？」」」」

――――――――――――――――――――

ジェネラルの素体になった人達を変身を解いた一也と杉崎、蓮、仮面シスターたちが木陰に休ませ介抱するが一人足りない

あの山嵐怪人、またの名を四十宮龍之介…飛鳥と杉崎の攻撃に耐えきり土煙と共に消え去った

去り際に『…敵は身近な場所にいるよ…リューノスは君達に最高の苦しみを与えたがってるみたいだしね…じゃあね♪』

最高の苦しみを与えたがっている…何故リューノスは自分達に苦しみを与えようとするのか、考えるが答えが見つからない

「…！飛鳥、これ食べる、元気なる♪」

「やめろ～アタイを食べるな～」

犬神家状態から助け出され考え込む飛鳥にアマゾンが差し出したのは紐で縛られもがくノア…一旦考えるのを止める

「ア、アマゾン？ノア食べられないから…そうだ畢ちゃ～ん」

そこで林に向け声をかけた、すると林の中からなにかが飛び出してくる

「呼んだ飛鳥ちゃん…ちっこいの見っけた…ジュルリ」

重箱を持ったちっこいの大好き畢ちゃんが熱い視線をノアに送っているとアマゾンが近寄る

「畢、ノア、あげる」

「い、いやだあああああ！」

「…冗談だから…やめてアマゾン…どうしたんだ？」

「飛鳥、戦い方、ムラサメと似てる」

「ムラサメ？」

「…ムラサメ、ＺＸ（ゼクロス）腕から、紐出す、相手縛り上げる、戦いする」

飛鳥の戦い方がムラサメ…ＺＸという人に似ているらしい

飛鳥の戦い方は腕の装甲からチェーンバインドを出し縛り上げ必殺技を叩き込むモノ…飛鳥はムラサメ、ＺＸに会ってみたいとおもいはじめた

「飛鳥ちゃん…お昼も近いし皆でお弁当食べよう…」

服の裾（空手着に着替えた）が引っ張られ見ると畢ちゃんが大きな重箱が置かれた御座の上へ皆をつれてくる

しかも…

「ハハハハハ！素晴らしい景色だ蓮、１ヶ月も我を寂しい思いをさせた罪は重い！」

「は、はや姉？やっぱりお祖父ちゃんにもう一度検査受けて！」

「…ユーノさん、はい」

「あ、ありがとうなのは」

何故か、なのは達の姿もある…そこにいきなり視界を何かで塞がれる

「だ～れだ？」

「……フェイトだろ…」

目を被う手を優しく除けると１ヶ月ぶりに見るフェイトの顔だった

「大正解だよ飛鳥！ボクだって良く解ったね、やっぱりボクと飛鳥は赤い糸で繋がってるんだ～！！」

赤い糸は言い過ぎかなと思いつつ飛鳥はフェイト?に手を引かれ皆がいる場所に向かい座ると重箱を広げいただきますを言い食べ始める

梅と桜の花びらがどこからか風に乗り舞う中、一也、アマゾン、杉崎、仮面シスター、なのは?、フェイト?、はやて?、畢ちゃん、ノア、飛鳥、蓮は畢ちゃん特製弁当の味に舌鼓をうつ

「うまい、畢、すごく、うまい」

「うん、将来は凄腕の料理人になれるよ畢ちゃん」

「…えっへん…今日のデザートはジュルリ……」

ガシッ!

「あ、アタイを掴むなぁぁぁ」

「箒達も連れて来ればよかったな…」

皆の会話を聞きながら、穏やかな陽射しの浴びながら

(…いつか、こんな穏やかな日々を街の皆が過ごせる時が来ればいいな…)

飛鳥はそう心の中で願った

――――――――――――――――

「アギャアアア！スーパー1め！！」

頭についたヘッドギアを壁に投げつける赤い手術着を来た男…カイ・リューノスが肩で息を切らしながら室内に響き渡らん限りに叫ぶ

先程一也が倒した偽スーパー1を遠隔操作し『スーパーライダー月面キック』のダメージをフィードバックし一瞬気絶したらしかった

「こ、このオレに…死の痛みを与えやがってえ！ゆるさねぇ…あのガキ共、最高の苦しみを与えてやる」

「ずいぶん荒れてるねリューノス」

振り返ると全身傷だらけになった山嵐怪人が姿を現す、とたんに不機嫌になる

「アギャ、あのガキとサソードの攻撃を受けてよく戻ってこれたな…」

「ギリギリだったけどね…其よりアレも順調に進んでいるみたいだね」

「アギャ…あと少しで数も揃う…先ずはガキ共と血の繋がりを持つ無限の欲望の拠点を叩き潰す…D‐ネクストを使ってな、アギャアギャアギャアギャアギャ！！」

暗い室内に空間スクリーンが浮かび映し出されたのは、D‐ネクスト…巨大な劣化版D進化体…ギガンテス級数百体が生体ポットに鎮座し、その内の十基が空間転移し消えるのを歪んだ笑みを浮かべ見ていた

――――――――――――――――――――

同時刻、新田屋敷地下秘密研究施設ではJと超次元通信をしていた

『飛鳥と蓮の二人が変身出来るようになりましたか…』

「沖君から連絡が入ってのジェネラル三体の内二体を倒したそうだ…一人は杉崎君と飛鳥の必殺技を耐えきり逃走したと聞いた…しばらくは動きはなかろうて」

『ですが警戒は怠らない方がいいですね…それと先生劣化版D生産

拠点【D・プラント】をようやく発け…』

言いかけた次の瞬間、空間スクリーンにノイズが走り更に爆音が通信越しに室内に響き渡った

「ジ、J君?どうしたんじゃ!?」

『…先生…奴等が……ファク…リー…周辺に…ギガン……級が空…間…移…ウーノ……P・Sシステム展開…同時に…治療中の民間人を…安全…場…に…アレは……民間人を避難ブロックごと…第二……研究…強制転移……急…んだ……』

――――――――

民間人という言葉を最後に通信は途絶えスクリーンにはノイズが流れ続けた

「ジ、J君……ジェイル君!!」

源三の悲痛な叫びが通信室内にこだまするのだった

第二十三話「D、コルト、アイギス変身不能!?九番目の男あらわる!」後編

次元空間内、ファクトリーではギガンテス級十体の攻撃を受けていた

「ウーノ!民間人の避難状況は!!」

「現在九割が避難完了しました…PS(プロテクトシェード)システムがもう限界です!」

「……やつら何故私達の場所が?」

施設内では民間人の避難と同時に避難ブロックを月の裏側『第二新田研究所』へと転送するが時間があまりにもなかった

「Jお父様、妹たちに連絡終わりましたわ!開発中の装備はすべてJ・ミラージュに積み込み終わりました」

「……ウーノ、クアットロ、J・ミラージュ発進準備急いでくれ…もしかしたらアレを使うかも知れない」

アレ…それを聞いた二人は真剣な顔に変わりチェックを同時進行

ではじめる

『民間人ノ避難ブロックハ転移完了シタ…出港ノ時ダJ』

「わかったトモロ、遺憾ながら今日を持ってファクトリーを廃棄する…J・ミラージュへ転送！」

トモロからの通信を聞き光と共に司令室？から姿を消した瞬間、先程までいた場所が炎に包まれた

――――――――――――――――――――

外ではギガンテス級十体の身体から熱線が撃たれファクトリーの外観は見るも無惨な状況になっている
その時一部区画が爆発し爆煙の中から白く巨大な舟が姿を表しギガンテス級は熱線の集中砲火を浴びせるが赤いエネルギーフィールドに防がれた

「ジェネーレティングアーマ正常稼働！」

「各種火器管制異常なしですわ、お父様！」

白く巨大な舟のブリッジにはウーノとクアットロがシートに座り
Ｊは中央に皆より高い場所に立っている

『Ｊ、ギガンテス級十体確認…生体反応ハ五体カラアリ』

「わかった…反中間子砲…一斉掃射撃てぇぇ！！」

白く巨大な舟の上部甲板にある砲門から赤いビームが撃ち出され
ギガンテス級十体の内、五体が蒸発する

「…威力が強すぎるトモロ」

『了解』

出力が強すぎる事を考えてながらモニターを見るとギガンテス級
が合体を初めさらに巨大になる

「トモロ、いけるかい？」

『問題ハナシ、イツデモイケル』

頷くとＪは左手をかざし大きく、そして力強く叫んだ！

「メガ・フュージョン！」

ギガンテス級の目前で上部甲板が…ユニットが分離しさらに白く巨大な舟が姿を変え巨大な人型へ変えユニットが三分割し頭、腕へ姿を変え合体し現れた

『キング・ジェイダー！！』

白く巨大な機械神がその姿を現し、その姿に恐れたのか熱線を撃つもジェネーレティングアーマに弾かれかすり傷すら与えられない

『ウオオオ！ジェイクォース！！』

右腕をかざし装備された錨上の部分が赤く燃え上がり不死鳥へと姿を変え撃ち出される

【――――――――――！】

不死鳥が合体ギガンテス級の身体を貫き再びその腕に戻ると底には素体にされた人達が気絶していた

『……今までありがとう…ファクトリー…私達の家…』

破壊されたファクトリーに別れを告げ再び戦艦形態に変わり次元空間内を進む白く巨大な舟【超弩級次元航行戦艦Ｊ・ミラージュ】

……

彼等は地球へと進路を向け出航したのだった

幕間　「雪降る日の出会い」（前書き）

幕間です

リニスと飛鳥と蓮の出会い

幕間　「雪降る日の出会い」

時間は少し遡ることクリスマス、クリスマス会の支度が一段落したリニスは光太郎さん特製コーヒーを飲みながら窓を見た

「雪…飛鳥さんと蓮さんに会ったのもこんな日でした」

聖夜の夜空から雪がチラチラと舞い降りるのを見てリニスは二人…飛鳥と蓮に会った日の事を思い出した

幕間　雪降る日の出会い

今からニ年半前、フェイトとアルフ、ドクターLの手で洗脳されたプレシアを助けるため、プレシアの恩師『新田源三』を探し様々な世界を探し回っていた

源三は孫達を助けた後、場所を転々とし行方がつかめず遂に半年後、プレシアからの魔力リンクが途絶え、無人世界で力尽き人型から本来の姿に山猫の姿で倒れてしまった

（ああ、私もここまでみたいです…）

自身の命が消えようとするなかリニスの脳裏に様々な思い出が流れる

プレシアが亡き娘アリシアのクローン、フェイトを産み出すも違うことに気付くも、実の娘として愛情注ぎ使い魔アルフと草原を元気にかけまわるフェイトの笑顔、それを優しく見守るリニスとプレシアの幸せな日々…

全てがかけがえのない思い出だった…だがドクターLの手により洗脳されたプレシアはフェイトに冷たく接しリニスは見ていられなかった

（この半年間、新田源三さんは見つからない…私は無力です……もう一度フェイトに……あ、雪…）

空から雪が降り始めリニスの体に積もり、その冷たさに意識が遠ざかろうとした時だった

何かに優しく抱き抱えられたのを感じ力を振り絞り見上げたリニスの視界に入ったのは瞳から光を失い無表情で自分をみる子供二人だった

（暖かい…です…）

その温もりを感じながらやがて意識を手放した

――――――――――――――――――――――――――――――

『先生……あの…飛鳥と蓮の様子はどうですか』

「…相変わらずじゃ…二人が負った心の傷は儂らの想像を遥かに超えておる…儂の声には辛うじて応じてくれるが……」

二人を助け出して半年、源三はあらゆる手段を用いて最高評議会の追っ手から逃げながら二人が負った心の傷を癒そうとするが未だに声に応じるだけだった…

あの時、自分達がR計画を考え出さなければ孫達から父と母を…人としての未来を奪うことは無かった

次の転移先をJと打ち合わせると通信を切った時、服の裾を引っ張られ振り返ると何かを抱き抱え立つ孫二人の姿だった

「ど、どうしたんじゃ飛鳥、蓮」

今まで自分達から近寄ろうとしなかった二人に驚きその腕の中を見ると

衰弱し今にも命が消えようとする山猫を抱いた飛鳥が口を開いた

「お、おじい…ちゃん…こ、この人…を助けてあげて…」

「…おね…がい…おじいちゃん…」

源三は信じられなかった…今までどんなに手を尽くしても心を開かなかった二人が自分の意思で言葉を発した事に驚きを隠せなかった

「わかった、儂が必ず助けるからの…安心せい」

二人から山猫を受け取り治療を始めすぐに只の山猫ではなく使い魔であると気づき魔力供給も同時にした結果、容態は安定し規則正しい呼吸と脈を確認して胸を撫で下ろす

同時に疑問も浮かんだ…なぜ無人世界に使い魔がいるのかを

意識が目覚めてから聞こう、そう判断し源三は簡易テントから出るが孫二人はその場から離れようとしない

「……この子が心配なのかの？」

その言葉に対し無言でうなずき、源三は山猫？の看病を二人に任せ簡易テントの入り口を締め切り出ると同時に涙を流した

もしかしたら飛鳥と蓮は自分達と重ね合わせたのかもしれない…自分達が一番傷ついてる筈なのに…

いや傷ついてるからこそ他者の痛みを解るのだと思う…源三はそう思いながら意識の回復を待つた

三日後

（暖かい…まるでプレシアに抱かれているみたいです…）

微睡む意識を覚醒させると目を開けると二人の子供達がリニスを暖めるように眠っている

「…この子たちが…私を此処まで…」

「ん、気が付いたみたいじゃな」

「あ、貴方は？」

「儂の名は新田源三、君を抱き抱え眠っているのは孫の飛鳥と蓮じゃ…二人が君を此処まで運んできたんじゃよ」

「あ、貴方が新田源三さんですか！おねがいですプレシアをフェイトとアルフを助けてください！！」

「プレシア君じゃと…」

プレシアの名が出た途端源三の顔は真面目な表情へ変わるとリニスからプレシアとその娘フェイトにまつわる話を聞き、そしてドクターLの名が出た瞬間声を荒げた

「なんじゃと…ドクターLめ、孫と息子夫婦ばかりか儂の弟子と娘に迄……許さん！！」

「げ、源三さん、声が大きいです…二人が目を覚ましてしまいま

す」

「あ、すまんの…しかし二人がこんなに安心した寝顔は久しぶりに見るの…リニス頼みがあるんじゃがいいかの」

「？はい」

「君は今プレシア君との魔力リンクがきれ後数日しか持たん、そこで儂と契約して欲しい内容は『飛鳥と蓮の心を癒すこと、必ずプレシア君達と再会させる』でどうじゃろうか？」

源三の申し出にリニスは頷き本契約し本来の姿へ戻りまだ眠る二人の頭を優しく撫でた

「飛鳥さん、蓮さん…貴方たちの傷付いた心をどれだけ癒せるかはわかりません…今は安心して眠ってください」

二人の閉じられた目から一筋の涙がこぼれ同時に小さく寝言を呟いた

「…おかあさん」

助け出して半年経ちはじめて聞く寝言…今まで眠ったとしても僅かな気配や物音などでも怯えその日は眠らないで一夜を過ごす…

それを繰り返す日々だった

源三にとってリニスとの出会いは　二人の孫達の心を癒してくれる人との巡り合わせだった

――――――――――――――――――――

「あれから二年…飛鳥さん、蓮さんは元気になりました…だけど飛鳥さんとフェイトが出会ったのは運命だったかも知れないですね…恩師と弟子、その孫と娘…何処かで二人は繋がっていたと思います」

やがて準備を終えリニスは出来上がった料理をキャリアに乗せ皆がいるパーティー会場へとキャリアを押して向かう

（来年のクリスマスも皆で過ごせると嬉しいですね）

向かいながらリニスは願うのだった

幕間　「雪降る日の出会い」（後書き）

おまけ

木星圏

Ｊ
「やっと地球圏に到着したか…ウーノ、Ｊ・ミラージュを月の裏側へ第二新田研究所に進路をとってくれ」

ウーノ
「はい、Ｊ…通信が入りました繋ぎます」

源三
『Ｊ君！無事でよかった…君が転移させた民間人は第二新田研究所の医療区画で治療をしておるから安心せい…その船がまさか』

Ｊ
「はい、遥か昔の戦争で滅んだ三重連太陽系『赤の星』アーク艦隊所属…」

トモロ
『Ｊ・ミラージュダ、私ハ管制コンピュータートモロ１２０２５ダ』

源三
「トモロ君、ようこそ地球へ…新田研究所についたら君にこの『緑色の石』について聞きたいことがあるのでの…まあ着いてからゆっくり話そうシスターズも新田研究所に待っておるからのＪ君ではまた後で」

Ｊ
「はい、先生…ＥＳウィンドウ展開！これより最後のワープに入る…トモロどうしたんだ？」

トモロ
『ナンデモナイ…ＥＳウィンドウ展開、突入スル（…ナゼコノ惑星ニ＞Ｇクリスタル＜ガ存在スルノダ…Ｇハ…破壊神ハ永キ眠リ二ツイタハズ…）』

トモロはＥＳウィンドウの内部を通過しながら考えるのだった

仮面ライダーD、アイギス、仮面騎士コルト必殺技技解説（前書き）

本編で使われた必殺技など

仮面ライダーD、アイギス、仮面騎士コルト必殺技技解説

仮面ライダーDが使用する必殺技は魔力を纏わせた蹴りと拳と自身の身体を用いた戦い方が特徴だが魔法も使う

ライダーパンチ

飛鳥がライダーキックを生み出すまで多用された必殺技

魔力を拳に纏わせ殴ると同時に分離術式と治療用ナノマシンを撃ち込み取り込まれた人や生物を癒す

ライダーキック

無印編で飛鳥が編み出した新必殺技

自身のＤＡＳシステムの肩と肩甲骨のアーマーを展開し螺旋状に回転し踵と脛のアーマから魔力刃を出しまさに巨大なドリルと化し相手を貫き生かす技

無印編では強化フォームで使用されるランページライダーキックに次いで使用された

ライダーワイルドブレイカー

飛鳥が模擬戦でなのはのスターライトブレイカーを相殺した際に自身を拘束したバインドを引きちぎった際に閃いた

ユーノ指導のもと強化されたチェーンバインドを自身よりも巨大な体躯に幾重にも絡め全身の魔力スラスター全開で砲丸投げ見たい振り回しアイギスが展開したギガラウンドシールドにぶつける荒業

本編を通して使用回数こそ少ないがギガンテス級に対しても使えると飛鳥は考えている

ランページライダーキック

仮面ライダーDが【ランページフォーム】なることで使用可能な必殺技

この時だけ魔力光が二色になりライダーキックの二倍の威力を弾き出す

無印編において最強のライダーキックと言われている

A-S編

ブレイズライダーキック

飛鳥が自身の戦闘用特殊ナノマシンDを進化させ新たな姿へ生まれ変わった仮面ライダーDの新必殺技

その威力はランページライダーキックをも上回り更に魔力変換資質【紅炎】も加わり炎の螺旋へと変わり相手を貫き生かす技

ブレイズフェニックス

ブレイズライダーキックを進化させミッド式魔方陣を貫き自身を炎の不死鳥【フェニックス】に変え相手劣化版Dのみをを焼きつくし治療用ナノマシンを撃ち込む必殺技

蓮の覚悟を汚した偽物コルト（ロッテ）に対して初使用された

使用回数は三回迄、使用後全身の装甲を展開し冷却しなければならない程の熱量を発生するため諸刃の刃とも言える

レイソニックウェーブ

ジャンさんの作品「勇者指令ダグオンA'　S～風の詩」の主人公、南楓姉さんから飛鳥へ伝授された必殺パンチ

楓姉さんが霧島薗の皆にチャーハンを作ってる時に閃いた技で中華鍋を振るのを応用し強く、しなやかにただ一点を真っ直ぐに狙って連続で撃ち込み内部に蓄積された破壊力で相手を内側から破砕する必殺パンチ

楓姉さんから教えて貰った後、飛鳥はライダーパンチに変わる決め技として日々鍛練している

…後、中華鍋の扱いと炒飯の味がかなり上達した

ライダーワイルドスラッシャー

学校での体育で逆上がりをしていた時に閃いた必殺技

逆上がりの応用で背部魔力スラスターを全開で回転、同時に脚部から魔力刃を発生させ自身を巨大な回転鋸に変え相手を切り裂く荒技

しかし使用後必ず犬神家みたいに地面に突き刺さるという欠点をもっている

ライダーロケットキック

ジャンさんの作品「リリカルなのは～漆黒の男」に登場する畢・ナカジマ…ちっこいの大好き畢ちゃんから教えて貰った必殺技

食べ頃になると浮かび上がる水餃子からヒントを得た畢ちゃんの技で跳躍し着地時の反動と腰のバネを全開で利用し一気に解き放ち凄まじいまで突進力と瞬発力を伴ったキックの破壊力は凄まじい

使用回数は少ないがギガンテス級（未使用）に有効な一撃になると考えている

D（ディメンジョン）・ライダーキック

脚部装甲をDフォームに変化させ無数のミッド式魔方陣を蹴り抜くと同時に【D・ターミナル】に圧縮させ放たれる必殺キック、その威力はブレイズライダーキックをも上回る

D（ディメンジョン）・ライダーパンチ

新種劣化版D、獅子舞に敗れた飛鳥が大地と血が滲むような特訓の末に完成させた必殺パンチ

発動には大きく三段階の手順が必要になる

第一段階

Dフォームに変化させた腕の【D・ターミナル】に自身の魔力を圧縮し螺旋状に展開したエネルギーをライダーパンチで撃ち込む

第二段階

間髪入れず楓姉さん直伝『レイソニックウェーブ』を強くしなやかにただ一点を撃ち込み内部に膨大な破壊力を蓄積させる

第三段階

無数のミッド式魔方陣を拳で撃ち抜くと同時に【D・ターミナル】に魔力が圧縮、レイソニック・ウェーブの蓄積された破壊力を炸裂させる起爆剤としてD・ライダーパンチを撃ち込み内部から破壊する

以上がD・ライダーパンチを発動させる手順でありその破壊力は計測不能

？？？？？

魔力制御訓練時に産み出すもフェイトから「絶対に使っちゃダメ！」と言われた……技

何時か陽の目をみるだろう

仮面騎士コルトは弓と双剣を用いた技を多用する

フリージング・エクスキューション

双剣【ツインソード】を組み合わせた弓から放たれる氷結魔法で魔力で生み出された矢の先端に展開したミッド式魔方陣を撃ち抜き相手を貫くと凍らせ劣化版Ｄのみを消滅と同時に治療用ナノマシンを撃ち込み生かす技

アブソリュート・スラッシュ

双剣【ツインソード】に蓮の魔力変換資質【絶対零度】の魔力を纏わせ相手を無数の斬撃を叩き込み凍らせ同時に劣化版Ｄを消滅し治療用ナノマシンで命を生かす技

蓮自身、戦いの経験がないためＤ-メット変身、魔力管制ＡＩ【

ディーヴァ】のサポートで補う

フリジット・シュペルター

魔力変換資質【絶対零度】で産み出された氷像で相手を囲み攻撃を受けると砕け氷刃と化し襲いかかり受けた相手は重度の凍傷を負う

はやてと烈火の将シグナムを傷つけた偽物仮面ライダーD（アリア）に対し使用された技

フリージング・バレット

弓形態にしたツインソードから無数の氷弾を放つ、主に牽制に使われる

フリーズ・ブレイク

ツインソードを正面に交差させ至近距離から放たれる魔力砲撃…威力は相手を吹き飛ばす程度のモノだが組み合わせ次第で有効な一撃を与える事も可能

フリージング・ドラグーン

蓮、仮面騎士コルトが放つ最大の氷結魔法

発動はフリージング・エクスキューションとおなじだが、矢の先端に幾重にもミッド式魔方陣が展開、同時に変換資質【絶対零度】の魔力を収束し放たれ巨大な氷龍が相手を襲い一瞬で凍てつかせる

使用回数は三回までだがリインフォースとユニゾンした場合は五回まで使える

ユーノが変身する仮面ライダーアイギスはレスキュー装備が充実しているが後にＶｅｒ・？へ変わり重力制御能力が強化された

グラビティ・ブレイカー

仮面ライダーアイギスＶｅｒ・？の最大の必殺技

相手を重力波で動きを止め更に重力で倍加した蹴りと分離術式を撃ち込む必殺技

威力は今後のユーノの成長次第で大きく変化する

G・バインド

通常のバインドに重力を加えた拘束魔法

G・ラウンドシールド

アイギスが初使用した技、無印編で海岸都市の防衛に使われた

飛鳥との合体技『ライダーワイルドブレイカー』でも使用された事もある

仮面ライダーD、アイギス、仮面騎士コルト必殺技技解説（後書き）

多分全部かいているはず？

第二十四話　「闇に囚われた三人、決戦『D・プラント』！」（前編）（前編）

決戦「序章」始まります

第二十四話　「闇に囚われた三人、決戦『D・プラント』！」（前編）

「アマゾン、沖さん…もう行っちゃうんだ」

「もう少しゆっくり出来ないの？沖さん、アマゾン」

あれから一月たった早朝、新田屋敷の前で二台のバイクに跨がる青年二人『沖一也』『アマゾン』に寂しそうな顔をする飛鳥と蓮とユーノ
後ろには源三、プレシア、リニス、杉崎、大地も居る

「飛鳥くん、蓮くんこれで最後という訳じゃないんだ、少しの間だけお別れをするだけだ」

「飛鳥、蓮、ユーノ、杉崎、大地、オレ、みんなとまた会う…さよならいわない」

「ア、アマゾン…沖さん、うんまた会おうね」

「沖さん、赤心小林拳の教えを僕は忘れません、今度会ったら稽古をお願いします」

「ああ、その時は互いに拳を交えようユーノ君」

互いに拳をパシンと当て再び会うことを誓う一也とユーノ

修行後も暇さえあれば鍛練を飛鳥達と共に重ねたユーノは正式に弟子入りをしたのだった

「また会おう沖さん、アマゾン」

「…沖さん、アマゾン元気でな」

杉崎と大地は二人に歩み寄り手を差しだし一也とアマゾンもその手を握る…再会するのを約束するかのように

「飛鳥、蓮、ユーノ、杉崎、大地、みんなトモダチ！また会う！！」

握手を終えたアマゾンが皆に手を組み合わせたのを見せ、飛鳥と蓮とユーノも同じ様に手を組み合わせそれを見てニカッと笑顔になる

しばらくして二人はエンジンを掛け、みんなに手を振りながら走り去って行った

「「「沖さ～ん、アマゾ～ン！また会おうね～～！！」」」

二人の姿が見えなくなるまで見送ると二人は皆と屋敷へと戻る…
仮面ライダーＳ‐１と仮面ライダーアマゾンと再び会うことを誓いながら

第二十四話　「闇に囚われた三人、決戦『Ｄ・プラント』！」
（前編）

月面、此所は人類が宇宙計画の大きな一歩を踏んだ場所だがいまだに開発は進まなず人にとっては過酷すぎる環境…しかしこの月の裏側にはすでに何がが出来ていた

月の裏側、其所は地球からは絶対に見る事が出来ない部分にある研究施設が存在する

第二新田研究所、飛鳥達の祖父新田源三が月で確認された未知のエネルギー調査のため極秘裏に建設した施設であり、現在そこで発掘された『緑色の巨大な原石』の解析調査を調べていた

「ここが第二新田研究所…ウーノ、先生と通信を繋いでくれ…トモロ君はこの原石を知っているんだね」

『…恐ラク【Gクリスタル】ダJ…』

研究所の格納スペースに超弩級次元航行戦艦【J・ミラージュ】を係留し所内を歩きながら尋ねる

トモロの話では遥か昔、三重連太陽系『赤の星』で生み出されたサイボーグ師団、アーク艦隊、生体兵器アルマは『緑の星』と共に何かと戦うも敗れ消滅する寸前、未完成の破壊神Gと生き残った人々と共に違う次元世界へ転移したがはぐれ、次元跳躍時のダメージで長い時間を次元空間内を中破状態で漂っていたところをファクトリーで移動中のJに発見され今に至る

「…ではこの巨大な原石の中に君が言う破壊神がいると」

『確証ハナイ…シカシ【Gクリスタル】ガ目ノ前ニアル事実ハミトメル』

「J君、直に会うのは久しぶりじゃのう…シスターズも既に来とるぞ」

「せ、先生?通信だけの筈では!」

「すいませんJ、通信を繋ぐ前に此方にこられてました」

「J君、久し振りねあの時は本当にありがとう」

「プ、プレシア女史まで…先生これは心臓に悪いですよ」

「なに、儂の性格は知っとるじゃろうに…さあオーダールームに行くとするかの」

源三に促され四人は所内を歩きしばらくして扉を開け室内に入った

「J、無事でよかったです」

「トーレ、オットー、ディエチ、セッテ、ノーヴェ、ディード、セイン、ウェンディ、チンク…早いうちにみんなと会うことになるとは思ってなかったよ…あれ?ドゥーエはどうしたんだい?」

「ドゥーエお姉様なら…あそこに」

クァットロに指差された方を見ると片隅で泣きじゃくるドゥーエがいる

「グスッわ、私の飛鳥と蓮等身大抱き枕とＪの私室から借りた（無断）写真が～」

ファクトリー脱出時、不在だったドゥーエの私物は次元空間内に置き去りになってしまったからだ

「まあまあドゥーエお姉様～今いる場所は何処だと思います～？月ですよね～」

泣きじゃくるドゥーエに近づき方を優しく撫でながら

「地球に近い…つまり飛鳥ちゃんと蓮ちゃんがいる海鳴に…」

「今すぐ海鳴に！飛鳥と蓮の所に行くわよ！！」

いきなり立ち上がると出口へ向かおうとするドゥーエを全員で必死になって押さえ数十分後　Ｊと源三の説得でなんとか冷静さを取り戻した

「とにかくじゃ…我々が今やることは一つ」

空間スクリーンに写し出されたのは何かの巨大な施設、まるで生産プラントと要塞が合わさった浮き島みたいなのを見てトーレとド

ゥーエは口を開いた

「「劣化版Ｄ生産拠点『Ｄ・プラント』…」」

「先月、ドゥーエとトーレが此所『第９７管理外世界地球』で見つけ出した…場所は海鳴市海上より５００Ｋｍ離れた小島に偽装され存在している」

「じゃあ、Ｄ・プラントを破壊すれば…」

「そうだ、奴等の計画…Ｒ計画を阻止すること出来る、飛鳥と蓮の二人がこれ以上戦わずにすむ…普通の暮らしが出来る日が訪れる」

「その作戦を立案するために今日は三人に来てもらっておる…」

自動扉が開くとクロノ、リンディ、グレアムの三人が入ってくる

「私は時空管理局に所属している…が今回の事件は管理局創設時から存在する闇『最高評議会』が起こしたものだ…私は人間として、大人として見過ごすことはできない」

「Ｊさん、作戦を説明するに辺り私から一言あります…必ず全員で戻ることです　まずこの作戦は人の目に触れず迅速な行動が成功

の鍵となります」

端末から空間スクリーンに表示された作戦概要、まず小島に偽装されたＤ・プラント周辺５００Ｋｍ圏内を位相結界を展開

次にギガンテス級、合体ギガンテス級に現れた場合に対し迅雷、キングジェイダーが対応しその間隙を縫い仮面ライダーＤ、仮面騎士コルト、仮面ライダーアイギス、仮面ライダーサソード、クロノ、リンディ、仮面シスターを含め十一名が内部に潜入し破壊し一連の事件の首謀者『カイ・リューノス』を確保する

以上が作戦概要だった

しかしなのは達の名前がない…

理由は最近のなのは達の様子がおかしい事だった、バレンタインに虫に刺された時からまるで人が変わったようになったからだ

検査はするも異常はなく源三とＪは三人のリンカーコアを検査し解析結果が今日ようやく出る

「…なのは達は今回の作戦から外す事は最初から決めていた…作戦開始は一週間後それまで英気を養ってくれ」

「クロノ君、頼みがある…飛鳥達を頼む、特に飛鳥は一番無茶苦

茶な事をするから頼むよ」

「わかりました…Ｊさん、飛鳥達には会ってあげないんですか？」

「…私は飛鳥達には直に会ってはいけない、会えばあの子達に私の罪を背負わせてしまう」

クロノの問いに拳を血が出るのではないかと握り締め苦しそうに声を絞り出す

Ｊは『悪魔』と呼ばれていた頃に犯した過ちと飛鳥達を助けだした施設破壊の容疑で今も『広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティ』として指名手配されていたからだ

「…私の罪は全てが終わった時償う、あの二人には明るい未来を、そして全ての次元世界に住む人達に希望を与えたい　すまないクロノ君、君達を巻き込んでしまって」

「…僕は飛鳥達の戦いを見て大事なモノを、人間として忘れてはいけない事を思い出させてくれました」

飛鳥達は人を、命を守る為に戦う…例え相手が異形の姿（自分）を信じなくてもその相手を信じて守り戦い抜く

相手が傷つき苦しむ姿をを自身の痛みとして感じる心を持つからこそ二人は戦う

身近で見てきたクロノは二人の戦いを見て力は及ばない、だけど守りたいという想いは自分達と同じだと

「…僕は約束しましたからね、例え何年　何十年かかっても今の管理局を変えてみせると生きてるうちは叶わないかも知れない…けど信じたいんだ変えることが出来ると」

「…私もその時が来るのを待っているよ…（この数年間で集めた情報が役立つかも知れないな）」

クロノの決意が宿った瞳を見て、Ｊは今まで集めた『最高評議会』の計画と関わったとされる事件、違法研究に手を染めた一部高官のリストを託すべくオーダールームにあるデータルームにクロノと共に向かう

一週間後の劣化版Ｄ生産拠点【Ｄ・プラント】攻略準備に全員が取りかかる、しかしカイ・リューノスが既に行動を起こすべく活動していたのに気づかなかった

それから六日後

海鳴市　繁華街

休日、人が賑わい親子連れの人恋人が手を繋ぎ、子供達が笑いながら遊ぶ風景…に溢れた日常が突然爆発と同時に爆音が響き渡ると同時に崩れ去った

爆心地に人は居なかったもののその爆音で腰を抜かし動けない人、余りの光景に茫然自失の人々の眼前で爆心地の中で黒いナニかが蠢きはぜ姿を表す

『――――――――――――――――!』

叫び…言葉に表すのが難しい雄叫びを挙げ同時に街の人々にその腕を振り上げ街をビルを車を持ち上げ投げ破壊し始め火が回るなか逃げ惑う人々は思う

なぜ自分達がこんな目に逢うんだ…

ただ普通の日々を送っていただけなのに

大好きな人とデートしていただけ

僕はお父さんと遊んでただけなのに

人々はなぜ自分達がこんな目に逢うんだ

その想いが憤りが胸の中に渦巻いて来た時だった
甲高いエンジン音が一つ いや三つ遠くから響き徐々に近づいてくる

「あ、あいつら！ギガンテス級か！！」

「兄さん、今はそれよりも街の皆を！」

「飛鳥！シスターの皆には連絡を終わったよ…僕は街の人々を避難させるから」

「わかった！師匠街の皆を頼んだぜ！！」

街の惨状と逃げ惑う人々、更にギガンテス級の数を確認した三人
…飛鳥、蓮、ユーノはバイクを走らせる
しかしその三人を見る人々の目にがナニかが違ったのに気付かなかった

「ウオオオリャアアア！」

ジェイダーでギガンテス級に体当たりし人々から遠ざけながら振り返り見るとユーノと蓮も同じ様に残った人々を誘導している

「ジェイダー！パッケージ起動！」

＞ラーサー！パッケージ『G・ユニット』展開＜

赤い光が飛鳥とジェイダーを包み込み消えると砲弾を模した外装と後部装甲左右合わせ十二基の魔導エンジンが唸りを挙げ辺りに音が響き渡る

「いくぜえぇぇぇ！D、ジェイダー！！」

＞行きますよおおお！＜

＞魔力制御は任せろ飛鳥！＜

ジェイダーを赤い螺旋状のエネルギーを纏い同時に十二基の魔導エンジンが唸り凄まじい加速でギガンテス級に体当たりをする

『――――――――――』

胴体、頭、腕にダメージを受けギガンテス級はよろめき膝をつくのを見た飛鳥は叫ぶ

「D！ジェイダー！ギガンティック・ナックルだ！」

＞＞ギガンティック・ナックル起動！＜＜

後部装甲と魔導エンジン十二基が分離し飛鳥の…仮面ライダーDの背部に黒く巨大な拳が現われる

「ハアアアア！レイソニックウェーブ」

仮面ライダーDの動きに合わせ巨大な黒い拳がギガンテス級の体を連続で殴りつけ動きを止めた瞬間を捉え強くしなやかに只一点を狙い吸い込まれるように撃ち込まれ身体が浮き動きが止まる

「ハアアアア！チェストオオオオ！！」

間髪いれず力を込め赤い炎の魔力を纏った拳が撃ち込まれると空へと打ち上げられ大爆発を起こす

「D、何かおかしい…今までだったら…ッ！」

突然、飛鳥の頭に何かが当たる見るとジュースの缶…更に別方向からも飛鳥の体に投げつけられた

投げられた方を見ると街の人々が此方を見ている

「お前達のせいだ！！」

「出ていけ、化け物！」

「出ていけよ！お前達はあいつらと同類だろうが！！」

街の人々から石や缶が投げつけられる

飛鳥を仮面ライダーDを憎悪に満ちた目で見る人々…まるで街をこんなにしたのは飛鳥達だと言わんばかりの目を向けていた

「飛鳥！」

「兄さん！」

二人が立ち尽くす仮面ライダーDを守るように立とうとするが止められ驚く二人に念話が届く

『師匠、蓮…戻ろう』

『でも…！』

『蓮、行こう…』

ユーノに促された蓮は頷くとバイクに乗りその場から走り去る

街の人々の怒りに満ちた視線を受けながら……

――――――――――

「飛鳥、大丈夫かい……」

「…ああ」

「…兄さん」

新田屋敷に向けバイクを走らせながら尋ねるユーノに答えるが元気がない…

化け物…その言葉が飛鳥にとって一番堪える言葉だったからだ

「…まあ、取り敢えず家に戻ろう…皆避けろ！」

空元気を出して蓮、ユーノに告げた時、頭上から水色の雷が降り注ぎ寸前で回避する

「へええ！凄いや…ボクの攻撃をかわすなんてさすがだね♪」

「…はい」

「フフフ、そうでなければ我の相手にならぬわ！」

その声に三人は上を見上げ驚愕する、なぜなら其所にいたのはなのは達だったからだ

しかし良く見るとバリアジャケットの色と髪の色と髪型が違う…

「お、お前、フェイトか？」

飛鳥が聞かれ一瞬きょとんととする

「フェイト？ああボクの中で眠ってるよ…でボクの名前は！雷刃の襲撃者…レヴィ・ザ・スラッシャー！！かっこいいだろ！！」

胸を張りエッヘンとするフェイト…雷刃の襲撃者

「は、はや姉なの…」

「我は、あの子鴉ではないわあ！我は闇統べる王…ロード・ディアーチェ！」

シュベルトクロイツ？を蓮に向けいい放つ

「…私は星光の殲滅者…シュテル・ザ・デストラクター」

ユーノが言う前に名乗り軽く挨拶する星光の殲滅者…シュテル・ザ・デストラクター

「フェイトに何をした…」

「ふん、答えてやる義理はない…と言いたいが教えてやろう、子鴉は我の身体になった！」

「なのはも私の身体になりました」

はやて…ロード・ディアーチェの言う通りならなのは達は依り代になってしまったと事になる

同時に疑問も浮かぶ…何故なのは達を依り代にし自分達を攻撃したのか

その疑問に答えるかのようにロード・ディアーチェが口を開く

「何故攻撃したのか聞きたいみたいですね…理由はあなた達が仮面ライダーだからです」

「我の身体をお前とレ…クッ…コルトが削り抜き更に煉獄の焔で焼き尽くそうとしたのを忘れたとは言わさんぞ！」

削り抜いた？焼き尽くそうとした？……そして飛鳥の頭の中にピースが嵌まっていきそして答えが出た

「お前達はまさか防衛プログラムライダーなのか！」

「正確には違います…私達はあなた達が言う劣化版D…D－ネクストに僅かに残った防衛プログラムを合わせ生まれたのが…」

「ボク達だよ！けど意識を乗っ取るのに苦労したけどね…」

そう言いフェイト、レヴィがデバイスを構えるが…

「…王、雷刃、今日は顔見せだけです…ではD・プラントで会いましょう…仮面ライダー…」

「ま、待て！」

「や～だよ！」

呼び止める間もなく三人は光に包まれやがて収まると姿は其所にはなかった

「…飛鳥」

「に、兄さん」

「……く、くそおおおお！！」

飛鳥の叫び声が破壊された道路と夕暮れの山一帯に木霊するのだった

一方、街では復興作業を進める中、突如街頭テレビに何者かの電波ジャックされある人物…カイ・リューノスの顔が画面に映しだされた

『アギャ、俺の名はカイ・リューノスだ…この街に怪物を送り込んでいるのは俺様だ…だがよコイツらがいるからだぜ』

映し出されたのは飛鳥、蓮の変身後の姿が…仮面ライダーD、仮面騎士コルトが画面の中で戦うシーンが流された

『コイツらがいる限りこの街に怪物が現れる…ならばやることは一つだ！仮面ライダーを…いや化け物を俺に引き渡せ！アギャアギャアギャアギャアギャアギャ！』

映像はそこで途絶え画面に砂嵐が走るがカイ・リューノスの声はまるで暗示のように街の人々に響き渡りそして…

「そうだ…アイツらさえ居なければ…」

「許さないぞ、仮面ライダー…いや化け物め！」

「俺達の生活を脅かす化け物をカイ・リューノスに引き渡すんだ

！」

飛鳥達に新たな敵、星光、雷刃、闇統べる王そして…カイ・リューノスの策略により街の人々まで敵になった今、飛鳥達の心と身体が傷つく戦いが今始まる……

第二十四話　「闇に囚われた三人、決戦『D・プラント』！」（前編）（後編）

おまけ

月の裏側　第二新田研究所
開発整備エリア

Ｊ
「皆、休憩に入ってくれ！」

ウーノ
「Ｊ、貴方も休んでください」

Ｊ
「いや、これを完成させるまでは休めないよ…『ライダーアーマー』を早く完成させなければ…」

Ｊの目の前には人より三回りも大きい強化外骨格にガトリング砲、両腰にはミサイルユニット、右肩には集束魔力砲がついたのが三体並んでいる

武装に使われている弾頭には分離術式と治療用ナノマシンが封入されている

飛鳥達の必殺技の使用回数を押さえるための装備だ

実は基礎フレームは飛鳥がレスキュー用強化外骨格を描いた図面を参考にしている

…Jと父の血が飛鳥に流れていると図面を見た源三とJは驚愕した

源三
「J君、この作業はワシがやる…君も作戦に参加するんじゃからの今は休むんじゃ」

ウーノ
「J、こちらに…」

J
「すまない、ウーノ」

ウーノに支えられながら仮眠室に向かう二人を見送ると源三は早速作業を再開するのだった

第二十四話　「闇に囚われた三人…決戦『D・プラント』！！」（中編）（前書き）

決戦、中編始まります

第二十四話　「闇に囚われた三人…決戦『D・プラント』！！」（中編）

第二新田研究所内部、オーダールーム

『……仮面ライダーを化け物を引き渡せ！』

カイ・リューノスの歪んだ笑み、声が空間スクリーンに映され、其れを見た源三は拳を握りしめ呟いた

「…カイ・リューノスめ、なんて事を…J君、準備はどうなっておる？」

「後一時間足らずですべての準備が整います…」

一見冷静に見える二人だがその胸のうちには激しい怒りが渦巻いていた

月での『D・プラント』攻略戦の準備がカイ・リューノスの付け入る隙を与えてしまった

「…飛鳥達を引き渡せじゃとカイ・リューノス何を企んでいる」

「先生、開発整備エリアから準備が終わったと連絡が入りました…」

J君の言葉を聞いた儂は通信を開きオーダールームに集まるようにメッセージを送ると先程の映像に目を通す

カイ・リューノス…飛鳥達に戦闘用特殊ナノマシンDを移植し、今なお海鳴市に現れる劣化版Dを送り込む目的は何故か？

儂等の知らない真実がまだあるということか？

「J、源三さん全員揃いました！」

声をかけられ思考の海から抜けるとオーダールームにグレアム君、リンディ君、クロノ君、大地君、杉崎君、シスターズが揃ってこちらを真剣な表情で見る

どうやら先程の映像を見て気が高ぶっているみたいだ

「…君達も知ってるかもしれんが、カイ・リューノスが飛鳥達に罪を擦り付け街の人々までもが敵になっておる…今まで以上にきつい

戦いになる、だがそれでも儂等は前へと進むしかない命を守り未来の為に……飛鳥達と合流しだい劣化版D生産拠点【D・プラント】攻略作戦発動する！」

「「「「「「ラーサー！！」」」」」」

「先生！」

其々の持ち場移る中、息を切らしながらプレシア君がオーダールームに走り込んで儂に駆け寄りあるデータを見せる

「こ、これは…フェイト君達のリンカーコアがDと融合しておるじゃと…しかも性格、容姿、魔力光迄変わるとは…プレシア君、飛鳥達と連絡とれるかの？」

「それが…フェイト達と会った後、屋敷であの映像を見て街の方に向かったっきり連絡が取れなくて…」

街に向かった…源三は気づいた飛鳥達が何をしに街へ向かったのかを

「ま、まさか飛鳥達は…」

そう飛鳥達は街を劣化版Dから守る為に自らの意思でカイ・リューノスの下に向かったに違いないと…

第二十四話　「闇に囚われた三人…決戦『D・プラント』！！」（中編）

同時刻、海鳴市

「くそ、化け物共はどこいやがる！」

「あいつ等、化け物のせいで街が…絶対に見つけ出してやる！」

街のあちら此方では化け物…仮面ライダーD達を探し人々が血眼になって探している

カイ・リューノスの言葉に扇動されたのもある、しかし以前から飛鳥達…仮面ライダーDが街の人々を守るようになってから流れたある噂

『赤い瞳の異形が人ならざる異形から人々を不思議な力で守り、拳と蹴りで異形なるモノ達を打ち砕き風のように去って行く』

赤い瞳の異形の存在、さらに黄色い瞳と翡翠色の瞳が現れた事で少なからず恐怖心があった

蓄積された恐怖心、それがカイ・リューノスの言葉で火が着き、街の人々の怒りの矛先が飛鳥達に向けられてしまったのだった

「いたぞ！」

探していた人々に一人の男の声が聞こえ、男がいる場所へと殺到する

「「「……」」」

仮面ライダーD、アイギス、仮面騎士コルトの三人が無抵抗な状態で立ち尽くしている

「……こい！化け物…さっさと歩け」

「やったぞコイツらを引き渡せばもう街が壊されることもない！」

街の人々から様々な言葉を投げつけられながら三人は引き渡し場所へ向かう

その道中三人は回りを見た

恨み、憎しみ、怒り、様々な感情が入り雑じった視線…其の視線を一身に浴び彼らはカイ・リューノスが指定した場所へ連れていかれる

『……兄さん…兄さんは…何時もこんな目で…辛くないの…』

『……蓮大丈夫だ……俺は…俺達が行くことで街の皆を守る事が出来る…』

『…飛鳥、蓮、着いたみたいだよ』

念話で話している内にカイ・リューノスが指定した引き渡し場所へ着きしばらくして

『アギャアギャアギャアギャ！よく連れて来たな』

空にスクリーンが展開し歪んだ笑みを浮かべ三人を見る

「な、なあ此れでもう俺達の街に…」

『アギャ、ああ！さっさと行け』

飛鳥達を残し街の人々は去っていく

『さてと…久し振りだなＤ０１、Ｄ０２…いやＤｅＡＭＯＮ俺を覚えてるか？』

「……え？」

「……何の事だ」

『アギャアギャアギャアギャアギャ！コイツは傑作だ覚えてないのか？お前達に戦闘用特殊ナノマシンＤを移植したのは俺様なんだよ！』

戦闘用特殊ナノマシンＤを移植した人物…ユーノは其れを聞き驚く

（この人が…飛鳥達の運命を狂わせ劣化版Ｄを海鳴市に送り込んだカイ・リューノス…プロフェッサーＲ）

翡翠色の瞳越しでリューノスを見る

赤い手術着にマスク越しに見える歪んだ顔、狂気をはらんだ瞳…
明らかに正常な思考を持つとは思えない

『アギャ！覚えてないなら教えてやるよ…』

「やめろ…」

『…お前らの両親を…』

「え、僕のお父さんとお母さん？」

「蓮！聞くな！！」

『こ…』

飛鳥の叫び声が響いた時、空から紫の閃光と白い光が飛鳥達の目の前に降り立ち姿を現す

「だ、大兄！それに杉崎兄さん！！」

「ったく…三人とも心配かけさせるな」

「街の皆を守る為とは言え…少しは俺達を頼れ飛鳥、蓮、ユーノ」

三人を守るようにサソード、大地が立ちはだかる

『アギャ！サソードに南大地！だがコイツらを助けたら……』

「街が大変な事になるか…だが自分の事も心配したらどうだ？」

『何！…なんだこれは！封鎖結界だと…お前らいつの間に！』

「…これで状況は五分五分だなカイ・リューノス」

『グッ！一つ言っておくぜＤ０１、０２…街の奴等はお前達を化け物って呼び続けるぜ永遠にな！アギャアギャアギャアギャアギャ！！』

歪み…其れを感じさせる笑い声をその場に残しスクリーンが消える

「飛鳥、蓮、ユーノ事情はプレシアさんから聞いた」

「あの三人に…防衛プログラムの残骸と新種劣化版Ｄを併せた規格外のＤ【Ｄ・マテリアル】を産み出したのも奴だ…元に戻す術式作成には時間がかかる」

大地が源三、プレシア、Ｊの三人が現在【Ｄ・マテリアル】から三人を分離する術式作成中だと聞き安心する三人に大地は説明を続ける

「……三人の意識が覚醒状態での分離術式を伴った必殺技を打ち込む作戦だ、成功確率は……」

突如吹いた風に声が消したが三人の耳には確実に届いた

「そ、そんな…じゃあもし失敗したらはや姉は…」

ガクリと膝を付く蓮に杉崎は同じ目線にしゃがみ肩を優しく掴む

「…可能性は０じゃない…八神君をＤ・マテリアルから救い出すことが出来るのは蓮だけだ…」

「飛鳥、ユーノ…俺には上手くは言えない、だがお前達の声が必ず届くと俺達は信じてる」

其れを聞き、三人は頷くと大地、杉崎と共に衛星軌道上に待機している『Ｊ・ミラージュ』へと転移魔法で移動しその場から消えた

――――――――――

衛星軌道上、超弩級次元航行戦艦Ｊ・ミラージュ

同ブリッジ

「Ｊ、大地君と杉崎さんが三人を連れて今帰艦しました」

「…わかった、ウーノ皆をミーティングルームへ…私は此所から参加する」

「Ｊ、飛鳥さん達に本当に会わなくて……ミツキさんから貰ったこれを使えば」

「……わかった」

ミツキから渡されたあるモノを着たＪはミーティングルームへウーノと共に向かった

―――――――

ミーティングルーム、現在作戦参加するメンバーが一同に介しているその時扉が開き　ある人物とウーノが壇上に上がる

「…私がこの超弩級次元航行戦艦【Ｊ・ミラージュ】を預かる…ソルダートＪだ」

彼の…ソルダートＪに視線を集める中、飛鳥と蓮はその声に懐かしさを感じていた

彼とリンディ、グレアムが空間スクリーンに劣化版Ｄ生産拠点【Ｄ・プラント】が映され話が始まる

「現在Ｄ・プラント周辺５００ｋｍ圏内に封鎖結界を展開している…先ずは第一陣、大地君の迅雷と私のキングジェイダーが突破口を開きその間隙を縫い内部に突入するメンバーは…あ…仮面ライダーＤ、アイギス、仮面騎士コルト、杉崎くん、シスターズからはノーヴェ、チンク、ディエチ、トーレ、オットー、クロノ君、リンディ君…以下十一名だ…」

「尚、この作戦は勝つためではありません…敵に囚われたなのはさん達を救出するのも含まれます」

Ｊの言葉の後にリンディが告げる、この作戦にはなのは達の救出も含まれている…

「…これは守る為の戦いです…ですから必ず全員で、なのはさん達を連れて戻って来てください」

そう言い作戦開始までの僅かな時間を過ごす

その最中、三人は源三とプレシアにある区画に連れられた

「じいちゃん此所は？」

すると照明がつき目が眩む、やがて目が慣れると目の前に三体の鎧が鎮座している

「飛鳥、蓮、ユーノ君…これは儂とプレシア君、今はこの場にいないＪ君と作り上げた【ライダーアーマー】じゃ…」

三人は鎧…ライダーアーマーを見る、其々の色に仕上げられて力強さ強調し鎮座するのを見て飛鳥は何かに気づく

「じいちゃん、これってまさか…」

「…そうじゃ、飛鳥が設計していたレスキューアーマーじゃ…すまん勝手に使って…」

「いいんだ、じいちゃん…これが終わったら武装を外してレスキュー用に戻してくれるかな…戦いの為に使うのはかわいそうだから…」

少しだけ悲しそうな顔になるが直ぐに明るく笑う飛鳥

「あ、そうじゃ…装備の説明をせんとの」

その時、自動扉が開いた

「遅れました先せ…何故飛ッ…新田君が此所に居るんだい…」

「おお、いかん準備がまだ残っておった…ソルダートJ、装備の説明を頼む…行くぞプレシア君！」

「え、あ！はい！！」

飛鳥達が居ることに驚くソルダートJに源三は装備の説明を任せプレシアと共にその場を後にする

「先生、良かったんですか？」

「ああでもせんと直に二人に逢おうとせんわい！J君にとって飛鳥と蓮は血の繋がった甥なんじゃ…どんな形で在ろうと会う権利はある！」

「フフ…先生も意外と強引なんですね」

プレシアに言われ少し照れながら源三は作業に戻る

此れから始まる戦い迄の僅かな時…仮面越しに数年ぶりに会う甥との僅かな時間が流れる

ソルダートJからライダーアーマーの説明を受ける飛鳥と蓮とユーノ…

飛鳥と蓮はソルダートJからミーティングの時からずっと昔から

知っている…言葉から懐かしさを感じ取っていた

そして…数十分後、とある島の遥か上空…衛星軌道上から白く巨大な舟が凄まじい加速と共に大気を切り裂きながら降下する

「J！劣化版D生産拠点【D・プラント】上空に到着しました」

『行くぞJさん』

「ウーノ！後の指揮をグレアム提督に譲渡する……メガ・フュージョン！！」

叫ぶと同時に分離したジェイバードが頭と腕に変わり同時に白く巨大な舟も胴体へ腕と頭がドッキングし現れるのは白い機械神…キングジェイダーが姿を現し
その隣には迅雷とゴッドアーマー、Vアーマーが飛来する

『いくぞ！真・超神合体！！』

大地の叫びと同時にゴッドアーマーが分離し迅雷の各部に着き、さらにVアーマーが巨大な翼と脚部へ変わり合体し現れる

『迅雷！ガイアモード！！』

叫ぶと左腕に巨大なクローが右腕に巨大なバンカーが装備され辺りに凄まじいエネルギーの本流が巻き起こる

『Ｊさん、どうやら合体ギガンテス級が出てきやがったぜ！』

キングジェイダーと迅雷ガイアモードの眼前には数百体の合体ギガンテス級がＤプラントを守る様に埋め尽くし二体に襲いかかる

『大地君、仮面ライダーＤ達の突入経路を開く！……Ｊクォース！！』

『あんたも中々やるな！スタッグブレイカー！！』

『『うおおおおおお！！』』

二体の鋼鉄の機械神の圧倒的な火力との前に合体ギガンテス級は数を減らしていく…尚この攻撃にも分離術式が組み込まれており取り込まれた生物や人を分離と同時に安全な場所へ転移させている

『うおおおおお！反中間子砲一斉掃射！！』

砲撃するキングジェイダーの背後で、迅雷ガイアモードが構え砲身に凄まじいエネルギーが充填され

『Ｊさん離れろ！うおおおおおお！マグナムノヴァ！！』

凄まじいまでの破壊力を秘めたエネルギーの奔流が合体ギガンテス級の群れを呑み込み一直線の道が出来上がる

『トモロ！ＥＳミサイル全弾発射と同時にキャリアーも射出！！』

『了解、ＥＳミサイル全弾発射、キャリアー射出』

キングジェイダーの全身のミサイル発射口からＥＳミサイルが撃たれ同時にキャリアーも射出される

ＥＳミサイルの弾幕に遮られギガンテス、合体ギガンテス級は手も足も出せないそしてＤプラント上空に１００ｍに迫った時キャリ

アーが爆散し激しい煙の中から三体の鎧がナニかを抱え逆憤をかけ着地する

三つの鎧の正体はライダーアーマーを装着した飛鳥達、クロノ、リンディ、仮面シスターズ、仮面ライダーサソードを抱き抱えていた

「では、私とシスターズの皆さんは内部施設に潜入します」

「僕はユーノとなのはの救出に向かう」

「俺は蓮と八神君の救出だ」

「俺は…って一人かよ!?ん?」

いきなり何かに肩を叩かれ見ると…

「飛鳥ちゃん、私も手伝う…」

「ひ、畢ちゃん?どうして此所に!?」

話を聞くと卑怯な手を使うカイ・リューノスに腹が立ち、あの時転移魔法に素早く入りJ・ミラージュに潜り混み今までキャリアーに息を潜めていたらしい

「……かなり危ないけど付き合ってくれるかな畢ちゃん」

「…（コクコク）」

飛鳥の言葉に頷き、組み合わせが決まり其々なのは達がいる可能性の高い場所へ、ライダーアーマーを駆り隔壁をその拳で砕き施設内へと雪崩れ込み途中三手に別れた

『フェイト／なのは／はや姉／待って／ろ／て、今すぐ助けにいくから／な!!』

劣化版D生産拠点D・プラント攻略作戦となのは達の救出作戦の火蓋が切って落とされた

第二十四話　「闇に囚われた三人…決戦『D・プラント』！！」（中編）（後書

D・プラント内部、中央管制室

「アギャ！奴等来やがったな…まあいいD01、D02に最高の苦痛を与えてやる」

『久し振りだね、カイ・リューノス』

スクリーンが開きドクターLが映し出される

「ドクターLかよ…アギャ何のようだ」

『実は君が勝手にD・プラントを管理外世界に動かした事にあの三人?がかなりご立腹でね…君への抹殺指令が出たんだよ』

「アギャ上等だ、返り討ちにしてやるよ…俺にそんな事したらあの二人のデータは…」

『…二人のデータですか…そんなの要らないですよ、私の最高傑作の前では霞んで見えます…貴方の抹殺に向かったのは【DeUS】です…では』

そう言いきると、スクリーンが閉じカイ・リューノスのみが管制室に残される、しかし様子がおかしい

体をガタガタと震わせている

「【ＤｅＵＳ】だと…Ｌのやつ完成させやがったのか…だがここまで来れるかよ…」

Ｄ・プラント内部通路

「アス……カイ・リューノスはドコ？」

＞お嬢、所在を阻害する術式が幾重にもされている…＜

緑色の瞳を持つ異形が大鎌を構え歩きながら、アスと呼ぶ人物に訪ねるも居場所がわからず困惑している

「アス…お兄様達が近くにいる…どうしょうか？…」

＞…今は無駄な接触は禁じられてるぜ…ステルスモードを展開し機会をうかがうしかないぜ＜

「…うん、今お兄様達を壊すのはダメってドクターは言ってたし…そうするねアス…ステルスモード」

彼女…【ＤｅＵＳ】がアスに同意すると姿が徐々に回りの風景に溶けていき完全に消え去った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9994u/

魔法少女リリカルなのはＡｓ～人々を守りし仮面伝説

2012年1月8日18時50分発行